Mutsu Nakanishi　Home Page 2006

『 Iron Road　和鉄の道 』【6】

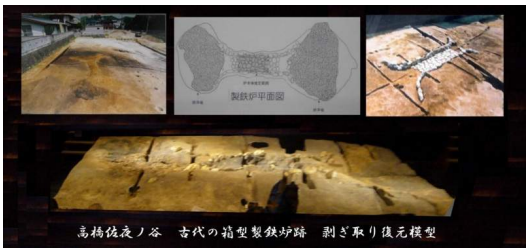
－ 日本の源流・たたら遺跡探訪 －

2007. 1. 1.　　by　Mutsuo　Nakanishi

「鐵」

「鐵」の字源とシルクロード

「弥生の戦」と鉄・日本のルーツ



四国で初めて古代の製鉄炉が出土
今治　高橋小夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡

中国山地石見　今佐山製鉄遺跡と出羽鉄の郷

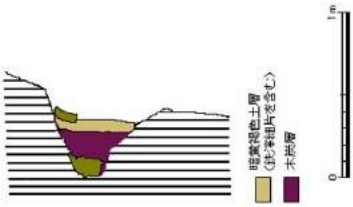
大分臼杵の石仏は炭焼長者によって　作られた

コウノトリが大陸と日本を結ぶ古代　和鉄の道　但馬・出石

口　絵　－　1　たたら製鉄炉の変遷【1】

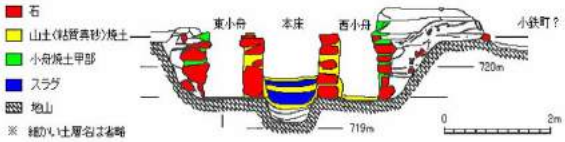
たたら炉の構造　　日立金属　ホームページ　「たたらの話」等より

古代



カナクロ谷製鉄遺跡第1号炉断面図
（6世紀後半～7世紀前半）

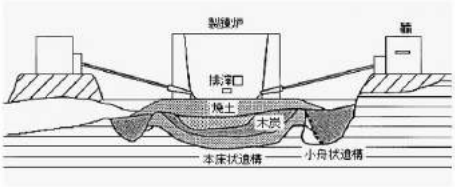
近世



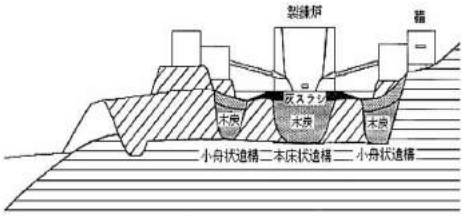
奥土用たたら炉床下部地下構造縦横断面図
（18世紀）

中世

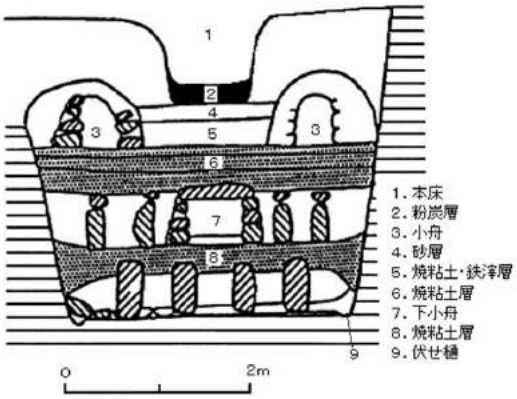
大矢製鉄遺跡製鉄炉関連遺構断面図
（10～11世紀）



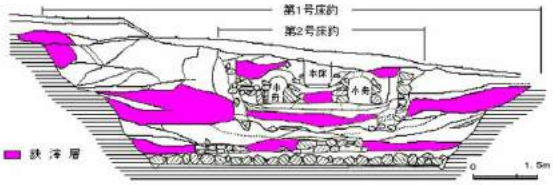
矢栗製鉄遺跡第2号炉復元想定図
（中世前半）



下稲迫製鉄遺跡製鉄炉築造工程復元模式図
（中世）



朝日たたら地下構造復元断面図
（18世紀後半）



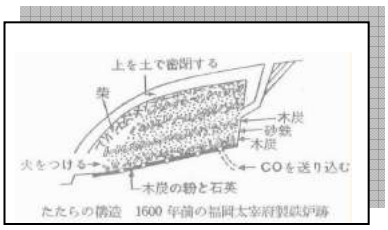
湯谷たたら第1号、第2号床釣り断面図
（19世紀）

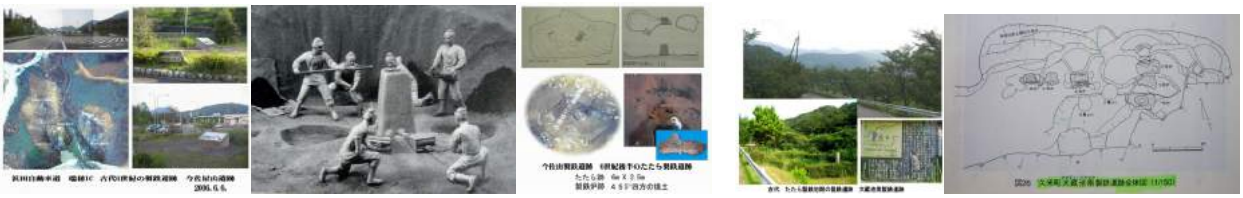
上記たたら炉構造の変遷図は　日立金属　ホームページ　「たたらの話」より採取

1. 日本で製鉄の始まりは6世紀前半まで遡れ、（広島県カナクロ谷遺跡、戸の丸山遺跡、島根県今佐屋山遺跡など）、
　５世紀には既に製鉄が始まっていたと考えられている。6世紀朝鮮半島から韓鍛治とともに新しい製鉄技術が導入され、小規模ながら先在する技術と融合してたたら製鉄が始まる。野たたらの始まりである。炉床を少し掘り下げ、木炭などを敷き詰めた簡単な防水構造が見られる。
2. 6世紀末～7世紀にかけて　炉床に石を引きつめるなどのしっかりした防水構造を施し、炉の両側に排滓場を持つ鉄アレイ型の古代製鉄炉が畿内で完成し、官営の規格型製鉄炉として各地に広がる
3. 10～11世紀　中世　になるとたたら炉も大型化し、芸北で、防水施設として炉の両側に小船状遺構を持ち、諸施設を機能配置した永代たたらの原型が完成する　（大矢製鉄遺跡　坤束製鉄遺跡　矢栗製鉄遺跡など）
　そして、島根県の下稲迫遺跡（しもいなさこいせき）のように本床、小舟状遺構を持ち、近世たたらに極めて近い炉形、地下構造となります。
4. 江戸時代　最も大きな技術革新は１７世紀末（元禄４年、出雲）の天秤鞴（ふいご）の発明。
それ以前は吹差し鞴や踏み鞴が使われていたが、天秤鞴の採用により炉の温度は上がり、製鉄炉の大型化、地下構造の充実が進み、大量生産が出来る永代たたら・高殿が完成。中国山地・出雲を中心に鉄山が営まれる。

口　絵-2　　たたら製鉄炉の変遷【2】

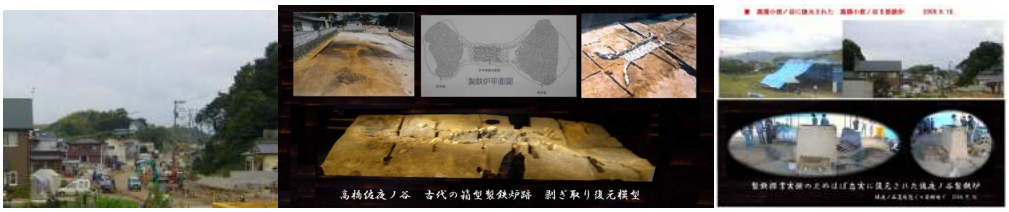
各時代別　日本各地の製 鉄 遺 跡





1.　　古代　たたら製鉄が始まる初期のたたら製鉄遺跡　　枠内は弥生時代　プレたたら想定される製鉄推定図

上段: 広島・カナクロ谷遺跡　近江・古橋と源内峠遺跡　　中段:石見・今佐山　吉備・大蔵池南製鉄遺跡



2.　古代　畿内で洗練され確立された鉄アレイ形たたら炉が官営製鉄コンビナートとして地方拠点で経営された

上段: 四国今治　高橋小夜ノ谷Ⅱ　下段: 官営製鉄コンビナート　近江木瓜原・東北原町金沢・九州元岡

3.　中世　芸北・石見で永代たたらの原型　炉床の防水施設・たたら場諸施設の機能的配置が完成し伝播　芸北・坤東製鉄遺跡

4.　江戸時代　高殿を中心とした たたら製鉄集落　「鉄山」が経営され、大量生産された

上段: 長門　白須たたら　　下段:奥出雲菅谷たたら

口　絵 -3

３～５世紀　朝鮮半島から持ち込まれた鉄素材

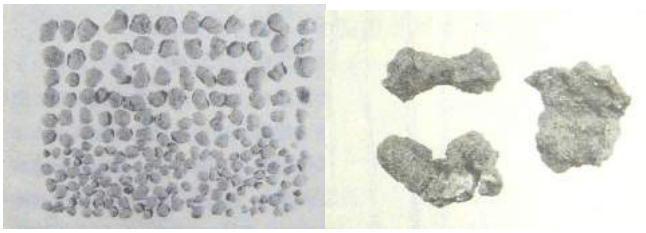
大陸と倭　「七支刀」が解明かす古代製鉄の謎

古代　鉄・軍事を支配した物部氏の本拠地 大和・布留の氏寺　石上神宮の宝物国宝「七支刀」

その製造法は謎。　古代の朝鮮半島の鍛冶・製鉄技術の探求とその復元を通じて、

まだ゛日本で製鉄が始まらぬ時代の朝鮮半島・倭の製鉄技術が見えてきた

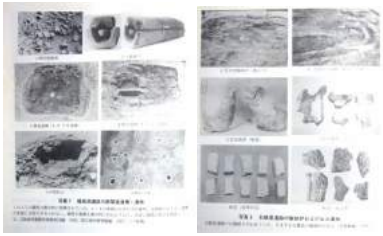
棒状鉄素材　　板状鉄斧　　鉄テイ



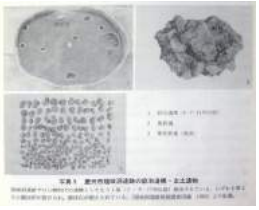
球状鋳鉄塊　　鋳鉄塊　4,5 世紀

３から５世紀　大陸から持ち込まれた鉄素材

【　4～5 世紀朝鮮半島
の製鉄遺跡と出土品　】



百済　鎮川石帳里遺跡



新羅　慶州の隍城洞遺跡

日本で出土した鉄素材の一例

奈良　大和６号墳　出土の鉄テイ　日田市萩鶴製鐵遺跡の鉄テイ

古代物部氏の根拠地　倭王権を支えた鉄の郷　「布留」　　2006. 3. 17.

和鉄の道 Iron road　たたら遺跡 探訪 2006

口絵-1.　たたら炉の変遷【1】　たたら炉の構造

口絵-2.　たたら炉の変遷【2】　たたら製鉄遺跡

口絵-3　　３～５世紀　朝鮮半島から持ち込まれた鉄素材　大陸と倭　「七支刀」が解明かす古代製鉄の謎

1.「鐵」の字源を調べて　　『シクロードの草原の道を駆け抜けた「鐵」』　2006.1.10.

2.　神戸の北端　丹生山に古代の赤「朱土・辰砂」を訪ねる

　　神戸　和鉄の山郷　押部谷・志染・丹生山・淡河 Walk　2006.2.22.

3.　京都東山　陽だまりハイク　より　2006.2.9.

　　蝦夷の雄「アテルイ」の足跡「清水寺・将軍塚」と永観堂「みかえり阿弥陀仏」を訪ねて

4.　近江の鉄の郷　比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡を訪ねて　大津市仰木

　　帰路は比叡と京都を結ぶ　「古代の鉄の道???　きらら坂・雲母坂」ハイク　2006.2.25.

5.　物部氏の本拠地　布止めを訪ねる 奈良県天理市布留　2006.3.17.

　　石上神宮の国宝「七支刀」の復元展にあわせて

6.　コウノトリが大陸と日本を結ぶ　古代　和鉄の道　「古代　和鉄の郷　但馬　出石」

　　兵庫県 但馬　出石・豊岡　Country Walk　2006.5.6.　1.

7.　九州の旅　アルバム　　九州　古代の豊の国から阿蘇へ　2006.　6.4.-6.5.

　　古代鉄のルーツにつながる鉄の国「豊（豊前・豊後)」臼杵石仏を作らせたのは炭焼き長者???

8.　奥石見　瑞穂町　古墳時代６世紀の今佐屋山製鉄遺跡を訪ねて

　　「出羽鋼」の郷　島根県　奥石見　瑞穂町市木　walk　2006.6.6.

9.　今治市　高橋佐夜ノ谷(Ⅱ)製鉄遺跡をたずねて

　　四国で初めて　古代の製鉄遺跡が見つかった　2006.7..3.

10.　弥生の高地性集落【1】芦屋市「会下山遺跡」からロックガーデンへ　　ハイキング

11.　弥生の高地性集落【2】播磨灘に浮かぶ砕石の島「男鹿島　大山神社遺跡」を訪ねて

　　３６０度展望の効く男鹿島　2006.8.1.　&　8.4.

12.　弥生の高地性集落【3】弥生の高地性集落「表山遺跡」とその下に広がる弥生の遺跡群

　　畿内と 播磨の境　明石川・伊川流域の明石平野は弥生から開けた先進地　2006.8.24.

　　● 補足　写真アルバム

　　明石川流域　伊川谷・玉津に弥生の高地性集落と弥生の戦を訪ねて

13.　写真アルバム　北部九州　魏志倭人伝の世界　壱岐・ 筑前・筑後の遺跡を訪ねて

　　水田耕作・鉄・倭国　弥生の時代を作った渡来人たち

14.　弥生の高地性集落【4】弥生の高地性集落に「弥生の戦」・「日本人のルーツ」を探して　2006.9.25.

15.　四国で初の古代製鉄炉　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡　発掘報告会

　　愛媛大・今治市共同シンポジュウム「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」　2006.9.16.

16.　甲州・信州国境　八ヶ岳山麓に縄文遺跡を訪ねて

　　「 縄文人は山を見晴らす素晴らしい高原に住んでいた　」　2006.10.6.-10.10.

　　1.　日本人の心の故郷　　縄文の集落がそっくりそのまま見つかった

　　茅ケ岳山麓の北杜市梅ノ木縄文集落遺跡を訪ねる

　　2.　初秋　白樺が美しい　紅葉し始めた清里の朝　　八ケ岳　清里　清泉寮に泊まって

　　3.　縄文の黒曜石原産地遺跡　長和市星屑峠に縄文の黒曜石鉱山を訪ねる

　　黒曜石」を日本各地に配っていた信州　霧ケ峰・中山峠

Iron Road【6】2006

1.

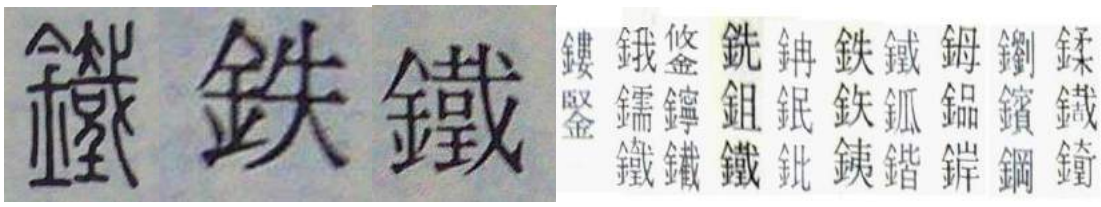
「鐵」の字源を調べて

シクロードの草原の道を駆け抜けた鐵

と

鉄 「鐵・テツ」 と馬 「驖・テツ」

hotan00.htm　2006.1.10.by Mutsu Nakanishi



「鐵は五金の王なり」

「鉄」の字の「字源」を知っていますか・・・・・

「鉄は五金の王なり」

「鉄」の字源は鐵の字の旁に「王」があり、誰に聞くともなくこれが字源と思っていましたが、どうも　違うらしい。

「鉄は五金の王なり」は日本での「鐵」の字の解釈だという。

「鐵」の字源を図書館へ行って調べたり、聞いたりするのですが、どうも良くわからない。

4 世紀には古墳から「砂鉄」が出土した例があり、「砂鉄」を「鉄」と認識しながら製鉄の始まるのはづっと後の 5 世紀以後。　日本古来の「たたら製鉄」の主原料の「砂鉄」が何時から「鐵」と認識されたのか・・・・

また、中国では「砂鉄」を製鉄原料として認識しなかったのか・・・

不思議に思えて　調べだしたのが発端。

鉄を吸い付ける磁石　これが一番鉄を見分けるのに良い手段と思えて調べると中国では古くから「磁石」があり、鉄を吸い付けることが知られていた。しかし、日本で実際に磁石が採取されるのは奈良・平安時代であるという。

もっとも　「磁石」の言葉はずっと以前に中国から伝えられていたという・

また、中国には　数千年前には「指南」の語源となった磁石を取り付けた「指南車」が軍団の先頭を走ったという。

そんな中で、「鉄」の字源にも触れ、「五金の王なり」がどうも字源ではないことを知りました。

鉄器文明のスタートは韻鉄の利用が始まりで、その後　紀元前 12 世紀　アジアの西端小アジアでヒッタイト人が鉄器の生産加工技術を発明し、そこから世界へ広まったといわれる。

アジア大陸の西端から、遠く中国・朝鮮半島とアジア大陸を横断して日本に伝わった。

シルクロードがその通商路。　　シルクロード通って　中国に伝わり、紀元前 5,6 世紀頃には中国でも鉄器生産が行われていたという。

漢和辞典などを調べると　「鐵」の字の右側の旁「戠」は「テツ」の「音」をあらわす「音符」だという

また、漢和辞典の中で「馬」篇に旁「戠」で「驖テツ」と読み「赤黒色をした馬」をさす「驖」の字にもであいました。

「驖」の字の旁「戠」は「赤黒色」をあらわすという。

これは　西域・シルクローヘドの草原を駆け巡った「天馬」を指すのでは・・・・・・・

「鐵・テツ」と「驖・テツ」のルーツが相互に関係しているとすれば

「鉄」は「赤黒い色をした金属」と読み、「驖　天馬は馬の王なり」との解釈も出来る。

そんな勝手な解釈を自分なりに試みたりもしているのですが、さあ　どうでしょうか・・・・・

「鐵」　　「驖」

漢和辞典のページより　「鉄」と「驖」

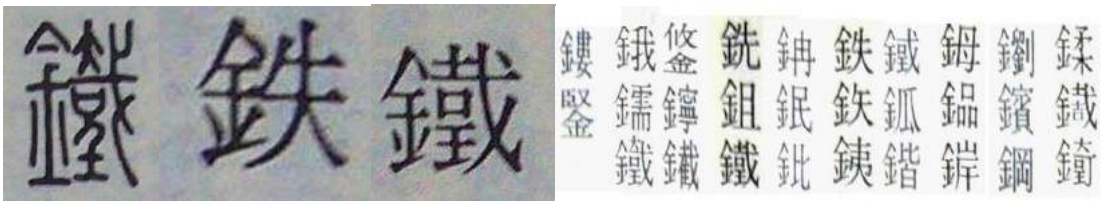
漢和辞典などで調べた字源は次のようである。

「鐵」の字を解くと「金＋戈＋呈」となり、戈は「切る」という意味があり、呈には「たいら」の意味があり、「真っ直ぐに物を切り落とす鋭利な金属」を表しているとする説がもっとも有力である。

また、江戸時代の思想家三浦梅園は「金とは五金（金、銀、銅、鉛、鉄）の総称なり、五金の内にては鉄を至宝とす」と記していて、これがどうも「鐵は五金の王なり」のルーツらしい。

新字体「鉄」の字も「失シツ」の転音が赤黒色の語原「漆　シツ」の音に似ていることからきていると漢和辞典に記載されている。「漆　ウルシ」からきているとすると「漆　生ウルシ」の色は黒茶色で「黒がね」と重なってくる。もっとも金属「鉄」を表す字は古代から数々用いられており、20 数字もある。

日本でも　古代から数々の字が用いられ、数々の変遷を経て現代の字になったという。


鐵 鉄 鐵
鏤 鋻 鋨 鐵 鐪 鑄 鐵 鉄 鉄 鉄

鐵の字源に描いた私のイメージにぴったりでビックリである。

アジアの西端小アジアで紀元前数千年前にヒツタイト人の中で生まれ、遠くアジア大陸→中国・朝鮮半島を通じて　日本に伝わった。
日本で製鉄が始まるのが、5 世紀後半。この頃　アジア大陸では　草原の民「突厥」（カザフ族のルーツ）が世界帝国を打ち建てた。彼らが発明した鉄の「あぶみ」をつけ、鉄の武器を持った騎馬軍団がシルクロードを東へ東へと駆け抜けたという。また、中国で「天馬」「赤兎馬」と呼ばれ、珍重された赤黒色の小さな馬も中央アジアの草原からもたらされたものである。
シルクロードの草原を馬とともに鉄が駆け抜け、シルクロードの国々中国　朝鮮半島　そして　日本の国々に新しい文明と文化をもたらした「鐵」 まさに　「鐵は五金の王」なりである。

豊富な鉄を武器に草原を駆け抜けた騎馬集団「突厥」　　NHK 新シルクロード　草原の道より

シルクロードの仏教国　ホウタンで生まれた「鉄線描」で描かれた仏教壁画
NHK 新シルクロード　草原の道より

アジアの西端小アジアで紀元前数千年前にヒツタイト人の中で生まれ、遠くアジア大陸→中国・朝鮮半島を経て日本に伝わった。日本で製鉄が始まるのが、5 世紀後半。この頃　アジア大陸では　草原の民「突厥」（カザフ族のルーツ）が世界帝国を打ち建てた。彼らが発明した鉄の「あぶみ」をつけ、鉄の武器を持った騎馬軍団がシルクロードを東へ東へと駆け抜けたという。
また、中国で「天馬」「赤兎馬」と呼ばれ、珍重された赤黒色の小さな馬　それも中央アジアの草原からもたらされたものである。シルクロードの草原を馬とともに「鉄」が駆け抜け、 シルクロードの国々中国　朝鮮半島　そして日本の国々に新しい文明と文化をもたらした「鉄」
そして、シルクロードに残る数々の壁画に描かれた仏像の顔は「鉄線描」と呼ばれる「針金を思わせる赤黒色の太い線」で縁取られ、ここにもシルクロードを駆け抜けた「鐵」の痕跡が残っている。
「鉄線描」はシルクロード天山山脈の麓の仏教国ホータンで生まれ、中国　棟。隋の長安で花咲き、法隆寺の壁画、そして現代の日本画の主要技法として脈々と受け継がれてきたという。

源氏物語絵巻を彩る「引き目　かぎ鼻」の技法のルーツもこれか・・・・

「シルクロード」は「鉄の道」。　「鐵」の痕跡が騎馬民族集団の馬や古い仏像壁画などに点々と残っている。
ほんの気まぐれで、「鐵」の字の「ルーツ」を調べだしたちょうどそんな折、シルクロードの草原を駆け抜ける赤黒色の馬「驖」にまたがり、疾駆する騎馬軍団が映し出された。

（NHK 特集　新シルクロード全集　草原の道）

「シルクロードを馬に乗って駆けた鉄の姿」
そんなシルクロードの痕跡を今に残しているのが「鐵」「驖」の文字ではないか・・・
これが「鐵」の字のルーツか・・・・

まさに「鉄は五金の王なり」と勝手にイメージしています。
でも、鐵を語るときには　いつも見え隠れする「勝ち組と負け組」　体制と反体制の葛藤
「五金の王　鐵」の言葉の裏に「鬼伝説」として「鬼」にされてきた「製鉄の民」の姿を忘れてはならないが・・。
国を築き、文化を作って世界を動かしてきた「鐵」
これからも、鐵が持つエネルギーが武器ではなく平和・文化をさらにクリエイトしてゆくことを願う。

2006.1.15.記

【参　考】

1.「鐵」におけるミスマッチ　ー鐵を活かすー　　豊田政男

鐵の字源をこね回している時に、ずっと以前一緒に仕事をしたこともある同じ材料屋　阪大豊田政男氏のコラム「「鐵」におけるミスマッチ」の中で「鐵を活かす」と題する「鐵」の字源に関する一文をインターネットで見つけました。　１０年も前の一文ですが「鉄と鋼」に対する仲間の心根が垣間見える一文として紹介。

「鐵」におけるミスマッチ　ー鐵を活かすー

豊田政男（平成５年３月８日）

鉄は鐵の略字とするのは誤りで，もともと異なった字であるという．鉄は糸偏に失とかく「チツ」（裁縫すること）の古字ともいう（服部・小柳共著，詳解漢 和大辞典）．鐵の旁は，音のテツを表し，（きる）と（たいら）の意味の呈の合わさったもので，まっすぐに物を切り落とす鋭利な金属を表す（藤堂他偏，漢字 源）．
また，旁は赤黒色の意味の語源（漆シツ）からきているともいう（貝塚他偏，漢和中辞典）．このシツが，失の音と似ていることから，別字であるが鉄の 字が新字体に採用された．いずれにしても，鐵には，「よく切れる鋭利な金属」，「錆びて赤黒色しているもの」や「堅いものや動かぬもの」と言うような意味がある．
鐵の歴史については，「鉄の散歩道」（斎藤，JSCC）などに詳しいが，小アジアのヒッタイト人の間で生まれ，鐵は青銅とともに人類が手にした画期的な 第二世代の材料である．鐵は，紀元前 1,500 年ごろのアナトリア地方で作られた鋼に至って，その強度が最大限に活かされるようになってきた．
鋼は，旁が 音のコウを表し，強いの意の語源（強）からきている．
このように鋼は，「刃金」であり，武器なのである．兵器としての鐵器を支配するものは強力な力を持っ た．鐵血というとき，鐵は黒鐵（武器）であり，血は赤血（兵士）である．鐵がこのように，武器として支配階級の道具となっていた時代は，鐵の時代とはいえ ないのではないか．鐵が，人々の生活の中で平和的に使われてこそ『鐵の時代』と言えるのであろう（斎藤，鐵の社会史）．
それは 17 世紀の，ダービー父子の コークス炉の発明によって，鐵の大量生産が可能となり，まさに鐵の時代へと入って行った．現在社会において，一年に７億トン以上もの銑鉄が生産され，我々がそれを利用している．鋼構造物は，社会基盤資本を支える大きな柱であり，そのありがた みも感じないほどに当然のごとく利用している．

特に，この 2-30 年間の鋼材の発達は目覚ましいものがある．鉄鋼は加工して利用されるわけで，その加工性に対する開発成果も著しい．誰もが，鉄鋼の必須性は認め，また当然のごとく敢えて口にさえしないのかも知れない．

しかし，この根幹である鐵の技術に，魅力が薄れるとなると，これは大きな問題である．鉄鋼に関しては，鉄鋼をつくる分野と鉄鋼を利用する分野の二つがある．最近の我が国の動向をみるとき，利用者側の鉄鋼に対する熱意が失せてきているように思われる．

利用する側の最大の関心事は，鐵そのものよりは，いかに 人手を掛けず，自動施工と作業環境の改善にあり，十分な品質の鉄鋼材料は当然提供されるものであるとの認識が多いのであろう．

あるいは，この製造業に置けるスリム化によって，鉄鋼の品質を最重点にした開発的なことまで利用者側では手が回らないのかも知れない．

できなくとも要求は出せるが，それさえも少なくなっている．

特に，学生に鐵の魅力を感じさせられなくなれば，将来が危ない．

まだまだ，現在の若いものにも，鉄鋼を，そしてその利用を魅力と感じる者も多いが，将来的に製造業を支える鐵の分野に積極的に動く人材が溢れる状況ではない．

大学・鉄鋼構造物関連企業の間で考えるべき課題も多い．

（ 平成５年３月８日）

。

2.「鉄」の字源　　社団法人　日本鉄鋼連盟　　http://www.jisf.or.jp/knowledge/mini/　より

「鉄」という字の正字は「鐵」で、これを解くと「金＋戈＋呈」となる。

「戈」は「切る」という意味があり、「真っ直ぐに物を切り落とす鋭利な金属」を表している。

また、別に「鐵」を「金の王なる哉」と解く説がある。

江戸時代の思想家三浦梅園は、「金とは五金（金、銀、銅、鉛、鉄）の総称なり、五金の内にては鉄を至宝とす。如何となれば鉄その価、廉にして、その用広し。 民生一日も無くんば有るべからず」と記している。

現在最も広範に利用されている金属であることを考えると、正鵠を射た説ともいえる。

「鉄鋼の実際知識」（発行：東洋経済新報社、編者：鋼材倶楽部）より抜粋。

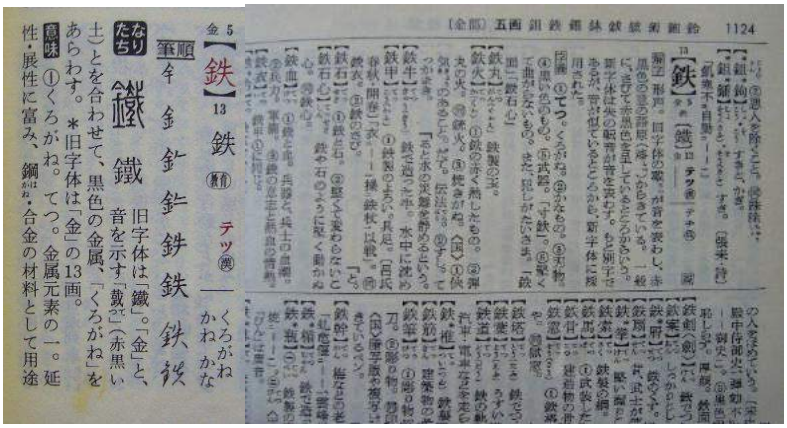
3.　漢和中辞典ほかによる「鉄」の字源

「鐵」の旁「戠」は，音のテツを表し，（きる）と（たいら）の意味の呈の合わさったもので，

まっすぐに物を切り落とす鋭利な金属を表す（藤堂他偏，漢字源）．

また，旁「戠」は赤黒色の意味の語源（漆シツ）からきているともいう

（貝塚他偏，漢和中辞典）．　...



4. NHK BS ハイビジョン特集　新シルクロード

新シルクロード全集　決定版　第３集　草原の道風の民

2. 神戸の北端　丹生山に古代の赤「朱土・辰砂」を訪ねる

神戸　鉄の山郷　押部谷・志染・丹生山・淡河 Walk　　2006.2.22.

丹生山系帝釈山東　丹生山越淡河への国道横で見つけた
赤土「朱土・辰砂」の露頭　　2006.2.22.

2006.2.22.
気になっていた丹生山山麓「朱土・辰砂」　そのの露頭がよく通る淡河への道の直ぐ横で見られるとの話しをインターネットで見つけて、さっそく観察に行ってきました。

古代　金・鉄と共に最も珍重された「水銀朱・辰砂」。「丹生」の地名があるところでは、水銀鉱脈と共に鉄・金・銅など他の鉱物資源も産出するところで、神戸で古代のたたら遺跡があるのかもしれないと気になっていて、近いこともあって何度も訪れた丹生山周辺。

山田から丹生山・帝釈山と稚児墓山の鞍部を越えて淡河の里に近づいた道のすぐ横の崖に多少黄色がかった赤土の中に真っ赤な石が入り混じった「朱土・辰砂」の露頭を見ることが出来ました。

1.　神戸北部　丹生山周辺　押部谷・志染は古代の鉄の郷

神戸の北　六甲山の裏側に古い歴史の山　丹生・帝釈山系があり、古代の貴重品「朱土・辰砂・水銀」を産し、古代から多くの人たちが住み、新羅・百済からの渡来人の里でもあったようだ。

　欽明天皇の 6 世紀半ば　百済の聖明王の子　恵は丹生山に勅許を得て堂塔大伽藍を持つ「明要寺」を建立したといい、その後　平清盛が深く帰依して　しばしば参詣したという。

いまも寺跡が丹生山の頂上近くに残っている。

「丹生山」の名前が示すとおり、この地は「辰砂」・鉄・銅など鉱物資源を産する山で　特に辰砂・水銀の産出がこの地を古代の重要地としたと考えられている。

丹生山山頂近傍　古代の明要寺跡

この丹生山系の西側播州平野の端「三木」は古くからの播州鍛冶「金物の街」であり、この丹生山を中心とした六甲山地との間に広がる丘陵地 押部谷・志染・淡河は　播磨風土記に記載のある「志染の里」。

古代　大和　の葛城・金剛の山麓「忍海」で製鉄・鍛冶生産を支配してきた渡来の韓鍛冶忍海氏につながる忍海部一族の根拠地で、　5 世紀、履中天皇の皇子市辺押盤皇子が継体天皇に暗殺された時に、皇子の二人の御子　憶計・弘計が難を逃れ、この地の豪族忍海部細目にかくまわれて成長。

その後、二人の皇子は顕宗・仁賢天皇を即位したとの記述が播磨風土記や記紀にある。

この地を収めた豪族忍海部氏と大和朝廷とのつながりならびに勢力の大きさを示すエピソード。

この地の忍海部氏の勢力の根源はいったい何だったのだろうか????

「丹生山の山腹には丹土が露出したところがあり、丹生山の南側の山麓には大正年間まで採掘したとされる銅山跡や銅の採掘跡が残っている。また　北山麓淡河には鉄の廃坑がいくつかあり、自分では確かめていないが　すぐ北の集落　南増尾には古い製鉄跡があつた」と言う。

上記したごとく忍海辺一族もまた韓鍛冶と考えられ、この地でも製鉄・鍛冶生産工房を営み、水銀の精製にも関ったのか見知れぬ。

そして　この系譜が後世の三木の金物につながったと考えられている。゜

【 古代　この地の豪族　忍海部　細目の館があった押部谷（現　押部谷町木津）】

大和葛城山麓を根拠地とする韓鍛冶の一族忍海部の一族が

製鉄・鍛冶を中心にこの押部谷周辺志染の里を治めていた

志染・押部谷を治める豪族忍海部細目の館跡　神戸市西区押部谷　木津

志染・押部谷の豪族忍海部細目にかくまわれた後の顕宗・仁賢天皇を祭る顕宗・仁賢神社

志染・押部谷の豪族忍海部細目の豪邸・顕宗・仁賢神社のある　木津周辺

「自分の住む神戸周辺に「たたら」遺跡がないのか?」と気になりながら、神戸の「たたら」製鉄遺跡については聞いたことがなく、「あるとすれば　この丹生山周辺」と思われ、何度となく　「辰砂や鉄鉱石の痕跡がないか? 」とこの山の周辺を歩いているが、いまだ　良くわからない。

【参考】

■ 「和鉄の道　Iron Road　日本の製鉄遺跡探訪」より　金剛・葛城山麓　葛城氏の鍛冶工房「忍海」

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/5iron05.pdf

■ 「和鉄の道　Iron Road　日本の製鉄遺跡探訪」より鍛冶屋の祭 り　「鞴祭り・ふいごまつり

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/4iron14.pdf

■ 三木市商工会議所編「金物のまち三木　-金物のルーツを探る-」

■ 「三木の自然「地学編」」　帝釈山の朱土　淡河から山田に抜ける道筋　三木市教育委員会　三木市中学校理科研修部

http://educa.miki.ed.jp/nature/shudo.html

2. 丹生山とその周辺の朱土形成　インターネットより

最近　以前貰った「金物の街　三木」の小冊子「金物のまち三木　-金物のルーツを探る-」を読んでいて、丹生山の山腹に「朱土」が露出していることを知り、また、その場所がいつも通る山田から淡河へ抜ける国道 428 号線の道際であることをインターネットで知りました。

「三木の自然「地学編」」　三木市教育委員会　三木市中学校理科研修部会

帝釈山の朱土　　淡河から山田に抜ける道筋　　http://educa.miki.ed.jp/nature/shudo.html

今から 1 億年ぐらい昔、丹生山周辺は大変激しい石英斑岩や流紋岩の火山活動の影響を受けた。マグマがだんだん冷えていく過程で最後の方で水分を主成分とする高温溶液（熱水溶液）が残るが、丹生山周辺では熱水作用により流紋岩の岩体の割れ目にこの熱水溶液が高い濃度で集まり、水銀や鉄・銅などの熱水鉱写真床を形成。　その後　水銀を含む熱水鉱床が風化して、水銀を含む朱土が形成されたと見られる。

概　要　　「朱土」「辰砂・水銀朱」

「丹土・朱土」とは硫黄と水銀の化合した赤土(辰砂)で、神社の朱塗りの柱などに用いられた。

「朱」はこの辰砂を粉砕して、水との比重を利用して採集したものである。また、辰砂を過熱すれば銀色の液体「水銀」が沸き出してくる。

地殻の奥深くにあるマグマが火山活動で上昇し、だんだん冷えていく最後の方の過程で水分を主成分とする高温溶液（熱水溶液）が残る。この熱水溶液には鉄・銅・金・水銀など多くの鉱物が溶け込んでおり、この熱水溶液が岩の割れ目に高い濃度で集まり、水銀や鉄・銅などの熱水鉱床を形成する。

朱土や辰砂はこの水銀を含む熱水鉱床がその後の地殻変動などで、地殻表面近くにまで現れ、風化して水銀を含む朱土が形成されたと見られる。

「久しく服すれば、神明に通じ、不老で、身が軽く神仙となる」と中国の古い文献に記載される仙薬であるが故に、赤土自体に呪力があると考えられたようで、弥生時代から古墳時代にかけては辰朱を細かく砕いて遺骸をつつむ施朱の風習などがあり、きわめて重要な貴重品であった。

酸化鉄系の赤土「ベンガラ」が「縄文の赤」と言われるのに対し、この辰砂を含む赤土が「弥生の赤」といわれる由縁である。しかし　両者の赤土は同じように見えて外観観察のみでは難しいといわれる。

この辰砂や水銀の採取や精製には専業の丹生氏が当たり、水銀を産する地域には「丹生」「丹生寺」などの地名が残っている。また　熱水鉱床には水銀と同時に金・銅・鉄などさまざまな金属が含まれており、これらを求めて山師たちが山中を探し巡り、これが修験道のルーツとも考えられている。

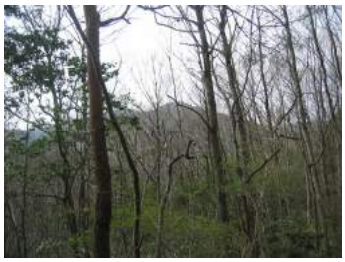
水銀と同時に多くの金属資源が同じ地域で産する場合も多いといわれ、「丹生」の地で鉄を産する場合もある。
施朱の風習は古墳時代前半には終わったが、その後　金を水銀に溶かし込んだアマルガムを銅などに塗り、これに熱をかけて水銀を蒸発させると、表面に金がしっかりと食い込むメツキの技術が伝来した。
６世紀の頃になるとこの水銀が必要になり、益々水銀は益々重要になる。
このメッキ技術を持ち込んだのは秦氏で辰砂と水銀の利用の主役は辰砂の採取を司る丹生氏から秦氏に移り、丹生氏は丹生都比売を祭祀する神官となっていったという。

我国の産地では三重･奈良･和歌山・徳島などの中央構造線沿いの産地や北海道イトムカ鉱山などが有名。
この水銀鉱石　辰砂（赤色硫化水銀 HgS：cinnabar）を「辰砂」というのは、中国の辰州から水銀鉱石が多量に産出されたことによると云われる。

3.　写真アルバム　丹生山 Walk　2005.4.13.

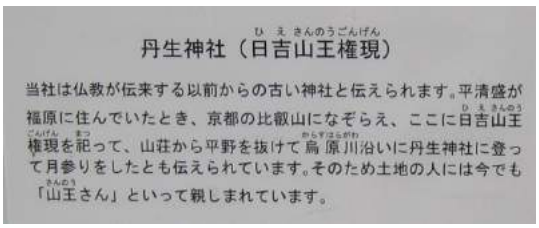
丹生山南の坂本から丹生山頂上への道　　丹生山神社参詣の古道

丹生山の南側　坂本集落からみた丹生山　2005.4.13.



丹生神社前からハイキング道へ　　山ツツジがいたるところで咲き始めていました

信仰の山　登山道の脇には道標など古い石仏が並んでいます



６世紀には　丹生山山頂近く　大伽藍が並んでいたという明要寺跡

丹生山　山頂　丹生神社　　結局頂上まで林の中で　視界が開けず

丹生山頂上南側の展望　六甲山系・遠く高取山・須磨の横尾山が浮いていました

丹生山の山裾にある不動寺

4.　丹生山に「朱土」の露頭を訪ねて　淡河へ

2.22.朝　丹生山系の山の山腹に露出している「朱土」を見にでかける。
場所は箕谷・山田から丹生山を越えて淡河へ向かう国道 428 号線。もう 10 年ほどになるが、道路改修がされ、素晴らしい山岳ドライブウェイで、一時　六甲山を締め出されたライダーが高速コーナリンクを楽しむ場所として有名になったところである。　丹生山系の帝釈山と稚児墓山の鞍部を越えたところで　道路から右手に見えるという。

自宅から愛用の原付で神戸三木線を北へ。
山陽自動車道　神戸北インターのところを右に折れて、丘陵地の山の中を呑吐ダム・丹

生山への道を急ぐ。
30 分ほどで山を越えると眼下に見慣れた丹生山と坂本の集落が見えてくる。
ちょっと一服　正面に広がる丹生山系の山々と山裾に広がる坂本の集落を眺めて、坂を一気に下って盆地に入ってゆく。
T 字路を左に行くと呑吐ダムを経て志染・三木　右へ行くと箕谷へ。北側に丹生山系の山々　南にも着た神戸の丘陵地に隔てられ、東西に伸びた狭い盆地　その中央の底部を丹生山を源とする山田川が東へ流れる。
古代から開けた歴史ある街　丹生山・山田の集落で、まだ　日本の原風景が残る神戸の山郷である。
坂本の T 字路を東へ曲がって直ぐに丹生神社の鳥居がある丹生神社前のバス停に出る。

古代から開けた丹生山・山田の集落

丹生山へは丹生神社前のバス停から鳥居をくぐって　集落を真っ直ぐ北に登っていったところが登山口でここからは　明るい林の中や尾根すじの旧参詣道を登って、視界は開けないが約 1 時間ほどで丹生山山頂に出る。
山頂は丹生神社の境内で木々で 360 度の展望は開けないが、南側　木々の間から　東西に横たわる六甲連山とその丘陵地とその間に点々と広がる裏六甲の町々そして須磨・三木の町々が遠望できる。

（　3.写真アルバム　丹生山 Walk　2005.4.13.　）

国道 428 号を北へ

今日はこの丹生神社のバス停前を通り抜け、左手に丹生山系の山々や盆地の底をながれる山田川を眺めながら箕谷方面への新道を 5 分ほど走る。
そして、淡河・吉川の標識で北におれ、山田川を渡って、福地の集落をぬけると丹生山系の山越で淡河に向かう 428 号線。箕谷のスポーツセンターのところから淡河への山越えが始まる。
素晴らしいドライブウェイを北から西へカーブしながら帝釈山と稚児墓山の間へ向かう。

眼下に谷筋の向こうに山田の集落　西に丹生山の美しい展望が広がる橋をわたり、北へカーブするといよいよ両側に帝釈山と稚児墓山の山肌が迫ってくる。その間を登りながら抜けてゆく。

淡河へ向かう国道 428 号線からの展望　帝釈山と稚児墓山の山間に入る手前

左手へ帝釈山・丹生山への登山道の標識や右手に稚児墓山への標識のあるあたりがこの道の最高点。

　赤色をした山肌が見えないか　きょろきょろしながら進むがやっぱり何の変哲もない土色。朱土らしきものはなし。山を越えて　少し下り気味になって、正面が急にオープンになって、左手に北へ大きく広がる深い谷・背後に丹生山系の山々が見え、右手に環境センターの入り口が見える。ここから道はこの谷に沿って尾根を淡河へ下ってゆく。インターネットで調べた情報によるとここを少し下った右手山肌が「朱土」の露頭が見える場所という。

稚児墓山と帝釈山の鞍部周辺
このルートの最高点近傍

山を越えて　環境センターのところから左手に深い谷が北へ広がる　この谷の先　眼下に淡河の街

環境センターの入り口のところに古い大きな道標と淡河への旧道が見え、「左　淡河　吉川　　右　木津」の字が読み取れる。
この山越えの道が生活道路･朱土などの鉱物資源の輸送路としてにぎわった時代があったのだろう。

環境センター横から淡河に伸びる静かな旧道とそのかたらにある道標

注意深く道際の山肌を眺めながら淡河へ下ってゆく。

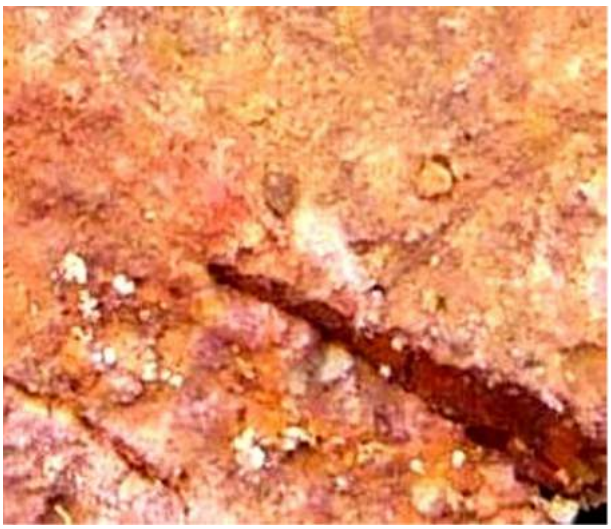
5 分ほど下った右手の崖の上へよじ登る道が赤い。少し先へいってみるが、普通の土色。
やっぱりこの崖だけが赤い。　これが「朱土」の露頭でした。
崖の上の道へよじ登るが、道際の崖の断面ほど赤くない。想像していた赤よりも酸化鉄系のベンガラ色に近い。
今まで山で赤色の土をみるとベンガラと思ってきましたが、朱土が混じっていたかもしれない。

朱土が露頭する崖

崖の上に上ったところ

朱土の露頭の拡大

目を近づけてみると　本当に赤い。　また　黄色味を帯びた土も周辺に見えるので、間違いなく朱土である。
火山活動の熱水が岩の割れ目を伝って上昇し、その中に含まれる水銀が硫黄と反応して硫化水銀・辰砂となり、それが　土と混ざって赤土となっている。
　カメラを近づけて、接写モードで写真を撮ると辰砂断面が出ている部分の赤と辰砂周りの黄色の部分が際立って見える。
水銀のにじみだしか何か見えないかと思うのですが、さすがになし。
　この辰砂を主とする「朱土」を寺院の柱を赤色に塗ったり、暴風を兼ねて死者に塗るなど貴重な品だったという。また、この辰砂を含む土を 400℃～600℃で蒸し焼きにすると水銀蒸気が発生し、これを冷却凝縮すると水銀が得られ、これを金や銅など金属と混ぜて水銀アマルガムを作って、これを塗って水銀を蒸発させればメツキが出来る。
古代　この辰砂・水銀の精製に丹生氏が関り、めっきの技術を秦氏が伝えた。
この場所だけでなく、この丹生山周辺で辰砂・水銀鉱脈が見つかり、貴重な辰砂・水銀の精製が行われ、この地が早く開けた要因であろう。
丹生山の地名から想定された「辰砂」の産出が自分で確認できました。
そうするとやっぱり　この丹生山周辺は熱水鉱床が露頭する鉱物資源で　古代　製鉄技術を持つ多忍海一族が進出してきて、この周辺を収めると共に製鉄を行っていたことも十分ありうる話である。

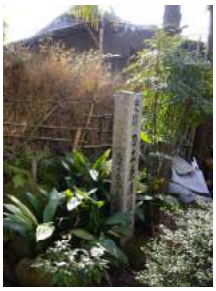


露頭　朱土の接者拡大写真

30 分ほど崖の周辺を歩いたりして、宿場町淡河の街へ下りてゆきました。
淡河の北　南増尾で古い製鉄後が出たというが本当だろうか・・・・・・・
行ってみれば、ひょっとしてそれの手がかりも得られるかもしれないと

淡河の街へのくだり道　　眼下に中国道が東西に走る淡河の街並みが見える

ドライブアェイを下りきると有馬の湯へいたる湯乃山街道の宿場町淡河の古い街並みが東西に広がっている。
左に道の駅右に豊助饅頭の店がある十字路が淡河本町の交差点　東西の街道が姫路・三木を通って有馬へいたる湯ノ山街道。
古い製鉄跡があったという南僧尾はそのまま街道とクロスしてさらに北へ 5 分ほど。　東西に走る中国道の橋脚をくぐったあたり、田園地帯の中の集落に入る。このあたりが南僧尾。
南には淡河の街の背後に丹生山系の山々がかすんで見え、まわりには小さな丘陵地が幾つも広がっている。
このどこかに製鉄遺跡があったのだろうか・・・・



南僧尾から淡河・丹生山を望む　　南僧尾で見た刀工兼国館跡の石碑

原付を走らせながら集落で出会った人に幾度かきくのですが、だれも知らないという。
ふっと横を見ると道脇の立派な屋敷の端に「史跡　刀工兼国館跡」の石碑が建っている。
数年前まで刀鍛冶さんが折られたが、古い話はやっぱりわからない。
でも　刀鍛冶の足跡があるとすると古い時代にこの地にもたたら製鉄の痕跡があったのかも知れぬ。
ひょっとして　それが遠い昔　この地を収めた豪族忍海部　細目の製鉄・鍛冶工房だったかも知れぬ。

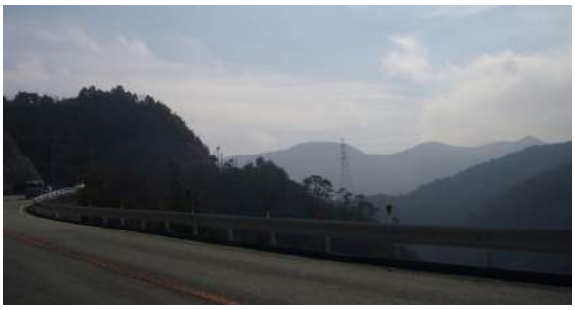
「丹生」の名のつく土地は水銀・辰砂と関係深い土地。この地では「辰砂」とともに「金」「銀」「銅」「鉄」など鉱物資源も産する。その昔、山師や修験道の人達はこれらを探して山を巡ったという。
「神戸の丹生山のどこかで天然の辰砂が見られるはず。
たたら製鉄の跡があるかもしれない。」と思い続けてきましたが、やっと見ることが出来ました。

丹生山　朱土露頭の「朱土・赤」

たたら製鉄の痕跡は良くわからない。
でも　この丹生山の周辺押部谷には古代大和の葛城山麓を本拠とする韓鍛冶の一族忍海部氏がいて　この地を収め、政争を逃れ、
この地の忍海部氏に匿われ成長した二人の皇子が顕宗・仁賢天皇になっている。そして　淡河にはそのルーツはわからないが刀鍛冶の館があった。

いずれ　この周辺のどこかで　たたら遺跡が出れば・・・　　・と益々思える walk でした

丹生山周辺は辰砂・水銀の里であると共に鉄の里
ベンガラの赤が「縄文の赤」に対して辰砂の赤は「弥生の赤」
是非とも一度みたいと思っていた天然の「辰砂」。
天然の「辰砂」の赤　ちょっと黒味がかった神秘的な色合いでした。
もっと朱色に近いのかと思っていましたが、ベンガラ色と見間違うかもしれぬ「赤」。
満足一杯で　また　丹生山を越えて　もと来た道を戻ってきました



丹生山を越えながら
Mutsu　Nakanishi

【　追　　記　】

今回の Walk でみつけた淡河　南僧尾の刀鍛冶ルーツや製鉄遺跡伝承について、神戸市埋蔵文化財センターに問い合わせたが、埋蔵文化財センターでは確認できていないとのことで、淡河の民間伝承と考えられる。
また、神戸市域でのたたら製鉄遺跡についても　現在まで発掘に関ったことはないとの事でした

【参　考　資　料】

■　「和鉄の道　Iron Road　日本の製鉄遺跡探訪」より　金剛・葛城山麓　葛城氏の鍛冶工房「忍海」
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/5iron05.pdf
■　「和鉄の道　Iron Road　日本の製鉄遺跡探訪」より鍛冶屋の祭り　「鞴祭り・ふいごまつり
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/4iron14.pdf
■　三木市商工会議所編「金物のまち三木　-金物のルーツを探る-」
■　「三木の自然「地学編」」　帝釈山の朱土　淡河から山田に抜ける道筋
三木市教育委員会　三木市中学校理科研修部
http://educa.miki.ed.jp/nature/shudo.html

神戸の北麓　鉄の山郷　丹生山　　押部谷・志染・丹生山・淡河

桜の呑吐ダム

箱木千年家

丹生山

押部谷　木津　古代韓鍛冶　忍海部一族の館跡

丹生山とその山麓　坂本集落

3.　蝦夷の雄「アテルイ」の痕跡
「清水寺・将軍塚」と永観堂「みかえり阿弥陀仏」を訪ねて

京都東山の陽だまりハイク　　2006.2.9.

京都東山　陽だまり　ハイク　アテルイの足跡と見かえり阿弥陀様

●伝説　永観堂　見かえり阿弥陀さま　の由来

●東北の雄「アテルイ」と征夷大将軍　坂上田村麻呂

1.1.　清水寺から将軍塚へ東山をハイキング

1. 清水寺　清水の舞台から蝦夷の雄アテルイ・モレの顕彰碑へ
2. 清水寺から東山を登って坂上田村麻呂の将軍塚へ
3. 将軍塚からの京都展望

1.2.　永観堂　みかえり阿弥陀さまを訪ねて

京都 東山 将軍塚より 京都市街地全景　2006.2.9.

円山公園から見上げる東山　将軍塚周辺

京都の街の東を南北に連なる東山連峰

2月6日　「京都　東山三十六峰」の東山界隈を歩きました。

発端はNHK新日曜美術館の司会など活躍中のはなさんのエッセー「ちいさいぶつぞう　おおきいぶつぞう」。京都　東山山麓の永観堂は東山山麓　銀閣寺から南禅寺への散策路の途中にある静かな寺永観堂の項に

『　小走りで仏さまに歩み寄ると「プィッ」と横を向く阿弥陀様の姿がありました。
　せっかく　会いにきたのに「プィツ」はないでしょう。・・・・・
　ぽかぽか心温まるゆたんぽのような仏さま・・・　　』

かわいらしい仏さまの挿絵とともにこれだけ愛らしく親しみやすい文に出会うのは初め

て。永観堂は学生時代に何度も歩き、秋の素晴らしい紅葉の印象はあるのですが、仏さま「みかえり阿弥陀仏」を拝観した記憶はなし。「是非とも出会いた」と。
また　この東山界隈には東北のたたら探訪で知った蝦夷の雄「アテルイ」の検証碑が清水寺にありその背後　東山・将軍塚はアテルイを討った坂上田村麻呂が眠るという。一度是非訪れたい場所。
「アテルイ」は教科書などでは「悪路王」・「鬼」とされていますが　東北人には今も強烈に愛され続けている。
東北の Country walk で東北人が熱っぽく語るその人物像を知り、東北の地と共に私の好きな人物の一人である。

（ 京都に連れてこられたアテルイは坂上田村麻呂の助命嘆願むなしく河内で処刑。
坂上田村麻呂は建立した清水寺で国家守護と共に戦乱で散った将兵をも弔ったという。
そして　平安京造営の折、桓武天皇は京の安泰を祈って　平安京が一望できる東山将軍塚の頂上に
塚を築き武将像に坂上田村麻呂の甲冑を着せて葬ったという。　）

東山の峰々を伝うハイキングは幾度か学生時代にはありましたが、ついぞ出掛けたことなし。今はどうなつているのか　東山の縦走路が今もあるのか良くわかりませんが、まあ　でかければ、とうにかなるだろう。
清水寺から将軍塚そして永観堂をつないで歩いてみよう。
久しぶりに東山界隈を歩こうと 2 月 6 日でかけました。

●　伝説　永観堂　見返りの阿弥陀さまの由来

東山連峰の山麓に建つ禅林寺永観堂　　2006. 2. 9.

永観堂は東山連峰　第十六峰　若王子山の真下にあり、正しくは禅林寺といい創建は平安初期という。
永観堂と呼ぶのは七世永観律師の名に由来するもので、本尊阿弥陀如来像は“見返り阿弥陀”と呼ばれ、その名のごとく、顔を左（向かって右）に曲げて後ろを振り返った姿の阿弥陀像である。
この阿弥陀仏には次のような伝説がある。

平安の中頃、永保 2 年（1082 年）、当時 50 歳の永観律師が本堂で阿弥陀像の周りを巡りながら念仏を唱える行道念仏の行をしている時、阿弥陀如来（実は室町時代作）が壇からおりて永観と行動を共にした。永観は驚いて歩みを止めた。先行した阿弥陀如来はふりむいて「永観遅いぞ」と促された。その姿が、そのまま像になったと言われている。
永観の時代と本尊の作られた時とには大きなズレがある。信仰物語の面白い所以である。
また、永観は人々に念仏を勧め、また、禅林寺内に薬王院を設けて、病人救済などの慈善事業も盛んに行なった。永観は、今日の社会福祉活動の先駆者といえるであろう。
禅林寺を永観堂と呼ぶのは、この永観律師が住したことに由来する。なお、「永観堂」は普通「えいかんどう」と読むが、「永観」という僧の名は「ようかん」と読むのが正しいとされている。

● 蝦夷の雄「阿弖流為・アテルイ」と征夷大将軍　坂上田村麻呂

古代東北は資源王国。この東北の資源をねらて　大和朝廷の蝦夷征伐が始まった。
蝦夷たちが手にした蕨手刀は弧状にそり、切る刀への日本刀のルーツ。
戦いに敗れた蝦夷の技術集団は俘囚となって、日本各地に散らばって、たたら製鉄・刀鍛冶の技術を日本全国に広めた。　　出羽鍛冶・舞草鍛冶などの名が広く日本各地に残る

清水寺にあるアテルイ・モレの顕彰碑

「アテルイ」の実像を示す資料はほとんど残されていないが、アテルイ復権の運動が今も広がっている。
東北に通って「和鐵」について　歩いているうちに「日高見の鬼」と呼ばれる蝦夷の族長「アテルイ」に東北の人たちが親しみを込め、熱っぽく語るその人物像ならびに「アテルイ」への強い連帯にビツクリ。
アテルイの生涯と蝦夷の戦いを熱っぽく描いた盛岡在住の高橋克彦氏の小説「火怨」があり、東北人の思いを込めたアニメ映画「アテルイ」の原案であり、東北人で語られてきた「蝦夷観」　「田村麻呂と蝦夷との交流」ほか当時の東北の事情が良く描かれている。

【蝦夷の雄「阿弖流為・アテルイ」と征夷大将軍　坂上田村麻呂】

8 世紀末頃まで、東北北上川流域を日高見国といい、大和朝廷の勢力圏外にあり、独自の生活と文化を形成していた。
当時　大和朝廷は服属しない東北の民を蝦夷と呼び、蔑視してその計略のため数次にわたり、巨万の征夷軍を動員した。
胆沢（岩手県水沢市地方）の族長「アテルイ」は近隣の部族を連合して 10 数年にわたりこの侵略を頑強に阻止した。中でも 789 年の巣伏の戦いでは勇猛果敢に奮闘して征夷軍に壊滅的な打撃を与え、蝦夷の英雄と称された。
征夷大将軍となって東北に赴いた坂上田村麻呂は和戦量戦略を用いつつ、801 年　数万の将兵を動員してアテルイを打ち破り、ここに蝦夷攻撃は終り東北経営の拠点として胆沢城が築かれた。

「アテルイ」は十数年に及ぶ激戦に疲弊した郷を憂慮して、盟友「モレ」と同胞 500 余名と共に降伏し、田村麿に従って平安京に上った。田村麻呂は蝦夷の両雄の武勇と器量を惜しみ、東北経営に登用すべく朝廷に助命嘆願したが、公家たちに反対され、「アテルイ」「モレ」の両雄は 802 年に河内の国で処刑された。田村麻呂は深く帰依し寺の造営につくしたゆかりの「清水寺」でこの二人や敵味方の将兵の霊にその誠を呈して祈念を重ねたという。

また、清水寺の後には京都東山連邦が連なり、その中央部のなだらかな山の上に「将軍塚」がある。

将軍塚からは京都全体が一望でき、桓武天皇が平安京造営を決断した場所といわれる。

そして、長く都を護る祈りを込めて土の武将像・坂上田村麻呂を作り、その甲冑を着せ、鉄の弓矢・太刀を持たせてここに埋めたといわれ「将軍塚」の名がついた。山の中央部にその古い円形の将軍塚があり、また頂上部の大日堂にはこの山から出土した平安初期の大日如来石像が祭られている。

一番最初にアテルイの名が出てくる「続日本書紀」では「賊帥夷亜弖流為　　賊の大将　蝦夷のアテルイ」となっているのが後の編纂になるや「類聚国史」や「日本紀略」では「夷大墓公阿弖流為　」と「公」という姓を与えられ、蝦夷の統率者として遇されており、その人物像には多くのなぞが残されていて、かつ　魅力的な人物である。

一般歴史では「悪路王」と呼ばれ、田村麻呂の影で悪者とされてきた「アテルイ」であるが、東北では自分たちのオリジンとしての連帯の中「坂上田村麻呂を信じ、更なる騒乱による犠牲と荒廃をさけて自ら投降し、平和共存を願うアテルイ」と広く愛してきた。そして、平成 6 年にアテルイの復権に賭けた人たちの熱い運動で、田村麻呂ゆかりの京都清水寺の境内に「アテルイ・モレ」の顕彰碑が建てられた。

岩手県北上市の市民憲章より

「あの高嶺　鬼住む詩り　その瀬音　久遠の讃歌

この台地　燃えたついのち　　ここは北上」

岩手県民総参加製作の長編アニメ映画「アテルイ」のメッセージより

「アテルイは親・兄弟を愛し、美しい自然を愛すために生きた。

21 世紀の人間がどう生きるかという大切なメッセージがある」

■　参考　「和鉄の道　Iron Road　たたら遺跡探訪【Ⅳ】」　6.蝦夷の鉄　東北　和鉄の道

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/4iron06.pdf

1.1.　清水寺から将軍塚へ東山をハイキング

1.　清水の舞台から蝦夷の雄　アテルイ・モレの顕彰碑へ

2 月 9 日朝　晴れ　京都駅から東山通りを走るバスに乗って清水道で降りる。東大路通りから直角にまっ直ぐ東に緩やかな坂道清水道をぶらぶらまわりを眺めながら上ってゆく。この坂道登るのは何十年ぶりかである。10 分ほど上ったところで、五条坂から茶碗坂が合わさって清水坂。　このあたりからは、立ち並ぶみやげ物屋の街筋のむこうに朱塗りの山門が見え、バスでやってきた修学旅行の学生でごった返している。

みやげ物屋の街筋を抜けると　ぱっと視界が開け　東山をバツクに真っ赤な清水寺の山門と塔が見える。

さほど登りとは感じませんでしたが、ここまで登ると京都の市街地が見晴らされ随分高い。

清水寺の参詣道　清水道　清水寺近く

清水寺の正面　山門

世界文化遺産　清水寺は「清水の舞台」で京都では最も人気の観光スポットのひとつである。
東山山麓境内の岩の間から清水寺の由来となった清水「音羽の滝」が湧き出し、この霊水と共に観音様が深く京都の人たちに信仰されてきた。　しかし、観音信仰に深く帰依した坂上田村麻呂の尽力でこの清水寺が建立されまた　長きに渡った戦乱で倒れた将兵をとむらったことなどまったく知りませんでした。
そして、この清水寺の境内に坂上田村麻呂と戦った蝦夷の雄アテルイとモレの顕彰碑があるといい、背後に連なる東山三十六峰　知恩院上の華頂山山頂付近には坂上田村麻呂が葬られたという将軍塚があり、京都の街全体を見守っているという。
何度かこの清水寺近辺から東山を歩いた記憶はあるのですが、今はどうなっているか　全くわからず。まず、清水の舞台へ上がって　アテルイの碑に出会ってから東山への道を探す。
拝観口で聞くとアテルイの碑は舞台の直ぐ下のところ　そして　東山へ登る道は地主神社の所からしっかりついているという。

清水寺の舞台　　2006. 2. 9.

清水寺の舞台からひとしきり京都の市街地を見て舞台の裏手に回りこむと北側に地主神社の鳥居が見え、鳥居の横に拝観口で聞いた東山への上り口の標識とよく整備された道が見える。清水寺から東山へ登る道がどうなっているか心配でしたがまったく心配なし。

清水寺の舞台から　京都市街地遠望　　中央左に京都タワー　　2006. 2. 9.

音羽の滝から　清水の舞台の下の遊歩道を舞台木組みを眺めながら　西へ　　2006.2.9.

舞台の直ぐ横に沿って舞台を支える木組みを見上げる階段があり、階段を降りたところが少し広場になっていて　石組みで作られた岩壁から湧水が3筋落ちている。ぼくの印象とは随分違う人工的によく整備された音羽の滝。

昔はここで　流れ落ちる水に打たれる人がいたりして、もっと素朴な場所だったのですが、観光ブームがすっかり景色を一辺していました。

音羽の滝

アテルイ・モレの顕彰碑

音羽の滝のところから西へ紅葉谷の縁に沿って、清水の舞台の木組みを見上げながら西の山門の方に遊歩道が続いていて、清水の舞台の下を通り抜けたところに大きな自然石の碑が木々の間から見え、これが蝦夷の雄「アテルイ」と「モレ」の顕彰碑だった。

こんなところに顕彰碑が建立されていたのか・・・

この谷沿いの道は何度も通ったことがある谷と京都市街を見晴らす静かな場所である。

1994年11月　平安建都1200年を記念して関西岩手県人会やアテルイを顕彰する会などの人たちによって建てられた自然石の立派な顕彰碑である。

清水寺　南の谷に面する清水の舞台下の丘にある　アテルイ・モレの顕彰碑

顕彰碑の横に置かれた銘文には　アテルイ・モレを愛した東北人の熱い思いがそのまま刻まれていて、以前　東北を歩いて感じた「アテルイ」「モレ」の人物像を重ねていました。

阿弖流為　母禮　の顕彰碑に刻まれた銘文

8 世紀末頃まで、東北北上川流域を日高見国といい、大和政府の勢力圏外にあり、独自の生活と文化を形成していた。当時　大和政府は服属しない東北の民を蝦夷と呼び、蔑視し、その計略のため数次にわたり、巨万の征夷軍を動員した。胆沢（岩手県水沢市地方）の首領大墓公阿弖流為「アテルイ」は近隣の部族を連合して 10 数年にわたりこの侵略を頑強に阻止した。中でも 789 年の巣伏の戦いでは勇猛果敢に奮闘して征夷軍に壊滅的な打撃を与えた。

801年　坂上田村麻呂は四万の将兵を動員して戦地に赴き、帰順策により胆沢に進出し胆沢城を築いた。

阿弖流為は十数年に及ぶ激戦に疲弊した郷民を憂慮し、同胞五百余名を従えて、田村麻呂の軍門に降った。

田村麻呂将軍は阿弖流為と副将磐具公母禮「モレ」を伴い京都に帰還し、蝦夷の両雄の武勇と器量を惜しみ、東北経営に登用すべく政府に助命嘆願した。　しかし、公家たちの反対により弖流為　母禮は 802 年 8 月 13 日河内国で処刑された。

平安建都 1200 年に当たり、田村麻呂の悲願空しく異郷の地で散った阿弖流為　母礼の顕彰碑を清水寺の格別の厚意により田村麻呂開基の同寺境内に建立す。

両雄もつて冥さるべし。

1994 年 11 月　吉祥日

関西胆江同郷会　　アテルイを顕彰する会

関西岩手賢人会　　京都岩手賢人会

2.　清水寺から東山を登って坂上田村麻呂の将軍塚へ

清水寺から将軍塚・大日堂への登り口　　2006. 23. 9.

地主神社の上り口には道標があり､将軍塚まで 10 町　知恩院まで 17 町など東山山麓への道のりが記されている。直ぐに清水寺寺域を出る橋を渡ったところで、そのまま真っ直ぐ山麓沿いを円山公園の方へ行く道から分かれて東へ山へ登ってゆく。清水寺の喧騒がうそのようなまったく人影のない静かな林の中。

山道であるが、足元は落ち葉のじゅうたんでサクサクサクと心地良いく、良く手入れされた林が美しい。

清水寺から将軍塚へ東山へ登ってゆく森の中の道

誰もいない林の中にもひっそりと清水寺と将軍塚の古い道標があり、また、この美しい林が神社建築に必要な桧皮の試験採取地であるとの案内板がある。おそらくは古くから清水寺から東山華頂山頂上の将軍塚・大日如来への参詣の古道なのだろう。
東山将軍塚へは五条とおりから北へ東山ドライブウエイが通じているので、山道などもう荒れていると思っていましたが、ハイキング道としてよく整備されているのにビックリ。

桧皮採取試験地を示す案内板

東山を貫く京都一周トレイル　東山コースの案内板

今回　東山を歩くまで良く知らなかったのですが、京都市街地を取り巻く東山・北山・西山をぐるりと巡る京都一周トレイルがハイキングコースとして整備され、京都の市街地のどこからでもこのトレイルを出入りして歩けるようになっている。清水寺から約 15 分ほどで東山の縦走路　京都一周トレイル東山コースに出た。この道は五条通渋谷街道から将軍塚を通って、蹴上げ・鹿ケ谷・大文字山から比叡山へと続いていて、ここからは将軍塚までこのトレイルを歩く。15 分ほどで将軍塚の頂上部の広い頂上公園　東山ドライブウエイの終点の駐車場に飛び出た。駐車場の北の山並みの奥に雪をかぶった比叡山が見える。
将軍塚は東山ドライブウエイからしか簡単には行けず、しかも路線バスがないので　車でないと行きにくい所と思っていましたが、京都市街地から 30 分ちょっとで将軍塚の頂上。本当に以外でした。

京都トレイル　東山コース　将軍塚への道で

将軍塚の駐車場から見る比叡山

公園の端に将軍塚の案内板があり、この地が昔から眼下に京都盆地全体を見下ろせる場所で桓武天皇が平安京建都の際にも　この頂上に立ち、建都を決意したという。
また、将軍塚はこの広い山頂部の北半分を占める青蓮院門跡大日堂の寺域の中にあると書かれている。

将軍塚の案内板と大日堂の門　　2006.2.9.

大日堂のお堂には将軍塚の「大日さん」として広く京都の人たちに信仰されてきた平安時代初期の古い大きな石仏大日如来が祭られていた。この仏様はこの将軍塚の山から出てきたという。
私はまったく知りませんでしたが、そういえば　登る途中の道標に「将軍塚」と並んで「大日如来」と書かれていて、道標に地名ではなく不思議に思ってましたが、京都の街で広く信仰されていた証拠。

この大日堂の周囲は広い庭園となっていて、北から北西斜面がぐるりと京都市街を眺める展望書になっていて、その手前の頂上部に周囲を石で囲まれた直径約 20 メートルほどの円形の塚があり、これが将軍塚。
桓武天皇が平安京の安泰を願って 2.5 メートルの武者像に坂上田村麻呂の甲冑を着せ太刀と弓矢を持たせてここに埋めたとの伝承の塚である。
将軍塚の背後には眼下にはなにもさえぎるもののもなく、京都市街是全体がパノラマのように広がり、本当に素晴らしい位置にある。

京都 東山 将軍塚より 京都市街地全景　2006. 2. 9.

大日堂とその寺域の中にある将軍塚　　2006. 2. 9.

3.　将軍塚からの京都展望

将軍塚は平安京建都の昔から京都市街地全体を見下ろせる素晴らしい場所で、また今も京都の夜景を楽しむ最も良い場所として有名である。

（でも　車でないと行けないことから、若いカップルのデートスポットとして夏の夜は一杯だとか・・・）

将軍塚の展望台は座って京都を見下ろせるよう桟敷のようになっていて、あっけに取られて学生時代生活した空間を目で追いながら京都の街を眺めていました。

南に京都タワーぼんやり修復中の東本願寺も見え　中心部に御所・二条城・下鴨神社の緑の森が点在し、すぐ下には　神楽岡・吉田山　遠く加茂川の向こうに双丘が市街地の中に浮いている。そして　それら市街地の中心軸を南北に加茂川が貫き、北の上加茂・松ヶ崎　そして比叡山へとつづく。

ここからは市街地を取り囲む京都五山の送り火床がすべて見え、その背後の比叡山　鞍馬・北山　愛宕山・西山そして南西の天王山・ホンポン山の北攝連山と生駒山・八幡の山の切れ目から淀川が大阪へ　そして南には淀・伏見の市街地が切れ目なく続く。

京都　東山　将軍塚より　京都市街地全景　2006. 2. 9.

京都市街地を貫く加茂川　右手中央出町で鴨川　高野川に分かれる
中央左　御所　中央奥　舟形・右松ヶ崎妙法五山の火床が見える

京大・・神楽が丘から松ヶ崎遠望

銀閣寺・修学院・比叡山遠望

京都駅周辺から北攝の山並み遠望

聞いてはいましたが、今見る京都全体の展望　特に加茂川を中心軸として町全体が見渡せる場所はこの将軍塚しかなく、正面の御所　そして左右に広がる京都の街、自分か街の中心の高台に立ち街を指揮しているような錯覚に陥る。
桓武天皇もこの地に立って　そんな感覚をあじわったのではないだろうか・・・・。
そして　眼下に広がる平安京の守護を坂上田村麻呂の霊に託したのではないだろうか

坂上田村麻呂は武人であるばかりでなく、清水寺建立にかかわった宗教人でもあった。
そして　坂上田村麻呂のアテルイ助命嘆願の歴史書記述がほとんど人物像の記録がない蝦夷の族長アテルイ人物像を浮かび上がらせた。そうでないとアテルイも「悪路王」として悪者としてしか記述されず、東北の人たちが共感する人物像が浮かび上がらなかっただろう。
坂上田村麻呂は単に策略を弄した武人ではない優れた大人物　彼とアテルイの交流がなければ東北の長きに渡る混乱は収まらなかっただろう。
そんな功績が将軍塚として京都に残り、また　アテルイに強い近親感を持つ東北秋田にも将軍野や将軍通といった地名として残っている。
一度登って　ゆっくり京都の街をみたかつた将軍塚　アテルイの顕彰碑に書かれた碑文などを思い起こしながらそんなことを考えていました。30 分ほどすわりこんで、眼下の京都を眺めた後、大日堂山門前に咲く椿をくぐって　そのまま東山を北へ向かって、静かな林の中のトレイルをぶらぶら歩いて粟田口に降りる。
サクサクと落ち葉のじゅうたんが本当に気持ちがいい。

大日堂入り口周辺の椿

将軍塚から北へ　静かな林の中のトレイルが続く　　2006.2.9.

30 分ほどで平安神宮の赤い鳥居が見え出すとまもなく粟田口の市街地に降りる。

トレイルはそのまま山裾を蹴上に出て東山を鹿ケ谷・大文字山を経て比叡山へと続くが、粟田口から今歩いてきた東山を眺めながら山裾を知恩院・円山公園の方へ引き返す。この山裾の粟田口からの道もお寺が立ち並んで静かな散策が出来る。

円山公園から見た東山　華頂山周辺

将軍塚の大日堂を所有する青蓮院門跡をすぎると知恩院の大きな山門。山門に大きな「華頂山」の額がかかっている。その背後になだらかなお椀形の山が見えるのが、先ほど上ってきた将軍塚のある華頂山。円山公園　八坂神社の門をくぐると祇園石段下。　清水寺から約 3 時間弱　あっというまに　また市街地に戻ってこんなに簡単に東山を歩けるなんて思いもよらなかったと振り返りながら遅い昼食。

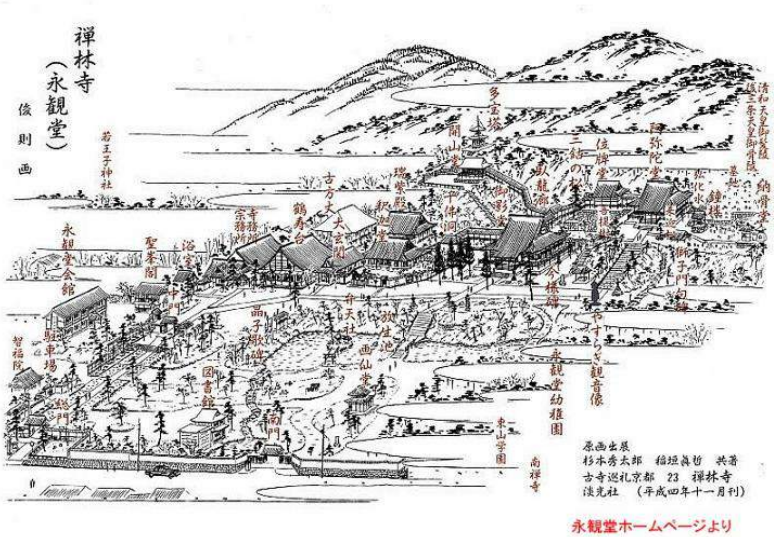
念願のアテルイの碑にも会えたし、田村麻呂の将軍塚からほんと天下を取ったような気分で京都も見下ろせたし、満足のハイクでした。
京都の街中の散策もいいですが、お勧めの東山ハイクです。

粟田口から知恩院・祇園石段下へ
上段: 神宮道　粟田神社　白川小　校門　青蓮院
中断: 円山公園から東山　知恩院山門
下段: 八坂神社石段下　祇園・四条通

昼食後　今度は　平安神宮の東　東山若王子山の山麓　永観堂の見返りあみだ様に会いに行く。

2006.2.9.午後　祇園で

1.2.　永観堂　みかえり阿弥陀さまを訪ねて　東山　若王子三山麓



２月９日　午後

「プイッと横向く阿弥陀さま」

「ぽかぽかと心温まるゆたんぽのような仏さま」

（はな著「ちいさいぶつぞう　おおきいぶつぞう」より）

に胸膨らませて出会いに行きました。

午前中に歩いた東山　将軍塚をさらに北に連なる峰若王子山の山裾　ちょうど平安神宮の東、銀閣寺から法然院を抜けて南禅寺に抜ける白川疎水沿いの散策路のほぼ中間　学生時代によく歩いた界隈である。市内から市バスに乗って東天王町の角で降りて東山へ。昔秋紅葉の頃には永観堂と書いた丸いプレートをつけた市電が直角に曲がるコーナーである。

幾度か訪れた東洋陶器の住友大コレクションのある泉屋博古館・芳泉堂のところから南へ曲がって少し行ったところが永観堂。そのままま っすぐ南へ行くと南禅寺・蹴上への道である。道筋は昔のままで、直ぐ学生時代に戻ってしまう。でも　建物の様子は随分変わっているようだ。

神戸住吉にあった住友資料館が博古館の向かいに来ていました。

10 分ほどで、永観堂の前に出る。このあたりはちょうど観光スポットの狭間で、紅葉の季節を除いては今も静かなものである。

永観堂界隈と永観堂の山門　　2006. 2. 9.

みかえり阿弥陀如来　　永観堂の山門　　みかえり阿弥陀仏の写真が貼られた中の門

「きれいな土塀があったかなぁ」と歩くと山門前　「みかえり阿弥陀如来」の大きな石碑がある。
随分　印象が違う。　わたしの学生の頃はどこからでも寺域の庭の中に入れて、庭には大きなショウギが置かれていて、横の茶店でお茶が飲め、山内の建物を巡ってあちこち自由に歩けたのですが・・・・。
拝観口で拝観料を払って　白砂の敷かれた境内の中、東山をバツクに奥の高台に塔が見え　その前の建物　庭をみると良く手入れされているが、頭の中にあるイメージといっしょでほっとする。
でも　「みかえりの阿弥陀さま」まったく記憶なし。

永観堂の境内　2006.2.9.　　本堂に並んで一番北の奥に塔　南の奥高台に修復中の阿弥陀堂（写真中央）

すぐに本堂に上がつて中を拝観する。　はなさんの本にも書かれていましたが、中々阿弥陀さまに近づけない。
釈迦堂から渡り廊下を渡って御影堂をから　渡り廊下をまたわたって奥へ奥へ。
国宝・重文の仏像・障壁画・襖絵が順路に沿って見られるのですが、今日はやっぱり「みかえり阿弥陀さま」。
　多宝塔がきれいに見える渡り廊下を渡って、すこしめぐったところが、阿弥陀堂。建物は修復中でしたが、暗いお堂の正面　黒いお厨子の中に阿弥陀さま。真っ暗な周囲の中に横向きの阿弥陀さまの立ち姿がありました。
一躯像高　77cm 平安後期～鎌倉初期の作。「みかえり阿弥陀」として知られる永観堂禅林寺の本尊像である。
左肩越しに振り返り、「永観、おそし」と声をかけられた。そのお姿がぼっと浮かんで素晴らしい。
正面から横にまわると厨子に取り付けられた窓から、真っ暗な中からじっとこちらを見つめるお顔に立ちすくんでしまいました。永観堂のシートに書かれた言葉が静かに心にしみてくる。

「みかえり阿弥陀如来」のお姿を現代風に解釈すると、次のようになろう。
自分よりおくれる者たちを待つ姿勢。
自分自身の位置をかえりみる姿勢。
愛や情けをかける姿勢。
思いやり深く周囲をみつめる姿勢。
衆生とともに正しく前へ進むためのリーダーの把握のふりむき。
真正面からおびただしい人々の心を濃く受けとめても、
なお正面にまわれない人びとのことを案じて、
横をみかえらずにはいられない阿弥陀仏のみ心。

永観堂ホームページより
http://www.eikando.or.jp/mikaeriamida.htm

拝観の前に茨木キリシタンの郷「千提寺」の「マリア 15 玄義図」を見たこともあって、イタリア旅行で見たテイツァーノの「聖母被昇天」の絵やアッシジの聖フランシスの一生を描いた壁画をダブらせていました

イタリア旅行で見た「マリア被昇天」・アッシジ「聖フンシス」

真っ暗なお厨子の中からこちらをじつと見つめるお顔が本当に印象的
永観堂の小冊子にきざまれていた「みかえり阿弥陀」の姿勢が心にしみてくる。

気になって仕方なかった「みかえり阿弥陀さま」本当に拝観できてよかった。
やわらかいひざしの中　静かな境内を戻りながら満足感でいっぱいでした。

2006.2.9.夕

京都東山　陽だまり　ハイク

アテルイの足跡と見かえり阿弥陀様を訪ねて

●伝説　永観堂　見かえり阿弥陀さま　の由来

●東北の雄「アテルイ」と征夷大将軍　坂上田村麻呂

1.1.　清水寺から将軍塚へ東山をハイキング

1.　清水寺　清水の舞台から蝦夷の雄アテルイ・モレの顕彰碑へ

2.清水寺から東山を登って坂上田村麻呂の将軍塚へ

3.将軍塚からの京都展望

1.2.　永観堂　みかえり阿弥陀さまを訪ねて

【完】

Iron Road【6】2006

4. 近江の鉄の郷 「比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡 」

帰路は比叡と京都を結ぶ　「古代の鉄の道???　きらら坂・雲母坂」ハイク

滋賀県大津市上仰木　　2006.2.25.

1. 仰木の里と上仰木製鉄遺跡　概　要
2. 比叡山麓　古代の製鉄遺跡「上仰木製鉄遺跡」を訪ねて
   - 2.1. 棚田の美しい田園が広がる仰木の里へ　田園ハイク
   - 2.2.　比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡
   - 2.3.　上仰木製鉄遺跡の出土品　及び　現地説明
3. 帰路は比叡と京都を結ぶ「古代の鉄の道???　雲母坂」ハイク

（　写真アルバム　）

【参考】

1. 大和政権を支えた近江国の鉄　瀬田丘陵の製鉄地帯
2. 北近江安曇川・マキノ　雪の山郷　Country walk
3. 和鉄の道　古代の鉄の足跡を訪ねて
   北近江　古橋製鉄遺跡ほか

■要約写真集

近江の古代　和鉄の郷「仰木の郷」

＆ 古代の鉄の道「雲母坂」を訪ねて

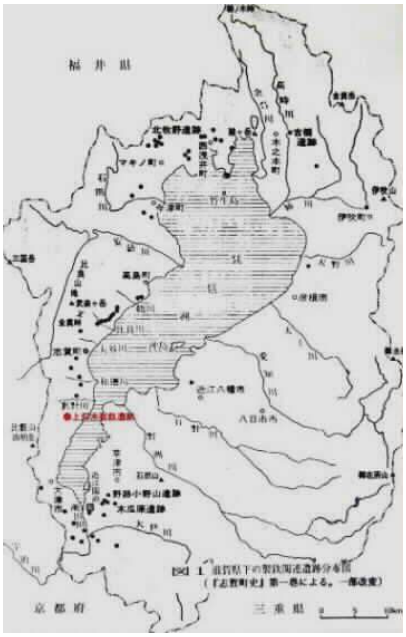
比叡連峰を見上げる山麓の丘陵地大津市仰木「上仰木遺跡」で、平安時代前期（９世紀後半）の製鉄炉跡と木炭窯跡各１基、そして製鉄に伴う大量の鉄滓（てっさい）などが出土した。

2 月 25 日日曜日に現地説明会がある。」と聞いて、「古代　鉄の先進地　近江の古代製鉄炉が見られる」と飛んで行ってきました。

古代近江 国は大陸・朝鮮半島からの文化・技術の流入口。

数多くの 渡来人がやってきて　数々の新しい文化・技術を伝え大和王権・日本誕生を支えた。
それらの中で最も重要な技術の一つが鉄の技術である。
琵琶湖周 辺は　日本海側から若狭・越から琵琶湖・近江を通って、大和への交通の要衝であり、大陸からやってきた数多くの渡来人によつて、大陸のさす芯の文化・技術がもたらされた。
鉄の技術についても同様で在る。
琵琶湖を取り巻く山々には鉄鉱石があり、山麓を根拠地にした鉄技術を持つ渡来人たちによって　大陸・朝鮮半島に依存していた鉄の自給を試みる。　挑戦半島の鉄素材を鍛冶加工する鉄器製造から、
日本で鉄鉱石や砂鉄を原料とした製鉄がこの近江の国でもいち早く始まる。
琵琶湖を取り囲む北近江の伊吹・三国・赤坂山系　そして　西近江の比良山系　琵琶湖の南　逢坂山・比叡山系・瀬田丘陵へと古代の製鉄関連遺跡が散らばる「古代鉄の国」が形成される。

北近江の古橋製鉄遺跡は日本でも最も古い 6 世紀後半の製鉄遺跡の一つである。
また、南の瀬田丘陵には鉄の自給を成し遂げ、7 世紀後半から 8 世紀にかけて　律令国家の体制を確立してゆく大和王権を支えた木瓜原・野路小野山製鉄遺跡など大規模な製鉄遺跡がある。
また、西近江　比良山系の山麓には和邇氏や鴨氏の本拠地で、ここにも製鉄関連遺跡が散らばっている。



滋賀近江国の製鉄関連遺跡分布

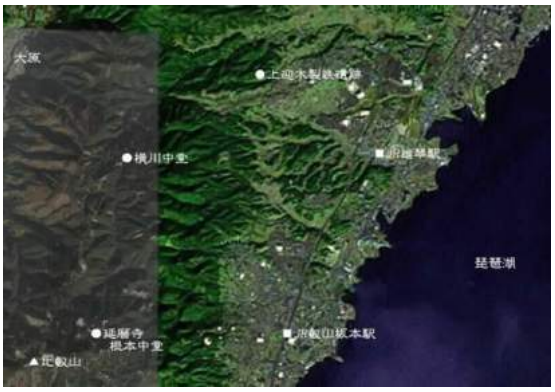
比良山麓と瀬田丘陵に挟まれ、花崗岩地帯で鉄の鉱脈があると見られる比叡山麓の地域は近江国の中心地に一番近いのに、鉄の空白地になっていて不思議に思っていました。
そんな古代製鐵の空白地　比叡山の麓　大津市上仰木で「製鉄炉を含む古代の製鉄遺跡が出土し、2 月 25 日日曜日に現地説明会がある。」と聞いて　びっくり。 まさに　比叡山の山麓である。
「 これで鉄の国　近江　琵琶湖西岸を巡る古代の鉄の道がつながる。
　古代　鉄の先進地　近江の古代製鉄炉が見られる」
と飛んで行ってきました。
発掘調査が進んでいる途中で、詳細はまだ明確ではありませんが、上仰木遺跡の現地説明と共に発掘現場をそのままの姿でみることができました。
赤茶色に土が焼けた古代の製鉄炉跡 1 基　しっかり見ることが出来ました。
また、　帰りには　この上仰木から　比叡山を越えて京都への古道「きらら坂・雲母坂」を歩きたくなって、麓の坂本から　比叡山　延暦寺・比叡山の最高峰四明ケ岳を経て　きらら坂を京都側の修学院に下りてきました。

「きらら坂・雲母坂」　学生時代に何度も京都側から登った道で　「名前がいい」と思ってはいたのですが、「きらら」とは、「花崗岩に含まれる雲母が風化して　道端できらきら光る」というのが語源らしい。
大和三輪山の山道は雲母がきらきら輝く鉄の道　また　東北岩手の砂鉄川には砂鉄と共に雲母が輝いていたことを思い出し、このきらら坂・雲母坂が比叡山中の鉄と関連する「鉄の道」で在ることに気がつきました。
多分　きらら坂も和鉄の道　古代　比叡の鉄原料・近江の鉄がゆききしたのではないだろうか・・それが比叡山延暦寺の発展と共に都と比叡・近江を結ぶ重要路になったのだろう。

1.　仰木の里と上仰木製鉄遺跡　概　要

比叡・比良山系の山々を背に　眼下に琵琶湖岸が遠望
段々畑が美しい比叡山麓の丘陵地　　大津市　仰木の郷　　2006.2.25.

「滋賀県大津市仰木」
京都　山科から東海道線と分岐して湖西線 逢坂山の長いトンネルを抜けると近江国　大津市の西部である。
琵琶湖と比叡・比良の山々に挟まれた狭い微余話弧西岸の山裾を北へ
三井寺や皇子山・比叡山の門前町「坂本」など歴史の街を過ぎると約 15 分で雄琴。
琵琶湖西岸では一番平野部が山裾奥へ入りこむ地域で湖岸からなだらかな丘陵地が比叡の山裾にまで広がる。
そんな比叡の山襞が幾重にも裾をひいて平野部に出てくる海抜150mから 200mの丘陵地に「仰木の里」がある。
眼下には琵琶湖岸までなだらかな丘陵地が何本も平行して延び、それらの谷や斜面を利用した段々畑が広がる素晴らしいのどかな田園風景を作っている。



上仰木製鉄遺跡の位置

最近は　湖西線の開通で新しい住宅地が　この丘陵地にも次々と開かれているが、丘陵地の一番奥　仰木の里には　琵琶湖を眼下にまだまだ日本の田舎の原風景が広がっている。
この仰木の地は比叡連山の山中　横川中堂を通って延暦寺根本中堂にいたる「仰木道」の起点に当たる山麓の郷で、比叡山延暦寺が開かれて以来　南の坂本集落と共に　比叡山と麓をつなぐ麓の中心集落となった。　今もここから　横川を経て　比叡山上の延暦寺を結ぶ奥比叡ドライブウエイが通じている。
眼下に琵琶湖を見下ろし、振り向くと直ぐ後ろには比叡の峰々。　そして北には雪をかぶった蓬莱・打見山がどっしりとすわり、ゆるい傾斜地一面に田園風景がひろがっている。

比叡山山麓のこの丘陵地は　比叡山　延暦寺が開かれるまでは深い緑の森で、この仰木の里の北側を流れる天神川沿いわずかに須恵器を焼く集落があった程度で、近江国の木地師たちがこの森に入っていただけで古代には定住集落はほとんどなかったという。

　そんな丘陵地の丘の斜面上に古代といっても　近江をふくめ、日本各地で製鉄が始まる世紀後半からはずっと後の 9 世紀　平安時代初期の製鉄炉跡が大量の鉄滓と共に出土した。

ちょうどこの時期は 8 世紀末 788 年に最澄によって開かれた比叡山延暦寺が大造営される時期にあたり、この仰木の地には　この時期以降　今回出土した製鉄遺跡ばかりでなく、次々と集落や寺院遺構がみつかり、比叡山と共に発展してきた地であった。

遺跡はそんな上仰木の集落の外れ、比叡山麓から琵琶湖に注ぐ天神川近く　谷に沿った丘にあり、当時　この丘の下の谷を天神川の支流が流れていたという。

今回発掘された上仰木製鉄遺跡　　2006. 2. 25.

製鉄炉は谷に沿った丘の縁にあり、長さ 1.2 メートル　幅 0.5 メートルの箱型炉が築かれ、すぐ傍に、崖の縁を利用して木炭窯が築かれている。 これらの製鉄関連遺構と共に鉄鉱石・木炭も見つかっている。

また　この炉 に隣接する丘の縁から谷の川岸への斜面にかけて 20 メートル四方厚さ 2.2 メートルにわたって約 120 トンを越える大量の鉄滓や炉壁片が堆積していた。

まだ、発掘が一部始まったばかりで　製鉄に関する主要設備遺構としては製鉄炉跡 1 基とそれに隣接した木炭窯が出土しただけで在る。

ほかの製鉄炉や鍛冶炉など生産工房としての諸施設はまだ見つかっていない。

大量の鉄滓などの出土から推定して、製鉄炉も 1 基だけでなく複数存在し、鍛冶炉などもこの周辺に存在すると見られ、また、まわりからは製作に失敗した須恵器の破片多数や銅滓と小さな銅塊なども見つかっている。

これらのことから、製鉄と共に銅の鋳造や須恵器なども作ったと見られて、比叡山延暦寺に資材を供給した大規模な総合生産工房だったと考えられている。

120 トンを越える鉄滓が堆積した川岸の崖
崖上の中央で製鉄 炉　左端黒く見えるのが木炭窯
これらの 下崖から一番下の旧の川まで鉄滓が堆積している

　比叡山の山裾　森林で覆われた木地師の里がひっそりあった仰木の郷が、比叡山の造営と共に建築資材、くぎなどの鉄や銅など寺院造営の資材の生産・調達の基地として開かれていったと考えられる。

また、比叡山延暦寺初期の資料はほとんど残っておらず、この生産工房の実像が今後の発掘調査で明らかになっていけば、比叡山造営の様子など初期比叡山の実像が見えてくると期待されている。

木炭と鉄鉱石

炉　壁

炉外排出滓

炉内鉄滓

銅塊と銅滓

須恵器破片

延暦寺造営の総合生産工房であることを示す上仰木製鉄遺跡出土品

上仰木遺跡現地展示より　2006. 2. 25.

2.　比叡山麓　古代の製鉄遺跡「上仰木製鉄遺跡」を訪ねて　2006. 2. 25.

琵琶湖岸　古代の里　仰木から比叡山を越えて　きらら坂を京都へハイク

比叡の山並みを背景に棚田が美しい仰木の里　　2006. 2. 25.

2. 1.　棚田の美しい田園が広がる仰木の里へ　田園ハイク

-比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡をたずねて-

2 月 25 日　快晴　早朝　「古代の製鉄炉が出土したままで見られる。

それも眼下に琵琶湖を見下ろす比叡の山裾で」と期待一杯で近江今津行の新快速に乗る。

地図では大津の市街地の西側　比叡山の山裾　延暦寺の里房が立ち並ぶ門前町　坂本からさらに山裾を北に 3km ほどいったところ。

湖西線　雄琴駅と北の堅田駅の間に湖岸から比叡山の山並みへ幅約 2～3km の緩やかな丘陵地が続く。

北には比叡山系と比良山系との間を京都へ抜ける途中越の道があり、また　仰木から横川を通って比叡山に登る奥比叡のドライブウェイが通じている。

上仰木遺跡はこのドライブウエイの直ぐ横　湖岸から比叡の山に続く丘陵地の市街地の外れ　仰木集落の直ぐ上にある。また、この仰木の里は丘陵地の上　湖岸を見下ろす素晴らしい棚田の里と紹介されている。

前週　上仰木遺跡の発掘調査をした滋賀県文化財保護協会に電話で位置を確かめたが、「比叡山山裾の丘陵地で仰

木の小学校の所から山の方へ少し入った所　足元をしっかりと」と聞く。製鉄遺跡だけは行ってみないとどんなところなのか　解らない。期待いっぱいで堅田駅に降り立つ。

「上仰木製鉄遺跡は比叡山造営を支えた生産工房。
久しぶりに比叡山に登って、延暦寺から四明嶽から京都側の蛇が池からきらら坂を修学院へ
久しぶりに比叡山　を越えて帰ろう。」

堅田は平成の大合併で大津市堅田。湖岸側に近江八景「堅田の浮御堂」などが広がる歴史の街。
また、西の山側の丘陵地には幾つもの新興住宅地が広がる。
駅前で街の案内地図をもらって、比叡の山並みが並ぶ駅の西側に出るといきなり北側　田園の向こうに雪をかぶった比良山系蓬莱・打見山がどっしりと座っている。比叡山そっちのけで見入る。
何度も学生時代に登った山で、こんな堂々とした姿で見たのは久しぶり。　うれしくなってしまう。

堅田駅 西側から見る比良山系蓬莱・打見山　2006.2.25.

その山裾には古代渡来の和邇氏の本拠地
滋賀の里が広がり、製鉄遺跡が点々と続く
堅田駅から南へ雄琴駅の方へ戻りながら　西へ比叡山の山裾を仰木の集落へ丘陵地をあがってゆく約4km ほどの里歩きハイク。目印は奥比叡のドライブウエイ。駅前でもらった地図を眺めながら、比叡の山並みに沿って田園の中を南へ 15 分ほど歩くと前方にひっきりなしに車が通る道路に出る。 比叡の山並みから流れ出る小さな川に沿って湖岸から丘陵地へ上がってゆく大きな道路で、川の 反対側には川に沿って遊歩道があり、ジョギング人たちがいる。 この川が比叡の山並みから流れ出し、東にカーブしながら　仰木の集落の縁を通って北側を流れ下る天神川だった。
広い道路が湖岸道路をくぐったところで道はまだ真っ直ぐ東へ丘陵地を登って行くが、住宅地「仰木の里」と書かれた大きな標識と丘陵地の中腹を南へトラバースして広い道路が見え　そちらに曲がる。地図ではこの住宅地を抜けた端を 90 度折れ曲がって東に登ってゆけば「仰木」の集落である。

天神川　　丘陵地の上を南にトラバース「仰木の里」　2006.2.25.

丘陵地の丘の上に広がる大き な団地「仰木の里」を横切ると丘陵地と丘陵地の間に広がる広い谷の縁に出る。
湖岸に向かってゆるい傾斜の馬蹄形の広い谷で向こう側の谷の縁を雄琴から仰 木への道が登って行く。
そして、比叡の山並みを背景に谷の中全体が段々畑になっていて、素晴らしい景色である。

右手仰木集落をＵ字の底に馬蹄形に琵琶湖へ向かって美しい棚田が広がる仰木の里の谷

U字谷の一番上　　仰木集落からの景色　　棚田がひろがる　仰木の里　　2006.2.25.

ここが　「仰木の棚田」らしい。まだ早春で赤茶けているが　ここに水が張られればもっと素晴らしい景色になるだろう。目を湖岸のほうに転ずると　琵琶湖の向こうに近江富士がかすんでいる。また　右手のU字の底になる谷の一番高いところに仰木集落の家並みが連なっているのが見える。

日本の原風景といったのどかな景色を楽しみながら仰木の集落に登ってゆく。この谷の上のところで　道の両側に古い家並みが続く仰木の集楽に入る。

比叡連山に沿って仰木集落を南北に貫くこの街道は北側で堅田から丘陵地を西へ上っていつて、比叡と比良山系の鞍部山麓に広がる伊香立集落から京都側の途中峠・花折峠へと途中越の道につながり、南では仰木の集落を抜けたところで雄琴から上ってくる道を合流して、奥比叡ドライブウェイとなって、比叡山へ上ってゆく。　そして延暦寺横川中堂から比叡山の頂上部　根本中堂へと続いている。

今回　製鉄炉など製鉄関連遺構がみつかつた上仰木遺跡はこの街道の直ぐ西側の山側丘陵地にあり、この仰木集落の山側をパイパスする県道の建設工事箇所での事前発掘調査で見つかった。

比叡山麓の丘陵地の上　比叡への街道の両側に広がる大津市仰木の集落　　2006.2.25.

雄琴から上ってくる道に出るすぐ手前で山側に折れ、目印の仰木小学校のところに出るとそこから先は比叡連山の山裾まで幾重にも続く丘陵全体に段々畑が続く田園地帯が広がっている。

この田園の中に比叡の山に向かって大きなキャンパスを広げて、この田園風景を描いている人がいて、反対側には雪を戴いた蓬莱・打見山がどっしりと座っている。

この光景そのものが素晴らしい田園風景である。

この丘陵地の一角に上仰木遺跡があるはずであるが、ぐるっと見回しても良くわからない。絵を描いている人も良く知らないがもっと上だろうという。

中央の竹薮が谷になっていて　その奥が上仰木製鉄遺跡

雄琴から登ってきた奥比叡ドライブ ウエイとぶつかった所に文化財保護協会の人が遺跡への案内板を持って、立っていてくれた。ドライブ ウエイに行かず　斜めに東への枝道を取るよう仰木遺跡への道を案内してくれる。
「遺跡はどこですか」と聞くと　グルツと弧の字に田圃の中の道を北の方に戻っていったところ
先ほど通ってきた小学校裏手の丘陵地ともう一つ奥の小さな丘陵 地の谷間だという。やれやれである。
細い道を車が次々とすり抜けてゆき、途切れ途切れであるが同じ方向に上仰木遺跡の現地説明会に参加する人の列が続いている。明日香や奈良の遺跡の現地説明会ほどではないが、同好の士が多い。

丘陵地のくぼ地いっぱいに田畑がひろがる上仰木　　2006.2.25.

道を少し進んだところでクロスする丘陵地と丘陵地が重なる小さな谷で道路をつける工事をしていて、右手北に伸びる道が途中で止まっている。
その先約 500m ほど先の丘に多くの人が見え上仰木遺跡とわかる。
そして、その向こうには　雪をかぶった比良山系蓬莱山が堂々とすわつて、素晴らしい田園風景を構成している。
また、この道路工事が浜大津から途中越の伊香立へとつなぐバイパス工事で　この道路に引っかかる上仰木遺跡の事前発掘調査で平安時代初期の製鉄炉や木炭窯などの製鉄関連遺構が出土した。

途中越 の伊香立へつなぐ工事中のバイパス道路と上仰木遺跡

直接この谷筋を歩いて遺跡まではゆけないので田園の中の道をぐるっと回りこんで遺跡へゆく。堅田駅から 1 時間ちょっと　比叡と比良の山並みと琵琶湖との間に棚田が広がる丘陵地をきょろきょろ眺めながらの田園ハイク
1 時間ちょっとのハイクで上仰木遺跡に 11 時前に到着。
比叡と比良を背景に素晴らしい田園風景が展開するその中央に上仰木遺跡がありました。
湖岸は本当に何度も通りましたが、その上の丘陵地にこんな素晴らしい田園風景が広がる古代の里があるなど思いもよらぬことでした。

南西奥に比叡山の主峰　四明ケ嶽か? 丘陵の南東側から見る上仰木遺跡　遺跡へのあぜ道にお地蔵さん
上仰木製鉄遺跡　周辺　　2006.2.25.

2.2. 比叡山　延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡　　大津市仰木

-比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡をたずねて-

丘の南東側から畑が広がる田圃道を西北側にぐるっと丘をまわりこんで　西側から遺跡に入る。
午前 11 時から現地説明会があるので、多くの人が詰め掛けている。
遺跡に入ったところにプレハブの事務所が建っていて　そこに今回の調査で出土した鉄滓・鉄鉱石と木炭　そして須恵器の破片・銅滓と銅小塊などが展示され、その前は人でごった返している。

南からバックに雪の蓬莱山

南東からバック に比叡連山

北西から天 神川越しに遺跡バックに仰木集落

周辺の丘陵地から見た上仰木遺跡全景　　2006. 2. 25.

そして、この奥と西側の田圃が今回の調査地点で、 その一部に青いシートが一部かぶせられている。
遺跡に立つとグルツと 360 度のどかな田園地帯が見渡せる。
北側から南西側に遠く比良蓬莱山そして比叡連山が並び、これらの山を背にして丘陵地の上に田畑が一面に広がり、その向こう遺跡の東から南東側には琵琶湖の湖岸から約 200m ほどの高さの位置にある仰木の集落が広がっている。そして　遺跡の西側を南北に連なる連山の山中　南西約 4km のところに延暦寺横川中堂　約 10km ほどのところが延暦寺根本中堂である。

仰木遺跡の入り口

今回の上仰木遺跡の調査地は東西に約東西約 40m 南北約 90m ほどの田畑でそのうちの北側半分が田畑　南半分が崖の斜面を含む谷。 そして　今回主要な製鉄遺跡が出たのは東側半分の所で、この場所の北西端に事務所がたっていて、その奥に調査地点が広がっている。 また、南半分のところは青いグランドシートがかけられ、今回公開されなかった。

上仰木製鉄遺跡の全景

上空からの上仰木遺跡

上仰木製鉄遺跡　発掘調査現場　　2006. 2. 25.

遺跡の南端が崖となって南西から北東へと小さな谷がのびていて、今は小さな崖と湿地になっている。
平安時代から江戸時代にかけて　小さな川が流れていたという。
パイパス工事が行われている谷で、向こう側丘陵の上に先ほど通ってきた仰木小学校や仰木の集落が続いている。
事務所の出土品を見ている人たちの横をすり抜け、奥の発掘現場にゆく。南の端が崖になっている手前半分に青いクランドシーがかけられ、その奥が製鉄炉が出土した所。　製鉄炉の後ろのグランシートのかけられた場所は後の時代の住居跡と教えてもらった。
「製鉄炉」の案内板が置かれた直ぐ横の地面が四角く赤茶けていて、そこだけが穴も石もなく平らである。
これが　製鉄炉の底の部分で　炉の下部構造もないようなので　やっぱり古いタイプの箱型炉か・・・・
崖に並行する両側の穴ぼこの部分にも赤茶色に土が変色した部分が在る。
この所は炉から排除した鉄滓を貯めた部分。
崖の前　前後方向に鞴が据えられたのだろう。

製鉄炉跡が出土した崖の上の部分　　2006. 2. 25.

周辺に鍛冶炉跡がないかと周囲を見渡すが、ここでは　まだ見つかっていない。
そして　炉の奥　崖の北の端に木炭窯の案内板が置かれ、この崖を利用して作られた木炭窯があった。

出土した製鉄炉跡とその奥木炭炉

製鉄炉の直ぐそば

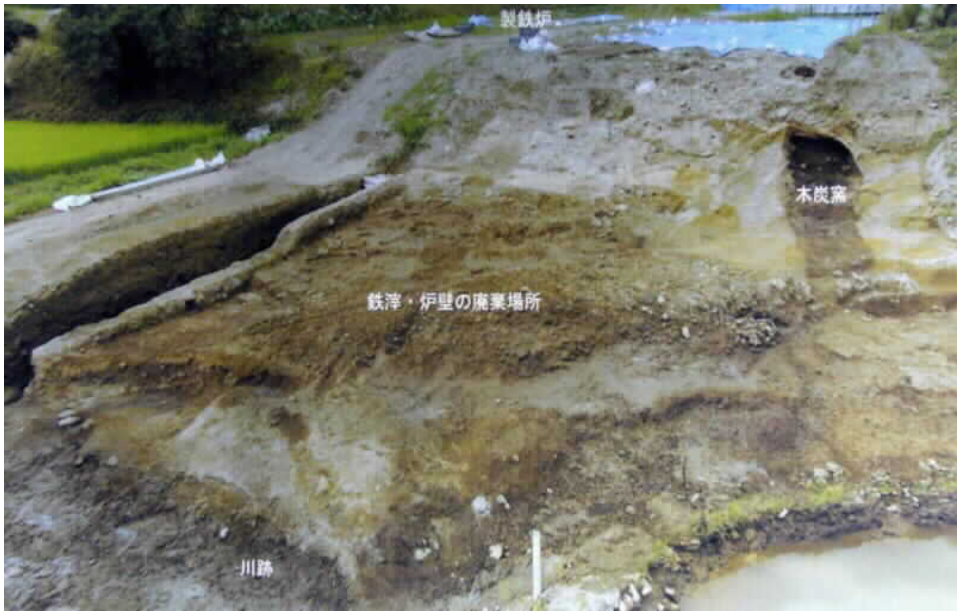
崖の下の谷に広がる膨大な鉄滓の堆積

崖を掘り込んで作られた木炭窯

崖の端から高さ約 3 メートルほどの下の谷に降りる通路がつけられていて、その通路に沿って崖いっぱいに鉄滓が捨てられており、その奥に木炭窯が見える。かつて川であつたという谷は湿地で遺跡の橋には水がたまっていた。谷 から遺跡の崖を見上げると崖にそって　比叡連山が頭をのぞかせていて、比叡の近さは実感されるが、新聞に書かれている比叡山　延暦寺の生産工房の実感はなく、現地説明が楽しみ。

2.3. 上仰木製鉄遺跡の出土品　および　現地説明

－　比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡をたずねて　－



上仰木遺跡　調査区域の全景と出土品　製鉄・銅・須恵器関係出土品　現説資料より

【1】木炭と鉄鉱石　「粉鉄七里（こがねしちり）に炭三里（すみ さんり）」

崖を利用して 作られた木炭窯

この上仰木製鉄遺跡では　出土した製鉄炉周辺からは主原料の小さな鉄鉱塊がみつかり、製鉄路の直ぐ隣には木炭窯がある。

この製鉄遺跡が営まれた頃　この一帯 は森になっていて、「炭三里　鉄七里」と言われるように製鉄に必要な木炭が周辺の森の木々をここで焼いたと考えられている。

大陸からいち早く製鉄技術がもたらされた近江では 6 世紀後半古代初期の製鉄　湖北・北近江の古橋製鉄遺跡や湖南の 7 世紀後半　源内峠・木瓜原製鉄遺跡　そして 8 世紀の野路小野山遺跡に至るまで　砂鉄ではなく鉄鉱石を原料とする箱型炉操業が行われていていた。

近江には琵琶湖を北側から西側に取り囲む山中や湖南の山中の花崗岩地帯に鉄鉱石の鉱脈があり、比叡山の山中にも鉄鉱石の露頭がみられる。

特定はされていないが、製鉄原料としてこの近江国の鉄鉱石が使われたと考えられている。
この上仰木製鉄遺跡の原料鉄鉱石もこの比叡山周辺の山中のものが使われたのではないかと考えられている。
上仰木遺跡の製鉄は　出土した製鉄炉跡の周辺から出土した土器や谷から発見された須恵器破片などから 9 世紀後半と考えられており、日本各地で砂鉄による製鉄が盛んになってゆく中で　近江では　鉄鉱石原料の製鉄が維持されていることがわかる。

（近江の鉄鉱石産出の候補地としては
露頭が見られる北近江　葛篭尾崎　湖南　石部山　湖西比叡山の山中などが考えられている）

【2】　製鉄炉

丘の南端の崖に沿って　製鉄炉が一基出土。まわりが穴ぼこだらけなのに長方形状に平らで赤茶けたところが見られ、これが製鉄炉跡であった。崖に沿う東西方向に長さ１・２メートル、そして幅０・５メートルの箱型の製鉄炉で、周辺から鉄鉱石の小塊が見つかっていることから、これを砕いて原料にしたと見られる。
構造は簡単な床構造の古代の製鉄炉で直ぐ下の谷から大量に見つかった須恵器破片の形式や何時書に見つかった少量の土器などから、9 世紀後半平安時代初期の製鉄炉跡と見られている。
炉の両側に幾つも穴があり、排滓した鉄滓を入れる穴と見られて、この地面も赤茶けている。
また　直ぐ下の谷は小さな川の川岸で、炉を壊して取り出した鉄塊がここで冷やされたのだろう。また　崖から川岸にかけて大量の鉄滓や崩された炉壁片が堆積している。
製鉄炉は複数であつたと考えられるが、まだ見つかっていない。また、製鉄の次のステップである鍛冶炉も見つかっていない。堆積した鉄滓の量から考えて　それらがこの周辺地域に眠っていると見られている。

上仰木遺跡　製鉄炉跡と周辺から出土した製鉄関連遺物

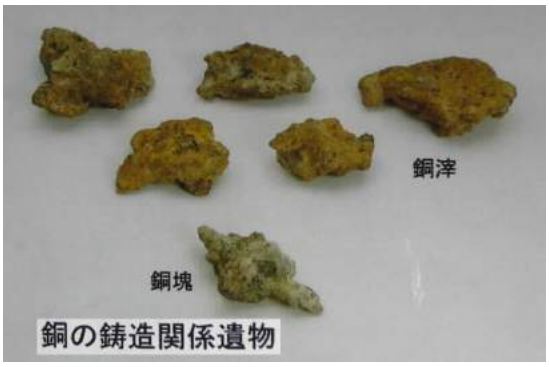
【3】堆積した鉄滓

製鉄炉の直ぐ下の崖から谷にかけて約 20 メートル四方厚さ 2.2 メートルに渡って　大量の鉄滓が堆積しており、その量は約１２０トンに及び、崖全体が鉄で赤茶けている。
そして、捨てられた鉄滓　炉内滓・炉外滓・炉壁と種類によって、ちょっとづつ　組成や質が違っていて、それらの違いによって崖の色がちょっとづつ違っている。
また、調査域の南西側に続く谷の崖のところからも試掘で鉄滓があり、調査域の南西側にも遺跡が続いているという。
まだ鉄滓の細かい調査が進んでいないので、詳細はよくわかっていないが、炉壁片には平らで直線的な段差が見られ、当時の築炉法である粘土で作られたブロックを積んで作られたと考えられている。

炉内滓　　炉外滓　　炉壁片

【4】銅滓・銅小塊と須恵器破片

製鉄炉跡から約１５０メートル西の丘陵地から１０－１１世紀の銅の小塊や遺跡周辺の谷などから大量の須恵器の破片や土器が見つかった。特に須恵器破片は延暦寺大講堂で確認された須恵器と形状・土質の面で一致し、この遺跡が９世紀後半の延暦寺の大造営と強い結びつきを持っていたと考えられている。



銅塊と銅滓

須恵器破片

【5】延暦寺の大造営を支えた総合生産工房としての性格

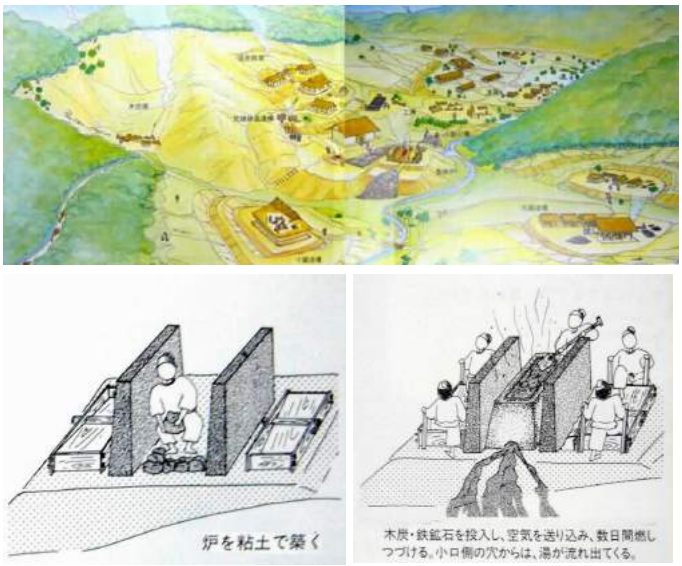
延暦寺は７８８年に最澄が開いたが、当初は堂舎がほとんどなく、９世紀半ば以降、円仁、円珍らが横川中堂ほか次第に大伽藍を整えていったとされ、今回発掘された上仰木遺跡の遺構と時期的に重なっている。

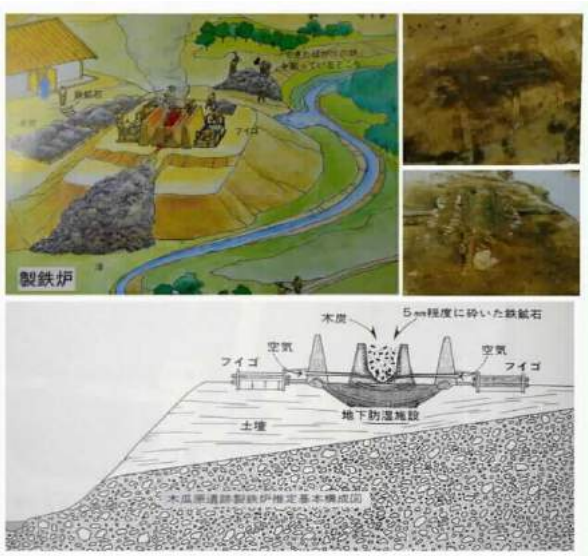
延暦寺の須恵器の中にこの上仰木遺跡の須恵器が確認されていることや、製鉄関連遺物ばかりでなく　銅の鋳造や須恵器関連遺物も見つかり、まだ　鉄の生産工房の中心とな る製鉄炉が一基しか見つかっておらず、鍛冶炉も未発見で、時期もわずかに出土した土器からの推定で不確かな面も多いが、位置的にも比叡山横川中堂が約３キロほどの距離であり、この遺跡が９世紀半ばから１１世紀にかけての延暦寺の大造営を支えた総合的な生産工房遺跡の可能性が強い。　今後この上仰木遺跡の周辺からさらにその遺構が見つかると考えられている。

このような製鉄を中心とした古代近江の生産工房遺跡としては７世紀末から８世紀初め　大和政権が律令国家としての体制を確立してゆく時期の官営の近江の中心的製鉄コンビナート木瓜原遺跡がすぐ頭に浮かんだ。

湖南瀬田丘陵の立命館大学瀬田キャンパスの地である。

もっとも、上仰木遺跡の方が１５０年以上後の遺跡であるが、生産工房の諸施設も　製鉄炉の形式もイメージ的にはよく受け継いでいるようだ。そんな「古代鉄のコンビナート木瓜原遺跡」のイメージ図が木瓜バラ遺跡の資料の中にありましたので下記に示します。

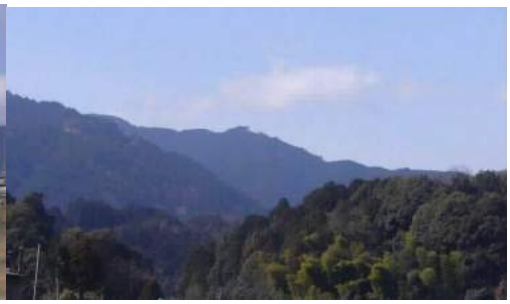




古代　近江の製鉄を中心とした総合生産工房イメージ図

資料「古代の製鉄コンビナート　立命館大学びわこ・くさつキャンパス　木瓜原遺跡の発掘」より

3.　写真アルバム　比叡山からきらら坂を京都修学院へハイク　2006. 2. 25.



大津市仰木の郷からみる比叡の山並み

比叡山延暦寺と関係深い上仰木製鉄遺跡。直ぐ横には比叡連山が横たわっている。そして　南西一番奥に比叡山の最高峰四明が嶽が山の重なりの間から見えている。

「上仰木遺跡が支えた延暦寺の伽藍を見て、古代からの古道　きらら坂を京都に下ろう。」

きらら坂は平安時代　京都から比叡山と結ぶ本道で最澄　法然親鸞　日蓮　道元など数々の高僧がこの道を通って比叡山に入った。

また　近江　坂本側日吉神社の上輿を担いだ比叡の荒法師が都を暴れまわった道である。

学生時代に何度も京都側から比叡山に登った道ですが、40 年ぶり。

きらら坂は「雲母坂」と書き、花崗岩に含まれる「雲母」がきらきら輝くことからつけられた名前である。花崗岩中の砂鉄にも随伴する鉱物で、良く知らないが比叡山山中の鉄鉱石の鉱脈・路頭もこの辺りの山中にあるのかもしれない「鉄の道」でもある。

京都市内から見た比叡山

まだ　日陰には雪が残る比叡山　延暦寺　根本中堂周辺　2006. 2. 25.

京都修学院　比叡への古代からの上り口　雲母坂　登り口　2006.2.25.

さすがに　時計を見て　上仰木からそのまま横川を経て比叡山を登る元気なし。
坂本からケーブルで比叡山に上がって　根本中道から四明が嶽を通って　蛇池のスキー場の横へ出て　きらら坂を修学院離宮の横へ下りてきました。
比叡山の上はさすがに山の上　あちこち日陰に雪が残っていましたが、延暦寺から京都修学院まで　約 2 時間ほどぶらぶらと静かな山中の古道ハイクを楽しんで帰りました。

写真アルバム　比叡山から京都修学院へ

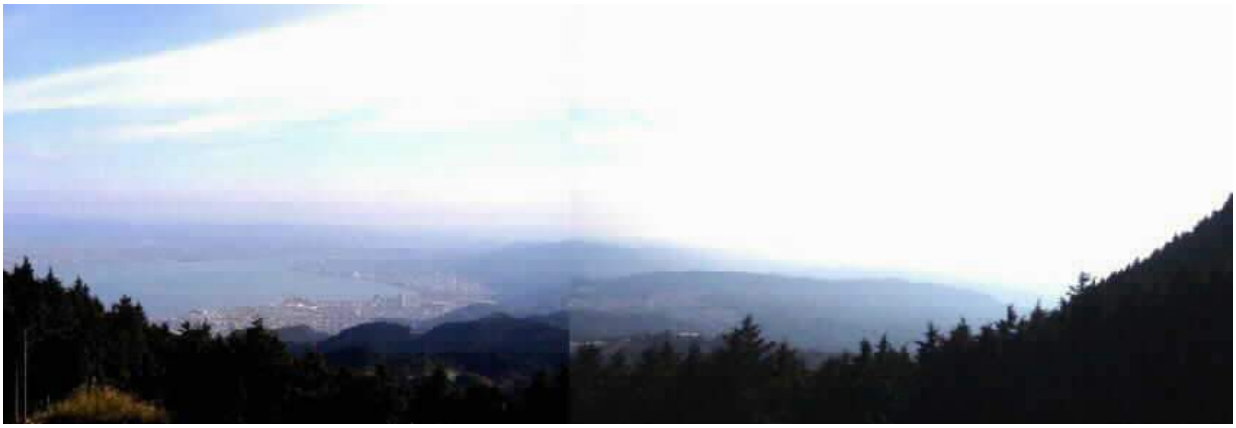
平安時代の古道　「雲母坂」ハイク　006.2.25.

比叡山延暦寺→四明が嶽→蛇が池→八瀬ケーブル→勅使道・きらら坂→修学院→曼殊院→一乗寺

比叡山　根本中堂　　2006.2.25.

雪が残る根本中堂から四明が嶽・京都へ山越えする道

四明が嶽周辺　京都へ山越えする道



四明が嶽から　　南　大津・比叡平の市街地　遠望

四明が嶽の下　蛇が池スキー場・八瀬ケーブル周辺

蛇が池ケーブル周辺から　京都市街地　左:松ヶ崎　中央:宝ヶ池・岩倉

京都一周トレイル　北白川へ下る道と雲母坂を下る道の分岐周辺　　2006.2.25.

修学院離宮の金網に総当り、急な下り坂が続く

急な坂を下ると標識・案内板のある雲母坂の登り口

雲母坂を下って一乗寺・曼殊院の坂を下って市街地へ　白川通りから振り返ると比叡山

今日は一日　古代の道をたどって、ご機嫌の一日でした。
比叡山の麓で　古代の製鉄遺跡　　この郷は北に比良　西に比叡
そして　眼下に琵琶湖が遠望され、美しい棚田が広がる日本の原風景　素晴らしいところでした。
そして　調べてゆくと　比叡の山中には製鉄原料の鉄鉱石があり、比叡山と京都を結ぶ古代からの道「雲母坂」はきらきら雲母が輝く鉄の道。幾多の勅使・高僧たちが行き来した道
近江の鉄の存在感を改めて感じた一日でした。
目算どおり、夕方　下る曼殊院からの夕日が素晴らしい

2006.2.25.夕　　Mutsu　Nakanishi

要約写真集　　近江の古代　和鉄の郷「仰木の郷」& 古代の鉄の道「雲母坂」を訪ねて

古代　鉄の国　西近江　比叡山麓の郷　*Country Walk*　　2006. 2. 25.

古代　比叡山延暦寺の大造営を支えた比叡山麓の上仰木製鉄遺跡を訪ねて

帰りは都と比叡を結ぶ雲母坂　この古道もまた　古代　和鉄の道

古代和鉄の郷　比叡の山麓　棚田が美しい仰木の郷　　大津市　仰木　2006.2.25.

古代和鉄の郷　比叡の山麓　棚田が美しい仰木の郷　　大津市 仰木 2006.2.25.

古代和鉄の郷　比叡の山麓　棚田が美しい仰木の郷　　大津市 仰木 2006.2.25.

比叡山延暦寺の造営を支えた古代の総合生産工房　上仰木遺跡　2006.2.25.背後 堂々とした姿の比良山系蓬莱山・打見山

比叡山延暦寺の造営を支えた古代の総合生産工房　上仰木遺跡　2006.2.25.

比叡山 延暦寺　　根本中堂　　2006. 2. 25.

比叡山　四明が嶽から見た琵琶湖・大津　遠　望　　2006. 2. 25.

比叡山と都を結ぶ古代の道　きらら坂・雲母坂の古道　　2006. 2. 25.

御所の勅使そして最澄・法然・親鸞・日蓮など幾多の高僧がこの道をたどった　比叡の荒法師も
「きらら坂」は花崗岩にふくまれる「雲母」がきらきら輝く様から名づけられた　この山中に鉄の鉱脈がある証でもある
琵琶湖岸にそびえる比叡・比良山麓は古代近江の和鉄の郷　この「きらら坂」も「古代の和鉄の道」に違いない

京都市街地 遠 望　　左: 京都市街　中央: 宝ヶ池・岩倉　2006. 2. 25.

京都　修学院　　比叡への「きらら坂」　登り口　2006. 2. 25.

比叡山と都を結ぶ古代の道　きらら坂・雲母坂の古道

4.　近江の鉄の郷　「比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡」
帰路は比叡と京都を結ぶ「古代の鉄の道???　きらら坂・雲母坂」ハイク
【完】

1. 仰木の里と上仰木製鉄遺跡　概　要
2. 比叡山麓　古代の製鉄遺跡「上仰木製鉄遺跡」を訪ねて
   - 2. 1. 棚田の美しい田園が広がる仰木の里へ　田園ハイク
   - 2. 2.　比叡山延暦寺造営を支えた生産工房　上仰木製鉄遺跡
   - 2. 3.　上仰木製鉄遺跡の出土品　及び　現地説明
3. 帰路は比叡と京都を結ぶ「古代の鉄の道???　雲母坂」ハイク

（　写真アルバム　）

【参考】

1. 大和政権を支えた近江国の鉄　瀬田丘陵の製鉄地帯
2. 北近江安曇川・マキノ　雪の山郷　Country walk
3. 和鉄の道　古代の鉄の足跡を訪ねて
   北近江　古橋製鉄遺跡ほか

■要約写真集

近江の古代　和鉄の郷「仰木の郷」

＆ 古代の鉄の道「雲母坂」を訪ねて

5. 石上神宮の国宝「七支刀」復元展にあわせて　物部氏の布留を訪ねる

橿原考古学研究所博物館　鋳造法での「七支刀」の復元　展覧会図録資料より　2006.3.17.

古代　鉄・軍事を支配した物部氏の本拠地　大和・布留の氏寺　石上神宮の宝物国宝「七支刀」。
全長 75cm 刀身の左右に３つずつの小枝が互い違いに付いているのが特徴で、表裏に金象眼を施した銘文 61 文字が刻まれている。表の銘文冒頭に泰和四年」とあり、これは中国・東晋の太和 4 年(369 年)と考えられ、当時の朝鮮半島の情勢から百済と倭国の軍事同盟の証として３６９年に百済王が自国で作り、倭王（わおう）に贈ったという説が有力で、「日本書紀」に神功皇后が朝鮮・百済から献上されたと記された「七枝刀(ななつさやのたち)」にあたると考えられている。
この複雑な形状を持つ「七支刀」の製造法には論議があって、鍛造鍛冶加工で作られたとする説と鋳造で作られたとする説があるという。
吉野の刀工河内国平さんと橿原考古学研究所はかつて実施した鍛造鍛冶加工による「七支刀」の復元の難しさなどから「七支刀は「鋳造」で作ったのではないか」と推測し、「鋳造」による復元を行ってその過程・結果を橿原考古学研究所博物館で「七支刀の製作技術と刀匠河内国平の世界『古代刀剣の復元』」展として公開・発表した。
弥生時代中国や朝鮮から移入された鋳造鉄斧はあるにしても、刀剣は鉄素材を鍛造鍛冶加工して作られているものと思っていましたので意外でした。

「日本で本格的な鍛冶が始まり、それがさらに日本の製鉄開始につながってゆく。
　そんな朝鮮半島の製鉄の先端技術が見られるかもしれない。」
本当に興味深々で「七支刀の製作技術と刀匠河内国平の世界『古代刀剣の復元』」展に出かけ、あわせて　大和王権の鉄を統率支配した物部氏の根拠地「布留」石上神　宮界隈を歩いてきました。
「百済に高度な銑鉄製造と鋳造技術があり、この鋳造技術なくしてはこの「七支刀」は作れない」という論拠には納得しましたが、まだ　本当に鋳造で刀が作られたかどうかについては　やっぱり半信半疑。
でも　この「七支刀」に象徴される製鉄技術の複雑性を改めて調べてみて　これは　人が動かないと技術伝承は進まないとつくづく感じて帰りました。

橿原考古学研究所博物館で開催された鋳造法での「七支刀」の復元　展覧会図録資料より

1.　百済より「七支刀」が贈られた時代と朝鮮半島の鉄

この４世紀から５世紀は　初期大和王権が「鉄」を求めて　朝鮮半島の諸国と交流しながら、着々と統一と国家建設を進めてゆく時代。大規模な前方後円墳の出現は鉄器なくしては建設できなかったであろう。また、朝鮮半島・日本とも戦乱の時代で多くの渡来人が多くの技術と共に日本にやってきた時代でもある。

4,5 世紀日本・朝鮮半島の最大の交易品は「鉄」・鉄鋌

まだ、自前の製鉄技術はなく、日本統一には大量の鉄素材を必要とし、それを朝鮮半島から得た鉄素材を鍛冶加工していた時代で、朝鮮半島にそれを頼っていた大和王権。

一方　朝鮮半島では　漢が滅んで大きな足かせはとれたものの北に高句麗が強大化し、南では新羅・百済・伽耶が分立して　相互に覇を競う戦乱三国時代。日本への鉄素材供給を武器に軍事連携を図り、自国の安全を図る。

そんな情勢の中　百済から日本に送られたのが「七支刀」であり、当時　朝鮮半島にあった鉄の先端技術で製作されたに違いない。

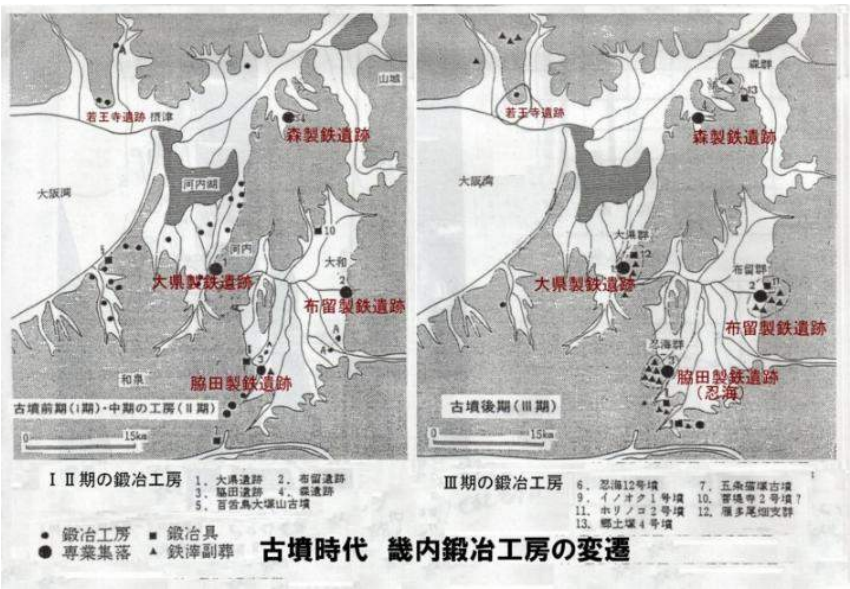
強力な国家建設と統一を進める大和には何よりの同盟の印だったろう。

大和王権が益々強力化してゆくプロセスがこのの中にある。

そして　多くの鉄技術を持った渡来人がその後渡来系氏族として、大和王権の中枢を担った。

ここに大和の鉄支配を通じた日本統一の構図が浮かび上がってくる。

大和王権側でそんな先端技術　鉄技術と軍事を統率支配し、大和の国家統一と建設を支えたのが物部氏で、そんな交流の象徴「七支刀」が物部氏の本拠地布留の兵器庫　石上神宮におさめられ今に伝えられている。



精錬鍛冶を含む本格的鍛冶で大和王権を支えた畿内の大専業鍛冶工房群

1.1.　製鉄黎明の４世紀　朝鮮半島の鉄

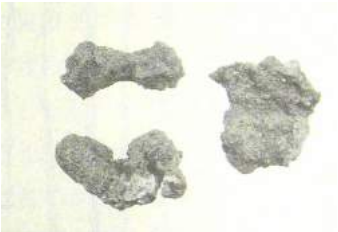
軟らかい鉄「軟鉄」・硬くて強靭な「鋼」・脆く加工が難しいが、鋳造で自由に成形ができる「鋳鉄」。
「鉄」と言っても色々。これらは鉄鉱石から直接単一の工程では作れない。
製錬・精錬鍛冶・鍛造鍛冶などのプロセスで区分され、それぞれの「鉄」が作り分けられる。
4,5 世紀朝鮮半島との交流が鉄の歴史に新しい風を送り、国内での鉄生産へ向かってハイスピードで進んでゆく。
実用的な鉄が大量に必要になったこの時代　これらの鉄素材の差がはっきり認識され、それぞれの用途にあった鉄素材が朝鮮半島から日本に移入される。そして、朝鮮半島との交流渡来の技術集団によって、次々と新しい鉄技術が移入され、鉄の国内生産も模索される。
一筋縄ではゆかぬ製鉄技術　判っていても実際に自前でやると中々作れないもどかしさに数多くの試行がなされたろう。そんな朝鮮半島との鉄の交流史を経て　国内での鉄生産が始まる。
「七支刀」はそんな朝鮮半島と日本との鉄の交流史の象徴でもある。

棒状鉄素材

板状鉄斧

鉄鋌

球状鋳鉄塊



鋳鉄塊

4,5 世紀　朝鮮半島出土の鉄素材

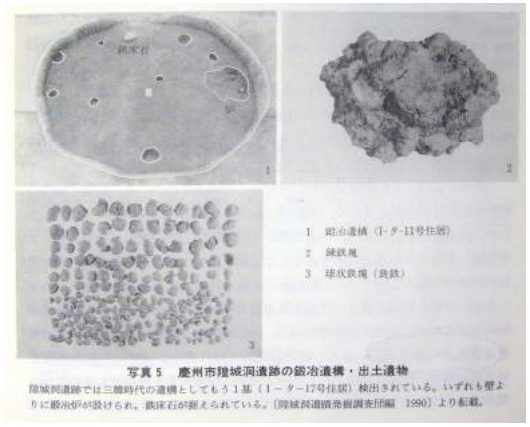
奈良　大和６号墳　出土の鉄鋌

日田市萩鶴製鐵遺跡の鉄鋌

日本で出土した鉄素材の一例

古代　朝鮮半島・日本で行われてきた鉄の製錬法は塊鉄法と呼ばれ 「鉄鉱石と木炭などの還元剤を混ぜて 1200℃以上に加熱　1000℃以上で蒸し焼き反応させて半融状態で鉄に還元する。」
この場合　還元された鉄には温度と時間に応じて　炭素が鉄中に入り、温度が高いほど炭素含有量が多くなる。
鉄は炭素が入ると融点が下がり、純鉄で約 1500℃の融点であったのが、2%以上の炭素が含まれる銑鉄では 1200℃以下にも下がり　半溶融・溶融する。
通常　製錬で作られた鉄塊には炭素量の異なる部位が複雑に分布しており、それを区分して、精製しないと鉄素材として使えない。
また、十分な高温で長時間の操業が行われると炉の底には炭素量が高く溶融した溶銑鉄が貯まる。
それを炉の底からズク・鋳物銑として排出して型枠に導いて鋳造することもできる。
したがって、　製錬といってもその様相は操業の状況で千差万別複雑で　見極めのきわめて難しい技術で現在もこの塊錬法の「たたら」製鉄が現場の「秘技」といわれる由縁でもある。
また、製錬鉄塊はそのままでは鍛冶加工できず、精錬鍛冶と呼ばれる精製の工程が必須である。
特に大部分を占める炭素含有量の高い銑鉄部分は脆くてそのまま鍛冶加工もできない。
鉄滓などのかみこみや炭素含有量の異なる性質の違う鉄の混在を同じような部位に小割りした後　再度　鍛冶炉で送風加熱・半融状態にして　脱炭すると共に鉄滓など不純物を除去し　さらに鍛造成形して加工が可能な鋼素材にする。この時に脱炭反応を早めるため、鉄鉱石粉や砂鉄を混ぜる場合がある。
また、　中国・朝鮮半島には溶解炉で　銑鉄に鉱石粉を添加し大型送風管で大量の空気を送って　溶融脱炭して鋼を作る炒鋼法があるが日本では発達しなかった。

4,5 世紀の古墳時代　この朝鮮半島からの大量の鉄の供給を受け、大量の実用鉄器（武器・農耕具）を製作する。
この時代　日本では　鉄の自給をはかる製鉄技術の習得が必死に進められると共に朝鮮半島の鉄素材の供給を受けて　鉄精錬を含む高温の本格的な鍛冶の時代に入る。
調べてみると 1 世紀　朝鮮半島には　すでに塊錬鉄生産と溶銑鉄生産の 2 種類の製鉄技術が存在して　この 2 種類の鉄塊はその後精製され、素材として日本など周辺諸 国に供給され鉄器に形を変えてゆく。
この頃の朝鮮半島の製鉄は、朝鮮半島の製鉄遺跡が進むにつれ、次第に明何なりつつある。
4 世紀には百済鎮川石帳里遺跡では製鉄炉や製鉄原料として製鉄が行われていたとみられ、日本の砂鉄によるたたら製鉄の源流と考えられる粉砕顆粒の鉄鉱石が高温溶融した鉄滓と共に見つかっている。
た、新羅慶州の隍城洞遺跡では大型の送風管と共に鍛冶・鋳造遺構が大量の鋳型破片や鋳鉄塊と共に見つかり、鉄素材である梯形鉄斧を鋳込んだ工房である。
同時に鋳鉄よりも炭素量の低い鋼鉄塊と鉱石粉が溶解炉の出土した工房内で見つかり、ここで脱炭・精錬鍛冶が行われていた可能性も指摘されている。



百済鎮川石帳里遺跡　　新羅慶州の隍城洞遺跡

4～5 世紀の　朝鮮半島の製鉄遺跡と出土品

◆　朝鮮半島　4～6 世紀の製鉄・鍛冶遺跡

http://kkuramoto.web.infoseek.co.jp/kankoku.kaji.htm　より

百済　石帳里製鉄遺跡

忠清北道　鎮川郡・石帳里

ソウルの南西約 100km、鎮川平野周辺の標高約 70m の低丘陵斜面上に立地。

約２０ｍの間隔でＡ区・Ｂ区を確認。

共に精錬炉・溶解・鍛冶炉・鍛冶関連遺構がセットで出土

Ａ区は 3～4 世紀代、Ｂ区は５世紀代と推定されている

新羅　隍城洞製鉄遺跡　１世紀から４世紀

慶尚北道　慶州市郊外三国時代を中心とする鉄器製作所跡標高 30m の平坦な水田地帯、沖積台地の縁辺部に立地。

精錬鍛冶炉・鍛錬鍛冶炉・鉄滓・溶解炉・送風管・土製鋳型出土

宅団地造成にて消滅

高句麗　蜜陽・沙村製鉄遺跡　　６世紀から７世紀

慶尚北道　蜜陽市・丹場面・美村里

発掘　1999.11.8～12.17

製鉄炉・鉄滓・送風管片・炉壁・鉄鉱石

これらの遺跡に見られるごとく　日本の古墳時代　朝鮮半島では広く高度な技術で製鉄が行われ、日本にも鉄素材が供給されていたことが理解できる。　日本に持ち込まれた鉄素材としては鉄鋌が主力と見られる。

しかし　国内出土例はまだ少ないが、銑鉄素材である梯形鉄斧・棒状や板状鋳鉄材そして　鋳鉄塊などそれらの想定する人達もいる。

この時期　九州や西日本に高温の精錬鍛冶を伴う本格的な鍛冶工房があらわれ、実用鉄器の大量製造を担う。

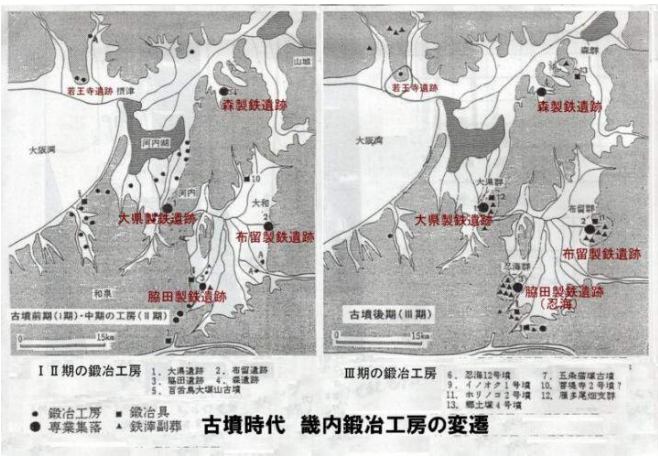
一方　この時代　楽浪・帯方郡の経営を通じて朝鮮半島を属国としていた漢が滅び、半島北の高句麗　南に百済・新羅・伽耶諸国の三国時代。漢の厳しい統制ははずれたものの　半島の特産品「鉄」をめぐって、それぞれの国々が覇をきそう戦乱の時代。

海を挟んで朝鮮半島にも影響力を持ってきた倭国の動向・連携が半島諸国にとっても重要であり、一方　日本では倭王権が成立して日本統一と国家建設を進め、朝鮮半島からもたらされる先進技術・文化そして鉄が何より必要な時代　相互連携が持つとも必要とされた時代であった。

また　大量の実用鉄器を求めて倭王権初め、日本各地で鉄の国内生産技術の模索と試行が必死で行われた時代であったろう。

４ 世紀　博多遺跡や巻向遺跡そして千葉県沖塚遺跡では高い温度での精錬鍛冶が行われたと見られる椀形滓や大型羽口が出土し、さらに 4,5 世紀になると畿内に大県・森・布留・忍海など専業鍛冶工房である大集落が大量の鉄器を製造して大和王権を支える。

大県など畿内の大専業集落では大量の精錬滓が出土し、国内での製錬の開始が想定されるが、精錬鍛冶にまわされた製錬で作られた鉄素材・鉄塊を供給した製鉄工房が国内には見つ



からない。また、精錬滓の存在は高温での操業が日本でも可能になったことを示し、製鉄製錬に最も欠けていた高温技術が習得されたことを示しており、製鉄開始の到来を予感させる。朝鮮半島との交流が活発なこの時期　朝鮮半島からの大量の鉄塊ならびに鉄素材の移入なども考慮に入れる必要がある。そして　この交流ルートを握った倭王権・吉備・出雲が九州勢力を次第に圧していったのであろう。
でも　どんな新技術・文化がそれを可能にしたのか　まだ良くわからない。
百済から贈られたという「七支刀」も　そんな謎を解く鍵かもしれぬ。

1.2.　古代の製鉄技術　補足　　古代製鉄の謎

【古代の製鉄技術　古代製鉄の謎　】

1.　製錬技術の伝来になぜ時間がかかったのだろうか

長い期間製錬技術が日本に伝来しなかったのは何が日本に欠けていたのか・・これも大きな謎。

1.　原料の問題なのか　鉄資源としての鉄鉱石が未発見だったのか
2.　高温・還元雰囲気を安定して維持する強力な送風・鞴の技術なのか・・・

砂鉄はすでに 3,4 世紀には　脱炭材として見つかっていて、鍛冶場に持ち込まれていた可能性がある。
一方　高温で焼きしめる須恵器・土師器が日本で展開されるのが 5 世紀である。
個人的には日本に製錬に必要な 1000℃以上（1200℃）の高温還元雰囲気を必要とする高温を得るための送風技術が日本では実現出来なかったのではないかと考えている。

2.　製錬と精錬　　なぜ　精錬はできて、製錬はできないのか　その技術の差はなにか・・・

a　製　錬

鉄鉱石や砂鉄を高温還元して　鉄塊を作るプロセス
鉄は 1500℃以上の高温にならないと融けないが、鉄の中に炭素が溶ける（固溶）すると融点がさがる。
たたら製鉄では　酸化した鉄鉱石を還元するのに木炭を使いますが、このときに温度と時間に応じて鉄に炭素が入りこんで　炭素量に応じて融点が下がる。
炭素量　約 2%以上の銑鉄では約 1150℃にまで融点が下がり、純鉄と鉄の間の炭素量を含む「鋼」ではその炭素量に応じて約 1500℃から 1150 度まで融点が変化する。　たたら製鉄でできたケラの中心部に「玉鋼」温度の高いその周りに「ズク・銑鉄」が形成されるのもこのためである。
したがって、製錬では還元雰囲気と共に　1000℃を越える高温が維持できる環境が必要となる。
たたら製鉄では　後の製品特性に影響するこの炭素量コントロールが極めて難しく　工人たちの秘技とされている

b　精　錬

しばしば「大鍛冶」とも呼ばれるが、製錬で出来た鋳塊を加熱して再度半融・溶解して、製錬鋳塊の炭素を酸化脱炭し、鉄滓など不純物をも取り去る。
砂鉄や鉄鉱石紛など脱炭剤を加えて　反応を早める場合もあり、製錬ほどの高温を維持する必要がない

c.　鍛造鍛冶・鋳造

製錬・精錬で作られた鋼素材を 1000℃前後に加熱して、鍛造変形・鍛錬して鉄器に繰り返し加工する
また、日本刀製作に見られるごとく別の成分の材料を鍛造接合したり、熱処理加工もする。
なお　鋳造とは鉄製錬で作った溶融銑鉄や再溶解した銑鉄を鋳型に流し込んで鋳物成形することである。

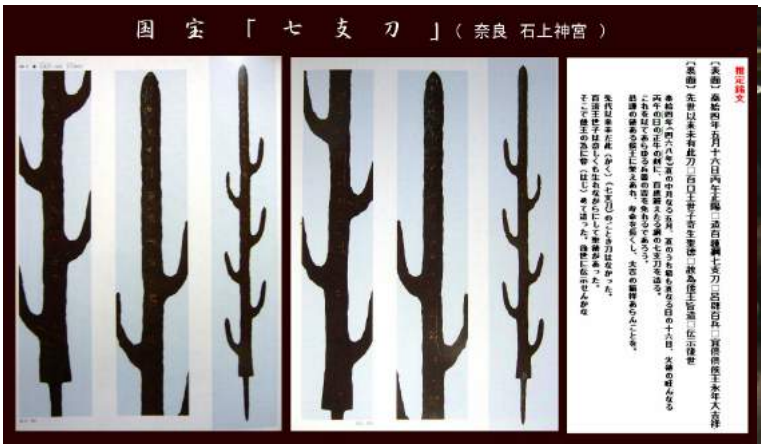
3.　鉄と酸化鉄の特異性

金属は大抵酸化すると融点が上昇する。しかし、鉄だけは酸化すると融点が下がる特異な性質を持つ。
現在でも　ガス切断・溶断とよばれる酸素-アセチレン炎で火花を飛ばしながら焼ききれるのもこのため。
製錬・精錬・鍛冶で鉄滓と鉄塊を作り、反応を制御しながら不純物を飛ばすことが出来るのもこの性質をフルに活用している。

2.　七支刀の製作技術と刀匠河内国平の世界『古代刀剣の復元』」展

「七支刀」復元　　橿原考古学研究所博物館で　2006.3.17.

「七支刀の製作技術と刀匠河内国平の世界『古代刀剣の復元』」図録資料より



3 月 17 日午後　近鉄畝傍御陵前で降りて橿原考古学研究所付属博物館へ。

畝傍山を目印に古い町並みを抜けて 10 分ほど橿原神宮の北側に広がる広い運動公園の一角に畝傍山を背にして新築されたばかりの橿原考古学研究所付属博物館がありました。

「4 世紀後半百済からもたらされた「七支刀」は一般に考えられている鍛冶加工ではなく、鋳造で作られたのではないか・・・」との検討を博物館最初の特別展として開催中の「七支刀の製作技術と刀匠河内国平の世界『古代刀剣の復元』」展を見るのが目的。もっと　人出が多いと思っていましたが、企画が地味なこともあって、いたって静か。じっくりと展示を見ることが出来ました。

「古代刀剣の復元」。

古墳に副葬された鉄製品の中で「刀剣」は王者の象徴であり、その刀剣の姿・形・意匠の中には数々の技術・文化そして時代状況などきわめて貴重な情報が塗り込められた出土品である。

しかし、全体が錆に覆われているため、それらを読み取る作業には多方面の人たちによる地道な検討と検証が必要である。そして、それを復元する事は情報・技術を総合的に検証すると共に全体像を浮かびあがらせ、更なる情報を浮かび上がらせ、きわめて意味深い。

橿原考古学研究所ではこれまでに　6 世紀後半の藤ノ木古墳出土の飾り大刀や剣の復元製作などを通じて、古代の刀剣製作の技術を探ると共に日本刀の技術源流を探ってきた。

この古代刀剣の復元製作の中心を吉野の河内国平刀匠で、これらの刀剣の製作には現在の日本刀の源流　和鋼の鍛造鍛冶技術が使われた。

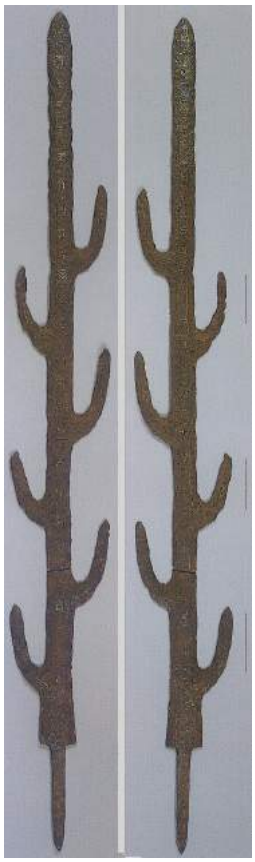
しかし、それ以前の古墳時代　まだ　朝鮮半島に鉄素材を頼り、鍛冶技術が未熟な時代にまで　この高度で複雑な鍛冶技術で均質な刀を製作する技術が存在したかどうかは疑問だという。

古墳時代　4 世紀後半百済から持ち込まれた「七支刀」を二十数年前　和鋼鍛造の方法で復元を試みた経験を持つ河内国平刀匠はその苦難の経験から復元製作法に強く疑問を抱いたという。

この時代　朝鮮半島から持ち込まれた刀剣も多いと考えられるが、鉄素材の移入を通じて　朝鮮半島との人・物・文化の交流がきわめて活発だったことを考えると鍛冶技術にもさほど差があるとは思えない。
しかし、朝鮮半島にはすでに存在する製鉄技術を通じて、溶銑鉄を鋳鉄素材に鋳込む技術が確認されている。この技術をのばせば、銅と同じく鋳造によって刀剣が作られるのではないか・・・・
まだ、朝鮮で　当時の刀剣の鋳型が見つかった例はないというが、当時の朝鮮半島の鉄加工技術水準として、「鋳込みと鍛造鍛冶」どちらも考えうる技術であろう。

展示室に入ると河内氏の刀鍛冶技術と刀製作プロセスの紹介、これまでに復元製作された古墳時代刀剣の展示、そして、七支刀の製作技術の復元研究について　鋳造による復元製作を中心にその実験製作の成果品の 3 つのジャンルに区分して古代刀剣政策技術の謎を探る展示がなされている。

2.1.　「七支刀」製作技術の疑問点　　刀鍛冶鍛造と鋳造法



「七支刀」は　全長 75cm で、下部より 15cm の所で折れている。
刀身の左右に３つずつの小枝が互い違いに付いているのが特徴で、
表裏に金象眼を施した銘文 61 文字が刻まれている。

推定銘文

〔表面〕泰和四年五月十六日丙午正陽造百練鉄七支刀　辟百兵宜供供侯王□□□□
泰和 4 年(369)年 5 月 16 日丙午の正午によく鍛えた鉄で七支刀を造った
この刀は多くの災厄を避けることができ、候王が持つにふさわしい
〔裏面〕先世以来未有此刀百済王世子奇生聖音故為倭王旨造伝示後世
先世以来、このような立派な刀はなかったが、百済王の世子奇生が倭王の為に
わざわざ造ったものである。後世まで伝え示されたい

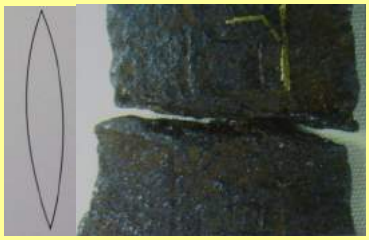
３６９年に百済王が自国で作り、倭王（わおう）に百済と倭の同盟の証として贈ったという説が有力である。
古代　鉄・軍事を支配した物部の本拠地　大和・布留の氏寺　石上神宮の神宝で、現在は公開されていない。
銘文の中に「造百錬鉄七度刀」の文字があり、「鉄を入念に鍛錬してこの刀を作った」の記述があり、日本刀と同じく　鋼を加熱鍛錬して刀を作ったとする説が一般的である。
しかし、この「錬」の意味については多くの人が検討していて、中国の文献では「錬」前に「煉」の字が充てられ、刀剣の製作工程では「加熱」を意味し　銑鉄・鋳鉄を加熱・鍛錬
するごとに材質を脱炭・脱滓が進み、回数を重ねることで　清浄な鋼になる。これが基本的用法という。
「百錬」とは百回の折り曲げ加熱・鍛造を意味する。
しかし、加熱溶融させた銑鉄に空気を吹き込んで脱炭して鋼を作る方法が発明された後も「鋼」を十分な加熱・鍛造を繰り返して仕上げることを「百錬」「八十錬」と回数に関係なく用法が残ったという。
したがって、この七支刀の材質が銑鉄であるのか　鋼であるのかは　分析からは良く解らない。
ほぼ同じ古墳時代に銘文が刻まれた刀
「百錬利刀」の文字がと刻まれている稲荷山鉄剣（5 世紀後半）はその鉄錆の分析から鉄鋌などと同じ鋼素材
「廷刀八十錬」の文字が刻まれている江田船山古墳銀象嵌太刀は錆が薄片状に発生していることや「利刀」ではなく「廷刀」の文字から　折り返し鍛造ではなく鉄鋌のような薄素材を重ねて、鍛造圧着させたものでないか・・・といわれる。
そんなことを考えると刀に用いられた材質を金属学的にきっちり分析しないと「錬」の用法からは使われた材料

が「鋳物銑鉄」なのか　「鋼」素材なのか　即答は出来ないのである。
今回の展示では　刀鍛冶鍛造法　銑鉄鋳法を想定して　それぞれ復元製作。そこで得た疑問点・技術克服点などがまとめられ、製作字の写真と共にパネル展示されていた。
我々が通常知り得るのはせいぜい刀剣の形状やデザイン・装飾程度であるが、さすが刀匠　「物づくり」の眼　多くの観察の面白さについつい引き込まれていました。
どちらかというと　鋳造法に力点がおかれていた。

河内刀匠の七支刀　復元の疑問

河内刀匠の七支刀の復元の課題　　鍛造法と鋳造法

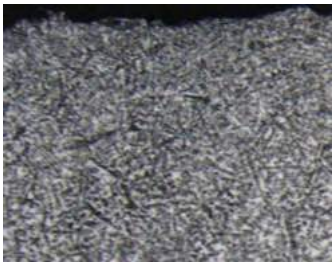
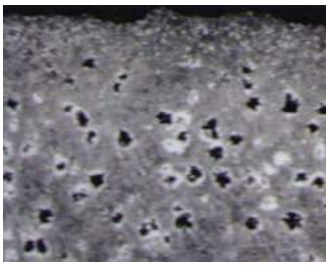
1. **鋼素材を用いて七支刀を鍛造で造る**
   1. 肉眼観察で板状にさびが見える場所があり、重ね繰り返し鍛造の可能性が考えられる。
      また、象嵌が可能な軟らかさが表面にあり、過去の表面分析から　炭素量は0.2%といわれ、
      この複雑な形状も鍛造工具の工夫で克服。　象嵌も可能である。
   2. 七支刀鍛造復元の限界
      1. 形状が複雑で　刀の性能（強度・硬さ）確保の為の焼入れが極めて難しい。
         7箇所もある枝刀のある複雑な形状を均一に焼き入れするのが難しく割れを発生しやすい
      2. 枝と枝の間隔をほぼ同じに鍛造で造る難しさがある。
         また、実用性を付すため、刃の火造りの難しさ
      3. 鍛造よりも鋳造に適した形状が見られる
         刀身の断面がレンズ状であり、枝の付け根の幅が広い。また　元に近い厚肉部で折れている。



象嵌　　枝刀部の構造　　刀身がレンズ状

2. **銑鉄素材の鋳造で七支刀を作る**
   （ア）複雑な形状や刀身の厚さばらつきや形状は鋳造であれば　容易に復元できる
   （イ）接損部の刃面から芯部は非常に脆いように見える。
   （ウ）鋳造法の最大の課題は硬くて脆く、薄い銑鉄鋳物材料に象嵌を可能にする方法の検討がである。

鋳物に粘さを付与する方法としては表面脱炭の熱処理アプローチがあり、刀身全体を象嵌に耐える強靭な材料に変質させる方法が容易に在ったかどうかである。
復元製作では白銑を長時間熱処理して可鍛鋳鉄にすることで象嵌に耐える強靭性付与に成功した。

熱処理前　白銑　　熱処理後　可鍛鋳鉄
4%を越える炭素量で硬くて脆い　　黒鉛が球状化して強靭化

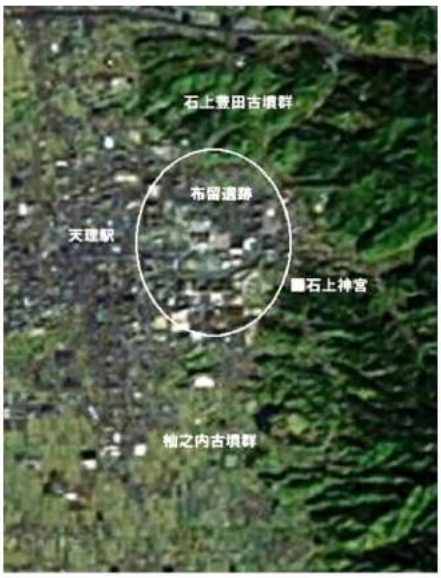
展示を見た私には　七支刀について　実のところまだそのプロセスが明確にはなりませんでした。

1. この複雑な形状を鋼の鍛造法で作ることの困難性は理解しましたが、実用性を廃して
火作りや熱処理を廃せば、製作の可能性はあろう。
2. 銑鉄鋳物の鋳造法には本当に説得力があるが、材質というより、実のところ　これだけ複雑な形状を鋳込む技術が百済にあったのだろうか・・・・
確かに　百済には鋳鉄塊　鋳鉄素材への鋳込みが行われつつあったのは事実としても、刀鋳造の
鋳型は見つかっていないという。
3.「百錬刀」の「錬」にはもともと中国で鋳造材を百錬して、強靭な材料に変質させることを意味し、朝鮮に技術伝承されたこの当時では　すでに「百錬」の言葉は形骸化して　強靭な刀に修飾される言葉になっていたとの考えもあり、必ずしも鋼鍛造で製作された刀のみに修飾される根ものでない。
4. これだけ高度な鋳物技術が百済にあったとすれば、どうして日本にこの鋳造の技術が日本に伝来しなかったのか・・・・・
やはり、鋳造は鉄の生産・製錬と密接に重ならなければ、可能にならぬ技術なのだろうか・・
それとも炒鋼や塊錬鉄法の方法の高度化が鋳造技術を押し出してしまったのか

「七支刀」の製作方法についてく　鋳造法と鍛冶鍛造法が頭の中でくるくる駆け巡るが、やっぱり　まだ　どちらともいえない。でも、この「七支刀」を通じて　これだけ多く 4,5 世紀の鉄について　情報が得られたのにはびっくりでした。
まだまだ、朝鮮半島の鉄を良く調べないとこの時代の日本は解けない。　それだけ　この時代　朝鮮半島と日本は密接だったのだろうとつくづく思う。
　先日の朝日新聞には次の趣旨の記事があった。
「　日本の国づくりに朝鮮半島からやってきた数多くの渡来人が支えたのではない。
　　この渡来人もみな　日本人の祖先　日本のルーツそのものなのだ　　」
鉄生産がまだできず、朝鮮からの鉄素材供給に頼っていた日本。朝鮮諸国との交流の中で　必死に鉄の国内生産を模索する一方大量の実用鉄器を製作して、日本の国づくりが進む時代であった。
日本各地に大規模な古墳が作られ、数々の鉄器と共に　大王の象徴として刀剣が副葬される。
朝鮮半島の鉄と共に、数多くの渡来人がやってきて、日本の国づくりを支えたという以外情報の乏しい時代であるが、この時代を経て　鉄の 6 世紀と呼ばれる日本の古代が花開いてゆく。
一番ドラスティックに日本の鉄技術が変化してゆく時代である。
また、蝦夷の蕨手刀や舞草や出羽鍛冶　日本刀のルーツといわれるこれらの技術がこの「七支刀」の技術とどこで出会うのだろうかろうか　　古代の刀剣には　まだまだ古代のロマンが詰まっている

参考資料　　佐々木稔　　鉄と銅の生産の歴史
　　村上恭通　　倭人と鉄の考古学
　　窪田蔵郎　　鉄から読むにほんの歴史
　　第 5 回　歴博シンポ　古代東アジアにおける倭と伽耶の交流　ほか

3. 物部氏の本拠地　布留　「七支刀」が収められている石上神宮を訪ねて



3 月 17 日そして、現在の天理市街の中心「布留」は古代大和の鉄・軍事を支配した豪族　物部氏の本拠地で、その後背　布留山の山裾に 4 世紀崇神天皇の頃の創建と

　　伝えられ、物部氏の氏寺である石上神宮があり、物部氏の管理する大和王権の兵器庫が置かれて大きく発展する。朝　近鉄駅に降り立つ。

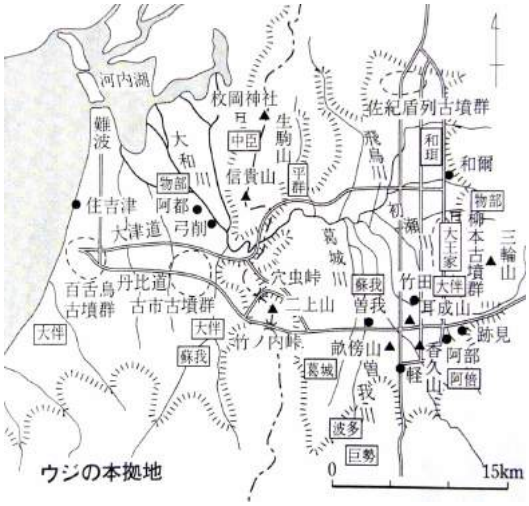
七支刀」復元展を見る前にぜひともその「七支刀」が収められている石上神宮界隈　布留の郷を歩くのが目的である。

初期倭政権が日本統一と国家建設を進めてゆく古墳時代　初期倭王権の鉄器製造で支えた専用鍛冶集落があり、鉄を支配した物部氏の本拠地があったところである。

奈良から天理を経て　桜井へと大和平野の東縁　大和・青垣の山裾を日本最古の「山の辺の道」が通り、倭王権の中心地である。

日本 最古の道「山の辺の道」に沿って山裾には数多くの古墳が集積する。

天理・柳本周辺は古墳時代前期　3 世紀後半から 4 世紀半ばにかけての初期倭王権の中心地で、天理の南柳本には倭王権の王墓と見られる柳本古墳群があり、その後 4 世紀半ばから 5 世紀にかけて　倭王権の墳墓は盆地北端の佐紀→河内へと移って行くが、倭王権を支えた豪族・氏族拠点を中心に栄える。



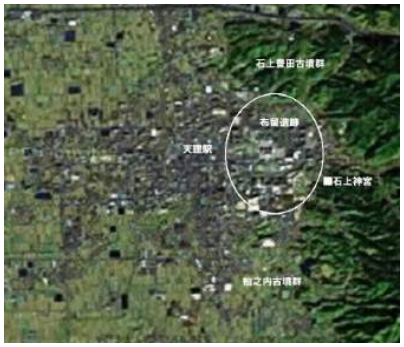
この山と平野を見渡せる青垣の山は軍事上の拠点であるばかりでなく　三輪山に代表される古代の「鉄」の山と考えられ、ここに倭王権が本拠が置かれた由縁でもあると考えられる。倭王権の大王家と共に　三輪山山麓の「忍坂」は出雲の関連地であり、「布留」の北側「和爾」の里は「鉄」と関連する和邇氏の根拠地である。そして、天理の市街地　「石上・布留」は物部氏の本拠地で背後南北に分かれて　石上・豊田古墳群・杣之内古墳群があり、その南に初期倭権の柳本古墳群へと続く。

予備知識を頭に入れて、天理駅前から歩き出す。
　以前に何度か山辺の道を歩いたので少しは知っているのですが、駅前初めもうすっかり様変わりである。
「古代　歴史の街　天理」といっても、今は天理教本部のある宗教都市。　天理教一色の街である。
駅正面から東側一帯　石上神宮のある山裾までの広大な市街地に天理教本部や天理大学の諸施設など近代建築でありながら入母屋造・瓦葺の百を越える大きな建物がブロックごとに散らばっている。
この地域がまさに古代の「布留遺跡」と重なる地域である。
駅前で地図を貰って、真っ直ぐ東に天理教本部の辺りまで伸びる商店街を抜けてゆく。
天理教の文字があふれ、地方からこられたのだろう　天理教のはっぴを着た一団が幾つも歩いている。
若い人が多いのにビツクリする。
ぶらぶら　商店街を抜けると広い天理教本部神苑に出ると中央に大きな神殿がある。とにかく広い。
南中央礼拝殿から拝殿に上がって静かな時間をすごす。
若い人達が本当にさりげなく気を使ってくれて、本当に気持ちがいい。

天理教本部　神殿　　2006.3.17.

神苑の門から南にでると布留川が東の山麓から流れくだり、その向こうに巨大な天理大学の建物が見える。この川に沿って、上ってゆけば、布留町　石上神宮へ出られる。
日本的というにはちょっと違和感のある瓦葺入母屋コンクリート作りの天理教の巨大な建物群の奥に布留の山々が見えている。　この周辺が　布留遺跡の中心部であるが、今はもうその痕跡は全く見られない。

天理教本部周辺から東側　布留川　布留の山並み　　2006.3.17.



「布留」遺跡は布留川をはさんで東西約 2km、南北 2km にもおよぶ　旧石器時代から現代まで続く大複合遺跡で、その中心は　ヤマト王権の武器管理をしていたと考えられている古代氏族の物部氏が居住していた古墳時代である。
遺跡内からは、豪族の居館跡や、倉庫、幅１３ｍの運河の跡などが見つかり、布留川の古い支流の跡からは、ふいご羽口、鉄滓、木製刀剣装具のほか、玉類が多数出土し、近くに鍛冶工房や玉作工房と祭場があったと考えられている。

また、遺跡後背の山裾　南に杣之内古墳群、北に石上・豊田古墳群の墳墓が築かれ、５世紀末から６世紀にかけての大型前方後円墳が複数あり、この時期に「大連」として活躍した物部の族長たちの墓と考えられている。そして、律令時代以降は都が奈良盆地を離れると次第にさびれていった。

畿内の大専用鍛冶工房　大県・忍海・森製鉄遺跡群などと共に　3 世紀後半に出現し、5,6 世紀には他の鍛冶工房をも集約して　倭王権を支えた布留の専業鍛冶工房　布留製鉄遺跡がこの地にあった。

おそらくは　物部氏が統括支配し配する鉄のナショナルセンターの一つであった。　朝鮮半島の製鉄新技術や渡来技術集団を受け入れ、鉄器の大量生産鍛冶を行うと共に鉄の国内生産の試みも行ったに違いない。そして、ここで造られた武器・武具は直ぐ東の山裾　石上神宮に納め一括管理されていた。

今はもう　市街地と天理教書施設の中に埋没してしまっている。

布留川に沿って、10 分ほど歩くと布留町の交差点。直ぐ横に布留川の橋を渡る石上神宮である。

また、　この交差点より上流側で布留川は石上神宮のある南の枝尾根と布留町の集落が乗る枝尾根の間を流れる狭い谷川となって　流れ下ってくる。今まで通ってきた下流側が整備された都市河川の様相であるのから一変する。

布留本町の交差点と布留大橋界隈　　2006. 3. 17.

橋を渡って直ぐ、案内標識に沿って、東の山の方に折れて　右手南の森に上がってゆくと大きな石上神宮の石碑の在る入り口。　神宮はこの枝尾根の上の北斜面にあり、森の中の参道をまっすぐ東へ進む。

大きな鳥居をくぐり少し進むと小さな広場になっていて、左手に社務所があり、その前で美しい鶏が放し飼いされている。

その奥一段高くなった地の左手に回廊をめぐらした中に拝殿があり、道を挟んで右手に出雲建雄神社の拝殿が建っている。右手の山から山辺の道が下りてきて、この広場で直角に東へ折れて、社殿の間を奥へ通り抜けて、奈良の方へ山裾を進む。

石上神宮　参道　2006. 3. 17.

回廊の中央に立派な楼門があり、中に入ると真っ赤な立派な国宝の拝殿　その奥に本殿がある。

昔は本殿がなく、禁足地に磐座があったという。創建は 4 世紀といわれ、最も古い神社の一つである。

国宝　石上神宮　拝殿　　重要文化財　楼門

細長い建物の中間に通路を確保するための馬道がある国宝出雲建雄神社拝殿

物部氏の氏神は納得出来るのですが、ここが　倭王権の兵器庫と言われてもピンと来ない。
しかし、この石上神宮は尾根の高台の斜面を平坦地に整地して社殿が建ち、その周囲　東西北にコの字形に濠をめぐらしていたようで、当時の古墳築造などと同様　大規模な土木工事が行われているという。
そう聞いて、社殿前の広場に立って地形を眺めたり、境内を抜けて北の布留川の崖に出て　この森をみるとなるほどこの地が要塞の備えをしているように思え、兵器庫だったといわれても納得である。
　また、境内東側の溜池からは古墳時代中期後半のものと見られる土師器高杯、土師器小型壺、初期須恵器の特徴を示す須恵器高杯などが出土し、ここで祭祀が行われていたことを示している。

本殿は布留川左岸（南岸）の標高１０５ｍの地点に鎮座し、北側を流れる布留川からの距離は約１００ｍしか離れていないが高低差は２５ｍもあり、南方は東の山々からのびる丘陵の急な北斜面の中腹に位置。
社殿は、一辺が約１２０ｍのほぼ正方形の平坦地に建っている。そして　木々に覆われて、一見しただけでは分かりにくいが、北から見ると高さ約１０ｍの段になっていて、この台地を取りまくように、東側・北側にはいくつかの溜池・空池があり、西側は民家が建ち不明ですが、もともと、東西北をコの字型にめぐった濠の跡のようで古墳築造等の土木技術が応用されたものではないかと考えられている。

楼門と社殿の間を東に抜けると布留川に沿う崖沿いの道　谷には梅が美しい花　2006.3.17.

山辺の道の道しるべにしたがって、楼門の横を奥に抜け、境内を抜け出ると布留川が急ながけ下を流れる斜面の中腹に出る。向かい側の尾根筋との狭い谷である。山辺の道は崖の途中で斜めに布留川に下って川を渡り、反対側の尾根の街道筋に出る。　この街道を西へ尾根を下って　天理の市街地にでてまた　北の奈良へ向かってゆく。一方　そのまま東へ崖に沿って谷を詰めると直ぐ上で滝本へ向かう新道に出て、さらに布留川に沿って滝本の集落から天理ダムへとさらに上流へ遡って行く。

先ほどの山辺の道への分岐まで戻って、布留川へ降りて　向かいの尾根へトラバース。
梅と桃と菜の花　梅・桃・桜の三色ではないが、「三春」思いもかけない谷の景色である。

石上神宮の北側　布留川が流れ下る谷　布留の高橋周辺　2006.3.17.

布留川に渡る赤い橋の袂に「布留の高橋」の案内板

「石上　布留の高橋　高高に　　妹が待つらむ　よるぞふけにける」

万葉集　巻 12-2997

布留の高橋が高いように　高々と爪先立ちで背伸びして

あの女は自分を待ちわびているであろうに、夜はふけてしまった

万葉集の恋歌である。
素晴らしい梅の花咲く崖道を駆け下って、細い茂みの小道。
高橋を渡って夜道を急ぐ姿が、景色に本当に良くマッチする。
最も　今の高橋そのものは　平坦な鉄橋で昔とは変わっているが、その風情は昔のままであろう。高橋をわたって、尾根筋の街道を天理に戻る。

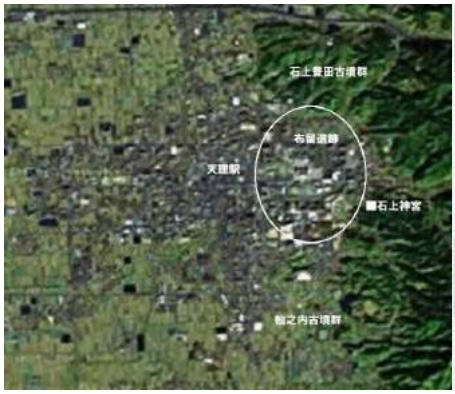
布留の高橋を渡って　豊田の集落を天理の市街地へ下る

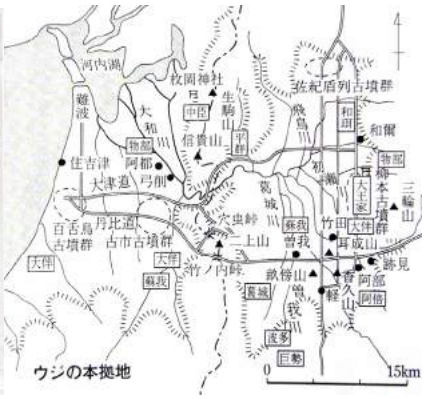
今までに天理・山辺の道は数度歩きましたが、「布留」をキーワードに歩いたのは初めて。
物部氏の本拠地　そして　倭王権が日本を統一して国家建設を進める過程で鉄器を供給し続けた専用鍛冶集落　文献や本で何度も見た「布留」。
具体的に鍛冶遺跡や物部氏関連の古墳を見たわけではありませんが、半日興味津々で歩きました。
そんな布留の製鉄遺跡が天理教本部の位置と重なっていること初めて知りました。
また　石上神宮が倭王権の兵器庫として機能する要塞のつくりになっていることも今回見聞きして、これにもビツクリ。
三輪山から巻向を通って柳本そして布留　その北には直ぐ和邇氏の和邇　本当に「山辺の道」が古代の鉄の一本道としてつながっていること実感して　天理の街に帰ってきました。
おそらくは　数多くの渡来人もこの道を数多く行き来し、鍛冶工房に朝鮮半島の先進技術を伝えると共にこの大和の山中に分け入り、鉄の国内生産の道を探ったに違いない。
そんな中で　百済から贈られた「七支刀」もこの石上神宮に奉納され、神宝として奉られたに違いない。
日本統一と国家建設を支えた専用鍛冶工房の郷「布留」は　梅・桃・菜の花　三色の花が布留川の谷を彩る素晴らしい鉄の郷でした。

2006.3.17.　　布留川沿いの道を天理へ

幾度も後背布留の山並みを振り返りつつ

Mutsu　Nakanishi





Iron Road【6】2006

6.

古代和鉄の郷　兵庫県 但馬　出石・豊岡　Country Walk　2006.5.6.

コウノトリが大陸と日本を結ぶ古代　和鉄の道

幸福を運ぶコウノトリと鉄をもたらした天日槍

朝鮮半島からやってきて　但馬・播磨・近江・若狭などに鉄の足跡を残した「天日槍」

但馬では湖だった豊岡盆地の日本海への出口を開いて平野にした開拓新

そんな天日槍の根拠地が但馬・出石

コウノトリが舞う大陸と日本を結ぶ和鉄の道

但馬・出石にはそんな古代の痕跡を今も残している

1.　天日槍の国　但馬・出石　　-山を隔てて鉄の王国「丹後」と隣あう-

2.　4 世紀　「砂鉄」が副葬された出石　入佐山古墳を訪ねて

古代和鉄の郷　兵庫県 但馬　出石・豊岡　Country Walk

2.1.　4 世紀　但馬王権の墓 ?　入佐山古墳群を訪ねる

2.2.　鍛冶屋集落・伊福部神社　界隈　& 天日槍ゆかりの 出石神社・中嶋神社

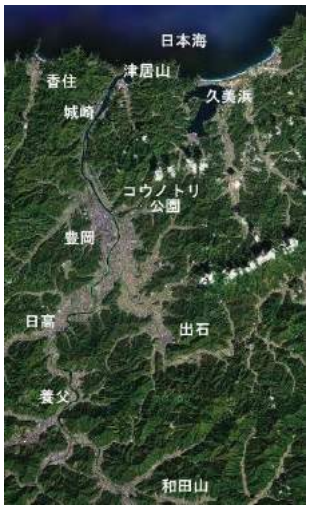
2.3.　コウノトリが舞う大陸と倭を結ぶ古代和鉄の道

新緑の５月　豊岡盆地　コウノトリの郷公園　2006.5.6

3.　古墳時代　但馬の古墳で出土した「砂鉄」の謎をめぐって

まだ製鉄が始まらない時に何に使われたのか

■　参考　但馬　天日槍の国の歴史とコウノトリを訪ねて　2005.6 月　Country Walk ・



「砂鉄」が副葬されていた
入佐山３号墳
４世紀　出石の豪族の墓群
出石　入佐山古墳群
2006.5.6.

昨年６月　製鉄関連の神「天日槍」の国　「但馬・出石」を訪ねた時に見た古墳に副葬されていた「砂鉄」。
鉄滓や鍛冶具などが、副葬されるのは５世紀以降。そして、日本で本格的な「たたら製鉄」が行われるのは５世紀後半である。それに先立つ古墳時代４世紀の古墳で　壺に入れられて副葬されていた「砂鉄」。
しかも　それが鉄の国　但馬で・・・・・・。
この但馬では古墳時代　４世紀には製鉄がすでに行われていたのか・・・・興味津々である。

鉄が日本に伝来して製鉄が開始されるまで千年近くかかり、いまだにその開始については諸説あり、謎である。
そもそも　その後日本で広くたたら製鉄の原料として使われた「砂鉄」は鉄としていつ頃から認識されたか・・・・・

但馬・出石は製鉄技術を持って　新羅からやってきた天日槍が住んだとの伝承の鉄の国。
そして唯一　大陸と行き来して幸せを運ぶコウノトリの飛来地。
絶滅の危機から昨年自然放鳥へとプロジェクトが進むコウノトリが舞う里。
「鉄の伝来をコウノトリ」大陸・朝鮮半島と日本を結ぶ古代の鉄の道に幸せ運ぶりコウノトリが舞う。

この古墳時代　但馬で出土した「砂鉄」が「日本での製鉄開始を解き明かすかもしれない」と興味深々で調べると共に再度　但馬出石の古墳を訪ねました。

1.　天日槍の国　但馬・出石―　古代鉄の王国　丹後とは山を隔てて直ぐ隣り　―

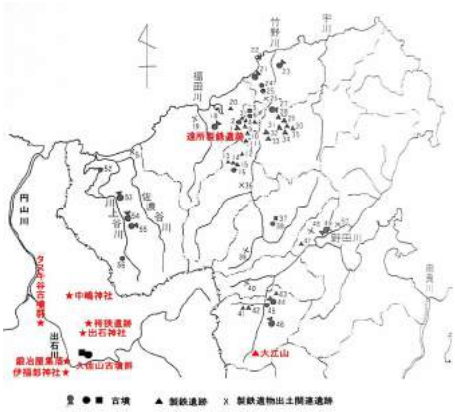
「天日槍」は記紀や播磨風土記に登場する「朝鮮半島　新羅から日本にやってきた伝説のひと」
「天日槍の伝説のあるところ鉄・金属加工の産地あり」

私の頭の中では隣国播磨風土記に書かれた「産鉄の神」であるが、この豊岡・出石では肥沃な豊岡盆地を作った開拓神としての伝承が残っている。

地図を開いてみれば判るのですが、豊岡・出石は円山川の河口に近い盆地で、四方をすっぽり山に囲まれ、唯一北　瀬戸・津居山の狭い岩山の間から日本海へ円山川が流れ出る。

縄文の海進の時代には奥へ深く入った海だったという。

大昔の豊岡盆地は南から流れ込む円山川で泥海・湖であったが、朝鮮半島からやって来て　但馬・播磨・近江・若狭などに鉄の足跡を残した天日槍の技術集団がこの地に留まり、北側河口近くの瀬戸・津居山の間の岩山を取り去り、濁流を日本海に流し落してこの肥沃な豊岡盆地（平野）を作ったという。



出石の鉄関連地と丹後国
製鉄遺跡との位置関係

このような大規模な工事には鉄器を使った技術が必須であり、天日槍を祖先として信奉し鉄器技術を持った渡来人の活躍する姿がこの開拓神の伝承としてこの地に根付いたのであろう。

その天日槍を信奉する渡来の技術集団の本拠地が豊岡盆地の南端の山裾が出石である。

鉄の国　伯耆・播磨・丹後と接して、この但馬に流れ込む川からも円山川を含め、砂鉄が多く取れ、出石付近まで船が入ったという。

この天日槍がやってきたのは３世紀卑弥呼の時代に近いらしく、この出石の山裾にはこれらの集団が残した古墳群や横穴墓など弥生後期や古墳時代からの遺跡群が残っている。（入佐山古墳群　袴狭遺跡　タヌキ谷古墳群　森尾古墳などで　いずれも渡来人集団が居た痕跡が見られる）

袴狭遺跡出土　船団の線刻画

出石の街を見下ろす丘陵地 入佐山の尾根の上に古墳時代にこの地を治めた豪族の墳墓と見られる古墳群があり、その一つ４世紀頃の方墳　入佐山三号墳には刀・武器・鏡など数々の品と共に「砂鉄」が副葬されていた。また、出石神社の北の丘陵地の山裾の袴狭遺跡出土の平安前期の木簡からこの地に金属の渡来系技術集団「秦氏」の存在が裏付けられる一方、入佐山の直ぐ傍で出石川から分流する奥山川の分流地に「鍛冶屋」の地名が残っており、さらに 1km ほど奥に古い由緒を持つ「伊福部神社」がある。

この地では　まだ　製鉄遺跡の痕跡は見つかっていないが、出石神社に伝わる天日槍伝承などと併せて考えるとこの地が古代製鉄との関係がうかがえ、新羅からの渡来系技術集団または交易集団の本拠地であったと思われる。

3 世紀後半～4 世紀　森尾古墳　　但馬一宮　出石神社

刀剣・鉄工具・玉類と共に正始元年の三角縁神獣鏡が出土　　祭神　天日槍

日本でも最も古い部類の砂鉄を使った製鉄の痕跡が見つかる隣国丹後の遠所遺跡は 5 世紀後半である。
ちょうど入佐山古墳で「砂鉄」が副葬された 3 世紀後半から 4 世紀にかけては　軟鋼材の鑿（サク・のみ）切り加工主体の原始鍛冶から高温の本格鍛冶への移行期であり、また　朝鮮半島と日本の交流が活発であった時代。
副葬された砂鉄は渡来の技術集団が日本での製鉄の夢を賭けて　持ち込んだのだろうか?????

■　天日槍　伝　承

古事記、

新羅の王子であった天日槍は赤い玉の化身として日本から来た女性と結婚したが、だんだん高慢になった王子が妻をののしるようになり、この女性はこつそり日本へ帰ってしまう。
彼女を忘れられない天日槍は海を渡って、妻の故郷難波に向かうが、海の神に妨害されて果たせず、迂回して但馬国に停泊。結局、但馬の地の娘を娶った。
天日槍が持ってきた神宝を玉津宝といい、八種であった

日本書紀

新羅の王子天日槍が 7 種の神宝を持って日本にやってきて、但馬国におさめた。
初め天日槍は舟に乗り播磨国にやってきて穴栗邑にいた。
天皇に「お前は誰か　何処の国の人か」と尋ねられ、「新羅の王子です　日本に聖王がおられると聞いて国を弟に譲り、やってきました」と答え、天皇から「播磨国の穴栗邑と淡路島の出浅邑の二つに自由に住むように」といわれた。
「自分の住む所は許してもらえるなら、諸国を巡り歩いて　自分で選びたい」と許しを貰い、宇治川を遡って　近江の国　次に若狭を経て但馬国に居を定め、土地の娘を娶る。そして、曾孫が田道間守である。

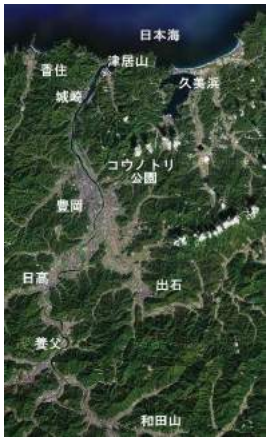
播磨風土記　御方の里の項

天日槍と大国主命が支配地を巡って争われた時、葦草を三条　足に付けて投げあいをされ、落ちた所を支配地にしようということになった。天日槍の葦草はすべて但馬に落ち、大国主命の葦草は、養父郡と気多郡とこの村にそれぞれ落ちた。だからこの地を三条（みかた）という。また、天日槍は但馬に行き　出石を本拠とされた。

このほか、播磨風土記には天日槍が揖保の里　奪谷・伊奈加川・波賀の村・糠岡の項など　数多くの里の項に登場する。いずれも鉄と関係深い里である。

2.　4 世紀　「砂鉄」が副葬された出石　入佐山古墳を訪ねて　　2006.5.6.

古代和鉄の郷　兵庫県 但馬　出石・豊岡　Country Walk



但馬国を流れ下って日本海へ注ぐ円山川　和田山周辺で　2006.5.6.

天日槍の鉄の国に出土した「砂鉄」が気になって仕方なし。4 世紀の砂鉄????そんな　ばかな・・・・・

砂鉄が 4 世紀にあれば、日本の製鉄はもつと早く始まっていたはず。本当だろうか・・・・

「砂鉄」の出土した入佐山古墳は「砂鉄」出土にふさわしい古墳だろうか・・・・。

そして、地図で知った伊福部神社や鍛冶屋の集落。

和鉄の痕跡はあるのだろうか・・・・・。

家内は昨年　秋に放鳥されたコウノトリにイメージを膨らませている。

鉄の里に舞うコウノトリ　これも是非見たい。

雪が消えたら　行こうといいながら　のびのびになつていた「天日槍の鉄の国　但馬・出石」に出かけました。何度も出かけた事のある「出石」でしたが、「城下町と出石そば」でない目的で行くのは前回の「砂鉄」を見つけたツアー「古代　天日槍の国」を除くと初めて。

地図で調べた入佐山は出石城の直ぐ東の丘陵地　旧京街道が出石の街に入る入口出石高校の裏山で尾根筋が公園になっているというが、行ってみないと詳しいことは全く判らない。

いつものとおり風来坊の Country Walk でしたが、今まで知らなかった「出石」の顔と日本でのたたら製鉄開始の謎が自分なりに整理が出来る旅となりました。

残念ながら入佐山古墳出土の「砂鉄」が展示されていた出石古代学習館へも再度訪れて、出石のたたら遺跡について調べたかったのですが、連休の休館日でした。

神戸から車で山陽道・播但自動車道と北播磨の山間　生野峠を越えて和田山盆地に出て、京都・福知山からの国道 9 号線と合流して日本海へ流れ注ぐ円山川の橋を渡るともうそこは但馬。神戸から 2 時間たらずである。

国道 9 号線と別れ、直ぐに円山川に沿って山間を北にすすむと直ぐ日高町。

現在はこの地も豊岡市。

山間の日高町を抜けると、周囲を丘陵地や山に囲まれた平野部の真ん中を円山川が流れ下る豊岡盆地に入る。

豊岡の街へはそのまま川に沿って北へ下るのですが、出石へはこの盆地の縁の丘陵地に沿って東へ。

円山川に注ぐ出石川の橋を渡り、川に沿って南へ戻ると出石の市街地。

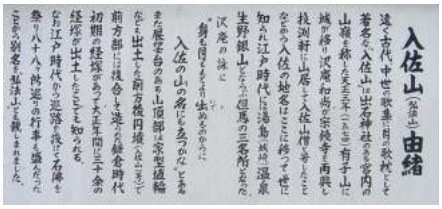
カーナビが勝手に道を指示して盆地の中の道を出石まで運んでくれる。

和田山の町で円山川を渡って出石へ

5 月の連休で出石の街中は新緑の「出石城」と「出石そば」を訪ねる人たちでいっぱい。
昨年放鳥された豊岡コウノトリ公園へも出石から北へ 15 分ほどでいけるので人出が多い。
出石は周囲を山でかこまれ、南の丘の出石城を正面にその北側に碁盤の目で広がる街並みがすっぽり収まっていてわかりやすい街であるが、「入佐山」は訪れたことなく、地図でしっかり入佐山の位置をインプットする。出石城址と街並みの中心に時を告げる辰鼓櫓があり、昔の城下町の風情を残す街並みが広がっている。
といっても、まあ　今は有名になった「出石そば」のテーマパークといった風情。
数多くの蕎麦屋・土産物屋が立ち並ぶ。周囲を緑の山に囲まれ、ゆったりとした街である。

城下町　出石界隈　　出石城　辰鼓櫓　　入佐山下の旧京街道　2006. 5. 6.

豊岡盆地の一番南の端でまた小さな盆地になった地形の中、市街地の南・東・北側を弧コの字型に山で囲まれ　西側を出石川が流れる。
市街地の正面　南の丘陵地の中腹に出石城があり、コの字の南東角の丘陵地が入佐山。
入佐山の丘陵地と城址のある南の丘陵地との間の狭い谷あいを東から旧京街道が街に入ってくる。
そして　もう一つの北東の角に出石神社がある。
街中を避けながら出石高校を目印に市街地の東端の山裾に沿って南へ。市街地の南東角近く　右手に明治館の古い建物の道の反対側の丘陵の端に入佐山公園入口の案内板があり、直ぐ隣に臨時の車置き場。ラッキーである。


入佐山（別名）由緒

遠く古代、中世の歌集「月の歌枕」として著名な入佐山は出石神社の奥宮内の山裾を縁とする天正元年（一五七三）有子山に城が移り沢庵和尚の宗純寺を再興し長渕軒に山居した入佐山博士がここに移って世に知られ江戸時代には湯島、城崎、温泉、生野銀山とならぶ但馬の三名所となった。

沢庵の詠に
"身を問えどもこたえず　出でぬるかなに"

入佐の山の名にも恥ずかしなる"とある
また展望台のある山頂部は宋型墳墓
なども出土した前方後円墳（後山）で
前方部には複合した迷宮の経塚時代
初期の経塚があって大正年間に三十余の
経塚が出土したことも知られる。
なお江戸時代からの巡路を後世に石碑を
建て八十八ヶ所巡りの行事も盛んだった
ことから別名を「弘法山」とも親しまれました。

入佐山古墳群のある入佐山公園登り口とその南側旧京街道沿いの出石高校　　2006. 5. 6.

2.1.　4世紀　但馬王権の墓 ?　入佐山古墳群を訪ねる

全く情報がなかったので、草ぼうぼうの雑木林の中に古墳が眠っているのかと思いましたが、登り口の案内板に古墳があることが書かれていたので、間違いなし。登って見るとよく整備された遊歩道が古墳のある尾根筋を巡り、そのいたるところに歌碑が立てられていました。また、登り口の尾根を南に回りこむと小さな川沿いの旧京街道が東西に走り、道沿いに出石高校がありました。　出石城の市街地はこの京街道を川に沿って西へ500mほどのところですが、城周辺の雑踏が嘘のように静かな街筋である。

登り口に戻って、よく整備された山道を登ってゆく。外から来たものにはよく判らないが、但馬の国では「入佐山」は良く知られた名所のようだ。登り口の案内板にも　但馬の歌枕「入佐山」　城崎・生野銀山と並ぶ但馬の名所と書かれていた。登り口から尾根筋を上りだすとそこはもう誰も居ない山の中。

幅の狭い尾根筋が新緑につつまれた林の中に続いている。

入佐山の散策路から見る出石の街並　　2006.5.6.

道のあちこちに歌碑やお地蔵さんが置かれ、出石の街の人達の散策路なのだろう。

雑木林の間から、碁盤の目に区切られた出石の街並みが見える。周囲の山々をバックに四角い家並み全体がすっぽりと収まり、その中央にシンボル辰鼓櫓が直ぐそこに見える。

出石の　　街をゆったり、見るにはこの散策路が一番である。

入佐山古墳群の散策ルート

15 分ほどで尾根筋の上に出たところに展望所があり、出石の街が見下ろせる。その傍らに「入佐山１号墳」の小さな立て札が立っている。

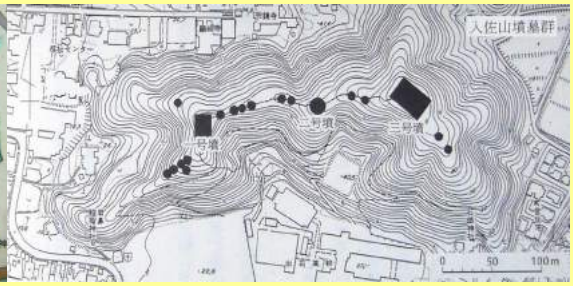
この休憩所の場所が 1 号墳のようである。登り口の案内板には前方後円墳と書かれていましたが、もうその痕跡はない。

入佐山一号墳周辺　　2006.5.6.

資料によると標高約 90 メートルのこの入佐山の狭い尾根筋には弥生時代後期から古墳時代前期いたる墳墓群が点在。尾根筋をつなぐ小さな 3 つのピーク部にそれぞれ古墳があり、尾根筋には 50 を越える小さな木棺直葬墓が点在している。このうち　一番奥のピークにある 3 号墳が発掘調査され、時期のほぼ同じ二つの墓壙が一部重なさつて存在し、第一の墓壙では赤く塗られた木棺の中　頭の直ぐ上に土器と共に砂鉄　鉄鏃　鉄斧が置かれ、体の右側に四獣鏡と太刀　左側に割れた方銘四獣鏡と刀・剣・ヤリカンナ　足元には鉄鏃と槍がおかれ、棺の直ぐ左にも鉄剣が置かれていた。この墓壙に重なるもう一つの墓壙はむしろこちらが古墳の中央にあり、先の墓と考えられるが、第一の墓壙で一部壊されていて、詳細はわからないが、ガラス玉が出土している。
副葬品からどちらも 4 世紀後半の墓と見られている。
他の古墳や木棺直葬墓については詳細調査資料がないので良くわからない。この 3 号古墳が他の 2 つの古墳より先に作られたと考えており、その副葬品などから　鉄の技術を有する渡来系のこの地を治めた豪族と考えられている。また　この尾根筋の直ぐ近く　南東の丘陵の端に但馬最大の円墳茶臼山古墳があり、一つの古墳群を形成している。

但馬王権の墓か?　　入佐山古墳群　　2006.5.6.

出石市街地の東南隅に隣接する丘陵地の尾根の上に点在



入佐山 1 号墳　入佐山
前方後円墳??

入佐山 2 号墳
径 15m の円墳

入佐山 3 号墳　砂鉄と共に数々の遺物が副葬
高さ 3.5m 36mX23m の方墳

但馬王権の墓か?　　入佐山古墳群　　2006.5.6.

４世紀後半　古墳時代の方墳　入佐山　３号墳　　*2006. 5. 6.*

歌碑がところどころに配された尾根筋の古墳をたどる遊歩道の奥

静かな木立の中　尾根筋の一番奥　一番高い所に高さ数ｍの方墳辺の痕跡が見える

古墳群の中で一番古い最初の族長の墳墓と見られ、二つの木棺が収められている。

この第一主体の木棺の枕元に砂鉄が土器に入れられて置かれ、周りに刀剣・鏡・武器・玉類などが副葬

朝鮮半島からこの地へやってきた鉄の技術集団の長と考えられる

狭い尾根筋をさらに進むと第２のピークがみえ、階段状になった遊歩道を上にあがるとそこに第二古墳の立札があり、道脇に歌碑が建っている。古墳というよりも尾根筋の少し出張ったところといった感じである。

そして　さらに奥へ雑木林の中を登ってゆくと雑草生い茂るこんもりした丘にぶつかり、その前に３号古墳の立札。

「これが　砂鉄の出た３号墳??　どこが　古墳だろう???」一瞬わからなかったのですが、立札のところから林の中を左へ回り込むと尾根筋の道よりも一段高くなった方墳の台形の縁が見え、古墳と判る。尾根筋の上にきっちり直線状の四辺に囲まれた古墳であるが、すでに埋め戻されていて雑草が生えているのみ．ここにも傍らに入佐山の歌碑が建っているのみ。

入佐山　　２号墳

入佐山　　３号古墳の周辺　　2006. 5. 6.

この古墳がどんな古墳なのか記した案内板があってもいいと思うのですが、興味がないのか　全くなし。
古墳時代　この入佐山に葬られた豪族の墓で、初めて副葬された砂鉄が見つかっている。
（　関東一本桜南遺跡　ほぼ　同じ時代の竪穴住居の中で壺に入れた砂鉄　また　3 世紀後半の関東の沖塚鍛冶遺跡で鍛冶場周辺から砂鉄が見つかっている。）
よほど　大事なものであったに違いないが、この砂鉄が何を意味し、また　どこからもたらされたのか　よく判らない。渡来系鉄の技術集団の痕跡の残る地でその族長の墓に副葬された「砂鉄」。
渡来の時に朝鮮半島の先端鍛冶技術の象徴として持ってきたのかも知れない。
この古墳時代朝鮮半島ではすでに製鉄が行われ、周辺諸国へ鉄素材の供給が行われていた。
砂鉄が明確に朝鮮半島で鉄材料として認識されていたかどうか判然としないが、3 世紀後半　新新羅の大規模な製鉄遺跡隍城洞遺跡では砂鉄と見間違われたほどに細かく砕かれた鉄鉱石粉が脱炭剤として使われ、精錬炉や鋳鉄塊などと共に見つかっている。
まだ、製鉄技術のなかった日本。鉄素材の供給を朝鮮半島に求め、それを　武器・農耕具に鍛冶加工して日本の国づくりが始まった時代である。北九州・大和を始め、各地の豪族が鉄の技術を求めて、朝鮮半島諸国と交流。
一方　朝鮮半島は戦乱の時代。多くの人達が技術と共に戦乱を逃れて日本にやってきた。そして、本格的な鍛冶加工から日本での製鉄開始へと時代が動いてゆく。次の時代　5 世紀後半には砂鉄を製鉄原料としたたたら製鉄が始まることから、鉄の技術集団の族長と思われる墓に副葬された「砂鉄」は新しい製鉄技術の象徴なのかも知れない。

入佐山の南山麓　出石高校周辺

そんな「砂鉄の謎」に思いをはせながら、緑につつまれた尾根筋を引き返して、出石高校の横に下りてくる。
入佐山の丘陵と南の山々との狭い谷間の小さな集落の中を旧京街道が出石の街へ抜けていく。静かな昔の街道筋のたたずまいの残る集落の上に入佐山の緑がかぶさっている。そんな山裾を緑を楽しみながら川に沿って西に 10 分ほど下ると出石城址の前に出る。
城址公園の中で「出石そば」を食べて、午後は地図で見つけた鍛冶屋集落　伊福部神社を探しながら、天日槍の出石神社・袴狭遺跡・中嶋神社と古い鉄の痕跡を訪ねながら、コウノトリ公園へ行く。

入佐山の南山麓　旧京街道　界隈　　出石高校周辺　　2006.5.6.

2.2.　鍛冶屋集落　伊福部神社　界隈　&　天日槍ゆかりの 出石神社・中嶋神社

「出石」は渡来の製鉄関連神「天日槍」伝承の街。　新羅の皇子　天日槍が鉄の技術を持ってやってきた時代　日本は古墳時代　大和が日本統一に向かって歩み出した時代である。出石入佐山の古墳から数々の鉄製の武具・刀剣と共に「砂鉄」が副葬されていたことが、益々この伝承に信憑性を与える。
なぜ　出石なのか・・・・確かに朝鮮半島から風に乗って日本海沿岸を伝えば　円山川河口　奥深く天然の良港「出石」にいたる。また、円山川をそのまま南に遡れば、　天日槍と大国主命が国を争った北播磨の製鉄地帯。また　出石の直ぐ東の山岳地帯は大江山。　この大江山の山塊から日本海へ流れ下る川筋は「鬼」や「羽衣」伝説の鉄の国「丹後」である。
周囲を鉄の国でかこまれた天然の良港であった出石が鉄の技術伝来の上陸地点だっただけであろうか・・・・出石には製鉄遺跡はないのだろうか・・・・・
そんな疑問で地図の上で見つけた出石鍛冶屋　伊福部神社の地名。また　天日槍伝承の出石神社・中嶋神社にも・・・
入佐山古墳に副葬された「砂鉄」が展示されていた出石古代学習館へ行けば　出石の製鉄遺跡についてももっとわかるかと訪ねましたが、残念ながら休館でした。

■　出石川の支流　奥山川沿いの出石　鍛冶屋と伊福部神社（出石市中村）

出石城址や入佐山の直ぐ西南　出石盆地の南端の山にかかる所で出石川が本流と奥山川に分岐するＹ字合流点の三角形の場所が鍛冶屋集落。そしてそこから西側の奥山川に沿って　数分南へ遡った丘陵地の山裾に伊福部神社がありました。

集落の中　二つの川に沿って　Ｙ字に道も分かれ、その分岐の角に出石鍛冶屋郵便局の名前がありました。ここからさらに少し南へ遡った道沿いに大きな樹木に囲まれた伊福部神社がありました。

鍛冶屋集落の中　出石鍛冶屋郵便局

拝殿前に堂々とした杉の大木がそそり立っていて台風でだいぶ痛めつけられたようであるが、樹齢１０００年の神木と云い、この神社の古さを物語っている

出石市中村　伊福部神社　　2006.5.6.

伊福部神社　社殿とその左手にある樹齢 1000 年という杉のご神木　　2006.5.6.

古ぼけてほとんど読めなくなった神社の由来を書いた額によると

祭神　素盞嗚尊　配祀　天香山命、伊福部宿祢命

天平十九年（７４７年)、伊福部連其祖天香山命を祀ると云う。

また、大生部兵主神社とも伝えられ、大生部兵主神社を弘原荘中村に鎮座し、これを大生部神社と崇めたと『日本書紀』にあると云う

出雲の製鉄神　素盞嗚尊を祭り、また、古代鉄の氏族　尾張　息長氏の一族　伊福部氏の祖天香山命の名も見え、鉄と官憲深い神社であり、鍛冶屋の地名も含め、この奥山川沿いに古代から鉄の技術集団が居たのだろう。

周辺で　鉄の痕跡について　聞いてみましたが、もう　全くわかりませんでした。

■　出石神社と中嶋神社　　－　天日槍伝承　－

天日槍を祭但馬一宮　出石神社

天日槍の曾孫　お菓子の神さん　田道間守を祭る中嶋神社

■　資　料【天日槍　伝　承】

出石神社由緒

天日槍命は、新羅国王の王子であり、日本に渡来されたとし、その事蹟は記紀のほか『播磨国風土記』『筑前国風土記』逸文等にうかがうことができます。天日槍命のご子孫には、田道間守命や、神功皇后がいる。出石神社社伝の『一宮縁起』には、谿羽道主命と多遅麻比那良岐と相謀り、天日槍命を祀ったと伝え、諸書によると遅くとも八世紀のはじめ頃にはすでにこの地で祭祀がおこなわれていたことがうかがわれる。

天日槍命は泥海であった但馬を、丸山川河口の瀬戸・津居山の間の岩山を開いて濁流を日本海に流し、現在の豊沃な但馬平野を現出され、円山川の治水に、また殖産興業に功績を遺された神として尊崇を集めている。また、鉄の文化を大陸から持って来られた神ともいわれている。

古事記、

新羅の王子であった天日槍は赤い玉の化身として日本から来た女性と結婚したが、だんだん高慢になった王子が妻をののしるようになり、この女性はこつそり日本へ帰ってしまう。彼女を忘れられない天日槍は海を渡って、妻の故郷難波に向かうが、海の神に妨害されて果たせず、迂回して但馬国に停泊。結局、但馬の地の娘を娶った。天日槍が持ってきた神宝を玉津宝といい、八種であった

日本書紀

新羅の王子天日槍が７種の神宝を持って日本にやってきて、但馬国におさめた。初め天日槍は舟に乗り播磨国にやってきて穴栗邑にいた。

天皇に「お前は誰か　何処の国の人か」と尋ねられ、「新羅の王子です日本に聖王がおられると聞いて国を弟に譲り、やってきました」と答え、天皇から「播磨国の穴栗邑と淡路島の出浅邑の二つに自由に住むように」といわれた。「自分の住む所は許してもらえるなら、諸国を巡り歩いて　自分で選びたい」と許しを貰う。

そして　宇治川を遡って　近江の国　次に若狭を経て但馬国に居を定め、土地の娘を娶る。そして、曾孫が田道間守である。

播磨風土記

大国主命はここでは別名の葦原志許男（あしはらしこお）命として登場する。

御方の里

天日槍と葦原志許男は、勝負がつかないので、山の上から三本の矢を射て、落ちた所を支配地にしようということになった。天日槍の矢はすべて但馬に落ち、葦原志許男の矢は、養父郡と気多郡に落ちた。

そこで、天日槍は但馬の出石を本拠とし、葦原志許男は養父神社と気多神社に大己貴命（おおなむちのみこと）として祀られたという。

このほか、播磨風土記には天日槍が数多くの里の項に登場する。いずれも鉄と関係深い里である。

【揖保の里　奪谷　伊奈加川　波賀の村　糠岡　の　項など】　**「筑前国風土記　挽文」「古語拾遺」にも記述がある**

2.3.　コウノトリが舞う大陸と倭を結ぶ古代和鉄の道

新緑の５月　兵庫県豊岡盆地　　コウノトリの郷公園　　2006.5.6.

空を舞うコウノトリの写真取りたいのですが、今回はかなわず。
一時間ばかり　家内と二人　コウノトリを眺めていました。
広い田圃に囲まれた自然の中に放鳥されたコウノトリ
自然の中ですくすくと育っているのがみられました
かつて　鉄のロマンを乗せて　この鉄の道の大空を行き来したコウノトリ
また、この但馬と大陸とを広く行き来するのは　いつだろう

昨年　自然へ放鳥されたコウノトリ　2006.5.6.

難しい繁殖　かわいそうにメスが擬卵と知らず抱き　オスがサギを追い払っていました
しかし、最近の新聞によると　この５月　このツガイが別のコウノトリが産んだ卵を温め、雛が誕生。
このコウノトリが自然の中での成長し、自然の中に巣立っていくことを見守るという。

コウノトリが舞う大陸と倭を結ぶ古代　和鉄の道　　兵庫県豊岡盆地 コウノトリの郷公園　　2006.5.6.

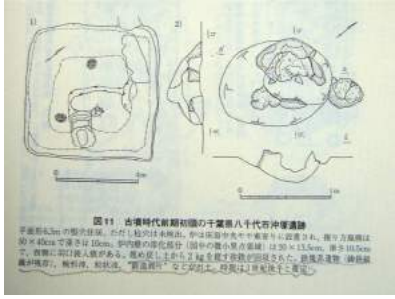
3. 古墳時代　但馬の古墳で出土した「砂鉄」の謎をめぐって

まだ製鉄が始まらない時に何に使われたのか

精錬鍛冶と製錬をつなぐ渡来技術の鍵がこの「砂鉄粉」
この技術習得で本格的な鍛冶生産そして製鉄が始まった

4 世紀後半の出石入佐山三号墳では　鉄製の数々の武具や刀と共に木棺の頭の所に砂鉄が土器に入れられて副葬されていた。日本で製鉄が始まる 5 世紀後半以前の古墳時代にこの様な「砂鉄」が出土した例を調べました。
5 世紀になると数々の鍛冶具と共に鉄滓が副葬されることが数多く見られるが、それ以前を含めても「砂鉄」が副葬された例はない。しかし、古墳時代前期　朝鮮半島から鞴・羽口による高温創業の本格的な鍛冶技術が伝来し、精錬鍛冶を伴う高度な鍛冶加工による実用鉄器が広く使われ始める時期と符合して　その例はさほど多くはないが関東にも「砂鉄」の痕跡が見える。
また、製鉄技術伝来のルートでしかも活発な交流がある朝鮮半島にも砂鉄ではないが、鉄鉱石粉の例がある。

一本桜南遺跡
竪穴住居より砂鉄が出土



沖塚製鉄遺跡
砂鉄が鍛冶滓と共に出土

入佐山古墳
砂鉄を副葬

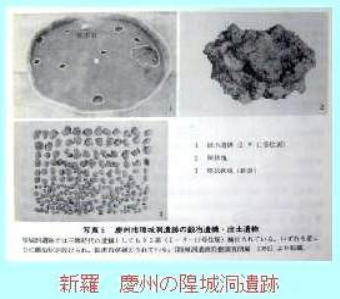
古墳時代前期に出土した「砂鉄」の例　　千葉県文化財センター「研究連絡誌　25 号」ほかよりまとめ

県別	千葉県白井市	群馬県　伊勢崎市	千葉県八千代市	千葉県旭市	千葉県　佐貫	群馬県吾妻川	兵庫県豊岡市
遺跡名	一本桜南遺跡	西太田遺跡	沖塚製鉄遺跡	外房海岸浜砂鉄	佐貫町で採取	群馬県吾妻川	入佐山 3 号墳
推定年代	古墳初頭 3 世紀	古墳後期	古墳初期 3 世紀後半	現代	現代	現代	古墳中期 4 世紀後半
出土量	520g		>2kg				150g
出土の状況	竪穴住居跡 小型壺形土器	集落遺跡の土コウ	鍛冶遺跡 炉の埋め戻し土				墓墓棺内 副葬 数々の鉄武具・ 鏡と共に土器内に
全鉄分	60.0	59.8		48.1	60.76	51.66	
FeO	27.0	19.83		26.2	32.48	24.45	
Fe203	55.8	63.4		39.2	50.74	64.7	
SiO2	2.18	2.56		2.1	1.98	9.0	
Al203	3.21	2.76		2.6	1.44	3.8	
CaO	0.60	1.11		1.4	0.28	0.82	
MgO	1.71	1.43		5.1	1.87	2.9	
MnO	0.43	0.48		1.3	0.90	0.54	
TiO2	4.83	7.09		10.2	10.16	5.3	
Cr203	0.007	0.045		0.12	---	0.037	
S	0.015	0.019		0.051	0.033	0.027	
P205	0.072	0.31		0.296	0.376	0.238	
C	0.18	0.03		0.042	----	0.074	
V	0.16	0.29		0.17	---	0.35	
Cu	0.003	0.004		0.005	---	0.038	

千葉県白井市印旛沼の台地にある古墳時代初頭の一本桜南遺跡の竪穴住居群の一つから　小型の壺にいれた砂鉄が見つかっている。砂鉄は顕微鏡観察による形状や分析結果などから、浜砂鉄ではなく川砂鉄のようである。しかし、他の多くの住居からは全く砂鉄の痕跡は見つかっておらず、砂鉄と認識して意図的に保管されていたと

考えられるが、その用途はわからない。
また、この遺跡から南東約 7km ほどの精錬鍛冶などの本格的な鍛冶加工の始まりを示す 3 世紀後半の製鉄遺跡沖塚鍛冶遺跡からは羽口痕を有する鍛冶炉や鉄滓・鉄片や鉄塊などと共に大量の砂鉄が見つかっている。製鉄遺跡であり、この砂鉄は製鉄原料と考えると量的には少なすぎる。
しかし、古墳時代の初期の遺跡から「砂鉄」が出土したこの千葉県の台地一帯は但馬出石と同様古代からの大製鉄地帯であり、製鉄との関連が考えられる。
古墳時代初頭　九州博多遺跡での本格的な鍛冶が始まった後、急速に関東にまで広がり、実用鉄器の時代が始まったことがわかる。そして、この急速な鉄鍛冶技術の進歩と呼応して、「砂鉄」が出土している。

朝鮮半島に眼を向けるとこの時代に「砂鉄」が出土した例は見られないが、半島では鉄鉱石を使った製鉄がおこなわれ、日本や周辺諸国に鉄素材が供給されていた。そして新羅の都慶州の隍城洞製鉄遺跡からは砂鉄に見間違うほどの細かく砕かれた鉄鉱石粉が見つかっている。
この細かい鉱石粉は製鉄炉で製造された鋳鉄塊を脱炭精錬するのに用いられていた。



慶州　隍城洞製鉄遺跡
鋳鉄塊の脱炭助剤として使われた鉄鉱石粉

博多遺跡
-高温操業の本格的鍛冶の時代を告げる博多遺跡　羽口

このことから、この頃の製鉄技術を持った技術集団が日本に渡ってきた時に日本で砂鉄に出会って、この脱炭精錬用に砂鉄が使われ始めたと考えられないだろうか
また、この但馬の砂鉄　本当は朝鮮半島の「鉄鉱石粉」でなかったか・・・・

精錬鍛冶と製錬をつなぐ渡来技術の鍵がこの 「砂鉄粉」
この技術習得で本格的な鍛冶生産が始まった

そんなイメージをこの砂鉄に今強く抱いている。

「砂鉄の出現によって、日本に砂鉄を製鉄原料とした製鉄が始まった」との考え方もあるが、その量・出土の状況からは製鉄が始まったとは考えにくい。

- ■　この頃　新羅隍城洞製鉄遺跡では鋳鉄の脱炭精錬の助剤として　大量の鉄鉱石粉がみつかつており、この使い方の流れが日本に伝来したのではないか・・
- ■　朝鮮半島で作られた鋳鉄塊・鋳鉄素材が日本に供給され、それを精錬して鍛冶加工する一連の鉄素材製造フロセスとその供給ルートが固まり、日本での大量の実用鉄器需要を支えたのでないか・・・・

この「砂鉄」が新しい製鉄技術の伝来
鞴・羽口による高温創業による本格的鍛冶の時代到来の象徴 国内での鉄生産探索の象徴ではないだろうか・・・・・

ひょっとすると　但馬　入佐山の副葬「砂鉄」は朝鮮半島の製鉄技術集団が日本に持ち込んだ本格鍛冶技術の中心にあったのかも知れない。

その後　日本で展開された「たたら製鉄の神業的な温度と雰囲気コントロール」そして「玉鋼と共に大量に発生する銑鉄塊とその処理法」を考えるとまさにこの一連の技術習得（鋳鉄製錬と製綱）が連結して習得されねば　たたら製鉄は誕生しえないことが見えてくる。

私見ではあるが、この理解と技術習得に 1000 年かかったと理解している。
まさに物づくりの粋であり、現在の近代製鉄においてもこの製錬・製綱の 2 段階プロセスの枠組みは今も変わっていない。
そう　考えるとその後の日本での製鉄開始の前夜　製鉄原料・製鉄現場や製鐵炉が発見されないにもかかわらず、数多く発見されるようになる鍛冶工房での大量鉄滓と見つからないと製鉄工房の謎とも合致する。
この砂鉄の助剤としての使い方から徐々に鉄塊が小さくなって「鉄の種」に添加される「砂鉄」が主原料に代わって行き、「たたら製鉄」の誕生になったのではないか・・
そんな風に今は考えている。　その一番の技術理解の時期がこの古墳時代の「砂鉄」にあるのではないか・・・・
みた目の技術習得ではどうにもならぬ製錬鍛冶技術の習得が数多くの渡来技術集団と一緒になって始まった。
その痕跡が　鉄の国但馬出石の入佐山に副葬された「砂鉄」
新羅の皇子だったという天日槍の製鉄伝承　新羅と関係深い金属技術集団秦氏の痕跡　そして伊福部の痕跡
そんな出石の鉄の痕跡が延々と朝鮮半島に延びる製鉄黎明の時代の和鉄の道を伝えている。
長年にわたり探し続けた製鉄技術の謎がこの砂鉄を契機に解明されていったと考えたい。
まさに　古代　朝鮮半島と倭を結ぶ「和鉄の道」でのエポック　メーキング的な出来事であったと考えたい。

自分なりに　そんな風に今は考えているが、異説を含め、検証すべき考え方を書きに記しておく。

1. たたら製鉄の前駆的な鉄塊の精錬鍛冶の脱炭剤として反応促進に使われた。
   この古墳時代の始まりと共に日本では本格的な実用鉄器にはいり、大量の鉄器か使われ始める。
   この鉄器製作のための精錬鉄素材は鋳鉄塊や板状・棒状鋳鉄素材として日本に持ち込まれた
2. 国内でプレたたら製鉄が始まり、大量に鍛冶工房に鋳鉄塊が持ち込まれ、その精錬反応助剤として砂鉄が用いられた
3. 本格鍛造鍛冶鍛冶素材の鍛造接合剤の可能性
4. 玉などの加工用研磨粉

日本で鉄が伝来してから製鉄が始まるのに約 1000 年かかったのはなぜか・・・・
鉄が開始される前夜　多くの古代鍛冶工房で製鉄の始まりを示す精錬滓や製錬滓が数多く見つかるのにいまだに製鉄炉や製鉄場がみつからないのはなぜか・・・・
砂鉄は何時から鉄と認識されたのか・・・・・・
そんな古代　鉄の謎にイメージをあたえてくれた　古代和鉄の国　但馬から出土した「砂鉄」

古代の鉄の謎が今回　出石に副葬された砂鉄を調べて行くうちに、なんとなくプレたたらの様子がおぼろげながら見えてきたように思う。
「鉄」と「鋼」は違う。　実用できるのは「ネバくて強い鋼」である。
「（銑）鉄をつくり、そこからさらに鋼を得る」この二つのプロセスを経なければ鋼は得られない。これは今も昔も変わらない。
唯一日本独自の「たたら製鉄」のみが「玉鋼」を一つの工程で「鋼」を得るきわめて難しい業である。
もっとも　たたら製鉄に於いても　大量の「銑鉄」を同時に発生し、この銑鉄を鋼にかえる精錬のプロセスが同時に行われている。 製鉄というと「鉄鉱石」を溶鉱炉に炭と共に入れて、高温でとかせば、簡単に「鋼」が得られると思いがちであるが、今も 2 つのプロセスを経なければ得られない。

古代の水銀や銅などの製造と一番違う点である。
この理解がないと「鋼」の実用鉄は得られない。日本での製鉄の前夜　本格鍛冶の時代といわれるのは　同時にこの技術理解の時代であった。
この製錬・精練に魔法薬のような働きをしたのが「砂鉄」だったのであろう。
脱炭助剤として　銑鉄の溶融脱炭を助ける役割から次第に製鉄原料へと長年にわたる鍛冶炉操業の中で代わって行ったのだろう。
細かい鉄鉱石粉または砂鉄が新しい鉄の技術をもった技術集団と共に日本海の海をわたって、そこから日本での製鉄の突破口が開けたと考える。
そんな大事な「砂鉄」だからこそ　鉄の技術集団の族長の墓に副葬されたのでないか・・・・・・・
この同じ時期　朝鮮半島には役割の明確な砂鉄と見間違うばかりの鉄鉱石粉があつた。
そして　但馬だけと思っていた砂鉄が壺に入れられ大事にされていた形で東国古代関東の製鉄地帯からも出土。

偶然ではない意図的な「砂鉄」
出石の砂鉄は朝鮮半島から海を渡ったものであろうか・・・・
朝鮮半島と日本を結ぶ古代の鉄の道を楽しくさせてくれた但馬　出石　入佐山古墳の「砂鉄」でした。

2006.5.20.　　入佐山の砂鉄のイメージを膨らませつつ
Mutsu　NakaNIshi

■　関連「和鉄の道　Iron Road」 by Mutsu Nakanishi

Country Walk Ⅳ　但馬　天日槍の国の歴史とコウノトリを訪ねて
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/walk/4walk08.pdf

From Kobe　古鉄再生『沸かし付け』の技術」TV 鉄腕 Dash 村で!!　精錬鍛冶を紹介
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/ mutsu/fkobe0604.pdf

和鉄の道Ⅰ　丹後の国　もう一つの邪馬台国　大陸と日本を結ぶ鉄の大加工基地　遠所製鉄遺跡
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/jstlaa11.pdf

和鉄の道Ⅰ　古代鉄の王国丹後　天女の通った道は和鉄の道　羽衣伝説
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/jastlaa10.pdf

和鉄の道Ⅱ　鬼の住む山　大江山
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/jstlbb06.pdf

和鉄の道Ⅳ　播磨風土記　和鉄の道【1】　古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/4iron01.pdf

和鉄の道Ⅳ　播磨風土記　和鉄の道【2】　「御方里」周辺
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/4iron10.pdf

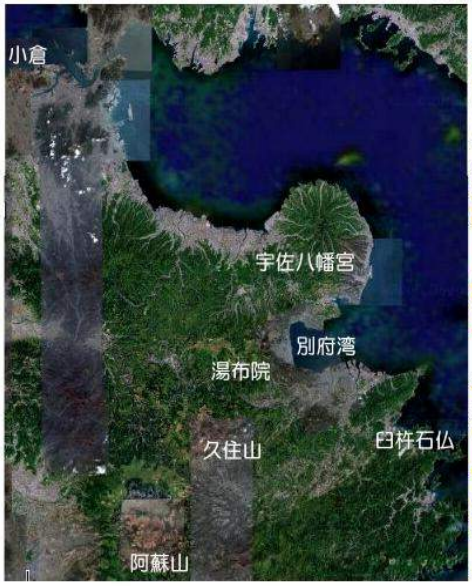
和鉄の道Ⅵ　石上神宮の国宝「七支刀」の復元展にあわせて物部氏の本拠地　布留を訪ねる
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/6iron05.pdf

■　参考資料

環日本海歴史シンポジュウム　渡来の神　天日槍
郷堀英司　大澤正巳「一本桜南遺跡出土の砂鉄について」　千葉県文化財センター　研究連絡誌 25 号
村上恭通「倭人と鉄の考古学」
佐々木稔編「鉄と銅の生産の歴史」
京都府弥栄町編「古代製鉄と日本海文化」
第 5 回歴博シンポ「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」

7.　　九州の旅　アルバム　九州古代の豊の国から阿蘇へ　　2006.　6.4.-6.5.

古代鉄のルーツにつながる鉄の国「豊（豊前・豊後）」臼杵石仏を作らせたのは炭焼き長者 ???



大分県「古代 豊（豊前・豊後）の国」ツアーマップ　2006.6.4.-5.　　宇佐八幡宮と臼杵石仏

朝焼けの由布岳　　久住山　　阿蘇山　火口東壁（仙酔峡）

梅雨時　雨が心配された 6 月 4 日と 5 日でしたが快晴。　大学時代の仲間約 20 名弱の九州での同窓会
九州の仲間が準備万端整えてくれ、小倉から臼杵・湯布院・阿蘇を訪ねる 1 泊 2 日のバスツアー
まさに学生気分に帰っての修学旅行である。
古き石仏を訪ね　湯布院の湯と宴会　そしてやまなみハイウエイを走って阿蘇の火口へのハイキング
仲間と 2 日眼いっぱい楽しんだ旅　そして　計画してくれた仲間に本当に感謝です

九州から帰って　訪れた所を見ながら整理を始めて　ふっと気がつきました。
みんなとしゃべったり　飲んだりする事に気がいっぱいで　全く頭にも浮かばなかったのですが、
訪れたところは古代の鉄の国　豊（豊前・豊後）の国。
しかも　訪れた宇佐神宮　臼杵大仏がそれぞれ古代日本への鉄の伝来とかかわりを持っている。
宇佐神宮はひょっとして・・・・とは思っていましたが、臼杵石仏が和鉄の道にかかわるなど全く思いも寄らぬこと・・・・・・・

鉄の伝来に大きな役割を果たしたに違いないと思いつつも　良く知らなかった豊の国
しかも　一緒に出かけた仲間が　大学で金属を学んだ仲間の同窓会ツアー
計画してくれた仲間はそれを知って繋いでくれたのでしょうか・・・・・
本当に帰ってきてから知ったビツクリです。

同窓会の楽しさとは別に、帰って調べた「和鉄の道　古代　豊の国」としての訪問記を付け加えて
九州の旅　－　九州　豊の国から阿蘇へ　－　　としました。

参考　◆　長嶺正秀著「筑紫政権から大和政権へ　豊前石塚山古墳」

◆　Country Walk Ⅳ

山岳宗教の歴史を秘めた霊峰　英彦山

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/walk/4walk01.pdf

◆　和鉄の道Ⅴ-3

鉄の 6 世紀　北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/5iron03.pdf

1.　九州の旅　アルバム　－　豊の国から阿蘇へ　－　2006.6.4.-6.5.

1.1.　豊前　宇佐神宮　-古代から謎の多い宇佐神宮-

八幡神社の総本宮　宇佐神宮　　2006.6.4.

小倉から高速道路新しく出来た北九州空港で東京からの仲間を加えて 1 時間ちょっとで八幡神社の総本宮宇佐神宮。　予備知識は和気清麻呂と弓削道鏡のご神託事件の由緒ある神社程度である。

中央構造線が九州に上がって福岡との県境を貫き、海岸まで山々が迫る大分県。小さな平野がぽつぽつと海岸にへばりついている。そんな山々にへばりついた小さな平野　宇佐の山裾の緑の中に広大な境内を持つ宇佐神宮がありました。

宇佐神宮の鳥居周辺

緑の山の中に真っ赤な鳥居　そして、山裾から山中に少し分け入ったところに華麗な本殿を有する上宮・下宮を持つ神社で、山裾の参道へ上がってゆく手前の広い境内にはかつて神宮寺の壮大な伽藍が立ち並んでいたという。

祭神は、一之御殿の八幡大神（御名：誉田別尊（応神天皇））、二之御殿の比売大神（御名：三女神（さんじょしん）＝多岐津姫命（たぎつひめのみこと）、多岐理姫命（多紀里比女命）（たぎりひめのみこと）、市杵嶋姫命（いきしまひめのみこと））、三之御殿の神功皇后（御名：息長帯姫命）の三神を祭る。

往時の宇佐神宮（神宮寺）伽藍配置図

また　御許山には、宇佐神宮の大元神社があるが、本殿はなく山そのものが御神体という自然信仰の残る山となっている。

当初は新羅から豊の国に渡来してきた精錬・鍛冶技術集団秦氏と強く結びついた神社であつたと考えられており、また、宗像大社の祭神でもある比売大神を祭ることなどから海人族との関係もある。

渡来神などとこの地の土着の信仰が深く結びつき、この宇佐神宮を信奉する技術集団の技術などを通じて、古代

大和王権と密接につながっていったと考えられている。
また、この過程で渡来仏教とも深く結びつき、日本で最初の神仏集合の大伽藍を持つ大神宮寺となった。
大和王権と結びつき、国家守護の神社となって、有名な弓削の道鏡事件や　奈良の大仏鋳造に関する神託など神託を通じて　古代大和王権の政治とも深く関ってゆく。朱塗りの壮麗な本殿と緑の森は京都の数々の神社で知ってはいるのですが、境内の大きさと山麓の自然と一体となった神宮には京都にない雰囲気と風格が備わっており、そのベースに上記したような大和王権との繋がりを強く感じました。

1.2.　豊後　臼杵石仏　2006.6.4.

臼杵大仏のある谷　全景　2006.6.4.

臼杵大仏　2006.6.4.

宇佐神宮から九州自動車道に乗って国東半島を横切ると左手に別府湾　右手に由布の峰々を見ながら南へ。
別府湾岸からそびえる大分市の高崎山をトンネルでくぐるとまもなく臼杵である。宇佐から約1時間　バスツアーなので、地図の感覚がまったくないまま宇佐から約維持間弱で臼杵石仏の入り口に到着。
緑につつまれた谷間の集落でちょうど巾着状にぐるりと丘陵地が取り囲み真ん中に草地が広がっていて、その丘陵地に沿って　穂ツホつと集落が見え、草地には花が咲き乱れ、素晴らしい田園風景。

臼杵大仏のある臼杵市深田の郷　2006.6.4.

この谷間の入り口の直ぐ右手の丘陵地が崖の枝谷になっていて崖に沿って少し登ったところから、くるりと谷を囲んで臼杵の石仏群が続いている。

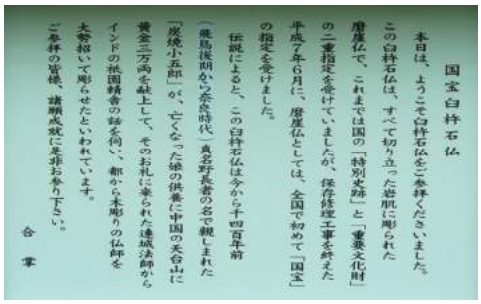
山中にぼろぼろになって風化して　取り残されているイメージが頭の中にあったのですが、周囲一面緑の谷筋石仏のある崖に鞘屋根が掛けられ、静かな雰囲気の中できっちりと守られているのにビツクリ。
本当に印象的でした。
また、首だけのあの有名な石仏があるはずと見るのですが、見当たらず。
よく聞くとこの石仏群が国宝に指定され、整備された時に　賛否両論ある中で　元の仏様の姿に戻したということでした。その仏様の堂々とした姿もありました。
日陰になるこの崖には緑のコケが張り付いて、それがさらに石仏に陰影をつけ、崖にさす光線によって　右から見るのと左から見るのとで表情を変える姿にしばし　見とれていました。
じっくり　石仏のある谷ほめぐって 1 時間　ふっとたたらの山郷の光景が頭をよぎったのですが、この郷がたたら製鉄と関係の深い炭焼き長者の郷とは帰って調べるまで露知らず。
一度行ってみたかった臼杵の石仏にじっくり出会ってきました。

谷の崖にある臼杵石仏を巡る遊歩道　建物は石仏の鞘屋根　　2006. 6. 4.

臼杵石仏　Ⅰ

臼杵石仏　Ⅱ

臼杵石仏　Ⅰ


国宝　臼杵石仏

本日は、ようこそ臼杵石仏をご参拝くださいました。
この臼杵石仏は、すべて切り立った岩肌に彫られた
磨崖仏で、これまでは国の「特別史跡」と「重要文化財」
の二重指定を受けていましたが、保存修理工事を終えた
平成7年6月に、磨崖仏としては、全国で初めて「国宝」
の指定を受けました。
伝説によると、この臼杵石仏は今から千四百年前
「飛鳥後期から奈良時代」「真名野長者の名で親しまれた
「炭焼小五郎」が、亡くなった娘の供養に中国の天台山に
黄金三万両を献上して、そのお礼に乗られた連城法師から
インドの祇園精舎の話を伺い、都から本彫りの仏師を
大勢招いて彫らせたといわれています。
ご参拝の皆様、諸願成就に是非お参り下さい。
合掌

参詣道より　石仏の郷深田　　国宝　臼杵石仏の案内板　　石仏群入り口より深田の郷

この石仏群の発願社として「炭焼き小五郎・真名野長者」の名前が見える

炭焼き長者伝説のあるところに「たたら」あり

1.3.　由布院からやまなみハイウェイを通って　阿蘇火口東側壁展望台　2006.6.5.

朝焼けの由布岳　　久住山　　阿蘇山　火口東壁（仙酔峡）

湯布院温泉に泊まって、夜の宴会そしてサッカー・学生時代の写真をビデオに仲間が作ってきてくれたのをさかなに昔を語って・・・・・・・・

早朝　朝霧の中　湯煙が昇る由布院の街の背後にそびえる由布岳から朝日が昇る。今日も晴れ。

ひょっとしたらミヤマキリシマがどこかで見られるかも・・・・の期待を持ちながらやまなみハイウエイを九重から阿蘇へ

　残念ながら、昨年来の異常気象の影響を受けて　ミヤマキリシマは九重ではまだ早く　阿蘇の仙酔峡ではすでに終りでした。でも思いもかけず、雄大な阿蘇五岳の展望　そして荒々しい阿蘇の火口壁と噴煙に昔修学旅行で来た時を思い出しながらの雄大な阿蘇火口壁（東側火口壁展望台）へのハイキング。

豪快に噴煙をあげる阿蘇はやっぱりいい。すごい　九州一の山・・・・・と。

由布の朝

久住山　長者原　　2006.6.5.

阿蘇山火口の衛星画像

西側壁展望所・草千里を望む

東側火口壁展望所より火口を望む

仙酔峡ロープウェイ駅から東側火口壁展望所への遊歩道

阿蘇山火口東壁から主峰中岳・高岳へと続く稜線と東側火口展望所　　2006.6.5.

本当に気心の知れた仲間でのバスツアーの楽しさ
修学旅行気分ではしゃぎました
阿蘇から九州自動車道を博多に戻って博多・小倉で次回を約して散会
一人気まま旅とはまた違った楽しみに酔った 2 日間でした
まあ　よう　こんだけ役者が揃っているわぁ・・・と
山口厚狭駅に帰り着くと九州　に沈む夕日がきれいでした

2006. 6.5. 夕　Mutsu Nakanishi

2.　古代　豊の国と和鉄の道
宇佐神宮・臼杵石仏は畿内大和と結びついた渡来の製鉄集団が残した足跡

古代　豊の国は瀬戸内海の西の端に面し、大和が九州の勢力を抑え　朝鮮半島と大和を結ぶ交流の拠点としたところであり、また、東西に四国北岸を貫いてきた中央構造線がこの豊の国を貫く、九州有数の花崗岩地帯で、豊富な鉱物資源があり、背後にはどっしりと英彦山が座っている。
博多を中心とした九州文化圏が大陸・朝鮮半島ととの交流により、新しい文化を育て、邪馬台国・大和に並ぶ勢力を持つ国を形成していったのとは少し違って、大陸・朝鮮半島を結ぶ大和の拠点として　畿内・瀬戸内勢力と深く結びつくことにより、文化を育んできたところである。
また、後背の山には豊富な鉱物資源が山中にあり、朝鮮半島から日本へ伝来してきた鉱山技術・鍛冶技術が一番先に経由する場所であり、多くの渡来人たちがこの地で渡来の新技術を育み、畿内へそして、日本各地へ伝播させていったという。
そんな渡来の技術集団が残していった足跡が宇佐神宮や臼杵の大仏として残ったと言われる。

2.1.　豊の国は大和が九州勢力を排して　大陸・朝鮮半島と交流する拠点

紀元前 1 世紀頃の北九州の「国々」
伊都国や奴国など玄界灘に面した国々が
大陸･朝鮮半島と活発な交流

西日本における 3 世紀出現期の主要前方後円墳分布
大和から瀬戸内・北九州に分布
なかでも豊の国に畿内の大王に匹敵する大 型前方後円墳が出現

弥生の終末　1 世紀後半以降　邪馬台国の時代　北九州では、朝鮮半島諸国との交流をする新しい国々が興ってきた。その交流の中心は「鉄」であり、魏志東夷伝　弁辰条には朝鮮半島南部の弁辰の地が「国出鉄、韓・濊・倭、

皆従取之」（西暦 286 年）と記されている。

また、邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送ったのもこの頃である。（西暦 239 年）古墳時代の始まる日本黎明の時代である。

当時日本では鉄が生産されず、全量大陸や半島に依存していた鉄文化の揺籃期でこの鉄を支配したものが勢力を伸ばしてゆく時代である。朝鮮半島に勢力を伸ばしていた「漢」が滅亡し、半島諸国の勢力バランスも崩れ、日本においても北九州勢力が衰え　邪馬台国・大和連合政権が大陸・朝鮮半島の覇権を握り台頭してくる。その大和勢力が朝鮮半島との交流の拠点としたのが、豊の国である。

大和から瀬戸内海を通り、下関海峡を抜けて、玄界灘を壱岐・対馬を経て朝鮮半島に至る道のりの中、北九州勢力の中に入らず、かつ北九州を押さえる要であったろう。

大和は勢力化に入った諸国にそのシンボルとして　巨大な墳墓　前方後円墳の建設と三角縁神獣鏡が与えられている。この墳墓の建設には土木技術　鉄器製造の鍛冶技術なしには到底達成できず、これらの技術や鉄素材が支配層に供給されるネットワークが大和連合勢力の源としてさらに勢力を伸ばしていったと考えられている。

そんな初期の前方後円墳の分布を前ページの図に示した。

鉄の交易路瀬戸内を完全支配し、新しい技術・文化の窓口　九州を押さえてゆく道筋がよく見て取れる。

中でも豊の国（豊前）にある石塚山古墳は 3 世紀末に築かれ、全長約 130 メートル　後円部約 80 メートルの北九州最大最古の前方後円墳でその規模は畿内大和王権の墳墓に次ぐか匹敵する大きさで、十数面の三角縁神獣鏡を含め数多くの威信財を副葬しており、この地の首長の勢力の大きさと大和政権との関係の深さが判る。

　また、宇佐神宮のある宇佐にも赤塚古墳などの前方後円墳群があり、この地の首長も大和との密接な関係にあったことがうかがえる。

時代はもう少し下るが、『隋書』倭人伝には渡来人秦氏についての記述がある。

608 年、遣隋使小野妹子が隋使・裴世清を伴い帰国した折に、裴世清は筑紫から瀬戸内海に入った時、中国人が多く住む「秦王国」の存在を知らされたという。

「秦王国」とは秦氏が住んだ豊前と言われている。。

　秦氏は、秦の始皇帝の血を汲む氏族で朝鮮経由で日本に渡来したと自称。この秦氏は金属精錬・鍛冶加工技術に優れ、養蚕や機織りなど半島の先端技術に長じており、開墾を進め、水田を広めるなど半島の新技術を日本に数多く広めた功績を持っている。

　このように朝鮮半島との交流の中には大陸・朝鮮半島の戦乱を逃れ、日本にやってきた渡来の技術集団が数多くあり、それらの人達が一緒になって、大和の国づくりを支えた。

特に渡来の金属加工技術集団がこの豊の国に居た事に注目する。

九州最大最古の豊前苅田町の石塚山古墳とその鉄製出土品

先に記したごとく、この豊の国の後背の山々は鉄・銅・金・水銀など数多くの鉱物資源を含む九州屈指の花崗岩地帯であり、また国東半島の海岸には砂鉄がある。渡来の技術集団がこの地にとどまった由縁であり、半島諸国との交流の中で、受け入れ窓口として　さらにその技術を磨いていったと考えられ、鉄鍛冶の技術についても、増大する鉄需要への対処　鉄の自立生産をももくろんだに違いない。

北九州の鉱物資源地帯を育んだ花崗岩帯と砂鉄の分布図

秦氏というと機織集団のイメージが強く、金属精錬・鍛冶加工の技術集団というと特異に見えるが、そのルーツは新羅にいた技術集団といわれ、宇佐八幡の神も彼らが信奉する新羅の天日槍が大和の神と融合したとする説もある。また、宇佐八幡宮の由緒にある宇佐の神が鍛冶の翁となって現れたとの伝承や　奈良の大仏建立の際に宇佐の祭祀を行う大神氏が奈良に入り，鋳造にともなう諸問題を神託によってたびたび解決したとの伝承もこの係累に属する。
さらに後で記すが　この豊後　国東半島の西の内陸側　三重には製鉄鍛冶伝承の典型といわれる「炭焼き小五郎」の原型である「真名野長者伝説」があり、この真名野長者が臼杵石仏を発願したと言われている。

このようにこの豊の国は出雲・吉備の製鉄地帯ほどの迫力はないが、古くからの産鉄・鉱物資源豊富な地であり、しかも朝鮮半島の新技術交流路の日本側窓口にあったことを考えると　常に新しい技術が一番に入る地であり、それらの技術をさらに取り込みつつ技術を高めてゆき、それが、大和王権を支える力になっていたに違いない。いまだに日本での鉄の自立生産が始まるルートが定かでないが、この豊の国の役割を見落としてはならないのではないかと思っている。

2.2.　宇佐神宮と朝鮮半島鍛冶集団との関係

宇佐神宮は全国に数多く存在する八幡神社の総本宮。
祭神は、一之御殿の八幡大神（御名：誉田別尊（応神天皇））、二之御殿の比売大神（御名：三女神（さんじょしん）＝多岐津姫命（たぎつひめのみこと）、多岐理姫命（多紀里比女命）（たぎりひめのみこと）、市杵嶋姫命（いきしまひめのみこと））、三之御殿の神功皇后（御名：息長帯姫命）の三神を祭る。また　御許山には、宇佐神宮の大元神社があるが、本殿はなく山そのものが御神体という自然信仰の残る山となっている。

宇佐神宮の由来

宇佐神宮の神格の起源については不明な点が多いが，本来は海神・鍛冶神・渡来系の秦氏の氏神など諸説があるが、この宇佐の地の土俗的な神だと考えられる。

● 宇佐八幡宮の所伝より

わが国に仏教伝来の頃（552 年）の欽明天皇の２９年に宇佐（現在の宇佐神宮境内）の菱形池のほとりの泉の湧く辺りに鍛冶をする翁や八つの頭を持つ龍が現れて、この姿を見た者は病気になったり死亡するなどの異変が起こった。

そこで、欽明天皇の 32 年（571 年）、大神比義という修行者がこの祟りを治めようと、３年の間五穀を断って祈り神業を行なっていたところ、菱形池のほとりに鍛冶の翁が小児の姿で現れて、「我は誉田天皇広幡八幡麻呂・名は護国霊験威力神道大自在菩薩なり」（「われは応神天皇（ホムタワケノミコト）である」）と告げ、黄金の鷹になって駅館川東岸の松の枝の上にとどまった。

この翁の神童の霊（つまり黄金の鷹）のとどまった処にその村の長が、和銅元年(708)に鷹居社を造立し八幡神として祀ったのが八幡信仰の始まりといわれている。

そして霊亀２年(716)には小山田社に遷座、さらに神亀２年(725)に小倉山の丘陵（現在の亀山）に遷座し、壮大な社殿の造営が行われた。

その後、天平 10 年(738)、これまで境外にあった２つの神宮寺を小倉山境内移建し、宮と寺を一体化させた堂々とした伽藍を持つ「八幡宮寺」なる特異な様式を生み出した。

この小倉山は大分県は宇佐平野の中心部、御許山（おもとやま）の北北西の麓にあり、この一帯には、多くの古墳群が存し、古くから開けていた土地であることを示している。

このような由緒から、宇佐八幡宮は、古くから伊勢神宮に次ぐ「第２の宗廟」といわれ、全国に１７社ある勅祭（天皇のお使いをお迎えする）の大社とされた。

745 年に奈良東大寺で大仏の鋳造が始まったが，宇佐神宮の祭祀を司る大神氏が奈良に入り，鋳造にともなう諸問題を神託によってたびたび解決したという。

宇佐神の祭祀集団が最先端の金属加工技術を持っていたことをうかがわせる話である。これをきっかけに宇佐神が国家の重大事に関与することになり、弓削道鏡を退ける託宣を下したことなどがよく知られている。

この宇佐神は新羅から渡来した金属精錬・カ時加工技術集団（一説には秦氏）が信奉する天日槍との関連が強く、鍛冶の翁出現の由緒も製鉄神の伝承によく似ており、奈良の大仏鋳造の話など鍛冶技術集団との結びつきが強いことをうかがわせ、この祭祀を勤めてきた大神氏も新羅からの渡来の秦氏系の氏族といわれる。

また、この地が大和と密接につながっていた事がこの宇佐神宮の由緒にもよく現れている。

『隋書』倭人伝には秦氏について次のようなことが記されている。

608 年、小野妹子が隋使・裴世清を伴い帰国した折に裴世清は、筑紫から瀬戸内海に入ったとき、渡来帰化人の秦氏が住んだ豊前の地　中国人が多く住む「秦王国」の存在（渡来帰化人の秦氏が住んだ豊前の地と推測される）を知らされたという。

秦氏は、秦の始皇帝の血を汲む氏族で朝鮮経由で日本に渡来したと自称した。

この秦氏は金属精錬・鍛冶加工技術に優れ、養蚕や機織りなど半島の先端技術に長けており、開墾を進め、水田を広めるなど半島の新技術を日本に数多く広めた功績を持つ。（近江・山城・河内・摂津そして関東??）

また、仏教や道教の普及者でもある。

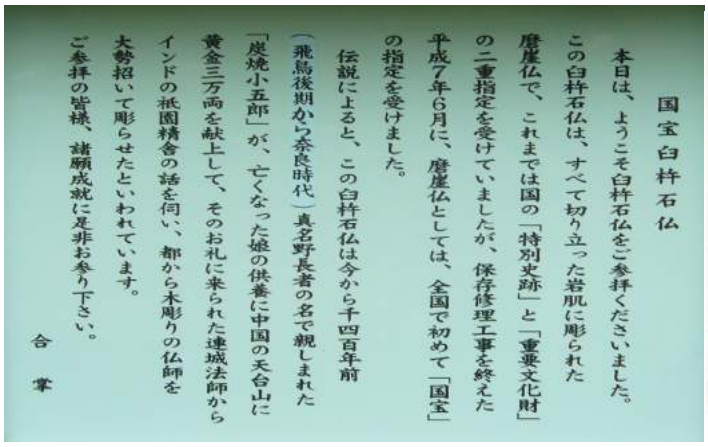
宇佐神宮（宇佐八幡宮）の最大の宗教行事は、６年に１度　神職たちが薦神社の池にやってきて真薦を刈ることである。　この薦でつくられた枕が宇佐神宮のご神体（御験とも神座ともいう）とされ、八つの神社を巡幸するという。この行事にも新羅から渡来した金属精錬・鍛冶技術集団の持つ開墾・農業土木の姿が見える。灌漑設備の中心をなす池は神であり、この池にイネ科のまこも　真菰・真薦　が自生し、暮らしの必需品としてこれを刈りとって編み、むしろなどにしたのだろうと司馬遼太郎も「街道をゆく一中津・宇佐のみち」の中で記している。

これらの話が示すとおり、この豊の国に居た渡来の金属精錬・鍛冶技術を持つ技術集団が大和王権の覇権に重要な役割を演じた。その中心は半島の鉄の支配と鍛冶技術の展開であったろう。まさに鉄の道が日本を動かした時

代であり、その日本側の窓口が豊の国であったと考えられる。
歴史の表舞台には現れてこないが、豊の国には数多くの渡来人などが上陸した国際都市で、その中心に宇佐神宮があったのかも知れない。

2.3.　臼杵石仏と真名野長者　－　製鉄伝承「炭焼き長者」－

炭焼き長者伝説由来の臼杵石仏の郷　豊後　臼杵深田の郷と石仏群のある谷全景



臼杵石仏の発願者は誰か・・・・・
臼杵へ行って、この発願者は真名野長者（炭焼き小五郎）であることを知りました。
「炭焼き長者」は日本各地に残る製鉄伝承。この伝承地は常に製鉄・鍛冶の痕跡が見える。
国東半島が砂鉄の浜であることは知っていましたが、その根元にある臼杵その有名な石仏の発願者が炭焼き長者。
本当にびっくり出した。

◆「真名野長者伝説」

全国的に分布している 炭焼長者譚 のもとになったともいわれる伝説。

大和朝廷の時代、都に、顔に醜い痣のある姫がいたが、仏のお告げに従って豊後国深田に住む炭焼き小五郎の許へ行き夫婦になる。
2 人は数々の奇跡により富を得て長者となり、1 人の娘が生まれた。
般若姫と名付けられた娘は都にまで伝わるほどの美女に成長し、1 人の男と結婚するが、実はその男は都より忍びで来ていた皇子（後の用明天皇）であった。
皇子は天皇の崩御により都へと帰ることになったが、姫は既に身重であった為、「男の子が産まれたなら、跡継ぎとして都まで一緒に、女の子であったなら長者夫婦の跡継ぎとして残し、姫 1 人で来なさい」と告げて帰京してしまう。 産まれた子供は女の子であった為、姫は 1 人で船に乗り都を目指すが、途中嵐に会い周防国大畠に漂着する。村人による介抱も虚しく数日後に姫は逝去してしまう。
姫の死を悲しんだ長者は中国の寺に黄金を送ると共に、深田の岩崖に仏像を彫らせた。
その仏像が現在も残る国宝臼杵石仏である。

平安時代後期から鎌倉時代にかけて造立されたといわれる 臼杵石仏。
　これだけの石仏を造立した財源は何かということになる。
その発願者が真名野長者(炭焼小五郎)ということになれば、臼杵深田近辺には採鉱 冶金を業とする集団の存在がうかがえる。
この豊後の後背の山塊を挟んで西側の位置にある熊本県菊池川流域の疋田にも炭焼き長者「疋田長者」の伝承が残っており、この流域もまた渡来の精錬・鍛冶集団がいた土地でもある。

炭焼き長者伝説由来の臼杵石仏の郷　豊後深田

真名野長者は伝説上の人物であるが、平安時代末にこの地で権力を握っていたのは臼杵氏で、その経済力は銅・鉄などの採鉱 冶金によるといわれる。　石仏の発願者が臼杵市である可能性は十分考えられ、それが、逆に真名野長者伝説を生んだのかも知れない。

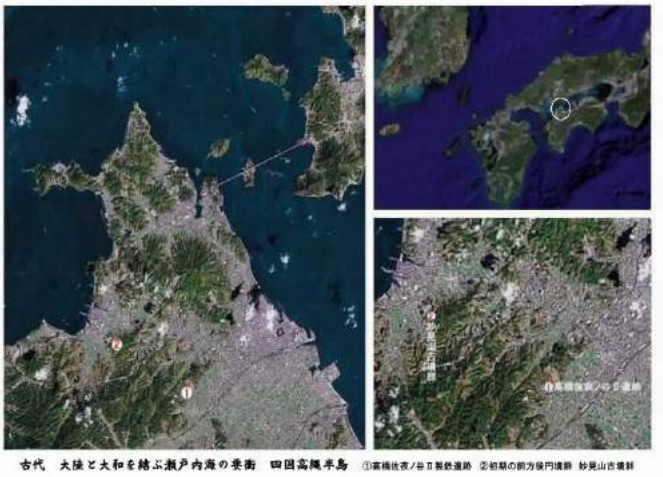
本当に静かな山郷の緑に埋まる崖に彫られた磨崖仏　見る角度によって表情が変わり、また　見る人によってその表情を変えるのだろう。本当に静かな山郷の仏　激しい労働に明け暮れたたたら衆もこの石仏たちに心のよりどころを求めたのかもしれない。
本当に一度訪れたかった臼杵大仏の郷
それが　思いもかけず、たたらの里と石仏の里が重なって一層印象深いものとなりました。

国宝　豊後臼杵の石仏群　　2006.6.4.

2.4.　補足　大陸と大和を結ぶ古代の要衝　四国高縄半島で古代の製鉄遺跡が発掘された

豊の国を九州の前線拠点として大陸・朝鮮半島とを結ぶ大和の鉄の重要な交易路が瀬戸内海ならば、古い製鉄遺跡がこの交易路の途中にもあっていいはず。
でも、四国には　いまだ　古い製鉄遺跡はみつかつていないし、三原・吉備まで見当たらない。
豊の国にも古い製鉄遺跡はないのか・・・・・・。
そんな事を考えていた　6 月 25 日届いた「発掘された日本列島 2006　新発見考古速報」によると昨年四国で初めて製鉄遺跡が発見されたと・・・・。
それも瀬戸内海の北岸の古代瀬戸内海交通の要衝　高縄半島に古い妙見一号古墳などの前方後円墳群がある愛媛県大西・今治周辺の地で、
詳細は不明ですが、弥生後期から古墳時代に掛けての複合遺跡である。
6 世紀末から 7 世紀に遡れる古代の製鉄遺跡が発見された（今治高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡）

そして、同じ丘陵地からは 詳細は不明ですが、鍛冶炉を持つ住居跡がいくか出土し、この丘陵地で古代製鉄・鍛冶加工の鉄作りがされていた。
また　豊の国では６世紀末の製鉄遺跡で箱型砂鉄原料の松丸Ｆ遺跡が資料に載っているが、詳細はわからない。
まさに大陸・朝鮮半島から大和への鉄の道　瀬戸内海ルートの完成である。



古代遺跡が枝谷に並ぶ今治日高丘陵と道路整備の下に埋まる高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡　　2006.7.3.
四国で初めて古代の製鉄炉が発見　週への古代遺跡から鍛冶炉も・・・

初期の前方後円墳　今治市大西町　妙見山１号墳とそこから見る瀬戸内海　　2006.7.3.
高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡とは狭い高縄半島　高縄山塊の西山麓と東山麓の関係にある

博多から筑後川流域にかけての北部九州筑紫とはちょっとちがった展開を見せた古代　豊の国
豊の国は九州から畿内・大和への玄関口であり、古代からの謎の宇佐神宮もある。
初期大和王権は北九州筑紫を牽制して　大陸・半島への窓口を豊の国に置いたという。
また、豊の国の後背の英彦山は修験道の山であり、筑紫の国との境をなすこの山塊には豊富な鉱物資源があり、

この資源を背景に日本誕生に大きな影響を与えたに違いない。

同窓会のツアーでかけた豊の国について　調べてゆくうちに　古代大和王権の鉄支配の根源がこの豊の国の経営にあったように思えてきました。多くの渡来人や技術が「豊の国」を経由して畿内・日本各地に伝播したのではないか・・・日本での製鉄の開始につながる製鉄の新技術・日本各地で起こる大和鍛冶と韓鍛冶の技術の転換さらには韓鍛冶間の新技術の取り込み等々 。
いまだによく判らぬ古代の製鉄技術の謎　　そんなものも　この豊の国を通過していったのか・・・・

臼杵石仏を作らせた炭焼長者の伝説は山塊の西側菊池川流域の渡来鍛冶技術集団との関係を想起させ、宇佐神宮は古代渡来の鉄鍛冶技術や鉄素材を支配した大和・三輪王権・鍛冶集団との関係を色濃く伝えてくれる。金属精錬・鍛冶技術にたけた渡来の秦氏の影が見え隠れする。
こじつけかもしれないが、製鉄技術伝来の空白の瀬戸内四国で古代製鉄遺跡が見つかったこととあわせ、いまだによく判らぬ製鉄技術の伝来とその開始　日本各地で伝承として残る鍛冶技術の革新と倭鍛冶から韓鍛冶技術への転換等々瀬戸内海ルートの鉄の謎を豊の国が謎を解き明かしてくれるのかもしれない。
また、もうひとつ　空白の島根・石見　そして越の鉄そして　東国の鉄がベールを脱げば・・・・・・・
思いがけない九州旅行での「古代　鉄の道」の発見に今　興味津々である。

2006.7.1.　Mutsu Nakanishi

7.　九州の旅　アルバム　　九州　古代の豊の国から阿蘇へ　　2006.　6.4.-6.5.

古代鉄のルーツにつながる鉄の国「豊（豊前・豊後）」　　臼杵石仏を作らせたのは炭焼き長者 ???

【　完　】

1. 九州の旅　アルバム　　－　豊の国から阿蘇へ　－　2006.6.4.-6.5.
   - 1.1.　豊前　　宇佐神宮　　-古代から謎の多い宇佐神宮-
   - 1.2.　豊後　　臼杵石仏　　自然の中の磨崖仏に感動 .
   - 1.3.　由布院からやまなみハイウェイを通って　阿蘇火口東側壁展望台へ

2. 古代　豊の国と和鉄の道宇佐　　神宮・臼杵石仏は畿内大和と結びついた渡来の製鉄集団が残した足跡
   - 2.1.　豊の国は大和が九州勢力を排して　大陸・朝鮮半島と交流する拠点
   - 2.2.　宇佐神宮と朝鮮半島鍛冶集団との関係
   - 2.3.　臼杵石仏と真名野長者　－　製鉄伝承「炭焼き長者」-
   - 2.4.　大陸と大和を結ぶ古代　瀬戸内の要衝　四国高縄半島で古代の製鉄遺跡が発掘された

参考　◆　長嶺正秀著「筑紫政権から大和政権へ　豊前石塚山古墳」

◆　Country Walk Ⅳ
山岳宗教の歴史を秘めた霊峰　英彦山
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/walk/ 4walk01.pdf

◆　和鉄の道Ⅴ-3
鉄の６世紀　北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/ 5iron03.pdf

8.　奥石見　瑞穂町　古代６世紀の今佐屋山製鉄遺跡を訪ねて

「出羽鋼」の郷　奥石見　瑞穂町市木　Walk

2006.6.6.

６世紀　国内で鉄生産が始まる頃の製鉄が見つかった炉今佐屋山遺跡　浜田道　瑞穂 IC　2006.6.6.

島根県　奥石見　瑞穂町市木字生家「生家」と書いて「おぶか」と読む。

山深い谷間に「たたら」の山が点々と続く奥石見の製鉄地帯で、「お産」や「女性」を嫉妬し嫌う「たたら」の守り神「金屋子神」のため、里に降りて産屋を建てて赤子を産むそんな集落があり、「生家・うぶか」と呼ばれていた。そんな集落が中国山地の山奥　浜田自動車道　瑞穂 IC の直ぐ近くの谷筋にある。

江戸時代　日本刀の素材として全国的に珍重された奥石見「出羽鋼」の製鉄地帯である。

出かけて知ったのですが、この郷瑞穂町市木の周辺は古墳時代から近世まで、谷筋全体に１００箇所を越える多数のたたら跡が点在する大製鉄地帯でした。この瑞穂 IC の下には古代　日本で製鉄がはじまった６世紀の製鉄炉が見つかった今佐屋山製鉄遺跡。古代　大陸・朝鮮半島に一番近い製鉄炉である。

古代日本での鉄生産が始まるにあたって、大陸・朝鮮半島からどんな風にどんなルートで伝来してきたのか、またその技術についてもよく判っていない。

そんな意味で大陸に一番近い古代の製鉄遺跡今佐山製鉄遺跡には興味深々。

６月６日午後　晴れ　山口から神戸への帰路　６世紀　日本で鉄生産が始まった頃の今佐山製鉄遺跡とたたら製鉄遺跡が点在する瑞穂町市木地区生家集落を訪ねました。

瑞穂町市木周辺の製鉄遺跡群と市木周辺　中国山地の中広島と浜田を結ぶ交通の要衝　2009.6.6.

日本で最初に製鉄が行われたのは５世紀まで遡ると思われるが、６世紀後半から７世紀前半にかけて、中国山地や丹後・滋賀県で鉄生産に使われた「製鉄炉」が発見され、確実に製鉄が国内で始まった証拠となった。

広島県世羅カナクロ谷遺跡、戸の丸山遺跡　三次市白ケ迫遺跡、

島根県石見今佐屋山遺跡　奥出雲羽森遺跡

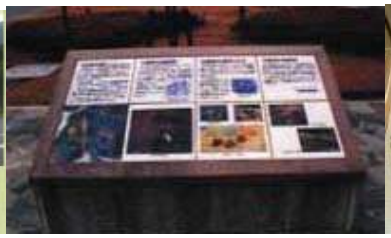
岡山県千引カナクロ谷・大蔵池南遺跡

京都府の遠所遺跡　滋賀県の古橋遺跡などである。

製鉄開始を告げる製鉄炉については、どちらかというと瀬戸内の製鉄遺跡が主に着目されてきましたが、日本海側で朝鮮半島・大陸に一番近い島根県にも６世紀の製鉄遺跡　今佐山製鉄遺跡が文献に見られ、製鉄技術の伝来・日本での鉄生産に大きな役割を果たしたに違いない。一体どんなところだろうか・・・・と興味深々。

また、この瑞穂町は芸北・石見の境をなす中国山地の一番奥深い奥石見の山里で、後世　日本刀の素材として「千草鋼」とともに最も珍重された「出羽鋼」を産する奥石見の製鉄地帯。江戸期には山を挟んで直ぐ南西の芸北のたたらと一体となって鉄の約 80%を産したという。また、後世隆盛を極めた「永代たたら・高殿」たたら形式を中世に確立したのもこの芸北・奥石見の中国山地からだという。

1.　今佐屋山製鉄遺跡　鉄の国内生産が始まる６世紀の製鉄遺跡



6.6.午後　山口を出発して約 1 時間広島　千代田 IC から日本海側の浜田道の方へトラバース。

今佐屋山製鉄遺跡は古代製鉄のルーツが探れる初期の製鉄炉が出た奥石見の遺跡。

とにかく瑞穂 IC までいったらわかるだろう。

場所的には昨年出かけた加計・芸北のたたら遺跡群とは中国山地主稜の南・北側の山間で広島からこの深い山間部を抜けて浜田までの石州街道が通じている。

予備知識はその程度しかなし。

現地へ行き、気がついたのですが、この地は同時に日本刀の素材として名高い「出羽鋼」の大製鉄地帯でした。

６世紀　鉄の国内生産が始まる頃の製鉄遺跡　今佐屋山製鉄遺跡

今佐屋山製鉄遺跡を示す説明板と鉄滓（今佐屋山遺跡出土、６世紀後半）

今佐屋山製鉄遺跡は日本でも最古の部類に属する６世紀末の製鉄遺構。浜田道瑞穂インターチェンジ内のバス停留所横にあり、緑地に整地され陶製の説明版がある。

1989 年浜田道瑞穂 IC の建設前の調査で土器や住居跡と共に製鉄炉跡が見つかった。丘陵地斜面部の苫地　長さ 6m 幅 2.5m の中央部に４５㌢四方の焼け土部が見つかり、正方形状の箱型炉が 1 基あったと見られている。隣接して竪穴式住居跡三棟が見つかった。

瑞穂 IC 建設に当たっては、日本で鉄が生産される頃の歴史的に貴重な製鉄遺跡として埋め戻し整備され保存されて平成元年の発掘調査で、約長さ 45cm 四方の小規模な製鉄炉が発見され、今から約 1400 年前（古墳時代後期）の製鉄炉であることが判明。島根県内でも最も古い製鉄炉である。

鉄生産が始まる頃の製鉄には原料として砂鉄と鉄鉱石の二つの原料がそれぞれ使われたが、今佐屋山製鉄遺跡では砂鉄原料と見られる。

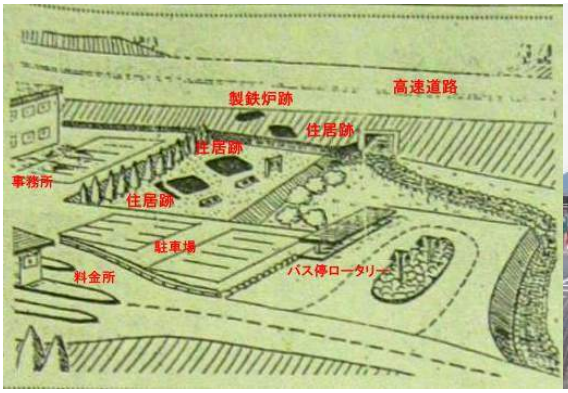
山陽道の広島から中国道へトラバースして、千代田 IC を浜田道に入ると極端に車が少なくなる。
中国山地の山また山の中へどんどん入って行く。
大佐 IC を過ぎて、猪子山トンネルを抜けると島根県の標識がでて、直ぐ瑞穂 IC の標識。

浜田自動車道　瑞穂 IC 周辺　　2006.6.6.

山また山で全く人家が見えない。
瑞穂 IC の標識でインターチェンジにでるが、やっぱり山の中で人家が全く見えない。ちょっと不安になりながら料金所を出て、事務所の横のところに車を止める。
　確か自動車道路の道路部分ののり面が今佐屋山製鉄遺跡と資料には書いてありましたが、通常のインターチェンジの風景で特に遺跡風のモニュメントもなし。多分このインターチェンジの場所そのものが製鉄遺跡。今佐山遺跡の位置を確かめるため、インターチェンジの事務所に飛び込む。

浜田道瑞穂 IC 全景　右手バス停前の高速道路に沿ったところが今佐屋山製鉄遺跡　2006.6.6.

事務所の人が出てきてくれて、直ぐ横のバス停のところが製鉄遺跡だと教えてくれる。
すぐ横の高速道路に沿う緑地が今佐屋山製鉄遺跡で、製鉄遺跡を示す案内表がその真ん中に建っていた。
教えてくれた事務所の方が、地元の人で、このインターチェンジ全体が遺跡で、市木の街がインターチェンジをさらに一段下に下りたところにあり、この地区全体どこにも製鉄遺跡があり、特に下の町から谷筋を入った「生家・おぶか」の集落がたたら衆と関係深い集落で、その地の郷土史家の K 氏を是非訪ねよとアドバイスしてもらう。
まずは今狭屋山の製鉄遺跡である。
案内板のところに立って　発掘時の写真と地形を交互に睨みながら製鉄遺跡の状況を探る。



発掘当時の新聞に掲載された遺跡概略と現在の IC　遺跡のある高速道路東側側面

今佐屋山製鉄遺跡の発掘当時の写真　　現地説明板より

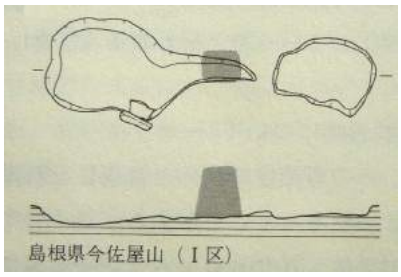
遺跡は　製鉄炉１基があるたたら跡とたたら跡に併設する形で３棟の竪穴式住居跡が現在の高速道路の東側側面傾斜部と側面に隣接した平地部から鉄滓や土器片と共に出土した。放射性炭素年代測定の結果からいずれも古墳時代後期６世紀後半のものと考えられている。

現在は製鉄炉は側面盛土傾斜地の下　住居跡は隣接する草地の植栽された場所に保存されているという。

また、隣接する場所から、平安時代の製鉄炉も出土している。

古墳時代　今佐屋山製鉄遺跡　鉄作りのムラ想定図　今佐屋山遺跡案内板より

たたら跡は長さ 6 ﾒｰﾄﾙ　幅 2.5 ﾒｰﾄﾙで、その中央部に初期製鉄炉をまさに思わせる小さな 45 ｾﾝﾁ四方の焼土部があり、ここに正方形状の小さな箱型炉があったと考えられている。炉の下の地面を深く掘りこんで作ったような防湿構造はまだなく、斜面に沿う東西方向の両側が排滓場になるように据え付けられ手いる。
製鉄炉の直ぐ下には　竪穴住居が 3 棟建っていて小さな村を形成していて、一つ一つの住居からはそれぞれカマドや土器が発見されている。

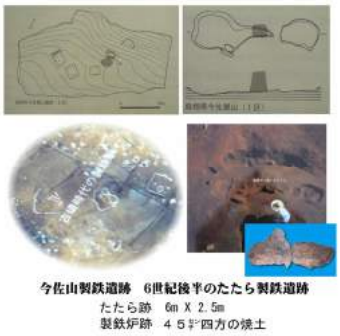


出土した製鉄炉の概要　　遺跡案内板 ＆ 村上恭通「倭人と鉄の考古学」より

今佐屋山製鉄遺跡　現状外観と出土した鉄滓　　植栽部が竪穴住居跡部

この市木地区は中国山地の奥の奥であるが、現在も高速道路　浜田道が瀬戸内側の広島から日本海側の浜田へ抜けている。古墳時代にすでにこのあたりに瀬戸内と日本海とを結ぶ道があったかどうかは判らないが、この地は古くからの本州横断の重要路　江戸時代には広島・浜田を結ぶ石州街道として賑わったという。
炭は無尽蔵に得られる中国山地の中である。また、後世この地が大たたら製鉄地帯となったごとく隣接する山・河には砂鉄・鉄鉱石があった。古墳時代にもそんな製鉄原料を求めてやつてきた製鉄集団がこの地でたたら製鉄を始めたと考えられる。
渡来系の集団だろうか・・・・・それとも延々と鉄鍛冶技術を磨いてきた倭の集団だろうか・・・・・
また、日本海側からやってきたのだろうか・・・・それとも瀬戸内側を系譜してやってきたのだろうか・・・・・
まだまだ謎は多い。
鉄の伝来後 500 年をはるかに越える長きに渡って国内での生産が出来なかった時代を経て、朝鮮半島・大陸からの新しい技術に従来技術と組合わせて国内生産が始まったと思われる。
大和王権が誕生して中央集権の日本統一を推し進めている時代　鉄はいくらあっても足りない時代である。
数多くの鉄技術集団が大陸・朝鮮半島から渡来し、既存の集団と一緒になって各地で鉄の国内生産を試みたに違いない。
この今佐屋山製鉄遺跡のある石見の直ぐ東には出雲・伯耆・丹後と続くたたら製鉄の先進地。南に中国山地を越えれば、芸北から吉備・播磨へと続くたたら製鉄の先進地がある。古代の鉄の大生産地帯である。
　この今佐屋山製鉄遺跡はそんな時代　鉄技術の先進地である大陸・朝鮮半島と王城の地大和とを結ぶ道の本州で最も西で出土した初期の製鉄炉。この石見での製鉄遺跡はまだまだ未調査のものが多いといわれており、今後新しい発見が次々にでてくると期待されている。
日本で製鉄が始まる初期の製鉄遺跡はどんな風であったのか・・・・・
また　王城の地大和へのつながりはどのようだったのか・・・・
国内での鉄生産が始まる古墳時代のいまだに解けぬ謎である。

数多くの伝承が残る石見国での製鉄炉　そしてたたら跡。今後　この地がひとつひとつ「たたら製鉄の謎」を解き明かす鍵になるかもしれない。


今佐山製鉄遺跡　6世紀後半のたたら製鉄遺跡
たたら跡　6m X 2.5m
製鉄炉跡　４５㎝四方の焼土

浜田自動車道　瑞穂IC　古代6世紀の製鉄遺跡　今佐屋山遺跡
2006.6.6.

島根県　奥石見　瑞穂町市木　浜田道 IC　今佐屋山製鉄遺跡

2.　「出羽鋼」の製鉄地帯　市木「生家・おぶか」にたたら伝承を訪ねる

瑞穂町市木　観音寺原から生家方面の谷を望む　　2006.6.6.

市木周辺の衛星写真　　市木周辺の製鉄関連遺跡分布

江戸時代加計隅屋が経営した市木水ケ迫たたら図　　加計隅屋が経営した芸北・石見の鉄山分布図

瑞穂インターチェンジから下へ下ったところが、市木の集落である。周囲を山で囲まれた狭い「ト」の字形の谷間に平地が広がる。この狭い市木の集落を南北に広島と浜田を結ぶ広島・浜田街道（石州街道）の宿場町である。芸北と石見の（広島県と島根県）の国境をなす中国山地　猪子山を越えて石見に入ったところが市木で、現在は浜田道がトンネルで猪子山を抜けて市木の集落に入り、浜田へ下ってゆく。　西へ曲がって狭いが緩やかな谷あいを抜けてゆくと瑞穂町の中心鱒淵・出羽である。その中ほどが「生家・おぶか」の集落でこの緩やかな谷間の中を生家川が流れ下る。この「ト」字の谷間全体に古墳時代から近世までのたたら跡が点々と広がっている。

加計隅屋経営の芸北の鉄山分布と島根県遺跡データーベースからプロットした瑞穂町市木周辺の製鉄遺跡分布を併せるとこの中国山地一体の製鉄遺跡分布の濃さがわかる。
「生家・おぶか」に残る「たたら衆がお産の時には生家の里まで山を降りて、ここに産屋を建ててお産した」との伝承もこれだけ多くのたたら跡分布を見ると本当だろう。
江戸時代この市木を含む芸北・石見の中国山地は全国の約 8 割の鉄を生産した大製鉄地帯の中心部で、芸北のたたら製鉄を束ねた加計隅屋はこの石見市木・猪子山でも鉄山を経営していた。また、市来から西へ広がる瑞穂町のたたら地帯の西端に「出羽」があり、この地が生産する「鋼」は日本刀素材の三大「鋼」(「千草鋼」・「出羽鋼」・「印賀鋼」) のひとつ「出羽鋼」の名の由来となっている。また　この「出羽」の地には古くから刀鍛冶集団がいて、「出羽鍛冶」の名とともに名声を博した。

市木「生家」の里に残るたたら伝承

「生家・うぶか」地名の由来

滝ケ谷川や生家川の上流の谷間周辺では「たたら製鉄」が盛んに行われ、
製鉄に従事する人々が多く生活していた。
「たたら」の神様「金屋子の神」は　子どもが生まれることが嫌いなので、
たたら衆のお産の時は谷を降りて、産屋をつくりお産をした。
それで、今では その集落を生家（おぶか）と呼んでいる。

中国山地の最深部市木は瀬戸内側の広島と日本海側石見・浜田に結ぶ石州街道の宿場町。
南の猪子山から北へ市木の集落を経て狭い谷あいを北に流れて江の川に合流する八戸川。
この八戸川に東の狭い谷間から流れ下る生家川が市木の集落観音原で合流する。
これらの川の流域にはかつて豊富な森林資源と砂鉄を利用して古代から近代まで数多くのたたら製鉄が営まれた日本有数の製鉄地帯でもあつた。
日本で製鉄の始まる６世紀後半の今佐屋山製鉄遺跡も八戸川の西岸の谷筋（現在は浜田自動車道瑞穂 IC）にある。また、江戸時代　日本刀の代表である「石州刀」を支えた「出羽鋼」の大生産地であり、広島藩加計の隅屋も市木の南　猪子山に大鉄山を営んでいる。
市木の町へ東から流れこむ生家川の谷間は田所地区小林と市木地区を結ぶ谷でその中流滝ケ谷川との合流点にある集落が「生家（うぶか)」。
「生家（うぶか)」の名の由来にはこの谷筋の山中に多数点在した「たたら」と絡む「生家（うぶか)」地名伝承が今も残り、この地帯が大たたら製鉄地帯であったことを示している

たたらの郷　市木　生家・うぶか　の里　2006.6.6.

今佐屋山製鉄遺跡から市木の里　大野ヶ原に下り、石州街道沿いに南北に広がる市街地にはいらず、そのままま生家川が流れ下ってくる西の谷筋に入って瑞穂インターで教えてもらった「生家・うぶか」集落の郷土史家　Ｋさ

んを訪ねる。
山裾まで田園が広がる谷筋の一本道に沿って、ぽつぽつと集落があり、その間を抜けてゆく。10 分ほど行って谷筋が狭まって、いよいよ道の両側の山がせまって　人家もなくなり山に入ってゆくと感じて、心配になって、車を止め、田園のむこうの山裾の農家を訪ね、表札に書かれた住所に「生家」。このあたりが生家・うぶかである。声を掛けたが留守。どうしようかと引き返しかけると手を振ってこっちへ来る人がいる。
この家のご主人でもうひとりのＫさん。郷土史家のＫさんの家を尋ねると東の道端に見える家がそうだという。
「たたら」を訪ねてこの谷に入ってきたというと、ひょっと西の道の先を指差して、「あの山の下がたたら跡。こっちもそうだ」という。「なんせ　ここは「いずぅ」鉄・石州刀の本場　刀も持っている」といわれる。
「自分も少しはこのあたりのたたらの資料持っているので、　コピーしておいてあげる」と。
はじめはピンと来なかったのですが、「いずぅ・出羽」。　「出羽鍛冶」の本場とはっと気がつきました。
「生家・うぶか」も最初聞いた時にはどんな漢字なのか判りませんでした。また　漢字から読みを覚えるのに時間がかかった。

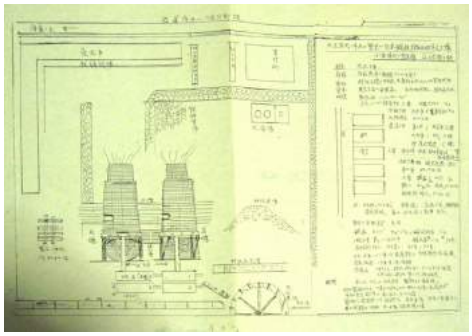
生家・うぶか　の里　　2006.6.6.

生家・うぶかの里　たたら跡がつづくという山にかかる周辺　　2006.6.6.

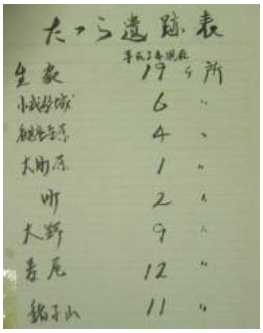
Ｋさんを訪ねて　入り口を入ると回りの壁いっぱいに集めた資料や写真が貼ってある。もうこの地の誰もが知っている古老。「今佐屋山たたらを見に来て、瑞穂 IC で教えてもらったこと。そして　この地のたたらの分布や　この生家のたたら伝承等々教えてほしい」と目的をつげると、奥から新聞の切抜きや資料を一杯だかえて持ってきて、自分で歩いて集めた市木地区のたたら跡を集計した表や資料をみせていただいたり、資料の写真をとらせてもらったりで、結局１時間ほど色々教えてもらった。
もう一つ　芸北の加計隅屋の鉄山も「石見」から製鉄原料の砂鉄を運んだというが、どのあたりか教えてほしいと聞くと「このあたりの山のあちこちから砂鉄が取れるし、市木から石見町へ抜ける道の原山トンネルを抜けたところから眼下に見える谷筋はどこも砂鉄の宝庫。帰りによるといい」と聞き、この地ではたたら場と炭と砂鉄が全部揃うことに納得しました。
　また、市木のインターチェンジを下りたところ観音原に大正年代砂鉄を原料とした溶鉱炉を持つ製鉄所があり、その溶鉱炉と工場の配置を書いた図面を見せてもらった。

たしか　東北八戸・久慈に行った時にも砂鉄精錬が昭和の時代まで続いたことを聞きましたが、砂鉄を使った製鉄の流れが、つい最近まで、しかも　こんな山奥で続いていたことにも驚きでした。

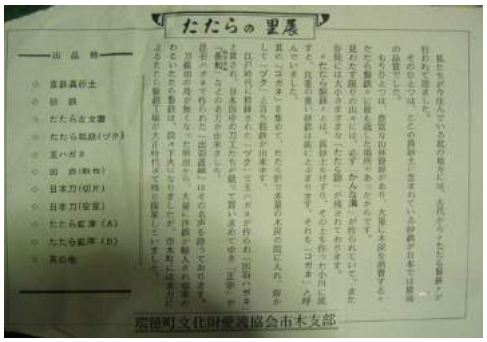
今佐屋山遺跡を伝える新聞（整理）



大正期市木にあつた砂鉄原料の製鉄所

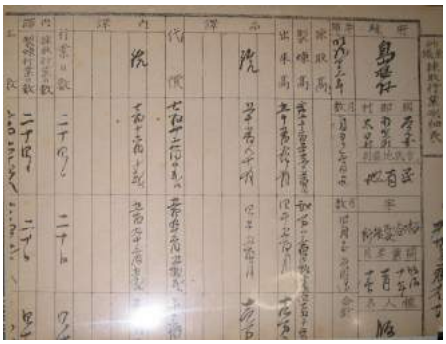


市木周辺のたたら遺跡



市木たたらの里展　開催案内

砂鉄採取相続の願い



たたらの月間出来高報告書

生家・うぶか　の古老を訪ねて見せてもらった資料（抜粋）　2006.6.6.

Ｋさん宅を出たときには　もう日も傾きかけ。
もと来た道を戻ると道端に先ほどお会いした Ｋ さんが　瑞穂町史のたたらの項をコピーして待ってくれていた。
どうも１時間も待っていただいたようです、本当に感謝です。
たたら衆というとどうも「鬼」伝説にあるように、里の人達とのトラブルがすぐイメージされるのに、この市木・生家・うぶか　では　お産のために山を下りてきたたたら衆を受け入れてお産をさせてあげた。
そんなやさしさが今もある。
行く先々で　いきあたりばったりの風来坊に、親切に声をかけていただき、また色々教えていただいたことと生家・うぶかの伝承をダブらせながら谷を下ってきました。
そして　教えてもらった原山のトンネルの出口までいって、瑞穂ＩＣまで戻ったときにはもう夕暮れ。

市木から北へ原山トンネルをぬけると砂鉄の宝庫　山々に囲まれた石見町が広がる　2006. 6. 6.

3.　古代石見国のたたら製鉄地帯　芸北と石見国境の市木　を歩いて

中国山地の山また山の一番奥　　広島県と島根県の県境（芸北と石見の国境）地帯に広がる大製鉄地帯。
古代の今佐屋山製鉄遺跡をちょつと訪ねてかえるつもりが、そこは「出羽鋼」の大製鉄地帯。
まったく出かけるまでは両者が結びついていませんでした。
おかげで　いろんなことが、頭を駆け巡って　楽しい和鉄の道でした。

また、今回であった「いずぅ・出羽」
このルーツをたどれば　おそらく東北奥州「月山」の「出羽鍛冶」ではないか・・・・・・と。
古代　東北の数多くの製鉄集団・鍛冶集団が俘囚として日本各地にきて、製鉄・鍛冶の技術を広めたという。
そんな一団が後世この石見で「出羽鋼」「出羽鍛冶」の技を広めたのではないか・・・・・

日本で鉄の国内生産が始まるまで、500 年を超える年月を要した謎　いまだ解けぬ謎
日本で製鉄が始まる初期の製鉄遺跡はどんな風であったのか・・・・・
また　王城の地大和へのつながりはどのようだったのか・・・・
石見には大陸・朝鮮半島と王城の地大和を結ぶ「和鉄の道」が通り、数多くの伝承が残る石見国での製鉄炉　そしてたたら跡。今後　この地が「たたら製鉄の謎」ひとつひとつを解き明かす鍵になるかもしれない。
今佐家山製鉄遺跡・生家のたたら伝承そして出羽鋼と今日一日の walk をダブらせながら　お会いした市木の人達に感謝しつつ猪子山のトンネルを抜けて石見の国を後にしました。

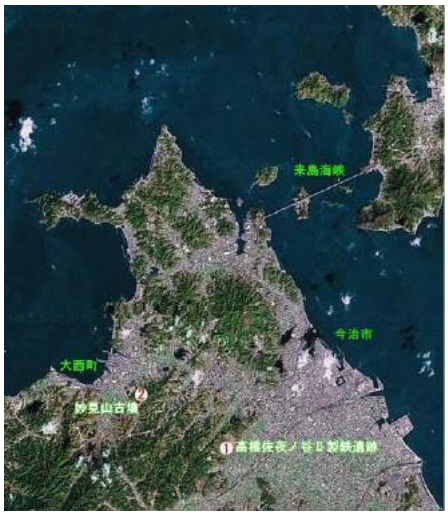
206.6.6 夕　　浜田自動車道　猪子山トンネルを抜けつつ
Mutsu Nakanishi

参考文献
- 村上恭通　「倭人と鉄の考古学」
- 島根県遺跡データーベース
  http://iseki.shimane-u.ac.jp/search_menu_siteclass.php
- 瑞穂町史
- 生家の郷土史家　河原氏所蔵資料
- 和鉄の道　V　　10.　「加計隅 屋鉄山絵巻」と加計・豊平町周辺の製鉄遺跡を訪ねて
  ---江戸時代　広島藩を支えた鉄の道「芸北 加計のたたら」---
  http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/5iron10.pdf

四国で初めて　古代の製鉄炉が見つかった

9.　今治市　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡をたずねて　2006.7.3.

6 月 25 日届いた「発掘された日本列島 2006　新発見考古速報」によると昨年四国で初めて製鉄遺跡が発見されたと・・・・。それも　しまなみ海道が来島海峡をわたる交通の要衝　今治市のある高縄半島の丘陵地で。
「空白の古代四国で製鉄炉がみつかった」数行かかれているだけであるが、もうびっくり。
この高縄半島には妙見一号古墳などの古墳時代初期の前方後円墳群などいくつかの古墳群があり、古代　大陸・朝鮮半島から大和へと続く海の交易路「瀬戸内海」をにらむ要衝の地。古代の最重要交易品「鉄」もこの海道を通って　大和にもたらされた。



日本で製鉄が始まる 5 世紀後半から 6 世紀まで、朝鮮半島から鉄素材の供給がこの海道を通って続く。
新しい製鉄技術もこの海道に沿って痕跡があるはずだと思いながら、四国で製鉄遺跡が見つからないのが不思議であった。
早速今治市に遺跡について、照会すると 7 世紀後半から 8 世紀に遡れる古代の製鉄遺跡が発見され、そして、同じ丘陵地からは詳細は不明であるが、鍛冶炉を持つ住居跡がいくか出土し、この丘陵地で古代製鉄・鍛冶加工の鉄作りがされていたという。
「空白の四国で古代の製鉄炉がみつかった」
8 月末まで、今治市役所のロビーでこの今治高橋佐夜ノ谷　Ⅱ遺跡を含め、今治市の平成 17 年度発掘調査速報展をやっていると聞いて、7 月 3 日早速　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡を見学に四国今治に行ってきました。
この製鉄遺跡の発見された高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡のある日高丘陵と古墳時代初期の前方後円墳群妙見一号古墳などがある大西町の丘陵地は高縄半島の中央を南北に伸びる山並を挟んで東西の山すその丘陵地にあり、この瀬戸内海の要衝を治める大和とつながる勢力があり、製鉄遺跡も時代は下るがこの大和の勢力につながるものであったろう。

古代遺跡が枝谷に並ぶ今治日高丘陵と道路整備の下に埋まる高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡　2006. 7. 3.

四国で初めて古代の製鉄炉が発見　周辺の古代遺跡から鍛冶炉も・・・

初期の前方後円墳　今治市大西町　妙見山 1 号墳とそこから見る瀬戸内海　2006. 7. 3.

高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡とは狭い高縄半島　高縄山塊の西山麓と東山麓の関係にある

小倉から大分にかけての九州北東部古代「豊の国」は博多から筑後川流域にかけての北部九州「筑紫」とは文化圏を異にし、畿内・大和の玄関口で、初期大和王権は北九州筑紫を牽制して　大陸・半島への窓口を豊の国に置いたという。 多くの渡来人や技術が豊の国を経由して畿内・日本各地に伝播していったという。

古墳時代初期の前方後円墳分布と鉄の通商路

空白の瀬戸内四国で古代製鉄遺跡の発見は　いまだによく判らぬ製鉄技術の伝来とその開始や日本各地に残る倭鍛冶から韓鍛冶の技術転換等々の伝承に新たな光を当てるかも知れぬ。

また、もうひとつの鉄の伝承路　日本海沿岸の海道　空白の島根・石見　そして越の鉄そして　東国の鉄がベールを脱げば・・・・・・・

古代の鉄のロマン　日本の古代大和王権確立の謎が次々と広がってゆく「四国での製鉄炉の発見」である。

1.　今治　高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡を訪ねて　walk　　2006.7.3.

1.1.　今治　高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡発掘速報展示

7 月 3 日早朝神戸を出て瀬戸大橋経由で今治へ。10 時前に今治駅に着く。梅雨の中　今にも雨が降り出しそうな天気はあまりよくない。

今日の予定は高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡発掘の展示をしている市役所のロビーに行って、遺跡の位置や情報をもらって、それから遺跡を訪ねる。どんな場所に遺跡があるのか　製鉄炉はどんなものなのか　皆目予備知識なしである。

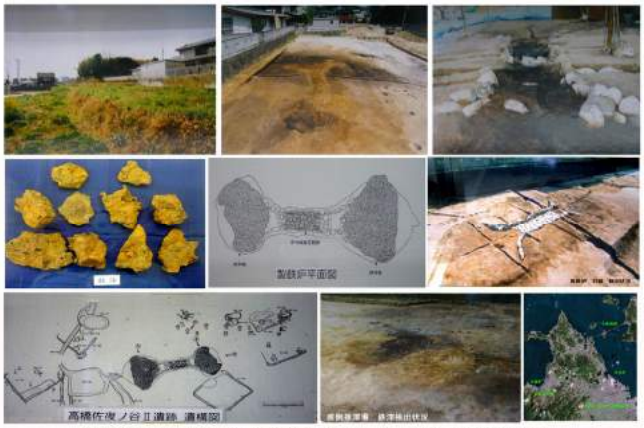
できれば、その後　製鉄遺跡を訪れた後、瀬戸内海を見下ろす山の上にあって、大和と連携して海道を監視した山を挟んで西側大西町の妙見山前方後円墳をも訪ねたい。

以前に何度も訪れた今治駅周辺であるがしまなみ海道が開通してすっかり様変わり。駅前からまっすぐ今治の港へ大通りが開通。その途中　駅から 500M ほどのところに大きな市役所があり、ロビーにある陳列ケースの中に高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡発掘時の写真パネルと出土した鉄滓などが遺跡の概要とともに展示されていました。出土した製鉄炉の写真もありまた。

今治市駅周辺とその南西の丘陵地の山すそにある高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡の位置

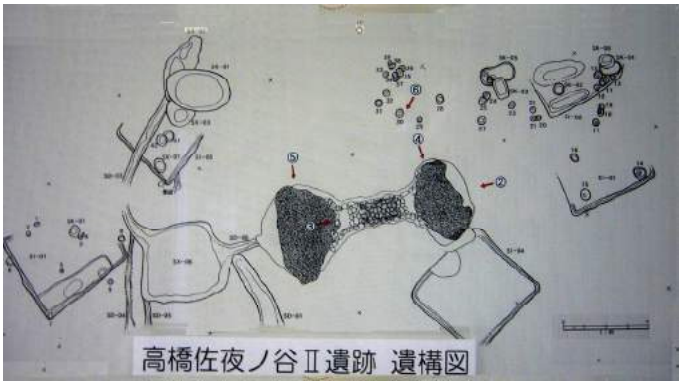
今治市平成 17 年度発掘調査速報展示で

展示された高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡
今治市役所ロビーにて


四国で初めて出土した古墳時代の製鉄炉　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡

【高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の概要パネルまとめ】

今治市の南西側に広がる日高丘陵地の山裾高橋地区は新市街地開発が進んでいる。
高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡はその日高丘陵の中央部佐夜ノ谷を丘陵地に上って行く今治丹原線の整備に伴う住宅地や道路の整備の試掘調査過程で標高約 26M の南側斜面部の端で発見され、当初は弥生・古墳時代の複合集落遺跡と思われていたが、平成 17 年 4 月～7 月の発掘調査でさらに四国では初の古代の製鉄炉 1 基が発掘された



発掘された製鉄炉の石組みと高橋佐夜ノ谷遺跡遺構図

発掘された製鉄炉の規模は長さ約 3.3M 幅 0.7M の長方形状で長辺の両サイドには川原石がならべられ、その上に粘土で炉が築かれていたと見られる。また、炉底に当たる石組みの内側は溝状に掘り込まれ、防湿のため石敷きと炭で固められた上に炭層があり炉底になっている。この炉構造などから　7 世紀後半から 8 世紀はじめの炉と考えられている。
また、この地からは古代の製鉄炉遺構のほか古墳時代の方形竪穴式住居５棟　弥生後期・終末期の土坑などが見つかっている

高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡の概要は展示でほぼわかりましたが、実際の遺跡位置や製鉄炉の年代など詳細はわからず。発掘調査時の現地説明会の資料や遺跡への行き方など教えてもらうため、すぐ近くにある教育委員会の埋蔵文化財センターに行く。
　資料はまだ現地説明会の資料しかなく、遺跡の詳細検討はこれからで詳細はよくわからない。
「高橋佐夜ノ谷の製鉄遺跡の場所はもう家が建っていて　何もなく　その周辺は道路工事でぐちゃぐちゃ。行ってもよくわからない」と多少困惑気味。
「山の中　谷あいでなく、住宅地　　駅からバスで高橋まで１５分程度」と聞いて一安心。遺跡の場所を示した市街地地図をコピーして行き方を聞いて駅前まで戻る。
雨も降り出しそうだし、駅前でタクシーに地図を見せ高橋まで行ってもらう。

1.2.　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡を訪ねて

高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の位置　　現地説明会資料より

今治駅より南の内陸側へ市街地を抜けるとほどなく前方に丘陵地が見え、新しい住宅地が広がる中を丘陵地の山裾へ。この丘陵の山裾に入ってゆくと道が細くなって、古い高橋の集落と田園が交差する。
地図とにらめっこしながら　行ったり来たりした後　丘陵地に上ってゆく付け替え道路工事の場所で下ろされる。この工事道路に沿うところが地図の場所だという。
あいにく　ぽつぽつではあるが、雨が落ちてきた。

今治市高橋　付け替え道路工事が進む佐夜ノ谷の入り口　　谷が奥に伸びている　2006.7.3.

遺跡の位置に〇を入れてもらった地図とデジカメに入っている発掘当時の遺跡周辺の写真と周囲の景色を見比べるのですが、どうもはっきりしない。道路工事の人に聞くと間違いなくこの道路沿いが地図の谷筋だという。谷の姿ももう失われている小さな谷で、周囲の景色が大きく変化していてよくわからないが、地図では　この山裾の谷の入り口から 300M ほどは行ったところが製鉄遺跡である.
高橋集会所のところで小さな小川を横切った左手　丘を背にした場所がどうも高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の位置であるが、どうも確信が持てない。
　道路工事の人たちが集まっているので、再度声をかける。現場監督がこの住宅のところから　この工事中の道路までが発掘現場だという。
工事中の道路に沿って　新しい家が立ち並び、その後ろに丘陵の崖が続く。そして　道路に沿って奥へ谷がのぴている。どうやら間違いなさそうである。
まったく、もう　うめもどされているので発掘の痕跡は見られない。
現地説明の資料に書かれた発掘図面と見比べながら製鉄炉の位置を確かめるが、正確にはよくわからない。

古代の製鉄炉が発見された高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡　現地
2006.7.3.

「この道を上っていった先に『たたら池』がありますか・・」と聞くと監督の人が「名前は知らんが、池があるよ。　この雨の中物好きな・・・・」と笑いながら教えてくれる。
この丘陵地の小さな谷からは鍛冶炉もいくつか見つかっており、また　「たたら池」の名も残っている。
古くから製鉄が行われた場所に違いない。
道路工事が続く谷筋を少し登ると丘陵地の尾根の上で　広い幹線道路がこの尾根の上でも工事されており、佐夜ノ谷の道路がこの幹線道路につながる。そして　この尾根を乗り越したところに池があり、「たたら池」と書かれている。振り返ると今登ってきた佐夜ノ谷の谷筋がよく見える。

丘陵地の上側から遺跡を見る

たたら池

丘陵地の上の幹線道路

丘陵地の上から佐夜ノ谷

もう　まったく製鉄遺跡の痕跡は残っていないが　南北に伸びる日高丘陵の小さな枝谷　佐夜ノ谷の中ほどの緩やかな南斜面の傾斜地が佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡。今治の海岸から谷筋を吹きくる風を利用したのだろう。緩やかな谷筋は製鉄炉を築く格好の場所である。
製鉄に必要な炭は周辺四国の山地から得られるが、主原料の砂鉄または鉄鉱石はどこから持ってきたのだろう。
四国の砂鉄の浜は知りませんが、この今治を含む四国北岸は中央構造線が貫く鉱物資源地帯であり、この近くで鉄鉱石・砂鉄が得られたのかもしれません。これら原料の産地についての検討はまだ　これからだという。
今まで空白だった四国で古代の製鉄炉が出た。しかも　古墳時代から海道をにらむ要衝の地で。
そして、現地説明会の資料によれば、この丘陵地からはほかにも鍛冶炉など製鉄関連遺構が出ているという。この丘陵地からはまだまだ製鉄関係の遺構・遺物が出てくるのかもしれないし、この地が四国における古代の製鉄の一大センターだったのかもしれない。それには　製鉄炉が一基だけでなく　複数の製鉄炉を含む製鉄現場遺構が出土せねばなるまいと夢を膨らませています。

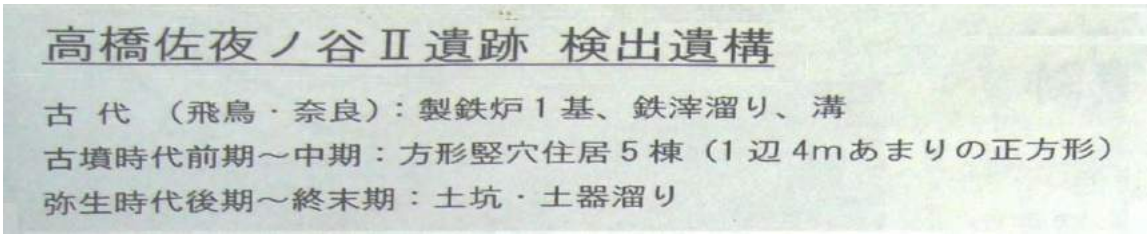
1.3.　高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡と現地対比　　高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡 速報展示 & 現地説明会資料より

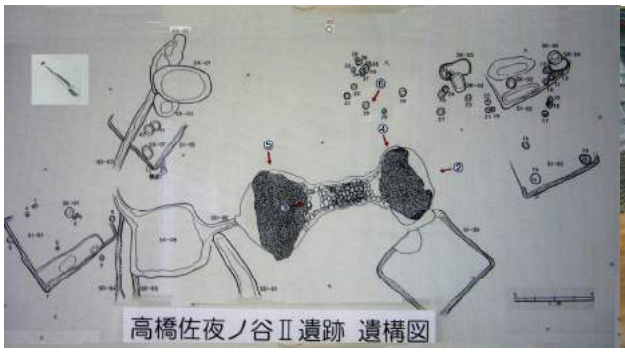
a. 高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡　発掘当時と現在

高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡　発掘当時と現在　Ⅰ　（　谷の奥側　西から撮影　）

高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡　発掘当時と現在　Ⅱ　（　谷の入り口側　東から撮影　）

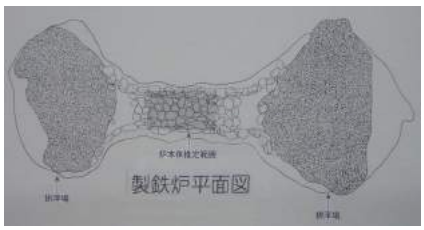
b. 出土した製鉄遺跡　遺構

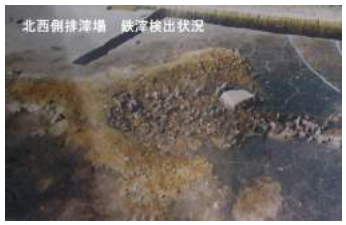




出土した製鉄遺跡　遺構

C. 出土した製鉄炉 遺構





南東側排鉄滓場　　北西側排滓場

製鉄炉　炉周辺の焼土　　製鉄炉長辺部の石組　　炉底の石敷き

発掘された製鉄炉は１基。　長さ約 3.3M 幅 0.7M の長方形状の箱型炉

長辺の両サイドに川原石による石組みが見られ、その上に粘土で築炉。

炉の長辺の両側にアレイ状に排滓場があり、鉄滓が検出された。

炉底に当たる石組内側部は溝状に掘り込まれ、石敷きと炭で固められた上に炭層がある防湿構造。

この炉構造などから　7 世紀後半から 8 世紀はじめの炉と考えられている。

また、古代の製鉄炉遺構のほか古墳時代の方形竪穴式住居５棟　弥生後期・終末期の土坑などが検出

1.4.　古代の遺跡群が連なる日高丘陵地に古代和鉄の海道の夢を乗せて

写真1. 高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の位置

高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡と周辺の古代遺跡

表1. 日高丘陵の古代遺跡一覧

	遺跡名	時代	遺跡の種類	主な遺構	主な出土遺物	調査主体
①	高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡	弥生時代後期～終末期 古墳時代前期～中期 飛鳥・奈良時代	集落跡	土坑、土器溜り、 竪穴住居、溝、製鉄炉	弥生土器、須恵器、土師器、	今治市
②	別名蟹谷Ⅰ遺跡	弥生時代後期 古代～中世	集落跡	掘立柱建物、井戸、溝 鍛冶炉	須恵器、土師器、赤色塗彩土器、 円面硯、銅印、墨書土器、梳状滓	愛媛県
③	別名寺谷Ⅰ遺跡	平安時代	集落跡、 工房跡？	溝、柱穴、鍛冶炉	須恵器、土師器、墨書土器、 風字硯、施釉陶器、青磁	愛媛県
④	別名寺谷Ⅱ遺跡	奈良・平安時代	集落跡	土坑、溝、柱穴	須恵器、土師器	愛媛県
⑤	別名成ルノ谷遺跡	古代～中世	集落跡	掘立柱建物 土壙墓、溝、鍛冶炉	土師器、青磁、銭貨	愛媛県
⑥	高橋板敷Ⅰ遺跡	奈良・平安時代	集落跡	掘立柱建物、柱穴、 鍛冶炉	須恵器、土師器、赤色塗彩土器、 墨書土器、転用硯	今治市

高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡がある日高給料の古代遺跡一覧

この高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡がある日高丘陵地の南部は狭い小さな谷が連なり、８世紀から１０世紀にかけての古代遺跡が多数存在し、これらの遺跡はその出土品(硯・墨書土器・銅印・施釉陶器)などから当時の役所のようなものがあったと考えられ、同時に鍛冶炉が出土しているいせきもあり、この地で製鉄・鍛冶加工が行われていたことは間違いない。

また、この日高丘陵地の山向こうの丘陵地には大和と深く結び付けられる初期の前方後円墳群妙見山古墳があり、瀬戸内の海道をにらむ要衝の地として、古墳時代から重要な場所であったろう。

大和の勢力との結びつきの象徴　前方後円墳群がこの日高丘陵からすぐ近く　西へ高縄半島を山越えした大西町西の伊予灘から瀬戸内海を見渡せる丘陵地にある。

製鉄が始まる６世紀からは１００年ほど下るが、そんな要衝の丘陵地で鉄が生産されていた。

おそらく、朝鮮半島の鉄素材の供給を受けながら　必死で鉄の自立をめざした試みがこの地でもあったろう。

そんな夢が膨らむ高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡の出土である。

古代製鉄技術伝来の道筋に位置付けられるこの海道の要衝にあって、古くから新技術を持ってきた渡来人たちと一緒になって製鉄技術を模索し、製鉄工房を開いていたのではないか・・・・・・・

そんな夢をふくらましつつ、佐夜ノ谷を下って　次の妙見山古墳群に向かった。

2. 大西町　妙見古墳群を訪ねて walk　2006.7.3.

瀬戸内海を見下ろす位置にある古墳時代初期のの前方後円墳　妙見山１号墳

西日本における出現期の主要前方後円墳分布と妙見山一号墳　発掘（上）復元（下）

宮前バス停　妙見山への入り口

再度今治の駅に帰って　駅の案内所で妙見山古墳群のある大西町へのバスを教えてもらう。電車もあるのですが、
松山への国道１９６号線バスに乗って高縄半島を西へ横切って　約１５分　大西町宮前バス停で降りればすぐという。午前中の梅雨空がうそのような快晴で暑い。バス停を降りると西側海岸線側には新来島造船のクレーン群が見え、反対側には高縄半島の丘陵地が続く。
バス停のすぐ前にスクリューの大きなモニュメントがあり、そこからまっすぐ丘陵地に登ってゆく道があり、すぐに藤山健康文化公園がこの丘陵地の山裾に広がっている。この公園の上に見える山の尾根筋が妙見山古墳群のある場所で、公園から妙見山古

墳群まで遊歩道が上って行く。公園から見上げると頂上部にちょこっと一号墳の墳丘が見える。
藤山健康文化公園は丘陵地の緩やかな斜面に広がる自然公園で、大西町から瀬戸内海を見渡せる丘陵地の頂上には妙見山一号古墳が復元整備されている。
古墳時代初期　大和の象徴前方後円墳がこの地にも築かれ、瀬戸内海の要衝をにらむ地として、大和と連携した大きな勢力の墳墓である。この妙見山古墳からは瀬戸内海が一望できるといい、胸わくわくで遊歩道を登ってゆきました。

藤山健康文化公園

丘陵のてっぺんに妙見山古墳がちょこんと見える

妙見山古墳への遊歩道で

大西町の海岸線にある新来島の大造船所が見える

15 分ほどで頂上部に登るとよく整備された前方後円墳があり、その墳丘の上からは大西町の市街地の向こうに新来島の大造船所　そして　伊予の斎灘が広がっている。すばらしい眺めである。
大西町は新来島の城下町　海岸に大造船が見え、そのむこうに斎灘が一望できる。
古代の製鉄遺跡が見つかった今治日高丘陵はすぐ東側の山裾にあり、おそらくは同じ勢力のもとにあったと考えられ、日本統一を進める大和の生命線　朝鮮半島から供給される鉄素材の通商路　瀬戸内海の海道をこの地で押さえていたと考えられる。大和と北九州・朝鮮半島に続く古代の鉄の通商路では、数世紀にわたって、渡来人とともに新しい製鉄技術を得て　自前で鉄素材の確保を図っていたに違いなく、その時代から２００数十年下るがそんな鉄の通商路　瀬戸内の海道の要衝の地で古代の製鉄遺跡が見つかったことに　ワクワクしています。
この妙見山古墳は四国高縄半島がそんな瀬戸内の海道の要衝の地の証である。

妙見山１号墳

妙見山１号墳から見た斎灘の展望　　2006. 7. 3.

2.1.　妙見山古墳群　概　要

妙見山古墳群は眼下に大西町の斎灘を見下ろす標高８０ｍの尾根先端に所在し、古墳時代前期、３世紀末から４世紀前期ごろに造られた前方後円墳３基の古墳からなっています。そのうちの１基古墳時代前期に属する前方後円墳妙見山１号墳が１９９５年に発掘調査を経て復元された。
墳丘は前方後円墳で、全長約 55 メートル、後円部径約 36 メートル、前方部長約 19 メートルで、くびれ部幅 25.5 メートル、前方部幅推定 31 メートル。前方部が短く、くびれ部が幅広の寸胴形であり、これがこの墳丘の大き

な特徴です。後円部を西に、前方部を東に向け、その主軸は海と平行しており、海から望むと古墳の側面が見える。埋葬施設はいずれも竪穴式石槨（室）であり、後円部から１号が、前方部中央から２号が発見され、二つの竪穴式石槨を持つユニークな複数埋葬例として知られる。
古墳の中段（段築部）と下段（裾部）には、全周する石垣状の列石が巡らされ、墳頂には、「伊予型特殊器台」と大型の「二重口縁壺型土器」が置かれていた。
出土品は、「斜縁四獣鏡（ななめぶちしじゅうきょう）」青銅製の鏡、２号石槨から出土「伊予型特殊器台」と「二重口縁壺型土器」・・・これらは古墳の頂上部に置かれていたらしい。
また、墳丘に接して後円部南側に２基の箱式石棺、前方部前面に１基の箱式石棺が発見されました。
大西町は発掘時に得た情報を生かし、妙見山１号墳の整備復元を行いました。発掘したままの形で竪穴式石槨がみれるのはこの古墳のみです。

2.2.　尾根筋にある妙見山古墳群

妙見山尾根筋の端にある妙見山１号前方後円墳　　2006.7.3

復元された妙見山１号墳　　１号竪穴石郭　　２号竪穴石郭

妙見山１号前方後円墳の石郭

妙見山２号　＆　妙見山３号古墳

3. 総　　括

今まで空白だった四国で古代の製鉄遺跡が見つかった。それも　瀬戸内海をにらむ要衝の地　今治高縄半島でそこには　古墳時代初期の前方後円墳があり、大和が大陸・朝鮮半島から大和への通商路の重要点と考えていたところである。でも今治には何度も出かけていますが、和鉄との関係など考えたことはなく　びっくりです。

　日本で製鉄が始まるのは５世紀後半から６世紀。
どんなルートでまたどんな技術の伝来が日本での製鉄開始にインパクトを与えたのか????? いまだに謎である。
そんな古代の和鉄の謎を解き明かしてくれるかも知れない四国高縄半島での古代製鉄遺跡の出土。
胸わくわくで今治に出かけました。
高橋佐夜の谷Ⅱ製鉄遺跡の詳細な分析はこれからですが、出土した製鉄炉はしっかりとした防湿構造を炉底に持つ
箱型炉で７世紀から８世紀はじめの炉と見られ、製鉄が始まる６世紀からは 100 年ほど下るのですが、周辺の丘陵地の数箇所からは鍛冶炉なども出土しており、この高橋佐夜の谷Ⅱ製鉄遺跡がある日高丘陵全体が鉄にかかわっていた可能があり、これから　さらに新しい事実が出てくる可能性がある。
遺跡そのものはもう住宅や道路の下になっていて　見ることができませんでしたが、古墳時代からの要衝の地高縄半島の一角にあることを含め、暴論ですが、この地が一大製鉄センターとして周辺への鉄供給の役割を担わされたのではないかなどと夢を膨らましています。
大和と四国の関係ももっと考えねばならないのかもしれません。

ほんの数行の記事を見て、出かけたのですが、主帝もかけず、四国の古代を垣間見ることができ、和鉄の夢を膨らますことができました。この丘陵地から　複数の製鉄炉がでてくれば　古代の四国が変わる・・・・など　次々と期待を膨らませながら　夕日を背に　今治から「しまなみ海道」を渡って福山へ帰路につきました。

2006.7.3.　　夕
Mutsu　Nakanishi

【参考・引用資料】

高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡　　2005.6.19.　現地説明会資料　　今治市教育委員会
妙見山古墳概報集成　　発掘調査概報　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　1994.10.　大西町教育委員会

- この佐夜ノ谷Ⅱ遺跡をたずねる walk で　今治市の教育委員会の人たちに遺跡の位置を教えてもらったり、現地説明会の資料などお世話になりました。
- 旧大西町役場(今治市大西支所)では妙見山古墳の資料をお願いして、後日沢山送っていただきました。
- 後日　今治市教育委員会より、下記シンポジュームの案内を送っていただきました。

古代たたら顕彰事業　公開シンポジュウム「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」
高橋佐夜ノ谷 II 遺跡の製鉄炉の実態とその歴史的背景を明らかにするためシンポジウム、
及び製鉄実験を行います。

日時　　2006.9.16.　場所　　今治市公会堂
佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の発掘調査成果　櫛部大作(今治市教育委員会)
日本古代の製鉄炉と国家政策　　村上恭通(愛媛大学)
古代の鉄づくりのいぶき　　木原　明(日刀保たたら)

10. 弥生の高地性集落　「会下山遺跡」からロックガーデンへ　ハイキング

阪急芦屋川駅-会下山-風吹岩-ロックガーデン-高座の滝-阪急芦屋川駅

egenoyama00.htm by Mutsu Nakanishi　　2006.7.14.

1. 弥生の高地性集落　「会下山遺跡」から　ロックガーデンへ
   - 1.1.　会下山の狭いやせ尾根の上に並ぶ弥生の住居跡　会下山遺跡へ
   - 1.2.　弥生の高地性集落概要と　会下山遺跡の発掘当時の写真
   - 1.3.　会下山遺跡から　魚屋道を通って　ロックガーデンの頭　風吹岩へ
   - 1.4.　ロックガーデンを高座の滝へ下る
2. 弥生の高地性集落　会下山 遺跡　　概　要
3. 高地性集落　会下山の集落の出現　　大阪湾周辺で　何が起きていたのだろうか

ロックガーデン　風吹岩から会下山・大阪湾を望む　　2006.7.14.

阪急芦屋川駅でおりて、北側に連なる六甲の連山を眺めると芦屋川の西側の住宅地のすぐ奥に六甲連山をバックにこんもりとした２つの山が見える。 西側が会下山　東側が城山。　尾根筋を登って　この山の上に行くと芦屋の市街地から大阪湾・淡路島が一望できるという。 弥生時代には　この二つの山の上に高地性集落があり、下の平野部にある集落と交流しながら　大阪湾をみはっていたという。

「芦屋の会下山　知っていますか・・・　会下山の高地性集落遺跡が発見されて 50 年その記念シンポジュームが６月の末にあるのですが出ませんか」と誘いを受け、シンポジュームには出席できなかったのですが、そのシンポジュームの資料をいただいた。
その資料を読んでいて、中学生の頃　この会下山のすぐ下にある山手中学に何度か試合に出かけたことがあって、発掘調査中の遺跡を見た記憶をたどっていました。 山手中学の周辺で発掘がいくつかされて、この周りには遺跡が多いと会下山の名前と共にぼんやりの記憶。 高地性弥生集落遺跡などの言葉も知らず、何とはなしに古い遺跡が山裾にあると・・・・・。

７月１４日朝三宮に出かけようと家を出ると梅雨の中休み快晴。　これは山に行かん手はなし。
予定を変更して　久しぶりに高座の滝・ロックガーデンへ行ってみようとコンビニでペットボトルの水を買って阪急電車に飛び乗る。久 しぶりとはいえ　よく知った場所なので、山手中学目指せは　どうにかなるといつもの風来坊。 梅雨とも思えぬ快晴の暑い日差しの中を会下山に登って高地性弥生集落遺跡を見学。そのまま風吹岩まで登って　ロックガーデンを下って　高座の滝へ下りてきました。ほんとに久しぶりのロックカーデンもこんな

に樹木がおおかったか・・・と。昔の記憶とは随分違っていました。
また　弥生の高地性集落　会下山遺跡も　ひそかに「本当は山中にある弥生の隠れ里　　縄文の暮らしもあったのではないか」などと思っていましたが、登ってみて「こんなやせ尾根の山の上に集落　これは意図的な村だ」とつくづく感じました。

調べてみると　この会下山から大陸と関係の深い「漢式三翼鏃」　と数々の鉄器がが出土している。
資料によると　稲作と鉄が日本に「戦」を持ち込んだといわれ、時代と共にその戦いの対象レベルは違っているが、高地性集落が交流する連合体の監視・通信の役割を担っていた村ではないかと見られている。
弥生時代中期以降　邪馬台国成立・大和王権へと国づくりが進む過程で高地性集落が次々出現する瀬戸内沿岸は自前の鉄をもたぬ日本が　朝鮮半島の鉄を求める重要な鉄の伝来・交流ルートでもあり、渡来人との関係も深く大和王権の確立まで幾多の戦いが繰り広げられたところ。
弥生の高地性集落の出現は邪馬台国成立前史を飾る激動の時代の象徴であるともみられる。

「この弥生の高地性集落を調べれば、鉄の痕跡が見えるのかもしれない」
岡山総社の「鬼ケ城」　伯耆妻木晩田遺跡　　大阪交野生駒山西端交野の高地性集落　いずれもその周辺には渡来人と関係の深い鉄の集団がいた。
弥生の高地性集落にはそんな鉄のつながりがあるのではないか・・・・・との夢を膨らましています。
そんなきっかけになった会下山高地性集落遺跡・ロックガーデン　ハイキングをまとめました。

1.　弥生の高地性集落　「会下山弥生遺跡」から　ロックガーデンへ

阪急芦屋川駅-会下山-風吹岩-ロックガーデン-高座の滝-阪急芦屋川駅

六甲の山々から平野部に出る山裾の傾斜地に高級住宅地が広がり、その中央を流れの急な芦屋川が流れ下る芦屋の山手。
関西では誰もが知っている六甲へのハイキングコースがいくつもこの芦屋川から伸びでいる。
六甲は高度こそ低いのですが、幅の狭い阪神間の平野部から急に立ち上がる連山が続き、しかも花崗岩の風化が進み、急峻な尾根と谷を形成。
中でも　ロックガーデンは　風化が進んだ岩屋まで、関西のロッククライミング発祥の地であるとともに、この急峻な岩山を見ながら六甲の稜線へ登ってゆくハイキングコースがいくつもある。　会下山弥生遺跡は芦屋川からそんなロックカーデンへ上ってゆく入り口の急峻な細い痩せ尾根の尾根筋の山道を30分ほど登ったところにある。
そのまま尾根筋を登ってゆくとロックカーデンの谷筋を右に巻きながら　隣の神戸東灘から六甲を越えて有馬への六甲山越えの古道「魚屋道」と合流して　ロックガーデンの頭　風吹き岩に一時間ほどで出る。
眼下にロックガーデンの荒々しい岩山が並ぶ谷が一望でき、その向こうに大阪湾・淡路島が遠望される。表六甲の代表的な景観である。
今日は気楽に弥生遺跡を見て　ロックガーデンのハイクを楽しむつもり。

1.1.　会下山の狭いやせ尾根の上に並ぶ弥生の住居跡　会下山遺跡へ

阪急芦屋川駅から北に芦屋川に沿って緩やに登ってゆく。
５００メートルほど登ったところ高座川との合流点の手前にある開森橋のところで左に折れて会下山の山裾の住宅地の中に入ってゆく。開森橋からは　芦屋川の正面に城山・その西に会下山の尾根筋がよく見える。
少し登ったところで、高座川を遡って行く高座の滝・ロックガーデンのハイキングコースの道と別れ、そのまま西へ会下山の尾根の方へ登ってゆく。 ここまでくれば、会下山への標識はあるだろうし、山手中学を探せばすぐ会下山の登り口はわかると思っていたのですが、それが間違い。 山手中学の裏手からの道は山手中学の中からしか行けず今は通行禁止。会下山の尾根筋の下に広がる住宅地の中を人に聞きながらグルグル。
やっと旧三条小学校裏の墓場の中を抜けたところに会下山の尾根への上り口を見つけました。

ここからは尾根筋に登る樹林の中の急な山道である。何度か折れ曲がりながら尾根筋の西側の崖に沿ってつけられた山道を登りながら尾根筋の上へ向かう。
有名な遺跡なので遊歩道でもついていると思っていましたか、完全な山登りハイク。でも　久しぶりの山歩きに汗が心地よい。
木々に囲まれ　道はよく整備されているのですが、あまり　ハイキングにはつかわれぬ道、まったく人の気配の感じられられぬ山の中である。 ３０分ほどでやっと樹林の中の尾根筋の上に出る。尾根の上といってもやせ尾根ですぐ向こう側も谷へ落ち込んでいるのが木々の間から見える。
木々の中につけられた尾根筋を少しよじ登ると少し広くなったところがあり、会下山弥生遺跡の案内板があり、尾根の反対側へ少し降りるとさらに広いくぼ地があり、そこに復元された倉庫が建っていた。狭い尾根筋に竪穴住居跡地が 3 棟　下のくぼ地に倉庫と竪穴獣まょ跡地が数箇所木々の間にありました。

尾根筋の上に並ぶ会下山遺跡の竪穴住居跡　　会下山遺跡の中心部　2006.7.14.

尾根の東側のくぼ地に復元された倉庫跡　　2006.7.14.

展望もあまり利かずですが、木々の間から下の山手中学など市街地がちらちら見える。
発掘調査時は３６０度展望の利く禿山のように見えるが、尾根筋には木々がしげって　そんな面影はない。
発掘当時の写真を見ると尾根筋の木々がまだ小さく 360 度展望がひらけ、尾根の形もよくわかりますが、今は尾根全体が木々に包まれ、視界が聞かない。
案内板によると会下山高地性弥生集落遺跡はおよそ２０００年前の紀元前 1 世紀から紀元 1 世紀にかけての弥生時代の高地性集落。
大阪湾を眼下まじかに見下ろす標高 160m～200m の山頂尾根に４０人前後の人々がすみつき､炊さんをともにして、低地の村々とも交流しながら、海上交通の見張りなど活発な社会生活を送っていたと考えられている。
発掘当初は 2 世紀末「倭の大乱」の時代　群立する国と国との対立の備えの集落と見る説もありましたが、それよりも以前の時代　かぎられた地域間たとえば川筋を単位とする利水・灌漑をめぐる争いなどの備えであったとも見られる。
いずれにしろ　山裾に水田耕作の集落が広がる中　意図なしでこんな山の中に隔絶した集落は存在しなかったと見られ、やはり、戦いの備えや戦いの集団祭祀の場などであったと考えられている。
尾根筋をさらに上へ登った一番高いところに祭祀跡があり、おそらく弥生の時代にはもっとよく展望が聞いたのでしょうが、ここからは　木々の間から、大阪湾までの展望が開けました。

尾根筋の一段高い頂上部に祭祀跡の案内板

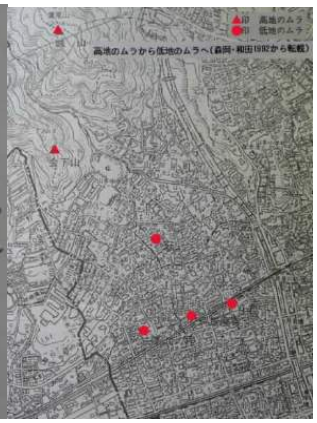
その周辺からは下の市街地・大阪湾が遠望できました　　2006.7.14.

1.2.　弥生の高地性集落概要と　会下山遺跡の発掘当時の写真

会下山遺跡発掘５０周年記念シンポジュウム資料「会下山から邪馬台国へ　高地性集落の謎と激動の弥生社会」より

高地性集落　会下山遺跡の位置と尾根筋の出土遺構の配置図

発掘当時の会下山遺跡周辺の写真



弥生時代の西阪神の集落分布　＆ 会下山遺跡と平地部の集落

弥生時代の高地性集落は平地の集落と連携しつつ、瀬戸内の見張りなどの任務を担っていと考えられる。
この会下山遺跡の下の平野部一体には水田耕作の集落が点在し、これらの平野部の集落と高地性集落とは交流があったと考えられている。

また、銅鐸がこの表六甲の山々に数多く持ち込まれて埋められているのも、この地が畿内の端・瀬戸内海の東端にあたることによると考えられ、この地の高地性集落の役割で゛ある異なる勢力の監視などと絡んでいたのかもしれない。
　鏃のささった人骨がこの大阪平野のあちこちで見つかっていることなどから、規模はよくわかりませんが、この地域で戦いがあったことは間違いない。

会下山遺跡に立つまでは
　「平野部は湿地が多く、災害に弱いし見通しも悪く住みにくいのではないか・・・・
　　むしろ縄文のスタイルを捨てきれずにいる民が山と平野 2 つの村を行き来していたのではないか・・・」
などと考えていました。

でも　会下山遺跡は急峻な瘠せ尾根の上でこの尾根の東に沿う谷はロックガーデンの岩場が続く急峻な谷。
とても耕作に適しているとは思えないし、また、頻繁な往来・物流には向いていない。
会下山の下で発掘調査をしていた学芸員の人によれば、同時期にすぐ下の平野部には水田耕作の集落が幾つも展開されていたという。
一番頂上の物見には祭祀の場の石組みも残っている。また、ノロシ場かもしれぬ焼土坑も見つかっている。
やっぱり、瀬戸内海の見張りの集落か・・・・弥生中期以降　この大坂湾沿岸の平野部で数々の戦いがあったことは武器の刺さった戦死者の墓の急増で理解される。

大規模な灌漑設備と開墾による稲作が急発展し、鉄器が急速に増加するのもこの時期である。
水田耕作の拡大には灌漑・利水の大規模な土木工事が必要であり、鉄器の使用は比すであり、また　この灌漑・利水は川の流域を単位とした地域間紛争を巻き起こしたに違いない。

発掘時の会下山遺跡から大阪湾を望む

会下山の頂上部　祭祀跡のある周辺
昔はもっと広く大阪湾や阪神間の平野部がよく見えたのだろう

1.3.　会下山遺跡から　魚屋道を通って　ロックガーデンの頭　風吹岩へ

阪急芦屋川駅- 会下山 - 風吹岩 - ロックガーデン - 高座の滝 - 阪急芦屋川駅

会下山の最上部を超えてさらに尾根筋をつめると少し下って鞍部に出て、再度西へ木々の中の尾根筋を登ってゆく。 傾斜は穏やかになり、道端に大きな岩が見えてくる。蛙岩といわれる場所で、ここで神戸東灘から登ってくる「魚屋道」に合流する。　東灘から六甲を越えて有馬へ結ぶ古道　昔の六甲越えの幹線道路である。

蛙岩周辺　　蛙岩と蛙岩周辺で合流する魚屋道　　2006.7.14.

少し道幅がひろくなり、緩やかな魚屋道をさらに登ってゆく。

急に岩が露出したゴツゴツの岩の間を抜けて行く道となり、ところどころで、海岸側や六甲側の視界が開ける。

会下山遺跡から 1 時間ほど　さらに岩がごろごろ転がる山道を登りきり、大きな岩山の横を回り込むとぱっと３６０度展望の開ける「風吹岩」の横に飛び出した。

魚屋道を通って　風吹岩へ　　岩肌むき出しのゴロゴロ道になると風吹岩は近い　　2006.7.14.

阪神間の市街地・大阪湾遠謀　六甲最高峰や六甲連山がすぐ近くに見える

会下山遺跡から約１時間ほどで大阪湾の大パノラマが見える展望台　風吹岩に　2006.7.14.

さすがに表六甲のハイキングコースの十字路　多くのハイカーが風吹岩の上に立って、360 度の展望を楽しんでいる。
眼下にはロックガーデンの岩峰が連なり、その向こうに大阪平野・大阪湾の大パノラマが広がっている。
登ってきた会下山・城山がはるか下のほうに見える。後ろには六甲の最高峰など連山が壁のように並んでいる。
　ロックガーデンはもっと荒々しい岩が並んだ景観で、その岩に登るクライマーが見えていた記憶があるのですが、今は緑の中に岩山が埋没して、かつての荒々しさがなくなっている。
植林が進んだのが原因だとおもうのですが、私の印象の違いだろうか・・・・・・

ロックガーデン　　風吹岩より　　2006.7.14.

展望を楽しんでいると猪れも３頭がハイカーを恐れることもなく、屏風岩の展望台へ悠然と歩いてゆく。
六甲の猪はよく慣れていてリックサックとって行くといわれるが、人の集まるところを猪もよく知っている。
この場所に来るとえさがもらえる。サルの餌場のようなものである。
おばちゃんのハイカーによるといつもこの場所に猪が寄ってきて、えさを少し持ってくるという。驚きました。

屏風岩に現れた猪　まったく人によくなれ　怖がらない　　2006.7.14.

1.4.　ロックガーデンを高座の滝へ下る

阪急芦屋川駅-会下山-風吹岩-ロックガーデン-高座の滝-阪急芦屋川駅
風吹岩で休憩している間に雲行きが怪しくなって、東の六甲の山際からごろごろいいだして、いっぺんに雲が出てくる。これは雨になる。
本降りになる前に下ろうとお尻をあげるとぽつぽつ雨が降り出したが、本降りにならず。湿った風が顔をなぜる。
予定通り、ロックガーデンの岩道を降りることにする。

岩を伝いながらの急峻なロックガーデンの谷くだりが続く　　2006.7.14.

ロックガーデンからの眺望　2006.7.14.
緑の中に包まれているが、岩峰が林立し、関西でのロック クライミング発祥の地である

風吹岩からロックガーデンの谷に入るといきなり、急峻な岩のくだりが続く。　ロープや鎖がつけられているので心配はないが、ほぼ垂直に下ってゆく。 やつぱり、木々に覆われていて見えなかったが、昔のままの急俊な岩のくだりが続く。雨が降っていて、前のグループも慎重なので時間がかかる。
岩場を抜け、急峻な谷筋を下って　３０分ほどで高座の滝につく。藤木久三のレリーフが滝の横の岩にはめ込まれている。もう何十年ぶりである。
ここからは車道が高座川に沿って下ってゆく。高座川の東側の崖が続く尾根筋は会下山の尾根。やっぱり急峻である。

緑に包まれた高座の滝　　2006.7.14.
ロツク　クライミングの先駆者　藤木久三のレリーフがあり　ロックガーデンのハイクの出発点

高座川に沿って２０分ほど下ってきて　芦屋の市街地まで出てきた時にはまた、快晴。
開森橋からは会下山・城山の向こうに六甲の連山が見える。
約４時間ほどのゆったりハイク　いい汗をかいて　心地よい疲労感。 今日一日の行程を思い出しながら　芦屋川の駅に戻りました。

かつての禿山が緑の山に　東から　甲山・このロックガーデン・神戸摩耶山・再度山等々阪神間の山々の緑が再生されている。 山が荒れていた子供の頃から４０年　環境再生には時間がかかる。　しかし、こつこつ植林すれば確実に緑は再生する。 時間のかかる環境改善にも思いのいった会下山・ロックガーデンハイクでもありました。

高地性弥生集落　これはまた　面白い山歩きのテーマ。簡単には片付けられないテーマである。
産業の米といいながら戦いを持ち込んだ鉄の文明史も絡んでいる。
さしずめ　会下山の資料で知った神戸伊川谷の表山高地性弥生集落に行ってこよう。
いつも通る伊川谷にそんな遺跡があるのか・・・・
この遺跡が鉄と絡んでいれば　それこそ　面白い 是非探さねば・・・と思っている。

2006.7.14.　　六甲を何度も振り返りつつ芦屋川の土手を歩きつつ

2.　弥生の高地性集落　会下山 遺跡　　概　　要

■ 遺跡の発見

昭和 31 年，市立山手中学校が学校植物実習園 をつくろうと裏山を掘り返した時に多くの弥生土器が発見され，その後，数年にわたって遺跡の 発掘調査が行われました。その結果，山頂や狭い尾根筋から 約 2000 年前のムラの跡と当時 の生活道具が続々と見つかりました。
そして，貴重な文化遺産として，昭和 35 年，兵庫県史跡第 1号に指定されてからは周辺の環境整備が整い，当時の生活跡の復元や解説板も設置され， 山の自 然と親しめる阪神間でも珍しい歴史教材園となっています。
山頂からは， 眼下に芦屋の市街地やシーサイド タウン，湾岸線や大阪湾が一望でき，視界のよい日には東に広大な武庫むこ 平野を経て，遠く北摂 ・ 生駒 山系の山並みを見渡せます。 また西は神戸の街から淡路島を， 北は林立する表六甲の高峰を間 近に望める優れた立地を占めています。

発掘時の会下山遺跡から大阪湾を望む

■ 遺　　構

調査によって明らかになった遺構は， 数軒分の 竪穴住居跡，山頂部二ヶ所の祭祀場跡を中心に，南北に伸びる細長い尾根と東方向に分かれる尾 根に点々と存在し， 墓地やゴミ捨て場などの付属施設も備えており， 当時の集落構造がよくわかります。

住居跡

斜面に立地する関係から， 住居は高い方に壁を 作った半竪穴式のものが多く，最大規模の住居が 最も見晴らしのきくいい場所に造られており， 室内には炉をもっています。この家にはムラのリー ダーが住んでいたのでしょうか。

当時の家の形は， 円形が主で，４～５本の支え柱があり，床面に小 さな溝が掘られ，室内の排水か部屋を分ける間仕 切りの役目をしていたようです。

倉庫跡・火たき場

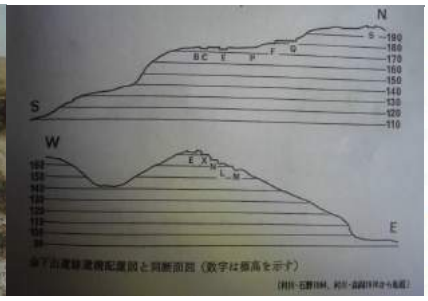
東斜面では倉庫跡が発見され， ここに収められた生産物は， ムラ全体で管理されていたようです。

また，火たき場の跡が残っており，ソトクド（野 外の共同調理場）とも，のろし施設とも考えられています。

のろしは交通や通信の未発達な当時に あっては， 最も簡単で確かな情報の伝達手段であり， 低地の集落では見ることのできない外来船の航行などを順次告げたのでしょう。

祭祀跡

この遺跡周辺の一番高い場所　２箇所で石組みなど祭祀跡がみつかっている。



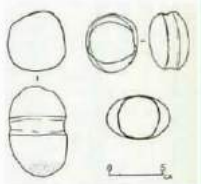
■出土した遺物

出土した遺物は， 日常で使用する容器である弥 生土器だけでなく，打製磨製の石鏃石錐刃器 石剣 石斧　石錘 砥石・石弾などの武器や生産用具の石器類に加えて，青銅製・鉄製の金属 製利器が新たに見られ， 特に青銅製の「漢式三翼鏃」は大陸との関わりを示すものである。

また， 鉄製釣針やイイダコ壷などの漁労具が出土していることから，山のムラであるにもかかわらず， 海まで出て漁をしていたことが明らかとなっています。サンドペーパーがわりに用いた軽石も存在し， おそらく木製の容器なども作っていたようです。

▲会下山遺跡から出土した弥生土器

▲磨製石鏃・漢式三翼鏃・銅鏃

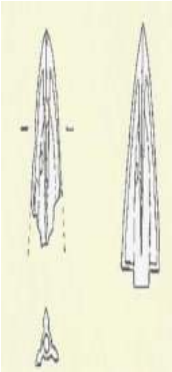


▲石錘・石錘・石弾

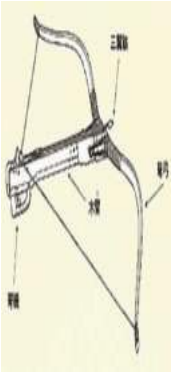
三翼鏃（さんよくぞく）

三翼鏃とは中国の戦国時代から漢の時代に発達し た青銅製のヤジリで、「弩（ど）」という発射装置から発射される矢の先に着くもので、このことから中国伝来の武器があったことがほぼ確認されたのである。

三翼鏃



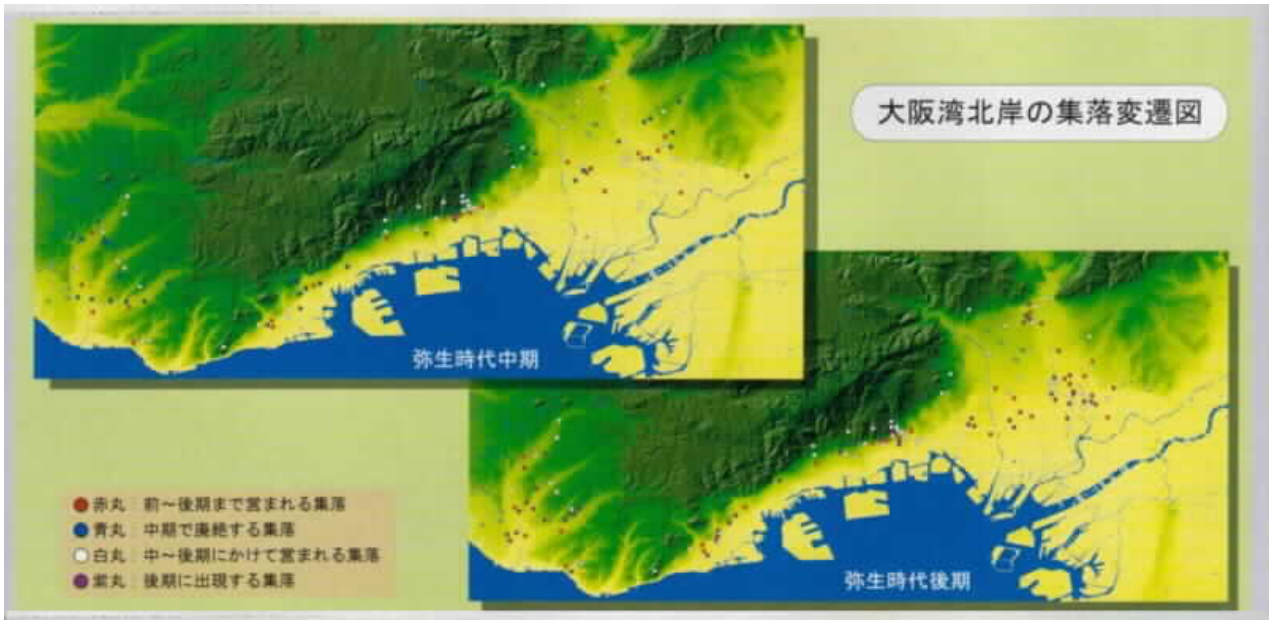
出土三翼鏃実測図



推定復原図　弩図

三翼鏃の大きさ

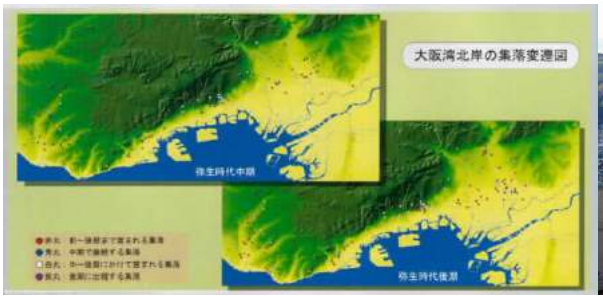
■　大阪湾北岸の集落変遷と高地性集落



3.　高地性集落　会下山の集落の出現　　大阪湾周辺で　何が起きていたのだろうか

第 35 回尼崎市立田能資料館特別展「弥生の戦」資料より　抜粋

寺沢 2000「六甲山から邪馬台国へ　-高地性集落の謎と激動の弥生社会-」より転載



弥生時代の大阪湾北岸の集落の変遷

弥生時代の高地性集落の謎

弥生時代は集落間の戦争が頻発した時代で集落の周りに濠をめぐらせた環濠集落や武器の傷をうけた人骨などが戦乱を裏づける。 弥生前期末に出現する環濠集落は村段階、クニ段階の争いに備えた防衛集落であったと考えられている。 そして、弥生中期後半になると中部瀬戸内沿岸から大阪湾にかけて高地性集落が出現。

弥生時代の普通の耕作地からみて遙かに高い場所（50～300m）に営まれた集落が出現する。

この高地性集落の目的は何なのか、数々の説が在るがいまだ定説はなく謎である。

山の上の集落であるが、山の下の集落との交流や釣り針・漁具・貝に象徴される海との関りも持っていた。

洪水に対する備えであったなどの説もあるが、一般には勢力圏の違う地域間の戦い、つまり九州勢力と近畿勢力というような地域勢力圏を越えた政権争いの戦争に備えた要塞であると推測されている。

会下山遺跡も同じような性格を持つ紀元前 2 世紀から 1 世紀にかけての高地性集落である。

■　大阪湾周辺での弥生の戦さ

第 35 回尼崎市立田能資料館特別展「弥生の戦」より　抜粋

昨年　尼崎の田能遺跡資料館で開催された特別展「弥生の戦」では　大阪湾周辺で起こった「弥生の戦」をわかりやすく展示し、弥生中期後半から高地性集落の出現をふくめ、ドラスティックに弥生の集落が変化する様子を戦さとの関係で捉えてまとめている。

高地性集落も　地域間紛争から　国と国の戦いへと戦が変化する時代の進展と共にその性格を大きく変化させる。

豊中市勝部遺跡から肋骨及び腰骨に食い込むように打製石剣の刺さった人骨が発見され、大阪湾沿岸部ではこうした戦死した人達を葬った墓が前期 6 例から中期 53 例へと弥生中期になって急激に増加する。

また、人骨と共に武器が出土した例から当時の戦の様子がわかる。

環濠や柵の外から弓矢で攻撃を仕掛け、序所に接近戦に移っていったと考えられる。

弥生中期に戦死者が急増したのはなぜか・・・・

戦は稲作と共に伝来したと考えられている。

稲作伝来以来肥沃な土地を求めて開墾が進み、また水を確保するための灌漑施設も作られた。

こうした資源を中心とした平野や川を中心とした狭い地域での戦いが始まった。

それが　時代と共にもっと大きな地域間戦いとなり、後期末には「倭国大乱」を経験して、地域間の戦は倭全土に広がっていった。

石弾 弥生時代中期後半～後期会下山遺跡

▲磨製石鏃・漢式三翼鏃・銅鏃

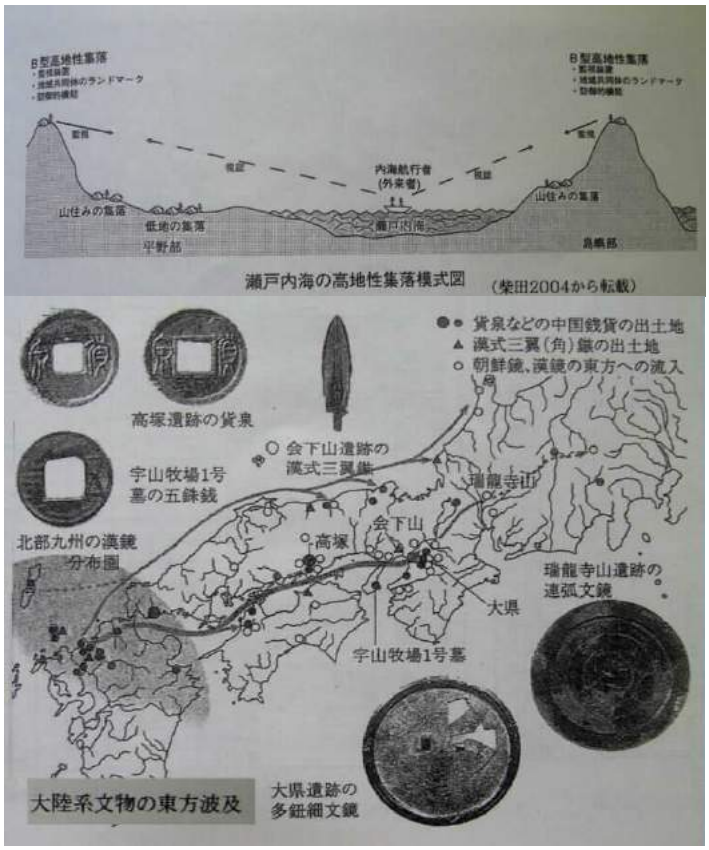
弥生中期の集落は地域の拠点となる集落と周囲に営まれる小規模集落とで一つの地域を形成しているが、後期になると拠点集落が衰退してゆくと共に武器では鉄器が増加する。
そして、中期末から後期前半にかけ、大規模な高地性集落が出現するなど中期までとは社会が変わってくる。
その変化をもたらしたのが、「戦」と考えられる。
弥生中期から後期の集落のあり方を 5 段階に分けて考える。
高地性集落も　地域間紛争から　国の国の戦いへと戦が変化する時代の進展と共に　その性格を大きく変化させている

弥生中期から後期の集落のあり方　第 35 回尼崎市立田能資料館特別展「弥生の戦」資料より　抜粋

1.　中期後半～	瀬戸内沿岸部の山口県東部から兵庫県西部まで島嶼・トウショや沿岸部の海に面した丘・山に営まれる高地性集落の急増期 香川県紫雲出遺跡・岡山県貝殻山遺跡などで　石製武器がピークで　瀬戸内海上ルートの抗争が東から西へ移動する
2.　中期末～後期初頭	近畿地方での抗争　　平野部での拠点集落が解体、大規模高地性集落が出現し、凹線文土器が見られなくなる。 この時期の大規模高地性集落として　神戸表山遺跡（神戸市西区伊川谷）がある。
3.　後期前半の短い期間	近畿地方各地で集落数・土器出土数が減少する一方　高地性集落が各地での代表集落となる この磁器の代表的集落として　芦屋市会下山遺跡がある。
4.　後期中頃以降	各地で分村化が進み集落数増加が見られ、地域によっては高地性集落が消滅する。 中期から後期に掛けての地域間抗争が落ち着く
6．弥生時代末	「倭国の乱」を経験して　その後地域間紛争は倭国全土へ広がってゆく。

■　　**弥生時代の高地性集落の変遷**

寺沢 2000「六甲山から邪馬台国へ　-高地性集落の謎と激動の弥生社会-」より転載



11、弥生の高地性集落　「男鹿島　大山神社遺跡」を訪ねて

2006.8.1.&8.4.

姫路市飾磨港から高速船で約 30 分　播磨灘の真ん中にぽっかり浮かぶ家島諸島がある。
東から男鹿島（たんがじま）・家島本島（いえしま）・坊勢（ぼうぜじま）・ 西島（にしじま）の大きな４つの島が中心。海上から一番先に目に飛び込むのが、島全体が削られた岩肌の荒々しい異景を見せる男鹿島。家島群島の一番東にあり、面積 4.37 平方キロメートル、周囲 9.99 キロメートルで、島全体が花こう岩質のため古くから採石業が盛んで全島が採石場。 遠くから見るとほかの島々が緑に覆われているのと対照的に、海の中に全島削られた山が迫る異様な風景である。昔、姫路から雄鹿が海を泳ぎ渡った島ということで男鹿島となったと伝えられており、対岸の姫路側には妻鹿の地名が残る。
島からは北に赤穂・姫路から明石へと播磨の海岸線が見通せ、遠く東は明石海峡・淡路島　南に鳴門海峡から四国　西には家島諸島越しに備讃瀬戸と 360 度の海の展望所である。
この島は海の要衝の地で　旧石器時代から人が住みついたと見られ、島の一番高い山頂の上には弥生時代　瀬戸内海　四方を監視していたとみられる高地性集落遺跡があるという。
阪神間芦屋の山裾の高地性集落「会下山遺跡」を調べている時に　「播磨灘にぽっかり浮かぶ家島諸島「男鹿島」の頂上に 360 度瀬戸内海を見渡せる高地性弥生集落があった」と教えてもらった。
以前　高校生だった娘が休みになるとせっせと通った「母と子の島・西島」・坊勢島もこの群島にあり、国生み神話「オノコロ島」伝説のもうひとつの伝承地「コウナイ石」も西島にある。
近くにいながら訪ねたことのない家島群島　調べてみると「交通の便は悪いが、朝早くでれば　男鹿島も行けそう。あわよくば、「コウナイ石」も見に行きたい。」と出かけましたが、私の計画とは裏腹にすごいところでした。

1.　弥生の高地性集落「大山神社遺跡」概要

弥生時代の高地性集落「大山神社遺跡」は家島町男鹿島、標高 210mの山頂部に立地している。この島の頂上部に大山神社があり、その境内一体が遺跡であるが、遺跡からは播磨平野が一望でき、遠く淡路島・四国を眺めることができる。島の人たちは「山の神」と称して昔から信仰。
この遺跡からはナイフ形石器が出土していることから、旧石器時代からすでにこの地に人の痕跡がある。そして、弥生時代中期後半になると、高地性集落が営まれ、弥生土器や農工具、狩猟具、漁撈具などが出土。その後、中世には池跡などが見つかっており、瀬戸内海を往来した物資である中国製の青磁碗や畿内産の瓦器碗などが出土している。

男鹿島　弥生の高地性集落「大山遺跡」から出土した遺物
2006.8.4.　姫路市埋蔵文化財センター　展示より

後期旧石器から縄文時代の始まるまでこの頂上部に人のいた痕跡があるが、縄文時代前期以降　この頂上部に人はいず、むしろ海岸部に遺跡が点在。弥生時代弥生時代中期後半からこの頂上部に高地性集落が出現する。最大１０棟程度の住居があったと考えられ、竪穴住居や掘立柱建物　土坑などと共に弥生土器・製塩土器　戦闘用の石鏃　農耕具としての石包丁・石斧・楔形石器　漁労具としての石錘・土錘などがしゅつどしており、麓の村と連携

して村が存立していたことがうかがえる。　鉄製品も鉄滓・板状鉄器など１０数点出土しているが、残念ながら時期は明確でない。

男鹿島　大山神社遺跡　発掘時の写真

「大山神社遺跡」　2006 年　家島町教育委員会・岡山理科大人類学研究室より

播磨灘の中央に浮かぶこの島がちょうど九州から瀬戸内海を通って　畿内に入る入り口にあり、３６０度瀬戸内海を見渡せる眺望の良さが遺跡を形成した要因の一つであると考えられます。瀬戸内で何か変化があればすぐわかり、また、この地で狼煙を上げれば、直ちに四方に連絡がつく要衝の地である。戦乱の弥生時代中期から古墳時代を経て大和が国造りを進めてゆく過程、さらにはその後も瀬戸内の海道の要衝の地として重要な役割を演じただろう。

男鹿島を訪れてはっきりしたのですが、現在砕石による山の取り崩しが進み、遺跡へは行けない。

（島の人たちによると「山ノ神」の境内はもう落ちてしまっているという。そして、「山ノ神・大山神社」は山の南東山麓の田　の浜の集落に移されている）

現在の男鹿島　頂上部　タテイワ周辺より

2.　家島群島　男鹿島を訪ねて　2006.8.1. & 8.4.

飾　磨　港

8 月 1 日朝　姫路飾磨港から船に乗れば簡単にゆけると思って飾磨港に行くと男鹿島を経由する船は出たところで、昼まで船はないという。また、船会社の案内所で聞いても遺跡なんか知らないという。それならば　坊勢へいって、母と子の島(西島)のコウナイ石を見に行こうと話をするも　そっちも　現在　西島へは県立母と子の島施設へ行く人だけしか乗せないという。理由は採石場で危ないからだという。母と子の島へ連絡しても同じ答えで、もし行くならば　坊勢で船を雇えという。
出だしから　びっくり。昼まで待たねば仕方がないのか・・・・・・

男鹿島へ行って後でわかったのですが、もう　海岸から奥まで島全体が砕石きり崩されていて、道がなく、海岸を伝って歩くのも採石場の中　大型砕石トラックと砕石の山を縫うように歩かねばならない。西島もコウナイ石の周辺も事情は同じと後で家島役場が運営する群島間の公共連絡船の人が教えてくれた。

砕石場の大規模な山崩しは山口県美祢の宇部興産石灰山崩しで知っているつもりでしたが、本当に唖然とすねほどすごいですね。考えて見れば　この数十年　関西空港・高速道路網整備・本四架橋そして大阪の最開発と大型プロジェクトが目白押し。都市開発の裏での自然破壊というか地方の犠牲をまざまざと見た感じです。

約 10 数年前からの大規模砕石採取　この周辺の砕石がみな関西の大規模開発を支えたのだから・・・。
この時はまだ知らなかったのですが、訪ねる大山遺跡も山の頂上から 360 度瀬戸内海を見渡す景観も砕石の中に崩されてしまって　行けなくなってしまっていました。

男鹿島　　海岸線から山の上まで　すべて採石場だった

昼まで　船を待つ覚悟ですぐ隣の埠頭で小さな貨物船が小荷物受付の看板を出して荷物を積み込んでいる。
「どこまでゆくの」と聞くと「坊勢までの生活物資の運搬定期便で男鹿島にも立ち寄る」という。
「男鹿島まで乗せて」と頼んで　軽トラで食料品を男鹿島まで届けに行く人の助手席に乗せてもらって、男鹿島へ。

飾磨港で家島群島への物資輸送の定期便に載せてもらう　　2006.8.1.

考えてみれば　無謀なんですが、島のどこに着くかもわからずです。
「男鹿島の一番山の頂上　瀬戸内海を360度見晴らす場所があるのでそこへゆく」というと　みんな寄ってきて、「道なんてないよ・・・・歩くの???」とさも珍しそう。
「　灯台の一番高いところで　おろしてやれば・・・・・俺の車　海岸にほってあるから　それのって行けよ」といろいろ教えてくれる。「車貸すって・・・・」とそのときは気にも留めなかったのですが・・・・・

播磨灘の中央から　赤穂・相生・姫路の海岸線を見る　新日鉄広畑の煙が遠く見える　2006.8.1.

姫路の海岸　新日鉄広畑

男鹿島

晴れてはいるのですが、かすんでいて　遠くの景色がかすんで見えるのですが、海岸線の煙突の煙だけが鮮やかに見える。明石海峡が見えるときがあるというのですが、肉眼では確認できず。
　飾磨から20分ほどで前面岩肌をさらした男鹿島が見えてくる。周りの島がみんな緑にかすんでいるので、本当に異様である。　あの島影の右のところがどうも頂上　あそこにかつて　弥生時代　「戦さ」に備えた瀬戸内海を見下ろす集落があった。　かつてはそうでなかったでしょうが、その姿は海に浮かぶ要塞そのものの感じである。
どんどん　島が大きくなってきて、島の東側にすこし回りこんだ海岸に進んでゆく。
見えるのは　岩肌をさらけ出した断崖を背に採石場のみ。　採石場の荷降場みたいなところに船が着いて、私を乗せてくれた軽トラー台だけが降りて、船が離れてゆく。　ひっそりとしていて　誰もいない。
　電話で注文を受けて軽トラで採石場をめぐりながらその事務所などに荷を届けるのだという。

男鹿島　北側海岸　青井浜周辺の採石場桟橋から上陸　　2006.8.1.

道はあるようでなし。通れることは通れるのですが、それこそ曲がりくねった凸凹の工事現場の中を海岸線に沿って中に入ったり、海岸に出たり。すさまじい。すぐそばに削りとられた崖　砕石の山が並ぶ。

青井浜を越えて東側海岸沿いを南に回りこむ　採石場の中のドライブ　　2006.8.1.

何度か砕石場の事務所に止まって、海岸から灯台への尾根越えの道に入り、その頂上でおろしてもらう。
「気をつけて行きや　　峠を降りたら　集落。　道はこんな状態だけど　採石場を縫ってゆけば　連絡船の港へ出れる」と峠を下ってゆく。
　一服して　コピーしてきた地図を広げて場所を確認する。地図といっても島の輪郭線があって　島の頂上への道が点々で 3 本ほど書いてあるだけである。来る時に青井浜の小さな集落通ってきて、灯台の位置がわかるので場所がわかる。
　灯台へ行ったが　樹木の中で　あまり周囲がよく見えない。
　わずかに乗せてもらった軽トラが超えていった西側が見え小さな集落　田の浜が見える。ちょうど島の南海岸である。

男鹿島の地図と　海岸の WALK ルート図
結局 8.1.と 8.4.と二回歩きました

灯台から西側　田の浜から採石場に占有された大崎

峠に戻って　西や北の山並みを見るが、ここからは頂上部への道がない。　　峠から島の頂上の方へ道があるが、少し登った給水塔のところで終わり。
田の浜には「山ノ神」を降ろして大山神社が移されていると教えてもらったので、一旦田の浜へ下る。途中登る道があれば登ってゆこう・・・と。
頂上部近く山の斜面を切った道が見え隠れするのですが、どうもゆけない。道を探しながら結局　田の浜の海岸　廃校跡まで来てしまいました。

峠から南の灯台

峠から西側の山並みと下り道

田の浜は湾になっていて砂浜が広がり、反対側の北側はちょうどコの字型に島中の央の山から尾根が張り出し海

に落ちている。東が灯台のある尾根で西の尾根は採石場になっている。湾の奥に少し平地があり、10 軒足らずの家がある。しかし、まったく人影がない。湾から見上げる奥の山ここだけには緑があり、山の裏側そしてコの字型の尾根の反対側から、採石場が迫っている。　この集落の少し奥まったところに大山神社が移設されていた。

田の浜の集落　移設された大山神社周辺　　2006.8.1.

廃校跡　　移設された大山神社　　田の浜

よく晴れていて田ノ浜の海の向こうには鳴門・四国が見えるはずであるが、よく見えませんでした。
この集落から　島の頂上部へ登ってゆく道があるはずと大山神社周辺をあちこち歩くのですが、道はなし。立派な神社が建てられているが、神社にも人はいない。集落の奥がちょうど谷になっていて、山々の中腹部に砂防堤が見えていて、その上の方が島の頂上部で、この谷を入ってゆくのだろうか・・・
浜からまっすぐ海岸を採石場に行く道とＴ字で奥の谷へ入って　峠越えで池の浜へゆく道がある。

田の浜から北側　島の頂上部周辺

この峠が地蔵峠でここからも地図では点々の道があるので、峠越えで池の浜　連絡船のあるタテノ浜の方へ向かう。　神社の横を小川に沿って奥へ入ってゆく。
何度か　車を見かけたのですが、また１台車が追い抜いてゆく。　やっぱりナンバープレートがついていない。朝から気になっていたのですが、走っている車にもナンバープレートがない。まあ　採石場の中を走るようなものなので、いい車を持ってきてもダメとは思っていましたが・・・・・　ナンバープレートがないということはこの島全体が私有地。　朝　乗せてくれた船の人が「俺の車もおいてあるから、乗っていけ」の意味やっとわかりました。

島の中はバックナンバーなしの車が現役で交通手段として使われている　2006.8.1.

浜から 10 分ほど奥へ入ったところで道は西に曲がり西の尾根を越えて池の浜への道になる。この周辺にも数戸の家があり、やっと人影を見つけて飛び込む。地図のコピーを見せながら田ノ浜から頂上部への道を聞くが、「知らぬ」という。　直角に道が曲がるあたりからそのまま小川沿いに伸びる小道があり、入ってみるが、もう廃道で先へ進めぬ。やっぱり　ここもダメか・・・・

あきらめて　元の道に引き返し、尾根の上に登ってゆく。15 分ほどで尾根の上地蔵峠に出る。峠にはお地蔵様が祭られ、木々越しに池之浜の海岸といっても採石場　振り返ると田の浜側の山々が見える。田の浜からは一面緑しか見えませんでしたが、山と山の間に切り崩された岩肌が見える。
やっぱり、もう集落のある裏山部分を残して　島全周にわたって海岸から中央頂上部まで切り崩されているとわかった。
ここからも島の頂上への小道の入り口があったが、やっぱり廃道である。ブッシュに覆われ　進めない。

池の浜&家島遠望　　地蔵様を祭る祠　　田の浜側　島の頂上部
地蔵峠からの東西の眺め　　2006.8.1.

田の浜から 30 分ほどで、地蔵峠を越えて　池の浜に出る。　ここもすごいスケールの採石場が海岸から山頂まで広がっている。

池の浜から連絡船の着く男鹿・タテノ浜までは島の中央部の断崖を見ながらの採石場歩き　2006.8.1.

ここから　連絡船の着く男鹿・タテノハマまで島の西海岸を浜伝いに採石場歩きが続く。海には家島がすぐ実の前にあり、坊勢・西島がその後ろにかすんでいる。反対の陸地側は幾段にも切り開かれた採石場の奥に島の頂上部　垂直に切り落とされた崖が見えている。　採石場の奥と海岸部の砕石置き場や桟橋の間をひっきりなしに大型の砕石運搬車が通るので　気を張って　採石場を歩かないと危なくて仕方がない。
頂上部の遺跡周辺を眺めている余裕なし。
　人が立っているたびに「あの頂上部にゆけないか・・・」と聞くのですが、働いている人は外から来ているからかもしれないが、「知らない」という。「乗用車のわだちを見つけながら　海岸部歩けば　船着場にいける」と親切に教えてくれる。
　船の時間　夕方までたっぷりあるし、家島を見ながらの採石場歩き。
　何か渡船を見つけて　向かいの家島に渡って、家島支所によって　資料と大山神社遺跡への道確かめよう。
人に出会うことが少ないので、資料なしで頂上部に行くのは難しいとつくづく思う

島の北側に回ってきたので、どれほど播磨灘がみえるか・・・と海に目を凝らす。

池ノ浜からタテノ浜への海岸沿い　播磨灘に目を凝らす　2006.8.1.

水平線のかなた　新日鉄広畑の煙が見える　写真中央

水平線を行く小さな船影の向こうにうっすらと播磨の海岸線の山々がかすんでいる。
その中に　うっすら垂直に立ち上る煙が視認できる。
どうも　新日鉄広畑の煙突の煙である。
ほとんどみえない状況でも白煙がみえるのは驚き。
やっぱり、狼煙は古代からすごい伝達手段であったろうと認識する。

田ノ浜からあっちへよったり、道草を食いながら約 2 時間ほどでタテノ浜。　ここが島では一番大きな集落で海水浴場が開設され、民宿や海水浴相手の店が狭い海岸沿いに並んでいる。姫路や坊勢からの船もここに着く。
ここに航路を持つ船会社がひとつつぶれたので、余計に不便になっている。船着場で海を見ながら時間つぶしと昼寝をしていると、若いお嬢さんがこの桟橋へ。
「姫路に帰るのだけれども　ここから　どこかに行く船あるのですか・・・」と聞くと「2 時過ぎに姫路　家島どちらにも船がある」という。びっくりして　飛び起きて　通常の航路にはないのに・・・と半信半疑だったが、きれいな船がやってきた。姫路と合併して家島町はもうなくなっているのですが、暫定的に旧家島町の役場がある家島と島々を結ぶ公共交通あり、男鹿島と家島を結ぶ船で、先ほどのお嬢さんと 2 人　貸切みたいなもの。と
　船の人に聞いても「もう 10 年ほど前　「山ノ神」を麓に下ろしたから　頂上への道どうなっているか・・・・」という。西島のコウナイ石も前に聞いたのと同じ答え。「案内者つけないと厳しい」という。
無料で 15 分ほどで向かいの家島の役場の前まで降ろしてくれた。

家島町の船で　向かいの家島へ

家島は家島群島の中心地で　島の湾の両側に家がびっしり詰まっている。また、この湾の中には数多くの砕石運搬船が停泊。漁港であると共に、運搬船の基地である。

家島湾と湾の両岸にぎっしり並ぶ家並み

桟橋のすぐ前に家島支所と公民館が並んでいる。家島支所で連絡とってもらって、資料を見せてもらいに公民館に行く。ここでも「山ノ神」に行くのは難しいという。男鹿島でもそうでしたが、みんな土地の人は「大山神社」といわず、「山ノ神」という。このあたりの人々が、海のどこからも見える男鹿山の頂上に強い信仰の念を持ち続けてきたことがよくわかる。

公民館で目的を告げると「大山神社遺跡」という立派な調査報告書を出してもらって、熱心に読ませていただいた。　づっと歩きながら　不安であった「大山神社の位置」「高地性集落としての遺構と平地の村」「遺物　特に鉄が出ていないか・・・」など調査報告書を30分以上眺めていました。

大部なので　部分的にコピーをお願いすると「研究目的だったら・・・・」と一部いただけることになって、本当に感謝です。この大山神社遺跡周辺には旧石器・縄文時代から人が住んでいたこと　それが　一旦弥生時代に麓の集落に降りて　また「戦い」の備えとしてこの山の頂上に人が住んだと・・・。

また中世の遺物として、瀬戸内海を往来した物資である中国製の青磁碗や畿内産の瓦器碗などが出土している。

やっぱり　古代からの瀬戸内海「海道」の要衝として重要な役割を果たしたこと明らかである。

夕方　資料をリュックに入れて、高速船で　男鹿島を見ながら姫路へ

それにしても　360度瀬戸内を見晴らせる頂上に立てなかったのは残念。

すばらしい資料ももらったし、島の北側　採石場側からの道の探査も住んでいないし、資料をよく読んでもう一度再挑戦しよう・・・と。

家島から姫路への高速船から見た男鹿島

● 8月4日男鹿島　頂上目指して　再挑戦

8月4日朝一番の船でタテノ浜・男鹿に到着。

「本当に頂上へ行けないのか・・・」あわよくば　頂上に立ちたい・・・・・と。

前回島を一周しているので様子はわかっている。　集落はこのタテノ浜と青井浜・田ノ浜しかなく、そこから以前は道が頂上に向かってついていた。今回は　集落で聞きながら　道探そう・・・と。

まず、船着場にいた古老に尋ねると「ここからの道はもう　大分前からない。神社は裏側の麓。もし　行くとしたら　青井浜までの採石場を登って行ったら　行けるかもしれない。」　と。

採石場では「もう　10年も前に「山ノ神」の周辺は切れ落ちたよ。ロープでも持って　よじ登らないと道はない。俺はここの人間やから　上に道あるように見えるがそこへ行く道がない」と。

青井の浜の古老は「青井の浜からの道も　地蔵峠からの道ももうないよ。　それこそ　垂直の崖をロープでよじ登らないと・・・・　本当に行くのやったら、後で捜索願だしといたる」と。

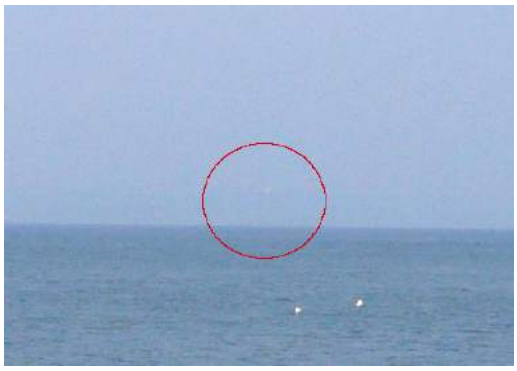
みんな行く先々で　ダメといわれながら　ついにまた　島を一周歩きました。

男鹿島　弥生の高地性集落「大山神社遺跡」のあった島の頂上部

3.　まとめ　弥生の集落遺跡「大山神社遺跡」を訪ねて　男鹿島 Walk

播磨灘の真ん中に浮かぶ男鹿島。　この島の中央の頂上からは 360 度瀬戸内海を見晴らせる場所。そこに弥生の高地性集落が存在すると聞いて、360 度瀬戸内海が見晴らしに行こうと軽い気持ちで出かけましたが、結局　目的は果たせず、すごい場所でした。

　島はここ 20 年にわたる関西のインフラ整備を支えた砕石の島。緑の島全体が丸裸の採石場に。山も道も海岸もすべてが砕石になり、海から見ると垂直に切り裂かれた断崖がまるで　岩のとりでのごとく海に浮かんでいる。
環境破壊の最たるものであるが、それが関西を支えた。今時　ナンバープレートのない車が自由に走り回れる所があるなど　本当に驚きでした。
おそらく昔は緑の島の海岸沿いに幾つも集落があり、どこからでも見える島の頂上に「山の神」が祭られ、周囲の村から「山の神」への道がついていた。この島全体が花崗岩の島で島の海岸から山の上までどこからでも砕石が取れる島であったことしかも海路ですぐに大阪に行ける。
このことが、この島を砕石一辺倒の島にかえたのだろう。集落も道も山も海岸線もみな採石場となり、わずか 3 つほどの小さな集落が海岸にへばりつき、砕石に関係しないと生活できない島になっている。
　海岸から山の頂上へ向かって砕石採取が猛烈ないきおいで進んだのだろう。約 10 年前に四方から頂上「山ノ神」への道も切り崩されてなくなり、　頂上部の「山ノ神　大山神社」も麓に下ろされると共に、頂上周辺も崖にとざされ、危なくて行けないところになってしまったという。したがって　360 度瀬戸内海が見晴らせ　弥生時代の高地性集落があったという頂上部へは行けなくなってしまいました。
関西の犠牲になった島といえないこともない。2 日にわたって　頂上へ行く道を求めて、海岸を 2 周しましたが、海を眺めながらの採石場めぐりでした。
後は　島をめぐりながら　海路はるかを遠視しながら、昔を創造せねば・・・・・・でした。
　相生・姫路の播磨の海岸線　明石海峡・淡路島　鳴門海峡から四国　小豆島　どこまで見えるのか???
興味津々でしたが、　2 日とも快晴の暑い日でしたが、遠く見る水平線・島影はかすんでいて、クリアーにそれぞれを認識することは出来ませんでした。しかし、水平線の向こうに見えるか見えないか　かすかな播磨の山並みにまっすぐ立ちのぼる煙突の煙が見えました。
まわりがほとんど視認できない中　煙だけははっきり見えるのにはびっくり。やっぱり　狼煙は通信手段としてすごい手段。
この男鹿島の頂上の弥生の高地性集落の一番高いところにも烽火台の跡が見つかっている。
麓の集落のみならず、海に出ている人々　海路はるか播磨　淡路四国の村々にも連絡を取っていたに違いない。



頂上に立てませんでしたが、島をめぐって 360 度瀬戸内海の景色を見れるところは　ここしかなし。すばらしい景色と採石場を余すところなく見ることが出来て　おもしろい Walk が楽しめました。
でも　遠ざかる男鹿島の均整の取れたというと怒られるかもしれませんが、島の頂上部を形成する山並みを見ていると　やっぱり　山の上に立てば　どんなにすばらしいか・・・と恨めしくもありました。

頂上部にあった弥生の高地性集落「大山神社遺跡」については家島町・岡山大学の立派な調査報告書が出ており、その報告と walk とを重ねながら想像するしか仕方がない。

　旧石器時代の遺跡というと遠く　関東・秩父・東北の世界と思っていましたが、この男鹿島の頂上部から旧石器時代のナイフ状石器や縄文の石器も続々。そして　弥生の石器も・・・・・。
その精密なつくりに驚かされる。ちょうど姫路埋蔵文化財センターで大山神社遺跡の出土品が一部展示されていて　その現物を見ることが出来ました。また　この遺跡からは 10 数点の鉄片や鉄滓などが見つかっているが、詳細は不明である。
旧石器から縄文時代　頂上部は狩猟場として都合がよかったのだろう。弥生時代になると一旦頂上部から人の痕跡は消え、海岸部にいくつかの集落が出来る。そして弥生の中期　再び　この山上に麓の集落と連携して高地性集落が現れる。その数６から 10 軒の竪穴住居と掘っ立て柱建物　そして一番高台に烽火台があった。
おそらく周辺の「戦さ」への備えだったのだろう。そして、国がまとまってゆく古墳時代になるとまた、人の痕跡は消え、中世にまた、人が住む。この 360 度瀬戸内海を見晴らせるという地の利がこの島の頂上部に戦乱の備えとして人を住まわせたのだろう。

播磨灘の真ん中にあって、要塞のような均整の取れた台形の島の頂上部に立てば、四方は我が手に在り　といった気分にもなったろう。畿内の入り口にあって、本当に重要な場所だったろう。

男鹿島からの烽火が視認できると考えられる播磨の集落

男鹿島　大山神社遺跡　発掘時の写真

【参考資料】　大山神社遺跡　　2006 年 3 月　兵庫県家島町教育委員会・岡山理科大学人類学研究室

12.

弥生の高地性集落【3】

幾内と播磨の境　明石川・伊川流域の明石平野は弥生時代から開けた地

弥生の高地性集落「表山遺跡」とその下に広がる弥生の集落群を訪ねて

明石川流域は明石平野の西縁の丘陵地を南北に流れ下り、明石海峡に注ぐ流域で本流の明石川と支流の伊川谷川、櫨谷川である。

この流域は弥生時代からよく開けた地域として知られ、例えば、弥生時代の最も早い時期に拓けた吉田遺跡、6 世紀の大壁造りの建物（窯業など高度の技術を持つ渡来人の住居）が発掘された寒風遺跡、弥生時代中期初頭から古墳時代後期までの玉造り工房跡のある新方遺跡、「日本書紀」に見られる億計（おけ・後の仁賢天皇）、弘計（をけ・後の顕宗天皇）王子の物語が残る押部谷を中心とした地域などがある。

弥生時代　鉄器が入り　稲作水田の展開と共に地域集団が発生して　それがだんだん国の性格を持ち、最後に大和王権に集約されてゆく。幾内の西端にあって　弥生の初めより発展していった明石平野の変遷を見れば、そんな　日本の国づくりの歴史が鮮やかに浮かび上がってくる。

■　明石平野の変遷

1.　弥生時代　稲作のはじまり

鳥獣を追い､木の実を採取して暮らした縄文時代､明石平野一体はまだ水草が生い茂る湿原に過ぎなかった。ちょうど　今から 2200 年ほど前　大陸・朝鮮半島から稲作の技術や鉄・青銅器をたずさえて、日本列島にやってきた人たちがいた。弥生時代の始まりで、北九州の一角から東へ進み、この新文化はまもなく明石平野や大阪に及ぶ。(「今から 2800 年前　縄文晩期後半と位置付けられている時代から弥生時代早期が始まる」とするとする説が最近　話題となり、検証が進められている。)

北九州から瀬戸内海を東進してきた弥生文化（青銅器、鉄器、水稲耕作など）の担い手たちは、近畿の入り口である明石海峡に到達し、まず明石平野の西縁にあたる丘陵地に沿って流れる明石川に沿って住み着き、近畿地方で最も古い弥生時代の集落を形成し、明石川流域の湿地帯はやがて豊かな水田になった。

吉田遺跡は弥生時代前期前半を代表する遺跡で、その人たちの営んだ村落跡である。

出土土器は、カメと壷であり、木ノ葉文様の壷が有名である。

木ノ菓文様の土器は、唐古（奈良県）からも出土し、銅鐸の文様にもなっている。土器の他に鉄板も発見されている。

櫨谷川流域は櫨（はぜ）というウルシ科の落葉広葉樹（実から蝋を採り、樹皮は染料となる）が多く栽培された谷間なので櫨谷とも、4 世紀初めから土師部（はじべ）がいて、陶器を造ったので櫨谷と云うようになったともいう。

須磨区白川付近から西流し，明石川に合流する伊川流域は伊川谷と呼ばれ、川筋に沿って　谷底平野が発達している。昔、伊川は蛇行し、少しの雨でも流れを変え「い」の字を描く「あばれ川」であった。そのため民家は川を避けて山裾に建てられた。

2. 邪馬台国の時代　高地性集落が明石平野の縁の丘陵地の上に現れ、平地の集落と連携して戦に備える

3 世紀のはじめ、弥生時代の後期　日本は 30 あまりの国に分かれ、もっとも大きな国が邪馬台国であった。邪馬台国が大和・河内にあったとする説に立てば、明石平野も邪馬台国の領域に含まれることになる。

池上口ノ池遺跡をはじめ、明石平野を囲む丘陵の上に営まれた弥生後期・古墳初期の集落は邪馬台国時代にたびたび起こった戦争と関係のある集落ではないかと思われている。

　　伊川と明石川の合流点近くに存在するこの時代の拠点集落　新方遺跡からは 3 体の石鏃で指された人骨が出土しており、この新方遺跡から伊川谷に少し遡った池上の中段地には新方遺跡からの移住と考えられている　池上口ノ池遺跡や低地の池上北遺跡　そして　北の丘陵地に頭高山遺跡などの集落があり、これらの集落を見下ろせる丘陵尾根の端に高地性集落　表山遺跡がある。

また、すぐ西の丘陵の上にも　高地性集落青谷遺跡があり、これらの高地性集落が下の平地の村と連携して「戦」に備えていたと考えられる。

3.　巨大古墳の時代へ

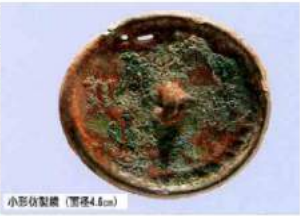
戦乱に明け暮れた邪馬台国の時代は統一王権を生み出す陣痛の時代であった。
畿内を中心に関東から九州北半分にいたる各地を配下に治めた大和の大王権はやがて海外へも進出するほどの強大な政権となる。
　大王はその富と権力を背景に巨大な墳墓を造営、各地の王（首長）もまた　これに習った。
古墳時代の始まりである。
明石平野にもこの地を支配する王が出現し、数々の古墳を残してゆく。
伊川谷のひさご瓢塚古墳　神出の金棒池古墳　玉津王塚台の王塚古墳はいずれもこの地を支配した王を葬った前方後円墳である。

戦いの後が見られる　明石平野　弥生の中心集落　新方遺跡　　王塚古墳

■　弥生の高地性集落　伊川谷　表山遺跡

弥生の高地性集落 表山遺跡

神戸市西区　伊川の中流西岸の弥生中期の高地性集落
海岸から北へ延びる伊川谷の西側淡路島から瀬戸内海を見渡せる尾根筋の上にある。
標高 56～86m の南向き斜面で竪穴住居7棟　段状遺構27ケ所　段状特殊遺構1ケ所が発掘された。段状遺構とは斜面を均して平坦地を作っているが、斜面であるため、盛土部が流され、半円型段状遺構として残っている。
段状特殊遺構からは吉備との関係をうかがわせる土器など弥生土器がまとまって出土。　また 長さ約 50m　幅4～6m 深さ最大 3.5m の環濠が見つかり、山の奥へ集落を巡っている。
また　この濠に橋が架かっていたと見られる橋状遺構があり、そこから　朝鮮半島で作られたとみられる小型仿製鏡が出土



伊川谷から明石海峡を見下ろす弥生の高地性集落　表山遺跡

弥生の高地性集落　表山遺跡から明石海峡を望む　橋は表山橋

弥生の高地性集落　表山遺跡より　伊川谷を眺める　写真中央を左右に伊川が流れる

伊川谷　弥生の高地性集落　表山遺跡　山の頂上部に環濠や青銅鏡などが出土

伊川谷池上　伊川　高松橋周辺より池上集落と旧物延べ神社の名がある惣社・池上の丘陵地

表山遺跡より　連携したと考えられる伊川谷の平地集落　池上口の池周辺

■　天王山古墳群

古墳時代前期（５世紀初めごろ）と後期（７世紀初めごろ）に、伊川を見下ろす丘の上に作られた　古墳群です。
方墳２つは古墳時代の初め、他の円墳４つと帆立貝式古墳１つは古　墳時代後期のものと考えられています。
鏡や剣など多くの副葬品（ふくそうひん）から、この一帯に大きな勢力　を持っていた豪族（ごうぞく）の墓だと考えられています。
360 度の視界が開ける明石海峡・淡路島・播磨灘の展望。残念ながら　大阪湾方面は垂水丘陵・須磨の連山にはばまれ見えない。
この地が攝津・播磨の国境であることよくわかる

■　瓢塚古墳

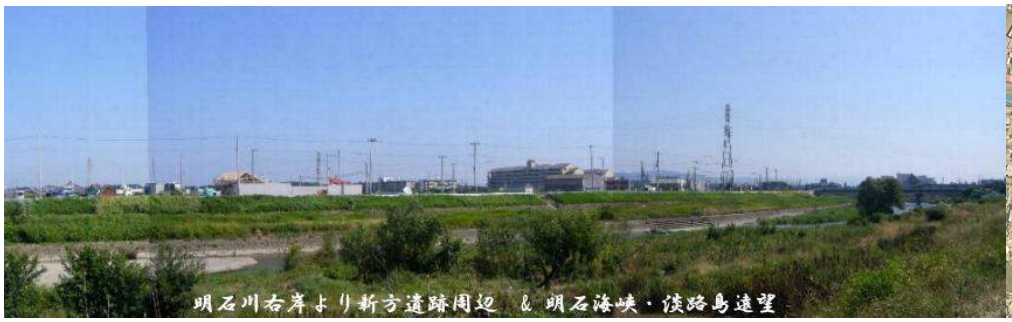
伊川支流右岸の標高６０ｍ薬師山山頂に位置する前期の前方後円墳から、一部盗掘されていましたが良好に遺存した粘土槨が検出されました。出土遺物は木棺内から鏡１、石釧９、車輪石４、ガラス小玉３００点以上、石製勾玉５、石製管玉４０がほぼ原位置で見つかり、配置状況を知る貴重な資料です。また、副葬品の内容から被葬者は女性である可能性があります。

■　玉津周辺の遺跡

■　伊川と明石川の合流点　明石平野　弥生の中心集落　新方遺跡

鏃の刺さった人骨が多数みつかった

新幹線ガード下すぐ南、明石川と伊川合流点の水田地帯、標高８～１０ｍの沖積地が新方遺跡である。
昭和４５年（１９７０）に発見されて以来、十数次に及ぶ発掘が行われた所で旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺跡が発見されている。
特に、弥生時代前期の人骨に多くの石鏃が突き刺さっていたことや、玉作り生産跡があったことで、注目を浴びている遺跡である。旧石器時代の出土品では、翼状剥片の石核がある。
弥生時代のものでは、大規模な方形周溝墓、近畿地方最古の弥生前期の人骨（一体には１７本の石鏃）、竪穴住居跡、玉作りの遺物が出土している。古墳時代では、多くの竪穴住居跡、水田跡、玉作り工房跡（原石・勾玉・菅玉・臼玉）が発掘されている。

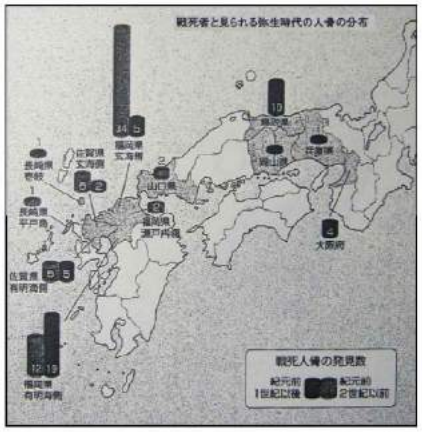


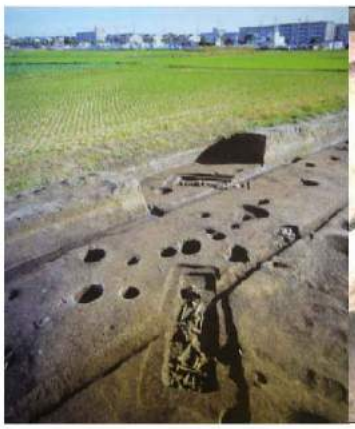
明石川の右岸住宅地に変わった現在の新方遺跡
瓦屋根の清水寺の手前で鏃の刺さった人骨など多数の人骨がみつかった。

弥生の戦　縄文から弥生への移り変わりを示す新方遺跡　18もの石鏃が刺さった弥生前期の人骨など多くの人骨が出土した

明石川と伊川の合流する地点の北側、標高８～10mの沖積地に位置する新方遺跡からは弥生時代前期（今から 2300 年前）から近世の遺構・遺物が発見されました。特に注目されるのは弥生時代前期の溝内に埋葬された３体の人骨。３体の人骨全てから石鏃（石で作られたやじり）が出土し、被葬者に射込まれたものと考えられます。これらの人骨は抜歯や足やすねの広い縄文の特徴とともにアゴの骨が小さいなど弥生の特徴も兼ね備え、両方の特徴を持っており、縄文時代から弥生時代への移り変わりを考える上で重要な遺跡である。

1. 弥生の戦　　縄文人とし弥生人の戦があったのではなく　むしろ水利・農耕適地そして農耕道具・武器としての「鉄」を巡る争い
2. 縄文人と弥生人はお互いに融合しつつ、現代人に至る源日本人を形成していった。





明石川と伊川の合流点　弥生の低地の集落遺跡から出土した人骨

瀬戸内海沿岸および近畿・神戸の高地性集落

弥生の前期　農耕をめぐって、集落が争い　殺傷痕のある人骨が多数出土

出土した人骨の観察から　弥生と縄文の両方の気質を受け継いでいることが判ってきた

■　弥生前期の集落　玉津田中遺跡

玉津田中遺跡　弥生の集落　　イメージ図　　県立歴史民俗博物館展示より

玉津田中遺跡は、弥生時代前期前半に集落が営まれ、弥生時代全期間および古墳時代中期まで継続する。竪穴住居や掘立柱の建物を中心とした集落と、集落の北に隣接して、３０数基の方形周溝墓群と埋葬主体の木棺墓などが検出された。 また、耕地は主として集落の西側にあり、水路や畦で区画した水田が見つかった所である。

水田に残された足跡と土器に残された木葉・籾の跡

前期の竪穴式住居跡(A)

中期の壷棺(B)

水田跡　畦の断面??(C)

中期の方形周溝墓跡(D)

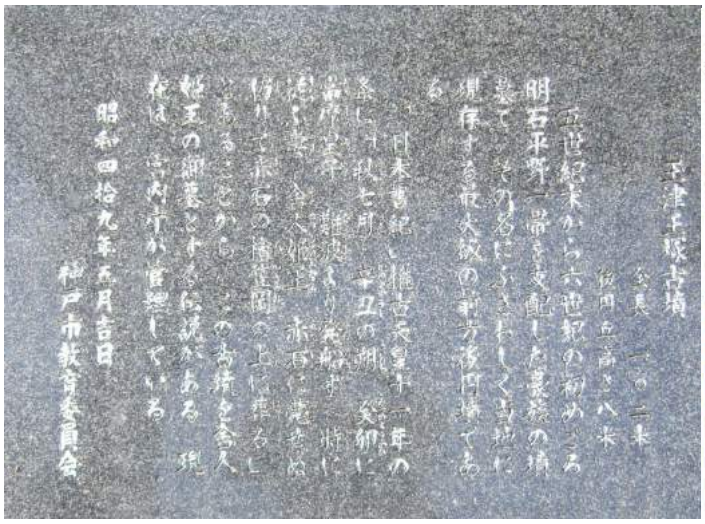
弥生時代の村と方形周溝墓（推定）

■　吉田南遺跡　弥生から奈良・平安・鎌倉時代に至る複合集落

海岸より 2km 上流　明石川の右岸　古代　播磨国明石郡　郡衙跡が出土

この遺跡からは、掘立柱の倉庫群、館とみられる廂（ひさし）つきの建物、厨家（くりや＝台所）とみられる、井戸をともなった掘立柱建物群が確認されている。播磨国明石郡はこれまで郡衛（郡の役所）の所在地が明らかでなかったが、水陸交通の要衝の位置を占めるこの遺跡が、郡衛跡であるとの説が有力になってきた。

■　玉津王塚古墳　　全約 100m の中期前方後円墳



「日本書紀」によると、推古天皇１１年(603)、征新羅将軍当麻皇子の妃・舎人姫王が薨去され、赤石の檜笠岡の上に葬られたと記録されている。しかし、実際はそれよりも古く、5 世紀末から 6 世紀初めごろにこの地を支配した豪族の墓であったと推測されている。もとは陪塚と考えられる３基の古墳があったが、今は、宅地化が進んで、それらは消滅している。

■　明石海峡を眺める高台にある兵庫県最大の前方後円墳　五色山古墳

まん前に明石海峡を望む垂水丘陵の端　畿内大阪湾側の要である

阪神間の背後に連なる六甲連山が須磨の海岸で明石海峡に落ちる。摂津・播磨の国境である。
このすぐ西側の海岸の高台に兵庫県最大の五色山古墳がある。

畿内へ入り入り口　大和王権の備えの要の位置にあり、大和王権に属する大豪族族長の墓であろう。
ところが、この明石海峡周辺にはそれを支える集落はなく、この大前方後円墳の主は何者か・・・

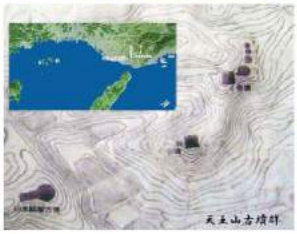
すぐ西の明石平野には弥生時代から開けたところで、数々の集落があり、この明石平野を支配する勢力がある。
古墳時代に早くから　大和の勢力化にあったと思われるが、その勢力は明石平野を取りかこむ丘陵地に古墳をきずいている。
どうも　この明石海峡周辺は明石平野の勢力からは離れ、大阪湾勢力の手にあったと考えられている。
　単純に明石の勢力などと考えていましたが・・・・・・・・・・・・・・・・・
詳細は謎であるが、その 1 案として　出土品などから　和歌山・和泉の紀氏との関係を考えねばならぬと五色山古墳の管理事務所で教えてもらった。
　北九州から大和へ　日本の国づくりが急速にすすんでゆく、古墳時代前夜　西日本では　中国・朝鮮半島を含めて　数々の文物　そして　人の交流が在り、それが　北九州と大和に集約され、また　全国へ伝播してゆく

鉄の伝来ルートも弥生の人の動きを見れば　鮮明になるのでは・・・と思って　弥生の高地性集落を調べ始めていますが、現在の考古学では　まだ　この瀬戸内での集団の動きを捉えきれていないと思う。
大陸　朝鮮半島からどんなルートで製鉄の技術我伝わったろう。また　大陸・朝鮮半島との交流が盛んであったこの弥生の中で製鉄技術以前の鍛冶技術がどのように変線していったのかも見たい。
最近の人類学と考古学の合体　微量分析機器の発達とその利用による科学的解析の展開などが　そんなところにスポットを当て始めており、いずれはこれらの謎が解けるだろうとおもう。
それまでは　古代は　まだ　ロマンの世界である。

写真アルバム　明石川流域　伊川谷・玉津に弥生の高地性集落と弥生の戦を訪ねて

伊川谷・永井谷への入り口の丘陵「天王山」古墳時代　明石平野を支配した首長の墓天皇山古墳群

西は播磨灘　南に明石平野・淡路島　東に舞子の丘陵地　北には奥へ広がる伊川谷の谷底平野　縄文時代から人の住み着いた明石平野
ここは畿内摂津と播磨の国境の地　大陸と大和を結ぶ海道の結節点　縄文・弥生から古墳時代へと日本黎明期の変遷を見続けた地である



天王山から明石海峡・大阪湾を望む 2006.9.19.

須磨で海に落ちる六甲西麓の丘陵地に阻まれて大阪湾の海岸線は見えない

天王山から表山遺跡を遠望　2006.9.19.

バックに横尾山から鉄拐山・鉢伏山と続く六甲連山の西端が見えている

摂津・播磨の国境　明石平野側からは舞子丘陵に阻まれ大阪湾側がみえない

ここが播磨側の国境であることがよくわかる

天王山からの播磨灘　遠　望

明石平野に突き出た丘陵地の山頂には弥生の高地性集落・この地を納める首長の墓が築かれた　この頂からは　どこまでが見張らせるのか　???
晴天の９月19日午前中　天王山の頂からは　遠く播磨灘に浮かぶ小豆島・男鹿山　そして　播磨の高御位山が視認で来た

弥生の時代から集落が営まれた伊川谷

伊川谷　伊川から北の頭高山・学園都市を望む　2006. 9. 19.

頭高山から南 伊川谷から明石平野望む　左手丘陵地　中央が弥生の高地性集落跡　表山遺跡

伊川谷の奥から伊川の谷底平野に広がる集落を見下ろす

弥生の高地性集落 頭高山遺跡

2006.9.19. 神戸市西区学園都市

弥生の高地性集落 表山遺跡

神戸市西区 伊川の中流西岸の弥生中期の高地性集落
海岸から北へ延びる伊川谷の西側淡路島から瀬戸内海を見渡せる尾根筋の上にある。
標高 56～86m の南向き斜面で竪穴住居7棟 段状遺構27ケ所 段状特殊遺構1ケ所が発掘された。段状遺構とは斜面を均して平坦地を作っているが、斜面であるため、盛土部が流され、半円型段状遺構として残っている。
段状特殊遺構からは吉備との関係をうかがわせる土器など弥生土器がまとまって出土。 また 長さ約 50m 幅4～6m 深さ最大 3.5m の環濠が見つかり、山の奥へ集落を巡っている。
また この濠に橋が架かっていたと見られる橋状遺構があり、そこから 朝鮮半島で作られたとみられる小型仿製鏡が出土

伊川谷の丘陵地より　平地の集落を見下ろす弥生の高地性集落　表山聚蚫遺跡

弥生の高地性集落 表山遺跡周辺より　伊川谷　池上口ノ池集落を遠望

弥生の高地性集落　表山遺跡周辺より　明石大橋・淡路島遠望

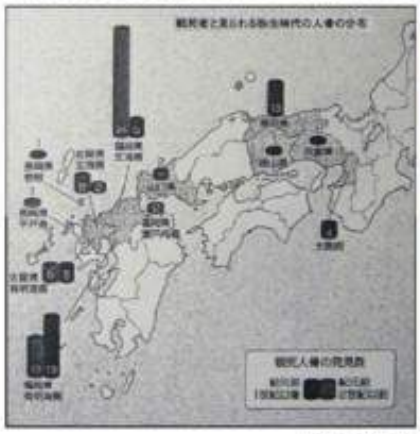
発掘当時の表山遺跡　　出土した環濠　　表山遺跡の航空写真

伊川谷の平地の集落をみおろす弥生の高地性集落　表山遺跡

弥生の戦　縄文から弥生への移り変わりを示す新方遺跡　18もの石鏃が刺さった弥生前期の人骨など多くの人骨が出土した

明石川と伊川の合流する地点の北側、標高８～10mの沖積地に位置する新方遺跡からは弥生時代前期（今から 2300 年前）から近世の遺構・遺物が発見されました。特に注目されるのは弥生時代前期の溝内に埋葬された３体の人骨。３体の人骨全てから石鏃（石で作られたやじり）が出土し、被葬者に射込まれたものと考えられます。これらの人骨は抜歯や足やすねの広い縄文の特徴とともにアゴの骨が小さいなど弥生の特徴も兼ね備え、両方の特徴を持っており、縄文時代から弥生時代への移り変わりを考える上で重要な遺跡である。

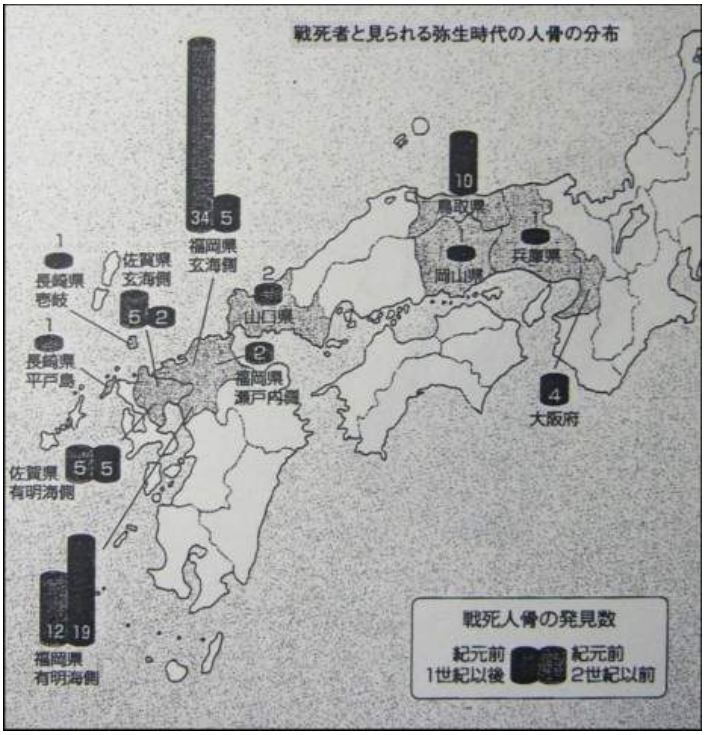
1. 弥生の戦　　縄文人とし弥生人の戦があったのではなく　むしろ水利・農耕適地そして農耕道具・武器としての「鉄」を巡る争い
2. 縄文人と弥生人はお互いに融合しつつ、現代人に至る源日本人を形成していった。

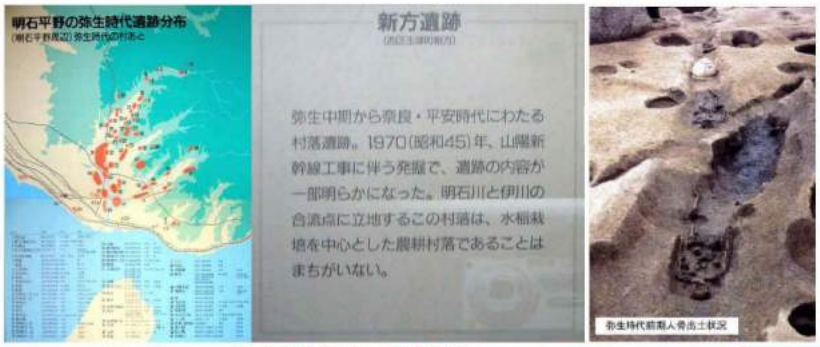


明石川と伊川の合流点　弥生の低地の集落遺跡から出土した人骨

瀬戸内海沿岸および近畿・神戸の高地性集落

明石平野　弥生初期の中心集落　新方遺跡　そこで17ヶ所も刺された人骨が出土





弥生中期から平安時代の複合集落

新 方 遺 跡

石鏃のささった
弥生時代の人骨3体が出土

場所は明石川と伊川の合流点
早くから稲作集落が開けた地
ここでも「弥生の戦さ」があった

弥生中期1世紀頃の出土品　　奈良時代の出土品

Iron Road【6】2006

13. 『水田稲作と鉄と倭国』 弥生の時代を作った渡来人たち 2006.9.7.&9.8.

写真アルバム 北部九州 魏志倭人伝の世界「壱岐・筑前・筑後の遺跡を訪ねて」

縄文・弥生時代から魏志倭人伝・卑弥呼の弥生後期 そして古墳時代とつながる日本の黎明期

大陸からの日本列島への入りであった北部九州

北部九州に鉄と共に水田稲作が伝わり弥生の時代が始まり、

数々の渡来の人達がやってきて日本の国づくりがはじまった

Country walk 北部九州 魏志倭人伝の世界

「壱岐・筑前・筑後の遺跡を訪ねて」

1. 筑紫五郎山彩色古墳 6世紀 古墳時代の円墳
2. 筑紫吉野ヶ里弥生遺跡 弥生時代 前・中・後期の集落
3. 筑紫東名遺跡 佐賀県巨勢川調整池 筑後 縄文草創期の貝塚群
4. 唐津 菜畑遺跡 縄文晩期・弥生早期 弥生の始まり 最古の水田跡
5. 壱岐への玄関口呼子
6. 壱岐原の辻弥生遺跡 魏志倭人伝「一支国」の中心集落
7. 壱岐の古墳群を訪ねて
8. 筑前金隈遺跡 奴国の心臓部 月隈丘陵

■ 写真アルバム PDF file

【北部九州 魏志倭人伝の世界 壱岐・筑前・筑後・筑紫の遺跡を訪ねて】

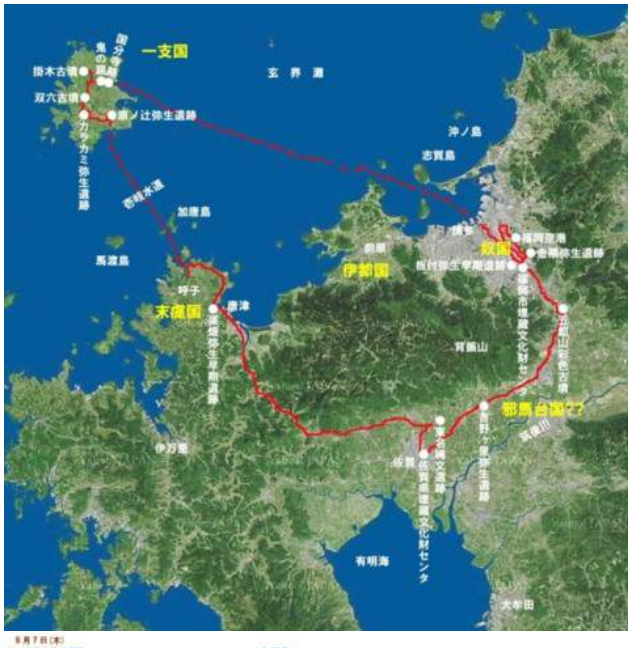
晴天に恵まれた９月７・８日 を縄文の仲間２０数名と北部九州 壱岐・筑前・筑後の遺跡 魏志倭人伝の世界を訪ねました。 また、私にとっては 大陸から日本に入ってきた「鉄」が日本をどのように変えていったのかを知るまたとない機会。

弥生の時代の幕開けを告げる最古の水田が見つかった唐津菜畑遺跡 以前より 一番いきたかった朝鮮半島と北部九州との中継地 壱岐 一支国の王都 原の辻弥生遺跡、九州邪馬台国の王都?筑紫吉野ヶ里 そして 奴国の中心を南北に伸びる丘陵地に眠る弥生の渡来人達の大墳墓郡と弥生の時代全体の流れを知ることが出来ました。

水田稲作と鉄と倭の国 弥生の時代を作った渡来人たちが今の自分たちにとってどんな存在なのか????

垣間見る楽しい旅でした。

いずれもよく知られた遺跡ですが、詳細をまとめるとなると膨大 簡単にはまとめ切れそうにないので これれらの遺跡について 「どんな場所で歴史が生まれたのか」そして「今 どないなっているのか」と私の興味のおもむくままパチバチ撮った写真を Country Walk 風にアルバムにまとめました。



北部九州　魏志倭人伝の世界「壱岐・筑前・筑後の遺跡を訪ねて」　概要

1.　筑紫　五郎山彩色古墳　　6 世紀　古墳時代の円墳

肥後菊池川流域の北　筑紫筑後川流域にも　　彩色古墳を作った謎の渡来集団がいた

福岡平野の南端　西側から背振山塊　東側の宝満山が迫る狭い丘陵地を抜けるとその南には有明海に注ぐ筑後川が東西に流れる広大な筑後平野が広がる。その境の丘陵地　筑紫野市南端から小郡市にかけての丘陵周辺には数多くの渡来人が住んだところ。そこにも古墳時代　熊本県菊池川流域と同じ石室に彩色画が描かれた謎の彩色古墳があり、立派な古墳館が建っている。ここにも石室の壁に色鮮やかに人物・動物・船・家などが描かれている。これらの絵はここに眠る人達の死後の世界・世界観を表している。

一番気になったのは石室の入り口　左右の石に描かれた石棺を積んだ船の絵。

私はこれら彩色古墳のあるところ　いずれも古代製鉄と関連する川の流域にあり、朝鮮半島からやってきた渡来の製鉄集団の根拠地と思っている。五郎山古墳の周辺には鉄の痕跡はまだ見つかっていないらしいが・・・・。

いまだ、よく判らないが　北朝鮮高句麗系の人達で　大和高松塚古墳やキトラ古墳などのルーツではないかと議論されている。

2.　筑紫　吉野ヶ里弥生遺跡

背振の山を背に卑弥呼の時代の王都を髣髴とさせる楼閣と環濠　まさに王都を思わせる弥生の集落

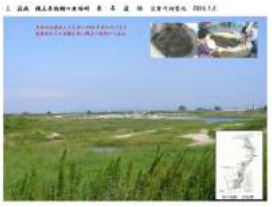
吉野ヶ里が背振山をバックに幾つもの楼閣が立ち並ぶこんな素晴らしい歴史公園になっているとは・・・・

まるで　映画のロケ地のセットを見るよう。楼閣に登って周囲をながめると眼下に広大な筑後平野が広がり、まさに王城。　卑弥呼の時代の繁栄がイメージされる。

この地の渡来系弥生人は福岡･山口に渡ってきた土井が浜人とは少し違って　大陸から直接やってきたのではないかと・・・・

3.　筑後　縄文草創期の貝塚群　　佐賀県　東名遺跡　巨勢川調整池

7000 年前　縄文の始まりの頃　もうここに集落があり、その頃の数多くの木製品・カゴ類などがおびただしい貝殻と共に出土



縄文時代の初めの 7000 年前頃この地は有明湾の海岸地帯の湿地帯。　ここには　幾つもの縄文草創期の貝塚があり、おびただしい貝類と共に湿地の泥の中に埋もれたおびただしい数の木製品やカゴ類が出土した

調査は今も続いていて、幸運にもどろどろの中からカゴを取り出す作業を見れました。佐賀平野を守る広大な遊水地の中　池の中に　沈んでしまうのか・・

背振山をバックに広大な佐賀平野がどこまでも田園地帯の青空が素晴らしい景色を作っていました

4. 菜畑　遺跡　　縄文晩期・弥生早期

大陸文化の先進地　唐津・「末盧国」　で日本最古の水田が出土した　　弥生時代の始まり

唐津市の丘陵地の山裾　市街地の中である。ここで鍬や石包丁・炭化米などと共に最古の水田跡が見つかった。

弥生時代の始まりである。今は新興住宅地の道路の下。復元水田に背丈の高い古代米が赤紫の稲穂を揺らしているのが印象的でした。

5.　壱岐への玄関口　呼子

呼子から壱岐へは　島伝い　数々の人達がこの海を行き来した

呼子は古代も今も壱岐・対馬の玄関口以前訪れた時は博多から。「島影の見えぬ玄界灘を本当に多くの渡来人が海をわたったのか ???」との疑問に思えました。

でも　呼子からは航路にずっと島影が見えて　この荒海を安心して渡れたろうと感じました。

壱岐への玄関口　呼子は佐賀県　壱岐は長崎県　長崎県から直接壱岐へは行けない。

今は呼子からフェリーで 1 時間ちょっと　博多から高速船で 45 分　近いもの。

6.　魏志倭人伝壱岐「一支国」の中心集落　原の辻弥生遺跡

日本の文化はみな　ここを通って伝来した

壱岐は一番高いところで 220m 海からみると本当に平坦な島に見える。ところが島に入ると魏志倭人伝にも書かれているごとく　小さな丘陵地が幾重にも島全体をおおう。魏志倭人伝に書かれた国で唯一王城の地が特定された「一支国」の王都　原の辻遺跡。　島の南東　かつては湿地であった周囲を丘陵地に囲まれた広い平地にあり、小さな岡を隔てて直ぐに東の海岸部で水路が通じている。原の辻には船着場があり、ここまで直接船が入ったという。

日本の文化はみなこの地を通って日本に伝来した。鉄の生産の出来ぬ日本へは大量に鉄素材が日本に持ち込まれたが、この地をかならずや　通ったろう。

今もこの原の辻遺跡は周囲を丘陵地に囲まれた田園の中にあり、発掘調査が続いている。

訪れた時にも　この遺跡の高台に祭祀の建物が復元中であり、また竪穴住居群や環濠の発掘調査が続けられており、学芸員の人に気楽にシートをあけて解説をしてもらえた。　　そのオープンさがうれしい。

「鉄」については　学芸員の人の話によると　あちこちで鉄器は数多く出土するが、鍛冶工房や製鉄炉の跡は不思議と出てこない。 原の辻にも鍛冶工房があったと考える向きもあるが、いまだ確証はないという。

竪穴住居群や環濠の発掘調査中の原の辻弥生集落遺跡

7.　壱岐の古墳群　を　訪ねて

大和王権の時代にも「一支国」の重要性は変わらない

多くの古墳が島の中央丘陵地に作られ　朝鮮半島と大和の交流を支えました。 古墳時代になっても　大陸・朝鮮半島との交流の中継地としての役割は重要性は変わらず。　しかし、ここを支配した首長たちはその本拠を原の辻から島の北部丘陵地に移し､そこに古墳を築いている。大和からの支配の高まりで大きな支配層の交代があったのかも知れぬ

8.　筑前　奴国の心臓部　月隈丘陵には数々の遺跡がある

1.　金隈弥生遺跡　弥生通期　348 基の甕棺墓に圧倒される
2.　板付遺跡　　縄文晩期の水田跡　環濠が今もきれいに残る

国の中心地　月隈丘陵周辺

500 に近い弥生人が眠る金隈遺跡

弥生の尺度　板付式土器　板付遺跡

御笠川の東岸を南北に連なる月隈丘陵　奴国の心臓部に 500 に近い弥生人が眠る金隈遺跡

御笠川の東岸を南北に連なる月隈丘陵は奴国の心臓部　その中央部に金隈遺跡がある。
北部九州弥生時代の特徴的な墓制である甕棺墓を主とする墓地跡。標高30mの丘陵上に、前期から後期にかけて甕棺墓 348 基、土壙墓・木棺墓 119 基、石棺墓
2 基が営まれていた。土井が浜人と呼ばれる渡来系弥生人 400 年間の墓。その甕棺墓の数に圧倒されるこの遺跡ではありませんがこの北部九州に眠る渡来系弥生人の時代識別から　弥生人の村で人口爆発が起こり、縄文から弥生の世界への移り変わりが「戦い」というよりも「融合」によってきたことがわかってきた。

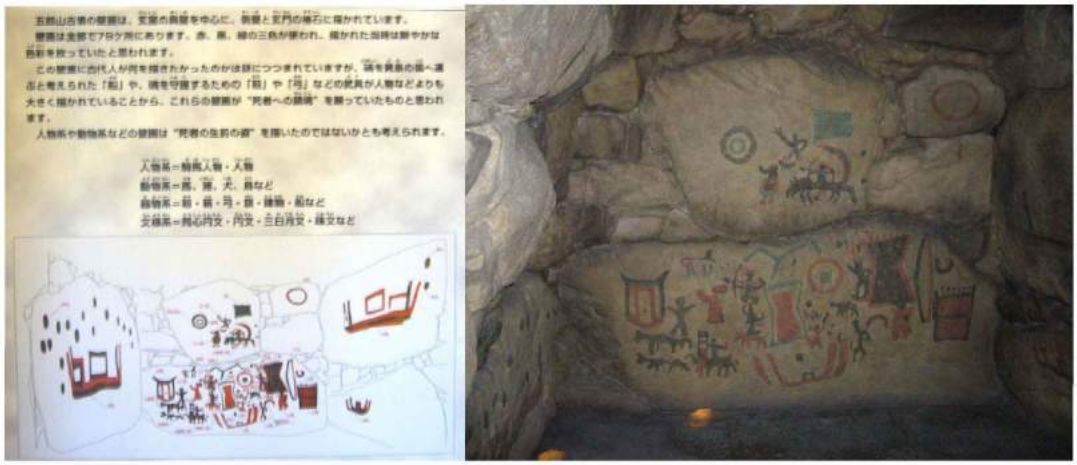
【参考】写真アルバム　PDF file

【北部九州　魏志倭人伝の世界　壱岐・筑前・筑後・筑紫の遺跡を訪ねて】

北部九州　魏志倭人伝の世界　壱岐・筑前・筑後を訪ねて　縄文の会　　2006.9.7、& 9.8、

1、筑紫　五郎山彩色古墳　6世紀　古墳時代

肥後菊池川流域の北　筑紫筑後川流域にも　彩色古墳を作った謎の渡来集団がいた



2、筑紫　吉野ヶ里弥生遺跡　背振の山を背に卑弥呼の時代の王都を驚嘆とさせる楼閣と環濠

筑後　吉野ヶ里歴史公園　2006.9.7.

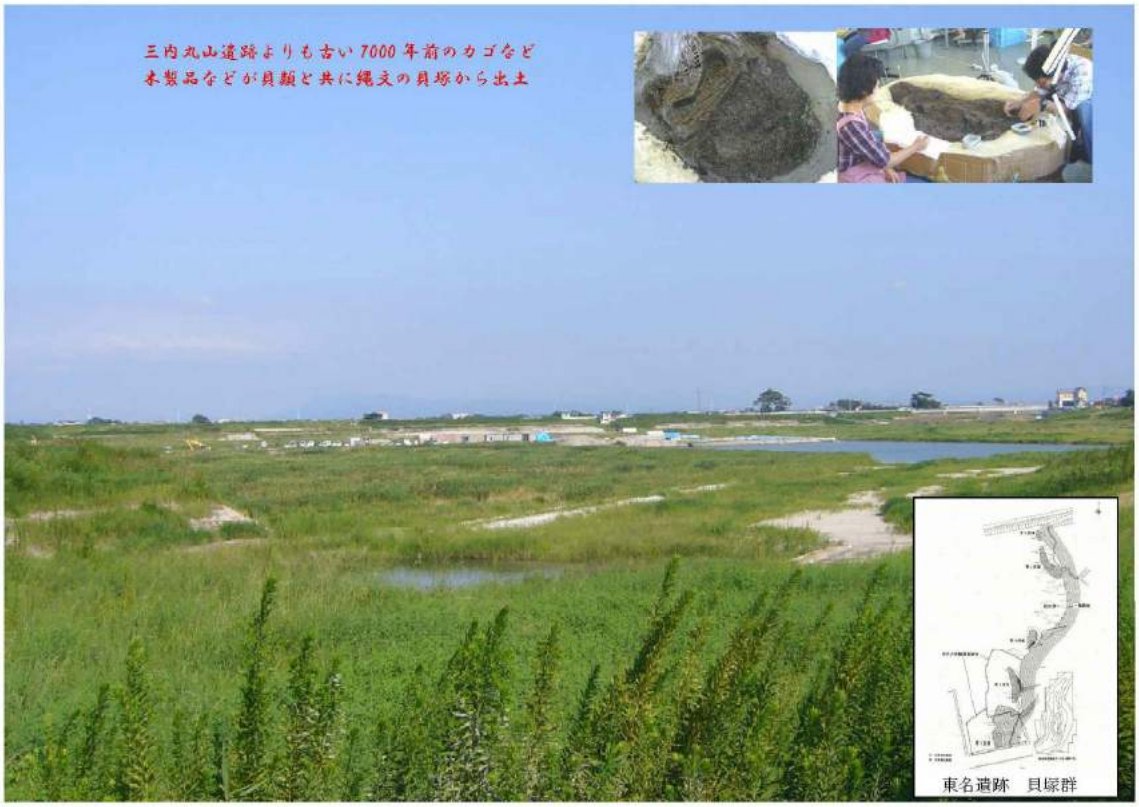
吉野ヶ里遺跡　南内郭と集落を取り囲む環濠

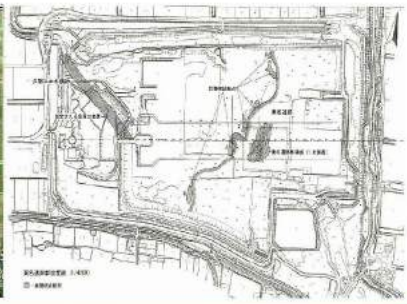
筑紫　吉野ヶ里歴史公園　吉野ヶ里弥生遺跡

吉野ヶ里遺跡　北内郭　祭祀の場

吉野ヶ里遺跡　倉と市

3、筑後　縄文草創期の貝塚群　東　名　遺　跡　巨勢川調整池　2006.9.8、





出土したカゴを土ごと切り出して洗出し作業と出土した縄文のカゴの一例

出土した貝類

黒曜石　剥片

4、菜　畑　遺　跡 縄文晩期・弥生早期　大陸文化の先進地　唐津・「末盧国」　で日本最古の水田が出土した

大陸・朝鮮半島どの文化の先進地「末盧国」の海岸に近い山裾に縄文時代の水田跡　今は都市計画道路の下に
でも　すぐそばの末盧館　復元水田では背の高い古代米が赤紫の稲穂をつけていました

5、壱岐への玄関口　呼子　2006、9.7.&8.

呼子海岸の夜明け　2006.9.8.

佐賀県　呼子の朝市　　2006.9.8.

6、 魏志倭人伝 壱岐「一支国」の中心集落　原の辻弥生遺跡　　日本の文化はみな　ここを通って伝来した

呼子からフェリーで島伝いに約1時間　呼子からは常に島影を伝いながら、海峡を渡れる　博多だと双は行かない
平野部は小さく、島のほとんどが小さな丘陵地で埋め尽くされ、意外と平地は少ない　島の最高点　岳の辻で標高 212m　平坦な島である
原の辻は島の南東部にある平地で、周囲を丘陵地に囲まれた島最大の平地部
弥生前期末から古墳時代に至る大集落　朝鮮半島と倭国の交流で栄えた一支国の中心・交易都市がある

壱岐　原の辻弥生遺跡　周囲を丘陵に囲まれた魏志倭人伝「一支国」の王都　朝鮮半島と倭の交易都市

8月8日　原の辻遺跡では　祭祀の建物群の復元　ならびに　住居跡　環濠跡の発掘がつづけられていました

7、壱岐の古墳群 を 訪ねて

大和王権の時代にも「一支国」の重要性は変わらない
多くの古墳が島の中央丘陵地に作られ　朝鮮半島と大和の交流を支えました

■ **カラカミ遺跡**　原の辻遺跡と並ぶ壱岐弥生の中心集落　祭祀の集落の性格

カラカミ神社のある丘陵の西側を南北にめぐる溝状遺構（環濠）が確認されており，そこからは弥生土器や石器をはじめ，占いの道具であるト骨（ぼっこつ）や，朝鮮半島の三韓土器，楽浪系の土器など，多数の遺物が出土しています。

■ **掛木古墳**　6世紀末
くりぬき式家型石棺の円墳

■ **鬼の窟**　6世紀後半
横穴式石室の　円墳

■ **双六古墳**　長崎県最大の前方後円墳　6世紀後半

8、筑前　奴国の心臓部　月隈丘陵には数々の遺跡がある

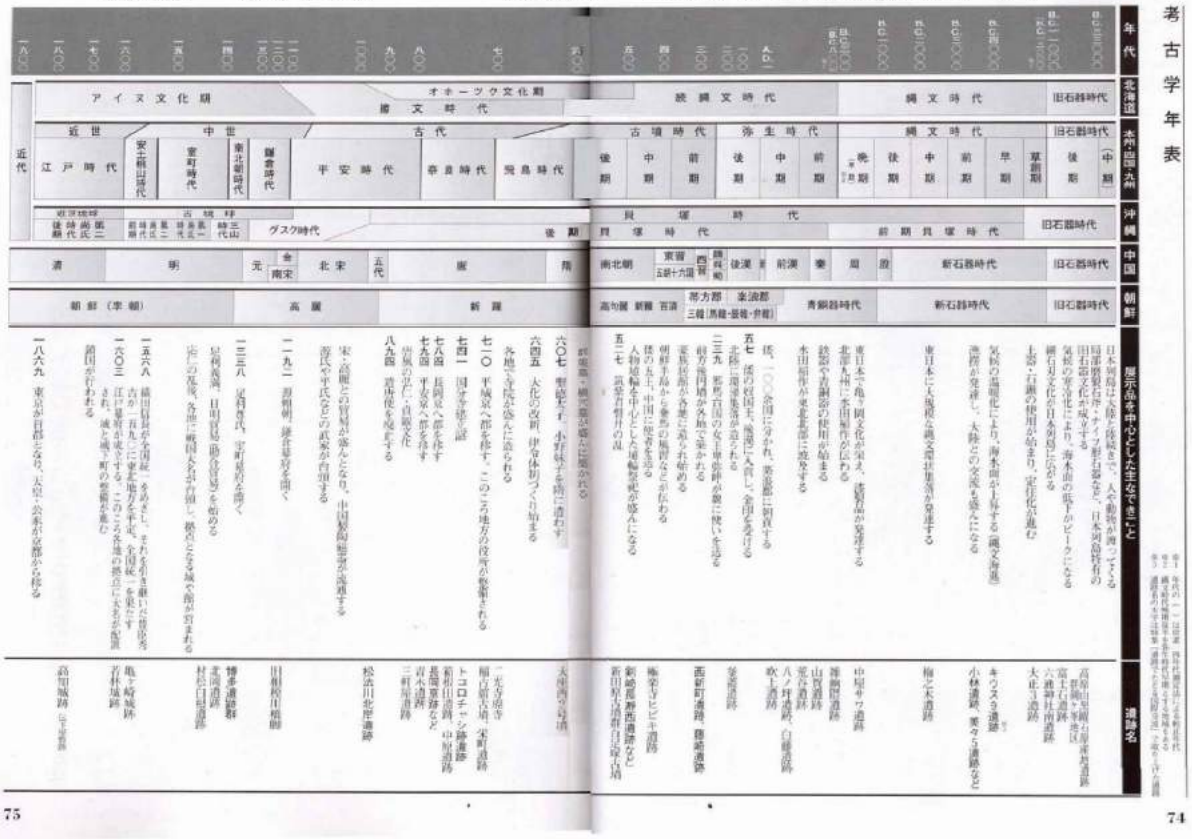
1、金隈弥生遺跡　弥生通期　348基の甕棺墓に圧倒される
2、板付遺跡　　縄文晩期の水田跡　環濠が今もきれいに残る

御笠川東岸を南北に月隈丘陵がつらなる　　縄文晩期・弥生の環濠集落　板付遺跡　弥生人の大共同墓地　金隈遺跡

■ **金隈弥生遺跡**　500に近い弥生人が眠る共同墓地　まだその集落はみつかっていないという・・

御笠川の東岸を南北に連なる月隈丘陵は奴国の心臓部　その中央部に金隈遺跡がある。
北部九州弥生時代の特徴的な墓制である甕棺墓を主とする墓地跡。標高30mの丘陵上に、前期から後期にかけて甕棺墓348基、土壙墓・木棺墓119基、石棺墓2基が営まれていた。
土井が浜人と呼ばれる渡来系弥生人400年間の墓。その甕棺墓の数に圧倒される

補足資料　考古学年表　　文化庁編　「発掘された日本列島」2006　より



「水田稲作と鉄と倭国」 弥生の時代を作った渡来人たち

写真アルバム　北部九州　魏志倭人伝の世界 「壱岐・筑前・筑後の遺跡を訪ねて」　2006.9.7.&9.8.

gishi00.htm　2006.10.5.　by Mutsu Nakanishi

縄文・弥生時代から魏志倭人伝・卑弥呼の弥生後期　そして古墳時代とつながる日本の黎明期
大陸からの日本列島への入りであった北部九州
北部九州に鉄と共に水田稲作が伝わり弥生の時代が始まり、数々の渡来の人達がやってきて日本の国づくりがはじまった

■ Country walk 北部九州　魏志倭人伝の世界
「壱岐・筑前・筑後の遺跡を訪ねて」

1. 筑紫 五郎山彩色古墳　6世紀　古墳時代の円墳
2. 筑紫 吉野ヶ里弥生遺跡　弥生時代　前・中・後期の集落
3. 筑紫 東名遺跡　佐賀県巨勢川調整池　筑後　縄文草創期の貝塚群
4. 唐津 菜畑遺跡　縄文晩期・弥生早期　弥生の始まり　最古の水田跡
5. 壱岐への玄関口 呼子
6. 壱岐 原の辻弥生遺跡　魏志倭人伝「一支国」の中心集落
7. 壱岐の古墳群を訪ねて
8. 筑前 金隈遺跡　奴国の心臓部　月隈丘陵

■ 写真アルバム　PDF file
【北部九州　魏志倭人伝の世界　壱岐・筑前・筑後・筑紫の遺跡を訪ねて】

【完】

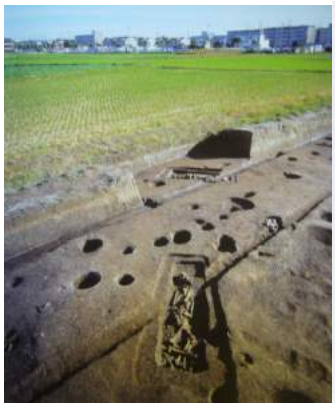
弥生の高地性集落【4】

14、　弥生の高地性集落に「弥生の戦」・日本人のルーツを探して　2006.10.5.

弥生の高地性集落【4】
弥生の高地性集落に「弥生の戦」・日本人のルーツを探して
1.　日本人誕生と弥生時代の展開
2.　農耕社会の展開と鉄の役割
3.　北部九州の甕棺墓が語る「弥生の人口爆発と戦さ」

神戸市西端の丘陵地　明石川流域の玉津・伊川谷・櫨谷　弥生初期から多くの集落があり、平野を見下ろす丘陵の上には高地性集落ここでも「弥生の戦」があった

神戸市西端の丘陵地　明石川流域の
玉津・伊川谷・櫨谷の弥生遺跡分布



石鏃が 17 ケ所も刺さった人骨
弥生中期/玉津新方遺跡

青銅製武器の刺さった人骨
弥生中期／玉津田中遺跡

本年７月　阪神間の弥生の高地性集落「会下山遺跡」を教えてもらってから　周辺の弥生の高地性集落集落に興味をもって調べている。
高地性弥生の高地性集落の本当の姿はいまだに良く判っていない部分が多いが、「戦の備え」。

表山遺跡

頭高山遺跡

神戸　伊川谷　弥生の高地性集落

弥生の中期　北部九州から瀬戸内沿岸の高台や瀬戸内海の島に出現し、その後規模を拡大して　日本各地に伝播し、大和の勢力が強くなると共に消えてゆく。山の高台の生業を営むには不向きな場所にあり、礫や石鏃などの武器やのろし台などが出土することから、平地の集落と連携して戦さに備えた集落と考えられている。
ちょうど　この弥生中期は弥生の人口が急速に増え、水田耕作が安定してその生産性を高めてわく時代であり、朝鮮半島からもたらされる鉄器もその実用性を増してくる時代である。
「戦を知らぬ縄文の時代」から　大陸・朝鮮半島からやってきた渡来人が「水田耕作の農耕文化」と「鉄」をもたらし、「弥生の戦の時代」をもたらしたと良く言われる。

「弥生の戦」
誰と誰が戦ったのか・・・・・???
また　その規模は・・・・????
弥生人が縄文人と大戦争をやった形跡はない
しかし　弥生人の東進とともに　縄文人は消え去った
縄文人は一体どこへ消えたたのか・・・・????
また　われわれ現代人のルーツの弥生人とは・・・
渡来人＝弥生人　????
まったく知らないことばかりないことばかりです。

「弥生の戦」といっても　自分たちの周辺にはなく、どこか　遠いところで起こったものと思い込んでいましたが、私の住む神戸須磨周辺　直ぐ西の明石平野を取り囲む丘陵地でも　高地性集落が谷筋の平地を見下ろす丘陵地の上に作られ、平地の集落では石鏃の刺さった人骨が出土する。阪神間や大阪湾周辺のあちこちの弥生遺跡からは武器の刺さった人骨が数多く出土しています。
本当に身近なところで　「弥生の戦」が起こっている。びっくりです。
弥生の後期　大量の鉄の武器を持って山陰に現れた巨大高地性集落　妻木晩田遺跡などは　巨大化した地方豪族の「国と国との戦」を思わせる。そして、戦乱の卑弥呼の時代を経て　大和王権の時代へと繋がってゆく。
このような国と国との戦争は古事記や風土記を通じて　何とはなしに理解できるのですが、それ以前に「戦」は始まっており、その「戦」については全く判らない。　そして　この戦を通じて　現代日本人のルーツが固まってきたというのに・・・。また、弥生時代の生業である水田耕作や弥生の戦に果たした鉄の役割も大きいだろう。
「弥生時代というと遠い昔　ついつい　直ぐに　卑弥呼・邪馬台国　そして大和へ」　と行ってしまって　知らないことが多い。そんなことで、「本当に身近なところで　弥生の戦が起こっている」をキーワードに神戸周辺の弥生の高地性集落をせっせと訪ね、弥生の戦　現代人につながる弥生人について　調べてみました。
弥生時代が最初にはじまる北部九州・壱岐の数多くの遺跡にツアーで行けたのも新しい知識を得られてラッキーでした　　正しいかどうか　判りませんが　私の私見を含め　PDF　file Ⅱまとめました。
「縄文人は弥生人の戦に敗れ、南と北の端に追いやられ　列島から消えていったのではないか????」とぼんやりイメージしていましたが、 どうも　そうではないらしい。 鉄が弥生の戦をもたらしたが、武器としてではない。鉄がもたらした水田耕作の文化が生産向上・人口爆発が戦さ・格差を生んだ。 弥生の戦から見えてくる日本人のルーツほか　現代社会を見る視点にも通じる事例を感じ取ってもらえれば　幸いです。

参考資料　「日本人はるかな旅　第５集　そして　日本人がうまれた」
神戸市埋蔵文化財センタ特別企画展示「神戸考古学 BEST50」
第 35 回尼崎市立田能遺跡資料館特別展「弥生の戦い」
兵庫県埋蔵文化財センタ　兵庫県埋蔵文化財情報「ひょうごの遺跡」

大阪湾北岸地域の阪神・神戸西部に見る「弥生の戦」の痕跡

神戸市	新方遺跡	集落	弥生前期	17 本の石鏃が刺さった人骨など石鏃の刺さった人骨３体
豊中市	勝部遺跡	集落	弥生中期	打製石剣の刺さった人骨
神戸市	玉津田中遺跡	集落	弥生中期	青銅武器鋒の刺さった人骨
愛媛小松町	大開遺跡	集落	弥生中期	石鏃製作工房
豊中市	勝部遺跡	集落	弥生中期	石鏃・石槍・石剣
芦屋市	会下山遺跡	高地性集落	弥生中期後半	石弾　石鏃　三翼鏃　鉄・銅鏃
神戸市	玉津田中遺跡	集落	弥生中期	木棺内折れた青銅武器鋒・石鏃　樹皮巻打製石剣
神戸市	表山遺跡	高地性集落	弥生中期末～後期初頭	環濠内から鉄鏃　石弾　石鏃　小形ボウ製鏡
神戸市	頭高山遺跡	高地性集落	弥生中期	のろし跡　石剣・石鏃など多数の武器

神戸新方遺跡　石鏃の刺さった人骨
弥生後期の大型集落　鉄製品を多蔵

大阪湾北岸地域の弥生の戦の痕跡
第 35 回尼崎市立田能遺跡資料館特別展「弥生の戦」より

高地性集落　会下山遺跡出土　石弾・鏃

高地性集落　頭高山遺跡出土　石剣・石鏃など武器

弥生時代後期　山陰の鉄

	刀剣	鏃	工具	農具	伐採	他	小計	不明	総数	備考
福岡	83	388	500	258	213	61	1503	243	1746	
熊本	17	377	189	158	45	37	823	1068	1891	
佐賀	26	47	91	85	69	19	337	28	365	
長崎	3	32	56	13	17	82	203	20	223	
鳥取	26	67	224	34	76	88	516	149	934	上寺地270
岡山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は県北部
兵庫北部	18	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南部	11	30	22	0	6	20	89	22	111	
京都北部	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大阪	3	32	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数
（藤田憲司「見えざる鉄器」『究班』Ⅱ２００２年９月を一部改変）

弥生時代後期　山陰の弥生集落

- 鉄と殺傷人骨が大量に出土した青谷上寺地遺跡
- 鉄を大量所蔵　巨大な高地性集落　妻木晩田遺跡

■　PDF file　弥生の高地性集落に「弥生の戦」・日本人のルーツを探して

1.　日本人の誕生と弥生時代の展開

「日本人はるかな旅⑤　そして日本人が生まれた」等より　整理

ある弥生のシンポジュームで「　暴論ではあるが、『弥生の集落の発掘調査で　渡来人つまり　半島の人々の骨ばかり発掘してどうする』　われわれが知りたいのは　今のわれわれの先祖だ」との発言があり、びっくりはしましたが、うなってしまいました。一般には「自分たちと渡来人とは別の存在だ」との空気が強い。
「海を渡ってきた渡来人と在来の縄文人とが融合して現代人につながる日本人が誕生した」ことは判っているつもりなのですが、渡来してきた弥生人はついつい異邦人と思ってしまう。
弥生人のルーツは紀元前7,8 世紀から4,5 世紀にかけて　戦乱の大陸から、北部九州を中心に水田稲作の技術と金属器・鉄の技術を持って海を渡ってきた渡来人であると考えられている。もし、弥生人が海を渡った人達が主とすれば、それこそ　すごい数の人達が、この頃　一気に海を渡ってこなければならない。
また、現代の日本人の資質は個人差はあるにしろ、ほぼ　縄文人３　弥生人７の資質をそれぞれの内に持っているといわれる。

「在来の縄文人はどこへ行ったのか　????・・・・・」
弥生時代　戦の痕跡はあるにしろ　はっきりとした縄文と弥生人の大きな戦いの痕跡は見られない。
今まで、この疑問にほとんど明快な回答が示されなかったため、常に上記の誤解がある。
答えは　すごい数の弥生人が大挙して　日本にやってきたわけでもなく
縄文人と弥生人が２つに別れて大戦争をやったわけでもないらしい。

渡来した弥生人が持ってきた水田稲作と鉄の技術が安定した定住生活を促し、
長寿命化・出生率の増加を生み、定住生活を始めた渡来系弥生人の村を中心
に人口爆発が起きたと考えるとこの疑問に答えられるという。
近年の発掘調査の結果もそんな証拠を提供するという。

当初　北部九州では　この人口爆発により、一定の地域でほとんどが弥生人になった時期もあるといい、水田耕作で定住した渡来人の集落では増加人口を養うため、さらに新しい耕地を求めて東進をはじめる。
一方　縄文人もこの弥生人の定住・水田稲作を学び、今までの狩猟採集の移動生活をやめ、次第に渡来系弥生人と融合しながら　縄文系の弥生人の集落も誕生する。
縄文人と弥生人が共同で作った集落も現れてくる。
そして、これらの集落が融合しつつ、２世　３世と代を重ねて　弥生の時代が成熟してゆく。

初期渡来系弥生人の集落　板付遺跡と渡来人が持ってきた土器　遠賀川式土器が在来の土器と融合しながら　東進する。　弥生の尺度である

日本で最初に古い水田耕作の跡が見つかったのは、九州北部　福岡の板付遺跡。この人たちの使っていた土器　遠賀川式土器の広がりを追うことで、渡来系弥生人の集落の東進の様子がわかるという。
一方　西日本では縄文系の集落が渡来系弥生人の集落と同時に存在することが出土する土器や人骨の調査から次第にわかってきた。
戦争などで一気に弥生の村に置き換わったのでないことが、わかってきたのである。

図１：稲作拡散図（括弧内は従来の年代観）

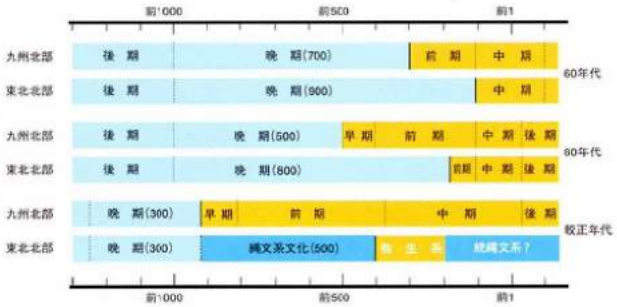


図２：縄文時代と弥生時代の変遷
年代が上がると同時に、拡散する時間が長くなっていることが見てとれる。

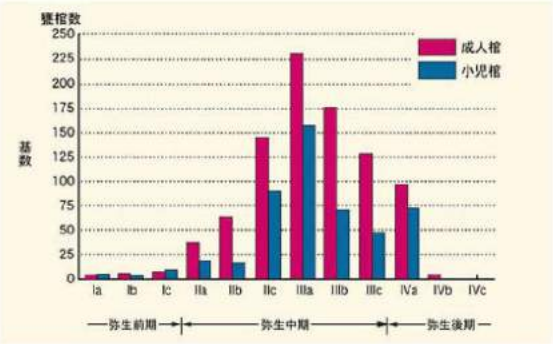
表１：炭素 14 年代の較正年代にもとづく縄文～弥生時代の実年代
（＊は年代を測定した土器型式）
www.rekihaku.ac.jp/.../hokoku05/b/b.html
時代区分と弥生文化の範囲　藤尾慎一郎より

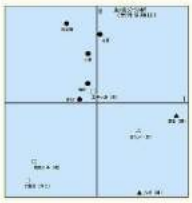
図７　東日本の縄文土器の西方への展開（紀元前４－３世紀頃）

東日本の縄文土器の西方への展開
紀元前３～４世紀
東の縄文人が西日本の農耕集落に入ってきている

西小田渡来系弥生人　縄文人　　土井が浜弥生人　中国山東省出土人骨

北部九州の渡来系弥生人





紫野市から小郡市にかけての地域には、集落や墳墓など、弥生時代の遺跡が密集して分布している。
筑紫野市南端部、小郡津古丘陵につながる隈・西小田地区には、弥生時代の大規模な墳墓群が見つかっている。

隈・西小田遺跡の時期別の甕棺墓数
弥生時代中期に入るとほぼ甕棺墓だけになり中期中葉にかけて急増する
北九州　筑紫野市南端部隈・西小田地区の甕棺墓数の変化　中期中葉の人口爆発が読める
（「渡来人のもたらした弥生の人口爆発」中橋孝博より）

隈・西小田地区遺跡群は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群で、各調査地点で弥生時代の甕棺と呼ばれる大型の土器に、遺体を納めて埋葬した墳墓群が出土。
数百基を数える甕棺の多くからは、何も出土しないか、人骨が出土するにとどまりますが、その中のほんのわずかな甕棺からは、中国前漢代の青銅鏡や青銅武器、玉類、ゴホウラ等の貝輪などのような、当時非常に貴重であった副葬品が出土いる。

（筑紫野市歴史博物館『ちくしの散歩 17　筑紫野のクニグニ』より）

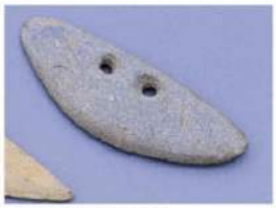
2.　弥生時代　農耕社会の展開　と　鉄の役割

インターネット　検索を中心に資料をぬきだました

「水田稲作」と「鉄」　大陸からの新しい技術・物資・人の流入

日本で最古の鉄器は福岡県曲がり田遺跡で出土した板状鉄器と熊本県斉藤山遺跡から出土した鉄斧で紀元前五世紀頃のもので、ちょうど弥生時代の始まり　日本で水田稲作が見つかる時期とほぼ同じ時代である。
いいかえれば、稲作の展開には鉄が不可欠であり、鉄と稲作の技術を持った人々が大陸から日本列島にわたり、鉄器文化・農耕文化の幕が開いたと考えられる。
弥生時代は農耕社会。各地の遺跡から様々な農具が出土しており、水田の跡も佐賀県唐津市菜畑遺跡、福岡県福岡市板付遺跡、静岡県静岡市登呂遺跡などで発見されている。また、農具は「土を耕す道具（鋤・鍬等）」、「収穫する道具（石包丁・鎌等）」、「脱穀する道具（臼・竪杵等）」に大きく分けられ、既に現在にまでつながる基本的な農具がほぼ全て揃っていた。
そして、弥生時代の前期には鋤や鍬も刃先まで木製であったが、中期以降、先端に鉄の刃先を装着するものが出現。収穫具も中期後半から後期になると石包丁など穂先を摘み取って収穫するものから、根元を刈る鎌に変化していった。

鉄製農具
（鋤先および鍬先・佐賀県吉野ヶ里遺跡出土）



収穫する道具
（石包丁・佐賀県吉野ヶ里遺跡出土）

このような農具の変化が農耕の更なる生産性の向上をもたらし、人口を爆発させ、小さな集落集団の社会から地域社会そして国へと社会を大きく発展させていった。そして、この過程で「戦さ」が起こり、その備えとして、集落は環濠をめぐらした大型集落・周囲を見渡し異変を監視する高地性集落を生む。

また、弥生時代は日本の国づくりの黎明期　大きな変革の時代であり、鉄器の幕開けの時代であると共に、中国・朝鮮との交流を通じて、東アジアの社会に登場する時代でもある。

■　弥生時代　各地の鉄器と鍛冶加工

弥生時代後期の鉄器出土数

	刀剣	鏃	工具	農具	伐採	他	小計	不明	総数	備　考
福　岡	83	388	500	258	213	61	1503	243	1746	
熊　本	17	377	189	158	45	37	823	1068	1891	
佐　賀	26	47	91	85	69	19	337	28	365	
島　根	3	32	56	13	17	82	203	20	223	
鳥　取	26	67	224	34	76	88	515	149	934	上寺地270
岡　山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は県北部
兵庫北部	18	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南部	11	30	22	0	6	20	89	22	111	
京都北部	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大　阪	3	32	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数
（藤田憲司「見えざる鉄器」『究班』Ⅱ２００２年９月を一部改変）

山陰の鉄

妻木晩田遺跡出土の鉄器群

青谷上寺地遺跡出土鉄器群

日本の鉄加工は九州の玄海灘沿岸で始まり、ここを中心に発展していく。九州のほかの地域は、弥生時代後期になると、玄界灘沿岸部とほとんど同じ完成された状態になる。その吸収で熊本県の鉄器の出土が非常に多く注目される。熊本県で鉄器工房跡が発掘された西弥護免遺跡は、４重の環濠を持つ大環濠集落である。
また、宮崎県延岡市でも、鉄器を加工した遺跡が見つかっている。
瀬戸内海の西部については、東北部九州に準ずる状態であるが、瀬戸内海東部は、生産の技術も密度も九州などに比べるとかなりの差があるということになる。
近畿地方でも、多くはないが、鉄器は出土する。しかし、大和朝廷発祥の地といわれる奈良県の鉄器出土は、かなり少ない。
山陰地方は、九州に匹敵するくらい鉄器の普及は、進んでいたものと思われる。
弥生時代後期の平田遺跡（島根県木次町平田）などの鉄器工房跡が発掘されている。
九州や山口では、高温溶解が出来る高性能な炉も出現し、鍛錬だけでなく、製錬まで行われていた可能性がある。
一方　弥生時代　日本での製鉄はまだ行われておらず、鉄の素材はほとんどすべて輸入品と考えられ、玄関口である玄界灘沿岸から離れた熊本県や山陰地方での鉄器の出土が多いというのは、独自に鉄を調達する経路を持っていたと考えられ、注目に値する。

《原の辻遺跡　鉄器・青銅器　　農具　》弥生時代中期後半（紀元前１世紀～紀　元前後）

上段左…鉄鎌　　右…鍬先
中段左…鉄鎌　　右…刀子
下段左２本…鉄斧　右２本…鍬先
（紀元前１世紀～紀元前後）

青銅製鋤先
弥生時代後期～古墳時代前期

鹿角製柄付刀子
弥生時代中期後半

『魏志倭人伝』に記載のある「一支国」の中心集落跡として知られる。多重環濠で囲まれた範囲は２４haに達し、大陸との交渉を裏づける土器、青銅器、鉄器等が多数出土している。これらの出土は，それぞれ北部九州地域と朝鮮半島南岸地域との交流を裏付けるものであり，『魏志倭人伝』で「南北市糴」と表現された両地域との交流の実態を改めて確認することとなりました。

弥生時代　レビュー　　大陸からの新しい技術・物資・人の流入による弥生文化の成立

鉄器の導入による大規模水田耕作の展開が社会をかえてゆく時代

前４世紀～後３世紀　　土器の様式からふつう３期に区分される
（ 早期　前 10 世紀頃～前５世紀　縄文晩期後半を遡らせて呼ぶ説もある　　）
・前期…前４世紀～前２世紀　　（前４世紀～前２世紀）
・中期…前１世紀～後１世紀　　（前１世紀）
・後期…後２世紀～後３世紀　　（後１～３世紀）

1. 水稲耕作の拡大

(a) 水田農耕の開始(紀元前５～４世紀＝縄文時代晩期)

夜臼式土器(縄文晩期の土器)と水田跡の共伴…例:板付遺跡(福岡県)・菜畑遺跡(佐賀県)

(b) 前４世紀初めには西日本に水稲耕作を基礎とする弥生文化成立

(c) 急速に西日本から東日本へ拡大(中期(前期末)には東北地方に達する、例:垂柳遺跡(青森県))

2. 金属器の使用…鉄器、青銅器の使用開始(ほぼ同時)

3. 大陸系磨製石器の登場

(a) 伐採・加工用石斧…太型蛤刃石斧(伐採用)、加工用石斧(扁平片刃石斧(手斧用途)、柱状片刃石斧(鑿用途))・

大型建築物の建築可能となり、高殿、楼閣建築の増加

(b) 石包丁(石庖丁)…穂首刈り

4. 機織り技術

■ 鉄器がもたらした水田農耕と戦さの始まり

大規模灌漑を伴う水田耕作を可能とし、また　戦闘の武器になったのが、鉄器

日本のルーツ　日本人形成のルーツ探し

鉄器導入による大規模水田耕作の展開は生産量の増大と共に人口増をもたらし、それがさらに灌漑設備の導入・新規耕田の開発をもたらし、集団がますます大きくなる。また、大きな水田の広がりは　灌漑・水利の争いをも生み、川筋を中心とした集団が強力なリーダーの下にまとまってくる。

それが更なる地域間紛争を巻き起こし、国を生み　国と国の争いへと展開してゆく。

弥生時代は「争い」の時代であり、日本各地に国が形成されてゆく時代である。

大規模灌漑を伴う水田耕作を可能とし、また　戦闘の武器になったのが、鉄器である。

大陸・朝鮮半島からの鉄器を持った農耕集団の度重なる大規模な人の渡来が　この変化を加速する。

水田稲作が日本に伝わったのは紀元前 4.5 世紀頃　鉄も早くに伝来したが、日本での製鉄・鉄製造は 5.6 世紀であり、鉄器の供給はそれまで朝鮮半島からの移入・供給に頼らざるを得なかった。当初　鉄は貴重品であり、水田耕作も木製や石の農具に頼らねばならなかったが、弥生の中期以降　朝鮮半島との交流が盛んになり、鉄製品が実用品として使われると共に水田農耕の生産性が向上。農耕集落・農耕社会での人口が爆発的に増加し、社会が変化してゆく。

そして、逆に鉄供給・支配が集団の力関係を大きく変え、大規模な国間の戦闘の時代に入ってゆく。

そんな中で　弥生後期には日本各地に数十の国が起こり、倭の大乱を経て　卑弥呼の時代へと入ってゆく。

「稲作」と「鉄」が日本に「戦さ」を持ち込んだといわれるゆえんである。

このように　時代を変えていった「稲作」と「鉄」そして　それを持って日本へ渡ってきた渡来集団が日本各地で在来の集団と融合交流しつつ、農耕社会を形成して、弥生の時代が展開していった。

ひとえに　「縄文人から　弥生人へ　そして農耕社会が人口爆発を生み、そして　延々と大和の現代人が形作られていった」といわれる。

最近の DNA 分析の展開の成果によると現在人の資質解析によると　多少それぞれのばらつきはあるにしろ　現代人は縄文人の資質 30%　残りの弥生人の資質 70%程度を受け継いでいるという。

鉄が弥生の世界にどのように受け継がれ、社会がどのように変化していったかを考えることは　日本のルーツ　日本人形成のルーツ探しでもある。

■ 弥生時代　水田稲作

弥生後期　農具として　鉄器が使われるようになり生産性が大きく変化

1. 農具

(a) 木製農具…鍬、鋤、えぶり、田下駄(湿田用)、大足(堆肥すき込み)、木臼・竪杵(脱穀用)

(b) 石製農具…石包丁(穂首刈り)　→　鉄鎌(後期)

(c) 農具製造用の道具 (加工用)磨製石器→鉄製工具(斧･やりがんな･刀子)の使用(後期)

2. 水田 (一般的な流れ、当初から確立した技術が伝播したという説もあり)

(a) 小区画水田　→　より大規模な水田(灌漑・排水設備完備)

(b) 湿田　→　乾田

湿田…地下水位が高く、常に冠水しており、排水施設が必要

乾田…地下水位が低く、通常は冠水していない、灌漑設備が必要(現在の水田)

冠水していないため、有機物の分解が早く、栄養分が多い

■ 主要遺跡

1. 菜畑遺跡(佐賀県)　縄文晩期の水田跡検
2. 板付遺跡(福岡県)…前期、縄文晩期の水田跡検出
3. 垂柳遺跡(青森県)…中期の水田跡が検出、稲作は中期には青森まで伝播
4. 登呂遺跡(静岡県)…後期の代表的遺跡、戦後の考古学は本遺跡からスタート
5. 百間川遺跡群(岡山県)…田植えの跡の検出

■ 弥生の集落

A. 住居

(a) 竪穴(式)住居、高床(式)倉庫、平地式建物(いずれも掘立柱)の増加

(b) 楼閣建築、高殿などの大型建築の出現…クニの支配者の住居、儀式の空間

(c) 物見やぐら　←戦争の存在

B. 集落

(a) 縄文時代よりも大規模化

拠点集落(環濠に囲まれるなどした大規模集落)の出現…

クニの中心　　通常は 20～30 戸か

(b) 低地に営まれるようになる　←水稲耕作

(c) 防御施設を備える集落の出現＝戦争の存在

・**環濠集落の出現**　例：吉野ヶ里遺跡(佐賀県)、唐古・鍵遺跡(奈良県)、池上・曽根遺跡(大阪府)、大塚遺跡(神奈川県)、板付遺跡(福岡県)、原の辻遺跡(福岡県壱岐)

・**高地性集落の出現**…例:会下山遺跡(兵庫県)、紫雲出山遺跡(香川県)

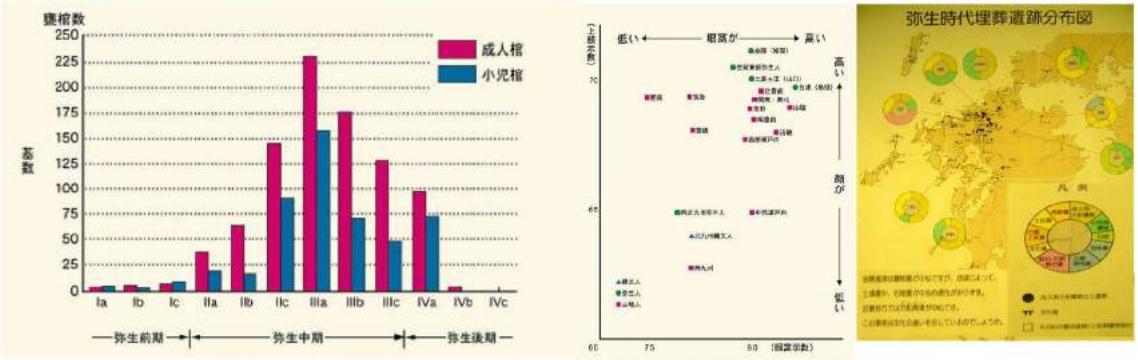
3.　北部九州の甕棺墓が語る「渡来系弥生人集落の人口爆発と戦」

甕棺墓は、甕・壺を棺とする墓で弥生時代前期～中期の北部九州で非常に顕著に見られる。
弥生時代前期　大陸から水田稲作と金属器・鉄技術を持ってやってきた渡来人たちが、北部九州に定住し、成人埋葬用に大型の甕棺を製造し始め、甕棺墓が定着。弥生時代中期に甕棺墓は最盛期を迎える。主として前原市付近、福岡市付近、佐賀県神埼郡付近などに分布。西日本各地に広がり、弥生時代末期にはほとんど見られなくなる。

筑紫野市南端から小郡市にかけての津古丘陵につながる隈・西小田地区の甕棺墓群の解析などから弥生時代の中期中葉九州北部の渡来系弥生人の集落で人口爆発が起こり、この地域での急速な縄文人消滅の理由と考えられ、この人口増加は農耕定住生活を営む渡来系弥生人の長寿命化・出生率の増加によるものと推定されている。一方、狩猟・採取の縄文人は寿命・出生率の低さゆえに、その数を急激に減らした。
そして、さらに　定住農耕を営む渡来系弥生人の集落が世代を重ねるにしたがって人口を急速に増やし、縄文人と融合しつつ、新しい耕地を求めて、西日本に広がっていったと推察されている。
また、在来の縄文人も渡来系弥生人の農耕生活を学び、狩猟・採取から定住の道を選び、縄文系弥生集落をつくる。
そして、次第に両者が融合して現代人につながる日本人が誕生したと考えられている。

福岡市金隈遺跡の甕棺墓群
大量の甕棺墓が時代別に印を付けて埋葬展示されている。個々では甕棺墓 348 基土坑墓 119 基人体 136 体などが発掘された

この弥生時代中期の急激な人口増加は農耕に適した耕地・水利をめぐっての「戦」を生じ、個々の集落間の争いから地域間の争い　そして　国間の戦へと展開。戦に備えるための高地性集落や人殺傷用の大型武器を生むことになった。
弥生の「稲作・水田耕作」と「鉄」とが「戦」を知らなかった日本に「戦さ」を持ち込んだといわれる所以である。



隈・西小田遺跡の時期別の甕棺墓数　　（「渡来人のもたらした弥生の人口爆発」中橋孝博より）
弥生時代中期に入るとほぼ甕棺墓だけになり中期中葉にかけて急増する北九州　筑紫野市南端部隈・西小田地区の甕棺墓数の変化　中期中葉の人口爆発が読める

●　吉野ヶ里遺跡の甕棺墓

吉野ヶ里遺跡では、600m もの長さに 2 列の甕棺墓列が発掘されたほか、丘陵の各地に墓地があり、これまでの調査で２５００基を超える甕棺墓が見つかっている。

●　筑紫野市隈・西小田地区遺跡群の甕棺墓

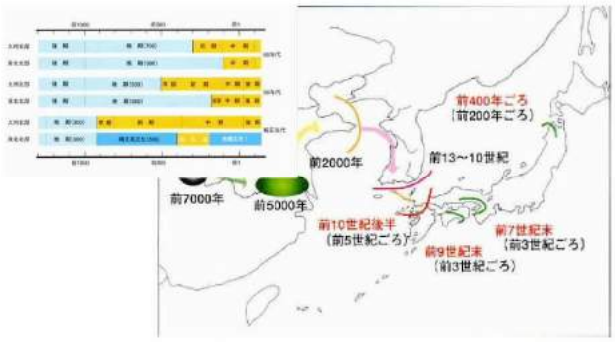
筑紫野市から小郡市にかけての地域には、集落や墳墓など弥生時代の遺跡が密集して分布し、筑紫野市南端部、小郡津古丘陵につながる隈・西小田地区の隈・西小田地区遺跡群は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群で、各調査地点で弥生時代の甕棺と呼ばれる大型の土器に、遺体を納めて埋葬した墳墓群が出土。この甕棺墓の数の年代別調査などから、弥生時代の中期中葉　渡来系弥生人の集落で人口爆発が起こっていることが推察された。

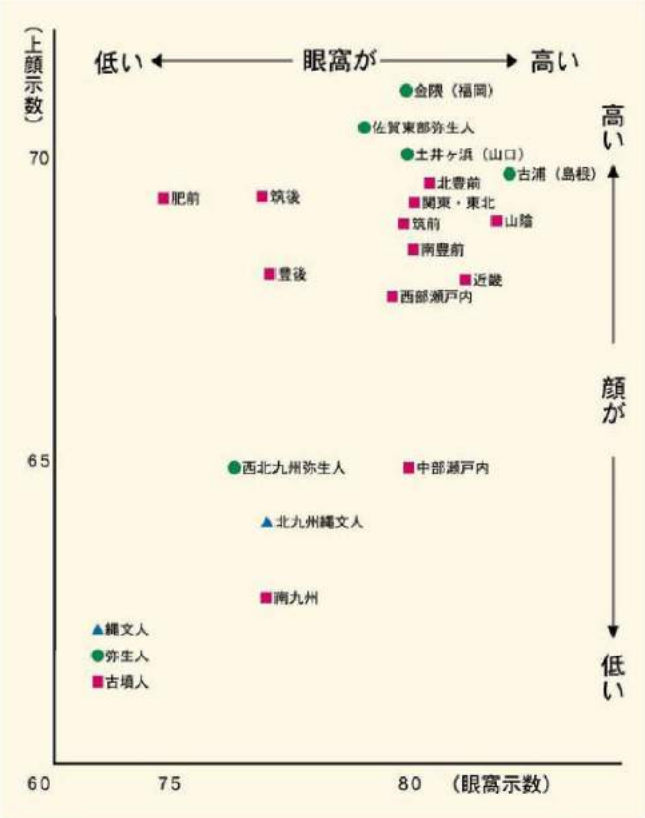
●　福岡市月隈丘陵　金隈遺跡

福岡平野の東部、御笠川に沿って南北にのびる月隈丘陵の中央　標高 30m の丘陵上にある北部九州　弥生時代の特徴的な墓制である甕棺墓の共同墓地。
弥生時代の前期から後期にかけての甕棺墓 348 基、土壙墓 119 基、石棺墓 2 基、人骨 136 体が発掘された。 唖然とする甕棺墓の数。時代別に送別された甕棺墓ごとに印を付けて展示されている。

1. 混 血 の 進 行

渡来的形質とされる顔の高さ、眼窩の高さ、梨状孔（鼻の部分の孔）の細長さを示す示数を軸にとって古墳人をみてみると、梨状孔は九州内では筑前から離れるほど横広になり、本州では北部九州と近畿・山陰を細長さの二つのピークとして中部瀬戸内が谷間のようになっているのがわかる。
また、関東・東北も同様な値であり、近畿からの流れで理解できる。
ところが、顔の高さは、九州内では南九州を除くとそう大差はない。
しかし、本州では梨状孔と同じく北部九州と近畿・山陰をピークとして中部瀬戸内が谷間のように低い。
逆に、眼窩の高さをみると、九州内では筑前と他の地域に差があり、本州では山陰・近畿が高い値を示すものの大差はない。
また、関東・東北の古墳人は顔の高さも眼窩も高い値を示しており、北部九州の弥生人・古墳人とほぼ同じである点は注目される。





日本列島における稲作・弥生文化の東進　　歴博藤尾らによって　最近の年代測定により弥生時代は 500 年遡ると提案
黒字はその新年代提案　　従来の縄文晩期後半を弥生時代　早期と呼ばれることが多くなっている。

● 弥生の遠賀川式土器と縄文土器の共存

板付遺跡などを含め、福岡県　遠賀川下流域は弥生農耕文化発祥地のひとつに挙げられています。北部九州で始まった農耕文化は東日本に伝播して行きますが、農耕文化と共に遠賀川式土器も東進し、農耕開始期の指標とされています。一方　東国の縄文土器が西日本各地で見られる。
これは、東の縄文人が積極的に西日本の渡来系弥生集落で共存し、農耕文化を習得していった証と見られている。

このような事象から縄文人と弥生人が同じ地域の中で共存・融合しながら、水田稲作を中心とする弥生の文化が花開く。
それが　さらには　新しい耕地・水利をめぐる集落間・地域間の争いをめぐって、集落内での地位格差　地域・集落間の格差を生み、争いに備える体制　環濠集落・高地性集落そして国へと発展していったと考えられている。

● 尼崎市田能遺跡　近畿の弥生時代ほぼ全期間に及ぶ大集落跡で九州北部特有の甕・壷棺墓４基出現

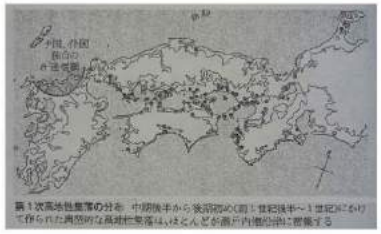
田能遺跡は、尼崎市の東北端、標高 7m、猪名川左岸に営まれた弥生時代(2300-1700 年前）の集落跡です。遺跡は東西約 110m、南北 120m 以上の広さがあります。弥生時代は我が国で稲作農耕が始まった時代で、田能の弥生人たちも川沿いのやや高いところに溝をめぐらし、住居を造り、低湿地で水田をつくったようです。遺跡は長期間にわたり生活の 場となったため、家の柱穴、ゴミ捨て穴、貯蔵の穴、排水の溝など多数の遺構がありました。人々の生活した竪穴住居も３棟が明らかになっています。また、ここは墓地としてもつかわれ 、木棺墓８基、土こう墓５基、壷・甕棺墓４基が発見されました。
遺跡の発掘は昭和 40 年の工業用水道の配水建設現場から、大量の弥生式土器が発見された事にはじまる。その後約１年間にわたる調査の結果、弥生時代前期から古墳時代中期にわたる大集落跡であることが確認された。この遺跡でもっとも注目される遺構は、墓と、それに伴う埋葬の状況であった。それまで近畿地方では、弥生時代の墓の発見例は少なく、その実体はほとんど不明のままであった。ここでは、木棺墓８、土こう墓５，壷棺墓３，甕棺墓１の計１７基の墓が発見された。うち１５基は１つのグループに、残り２基はそれらとは離れた場所に埋葬されていた。調査の結果、壷・甕を棺に利用した壺棺・甕棺墓、遺骸の埋葬可能な程度に掘り窪めた土こう墓、厚い板を組み合わせた木棺墓の３種類の埋葬方法が明らかになった。残存した人骨によって、壷・甕が子供や乳幼児の埋葬に用いられたこと、土こう墓には木の蓋が存在していたこと、木棺には高野槇か中国

産の木が使用されていたことなどが確認されている。
木棺墓に埋葬されていた男性のうち２体には、 623 個以上の碧玉製管玉を装着した遺体と、左腕に白銅製釧（くしろ：腕）をした遺体も発見された。上半身には朱が施されており、この２基だけが明らかに特別扱いされている。ムラの首長クラスだった事をうかがわせる。
これらの埋葬方法のうち、特に壺棺・甕棺などは当時北九州で盛んに用いられた埋葬方式である。
言い換えると　この田能遺跡が弥生時代の初期から機能していたことを考えると「縄文系弥生人の集落が渡来系弥生人の農耕を学び　九州からやって来た渡来系弥生人と融合しつつ　この集落を弥生の中心集落に発展させていった」田能遺跡の弥生の墓群は縄文系弥生人と渡来系弥生人融合を示すモニュメントであるかもしれない。

2.　弥生の戦　　戦の備えと鏃の刺さった人骨の急増　阪神・明石の例

弥生の戦いの証拠は渡来系弥生集落を中心に人口爆発の起こる弥生中期以降　殺傷を受けた人骨のおびただしい増加　高地性弥生集落の増加　そして　大型の石鏃や石つぶてなどの出土によって裏付けられ、しばしばこの渡来系弥生の集落からは朝鮮半島や大陸に起源を持つ土器や鏃・鉄製品が出土するこの事情は畿内　私の住む阪神間・播磨でも同じである。

近畿地方における弥生の戦い　　田能遺跡企画展「弥生の戦」より



■　大阪湾北岸の弥生の高地性集落と弥生の戦

弥生中期から平安時代の複合集落
新方遺跡
石鏃のささった
弥生時代の人骨3体が出土
場所は明石川と伊川の合流点
早くから稲作集落が開けた地
ここでも「弥生の戦き」があった

農耕文化の北部九州からの東進　と　渡来系弥生人と縄文系弥生人の融合

伊丹市口	酒井遺跡	縄文晩期	籾殻付の土器出土　、また、東日本の縄土器と弥生時代の土器が混ざりあって出土　縄文人と弥生人が交流 極めて早い時期に弥生文化を受け入れた先進集落として知られる
神戸市	大開遺跡	弥生前期	環濠集落　西日本では目面しい　東日本縄文時代の祭具「石棒」が出土　縄文人と弥生人が交流、 極めて早い時期に弥生文化を受け入れた先進集落として知られる
小田原市	中里遺跡	弥生中期	弥生式土器が縄文土器に突如混じる　大規模水田耕作集落

渡来系弥生人のもたらした定住農耕文化と「鉄」は北部九州だけでは治まりきらず、またたく間に日本列島を東進
この過程で縄文人と弥生人が融合して定住農耕生活が広がり、狩猟・採取の縄文の生活が弥生前期には西日本ではまったく消えてしまう。
しかし、この間　定住農耕の集落での弥生人と縄文人の交流度は千差万別　また　東国から移り住んで先進の農耕生活をスタートさせる集落や　その逆に弥生人が縄文人の集落に飛び込み先進農耕を始める場合もあった。
縄文系弥生人・渡来系弥生人の言葉があったが、世代を重ね融合が進むにつれ、人口を増やすと共に現在の日本人に繋がる弥生人が誕生した。
そして、弥生人の定住農耕生活が進み人口が増加するにつれ、集落間の格差を生み、新しい耕地・水利を求めて、地域間の争いや集落内の地位が生まれ、弥生の「戦さ」の時代へと突入する。
ちょうど　農耕定住生活が進み　人口爆発の起こる弥生中期以降であり、西から順に戦闘に備えた村　戦の痕跡が急増する。
この状況は私の住む大阪湾北岸地域でも同じであり、数多くの高地性集落が現れ、戦いに備える。
渡来の弥生人が持ち込んだ「定住農耕の文化」「鉄・金属器」によって　日本で「戦さ」が始まったといわれる所以である。

高地性集落の変遷に見る「弥生の戦い」

中期後半	瀬戸内沿岸　山口東部から兵庫西部に高地性集落が営まれ　打製武器が発達 ● 播磨灘　男鹿島大山神社遺跡　備讃瀬戸　紫雲出遺跡
中期末～後期初頭	近畿での抗争激化　拠点集落の解体と大規模高地性集落の出現 ● 伊丹台地　拠点集落　加茂遺跡の衰退と台地周辺に坂根・下加茂・小部の小集落出現 ● 神戸伊川谷丘陵地　大規模高地性集落　表山遺跡の出現
後期前半	各地で集落が減少し　高地性集落が代表的な集落になる ● 六甲山裾丘陵地　会下山遺跡
後期中	高地性集落が減少し　分村化集落が増加
後期末	「倭国の大乱」を経て　地域間の戦いから国間の戦いへ　日本全国に波及 ● 鳥取青谷上寺地遺跡　後期の集落から殺傷痕のある人骨多数出土　群を抜く鉄製品の出土 ● 妻木晩田遺跡　大型高地性集落遺跡　多数の鉄製品

大阪湾北岸の阪神・神戸西部に見る弥生の戦さの痕跡

神戸市	新方遺跡		弥生前期	17本の石鏃が刺さった人骨など石鏃の刺さった人骨3体　縄文系人骨
豊中市	勝部遺跡		弥生中期	打製石剣の刺さった人骨
神戸市	玉津田中遺跡		弥生中期	青銅武器鋒の刺さった人骨
愛媛小松町	大開遺跡		弥生中期	石鏃製作工房
豊中市	勝部遺跡		弥生中期	
芦屋市	会下山遺跡	高地性集落	弥生中期後半	石弾　石鏃　三翼鏃　鉄・銅鏃
神戸市	玉津田中遺跡		弥生中期	木棺内折れた青銅武器鋒・石鏃　樹皮巻打製石剣
神戸市	表山遺跡	高地性集落	弥生中期末～後期初頭	環濠内から鉄鏃　石弾　石鏃　小形仿製鏡
神戸市	頭高山遺跡	高地性集落	弥生中期	のろし跡　石剣・石鏃など多数の武器

弥生時代前期人骨出土状況　　人骨3の石鏃出土状況

神戸新方遺跡　石鏃の刺さった人骨

弥生時代後期　山陰の鉄

	刀剣	鏃	工具	農具	伐採	他	小計	不明	総数	備考
坂	83	388	600	268	213	61	1603	243	1749	
備	17	377	189	158	45	37	823	1068	1891	
鳥	26	47	91	85	69	19	337	28	365	
兵	3	32	56	13	17	82	203	20	223	
鳥	26	67	224	34	76	88	515	149	934	上寺地276
岡 山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は風北期
広島平野	38	60	72	0	7	18	195	7	169	
広島周辺	11	30	22	0	6	20	89	22	111	
京都北部	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大 阪	31	38	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数
（藤田憲司「見えざる鉄器」『究班』Ⅱ２００２年９月を一部改変）

妻木晩田古墳　　青谷上寺地遺跡

弥生後期の大型集落　鉄製品を多蔵

▲磨製石鏃・凹基三翼鏃・銅鏃

会下山遺跡出土　石弾・鏃

石剣・石鏃など武器
頭高山遺跡出土

Iron Road【6】2006

愛媛大学・今治市共同企画シンポジューム

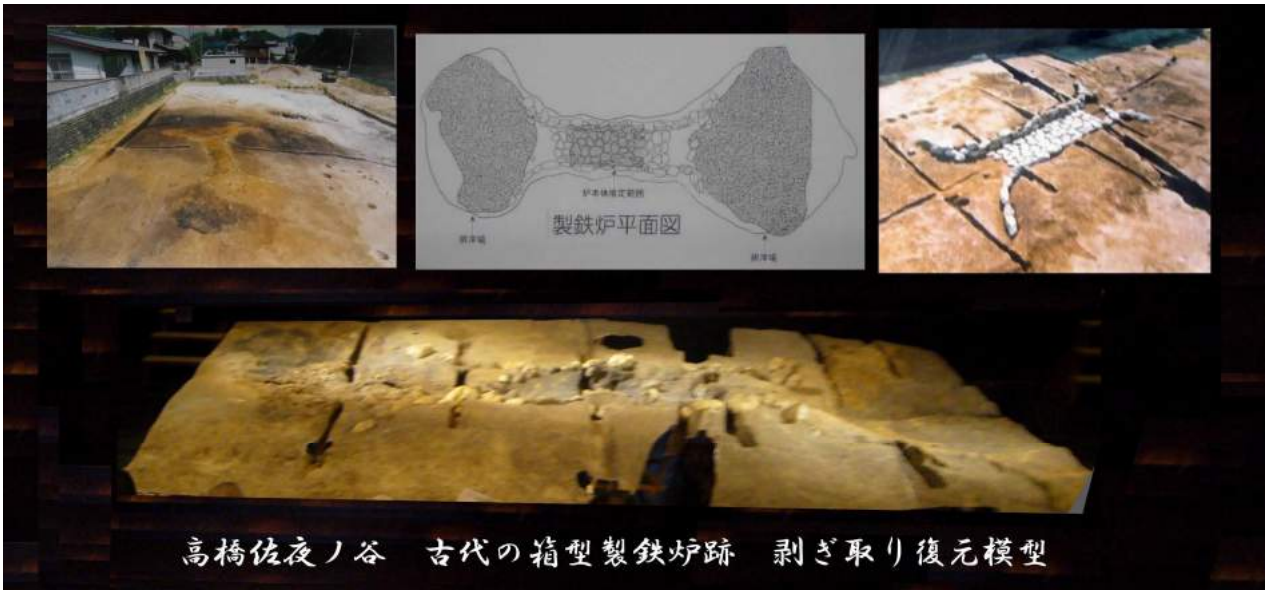
四国で初の古代製鉄炉　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡　発掘報告会

15.

「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」　2006.9.16.

「四国で初めて　古代の製鉄炉を発見　しかもその地は瀬戸内の海道　要衝の地　今治」

「その製鉄炉の下には整然と川原石が敷き詰められたすばらしい箱型炉」



今治　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡　発掘報告シンポジュウム　会場　2006.9.16.

四国で初めて出土した古代製鉄炉　今治　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡　発掘報告シンポジュウムに9月16日参加してきました。

素晴らしい古代製鉄炉発掘のシンポジュウムの内容(佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡と発掘された製鉄炉の構造　この遺跡・製鉄炉の位置づけ　佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡に復元された製鉄炉)を写真PDF file　にまとめました。

四国で初の古代製鉄炉　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡

愛媛大学・今治市共同企画シンポジューム

「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」

【参考資料】

1. 今治市古代文化シンポ「鉄と国家ー今治に刻まれた鉄の歴史-」
   愛媛大学考古学研究室・今治市・今治市教育委員会
2. 和鉄の道Ⅵ　「今治市高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡を訪ねて」
3. 和鉄の道Ⅲ　「近江の国　瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群」
4. 和鉄の道Ⅰ　「蝦夷征伐の兵器庫　金沢製鉄遺跡」
5. 和鉄の道Ⅴ　「7世紀古代飛鳥の大製鉄遺跡を訪ねて」

製鉄遺跡のある日高丘陵

1. 高橋佐夜ノ谷Ⅱ　製鉄遺跡　発掘報告 シンポジューム　　概 要

高橋佐夜ノ谷　佐夜ノ谷･ 製鉄遺跡周辺　谷の入り口から奥を望む

本年 7 月「発掘された日本列島 2006　新発考古速報」で知り、今治市役所のロビーでその発掘出土品の展示をしていると教えてもらって出かけた今治　高橋佐夜ノ谷･ 製鉄遺跡。 鉱物資源帯中央構造線が東西に貫く四国に古代の 製鉄炉がないのが不思議。

また、「鉄が伝来して　それから約 800 年もたった 5 世紀末・6 世紀にならないと日本での製鉄が始まらない謎」がひょっとして見えるかもしれないと今は谷筋が市街地になって　谷筋をまっすぐ伸びる改良道路建設が進む高橋小夜ノ谷を歩きました。

もう　遺跡は道路と家の下になっていましたが、調査の進む製鉄遺跡の概要・発掘された製鉄炉や出土品などのパネル展示が市役所のロビーに展示されていて、まだ調査中ながら、7 世紀末から 8 世紀はじめ　ちょうど大和王権が中央集権を確立してその支配力を高める頃の製鉄遺跡で鉄の需要が伸びて大型の製鉄工房が営まれる時期の炉であることや、炉の底に整然と石が敷き詰められ、古代の製鉄炉とは思えない整った炉であるとの印象を持って帰ってきました。

9 月には調査結果がまとまるとの事だったので、この瀬戸内海の要衝の地で　しかも全く鉄と縁がない土地でどのような新たな事実がでてくるか　楽しみでした。

そして　「9 月 16 日 17 日今治でこの製鉄遺跡発掘報告のシンポジュームがあり、製鉄炉を復元して当時の再現操業もする」との案内をいただいて、胸わくわくで 出かけました。台風が九州に近づいていて、どうなるかと心配でしたが、朝一番の新幹線に乗って　今治へ

シンポジュウム会場　今治市公会堂　2006. 9. 16.

シンポジュウム会場の今治市公会堂ホールの中には　現在は家や道路の下になってしまった佐夜ノ谷･ 製鉄遺跡が発掘時そのままの状態で　実寸復元展示され、客席から全体を見下ろせるように設営されていて、今　現実に佐夜ノ谷の発掘現場に立っているような状態でシンポジュームがはじまりました。

現在はこんなことができるのか・・・・とうまい設定にびっくり。

製鉄遺跡というとそのほとんどが、発掘調査が終わり、調査報告書が作られると破壊されてしまうのが常で、遺跡イメージもわかず、無視されていることに憤慨していましたが、うまい方法があると・・・・・。

一番知りたかった製鉄炉の位置づけなどが　発掘調査に当たった今治市教育委員会　櫛部氏や愛媛大学　村上恭通教授らによって　まさに発掘された製鉄炉の前に立って報告され、遺跡その場所での討論　現地説明会にいるようで素晴らしいアイデアでした。

「古代吉備を中心とした中国山地や石見・丹後で始まった製鉄炉が次第に　大型化・モデル化され、古代鉄の大コンビナートに展開してゆく様やこの四国で発見された製鉄炉構造がその過程での炉構造確立を示す重要な製鉄炉であること」　などなど

愛媛大学・今治市共同企画の本当によく準備されたシンポジュームで、製鉄炉の詳細な構造・古代におけるこの製鉄炉の位置づけと今治の地と製鉄炉の関係などいずれもが、きっちりとした科学的な視点からの解説・実証報告がわかりやすくなされ、眼を凝らしてその報告に聞き入りました。
私の歩いた製鉄遺跡も次々と登場して関連付けて解説されたのもうれしかったです。

また、発掘調査に基づく製鉄炉の復元実験が遺跡が出土した佐夜ノ谷の丘陵地で行われ、日本で唯一復元操業を続けている島根県横田「日刀保たたら」村下の木原明氏の指導で忠実に立派な炉が築かれており、17 日深夜 3 時頃から復元操業するという。(実際には　復元操業時間を短くするため、1 割ほど小型化したほかはすべて発掘どおりに復元したという)
また　復元炉の直ぐ隣には日本にはない古代朝鮮半島の大型羽口のついた円形竪型炉が築かれていて、こちらも操業するという。写真では何度か見たことあるのですが、復元実物見るのは初めてでした。
実験考古学を取り込んだ実証主義には敬意を表します。
最近の関西で聞く同種のシンポというと　何か自慢話と「素人にはこの程度適当に・・・・」といった態度に閉口するのですが、資料を含めて素晴らしいシンポジュウムでした。

高橋佐夜ノ谷に忠実に復元された箱型製鉄炉と朝鮮半島の復元円筒竪型炉　2006.9.16.

台風が近づき、大雨の中になりそうとの予報に復元実験には参加せず帰ってきましたが、後日メールで復元操業が成功して　素晴らしい鉄塊が得られ、次はこの鉄塊を鍛冶加工して鉄製品を作るとききました。
どこまでも　実証主義の科学的な視点でこの四国で初めての高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡が調査されていくことにうれしくなっています。
復元された製鉄炉の周りをあっちへまわったり、こっちから見たり、ふいごの取り付け方も面白い。
残念ながら　砂鉄は封が切られていなかったので、どんなものが使われるのか　見られませんでした。
シンポジュウムで村上教授はこの今治周辺の海岸では砂鉄が取れ、瀬戸内の島では今も黒々と砂鉄が堆積した浜があると・・・・・。ただし、いずれも現在周辺で採取される砂鉄はチタン分が高く、佐夜ノ谷製鉄炉に使われた原料とは少し違っていると話されていた。
　また、たたら製鉄が日本で始まるまで長時間かかった理由について　村上教授は長期にわたって鉄素材が日本に持ち込まれていること疑う余地なく、朝鮮半島・中国では　今回復元された大きな羽口を取り付けた竪型炉などが主でたたら炉に類するものものがないことから、朝鮮半島では日本に製鉄の技術を隠し切り、日本では鍛冶技術の展開の中で　独自のたたら炉が成立していったのではないか・・・・・と。

そのキーはなにか・・・・
私は温度と製鉄技術が゛銑鉄を作る製鉄とそれを脱炭精錬して鋼を作る 2 ステップの工程と理解されなかったことによると思っている。
その証拠と思えるのは　たたら製鉄が１プロセスで玉鋼を作る方法であり、後に大鍛冶と称する脱炭精錬がたたら炉で作った鉄塊の品質を区分けしてそろえるためと称して行われるが、それも脱炭精錬の必須の第２ステップとは理解されていない。したがって大陸から入ってくる鉄素材の品質には長く到達できなかっただろうと推察している。
村上教授らは朝鮮半島に続いて　今年　中国の古代製鉄炉の調査復元実験を続けてゆく計画と聞きました。
結果が　待ち遠しい限りです。

台風が近づき、大雨の中になりそうとの予報に復元実験には参加せず帰ってきましたが、後日メールで復元操業が成功して　素晴らしい鉄塊が得られ、次はこの鉄塊を鍛冶加工して鉄製品を作るとききました。
どこまでも　実証主義の科学的な視点でこの四国で初めての高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡が調査されていくことにうれしくなっています。

表1. 日高丘陵の古代遺跡一覧

	遺跡名	時代	遺跡の種類	主な遺構	主な出土遺物	調査主体
①	高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡	弥生時代後期～終末期 古墳時代前期～中期 飛鳥・奈良時代	集落跡	土坑、土器溜り、 竪穴住居、溝、製鉄炉	弥生土器、須恵器、土師器、	今治市
②	別名端谷Ⅰ遺跡	弥生時代後期 古代～中世	集落跡	掘立柱建物、井戸、溝 鍛冶炉	須恵器、土師器、赤色塗彩土器、 円面硯、銅印、墨書土器、椀状滓	愛媛県
③	別名寺谷Ⅰ遺跡	平安時代	集落跡、 工房跡？	溝、柱穴、鍛冶炉	須恵器、土師器、墨書土器、 風字硯、施釉陶器、青磁	愛媛県
④	別名寺谷Ⅱ遺跡	奈良・平安時代	集落跡	土坑、溝、柱穴	須恵器、土師器	愛媛県
⑤	別名成ルノ谷遺跡	古代～中世	集落跡	掘立柱建物 土壙墓、溝、鍛冶炉	土師器、青磁、鉄滓	愛媛県
⑥	高橋板敷Ⅰ遺跡	奈良・平安時代	集落跡	掘立柱建物、柱穴、 鍛冶炉	須恵器、土師器、赤色塗彩土器、 墨書土器、転用硯	今治市

佐夜ノ谷がある今治市郊外の日高丘陵と関連古代製鉄遺跡
今治市教育委員会　高橋佐夜ノ谷Ⅱ現地説明会資料より

四国で初めて出土した素晴らしい製鉄炉　というだけではなく、シンポジュームを通じて、古代の製鉄炉や技術変化　そして日本と大陸の技術の相違など数々の新しい知見を教えてもらって、それがそれぞれ復元操業でこつこつ実証され多結果であることに感激しています。
いろんなケースがあるとあれやこれやふらふらしていたイメージがぱっと明るくなったような気がして　ますます古代の鉄が面白くなっています。

四国今治の夢は
「この地がかつての伊予国府の地であることから、周辺に製鉄炉が立ち並び、
さらに鍛冶工房を持つ古代の大製鉄コンビナートではなか・・・・・　　」と

実際にそんな製鉄遺跡であれば本当にいいなあと願っています。
四国初の製鉄炉と共に　晴らしい資料とイメージをもらって、
真っ暗な備讃瀬戸を満足感いっぱいで帰ってきました。

2006.9.16.　夜　真っ暗な備讃瀬戸をわたりながら
Mutsu　Nakanishi

高橋　佐夜ノ谷　奥から今治市街地遠望

佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡周辺　　2006.9.16.

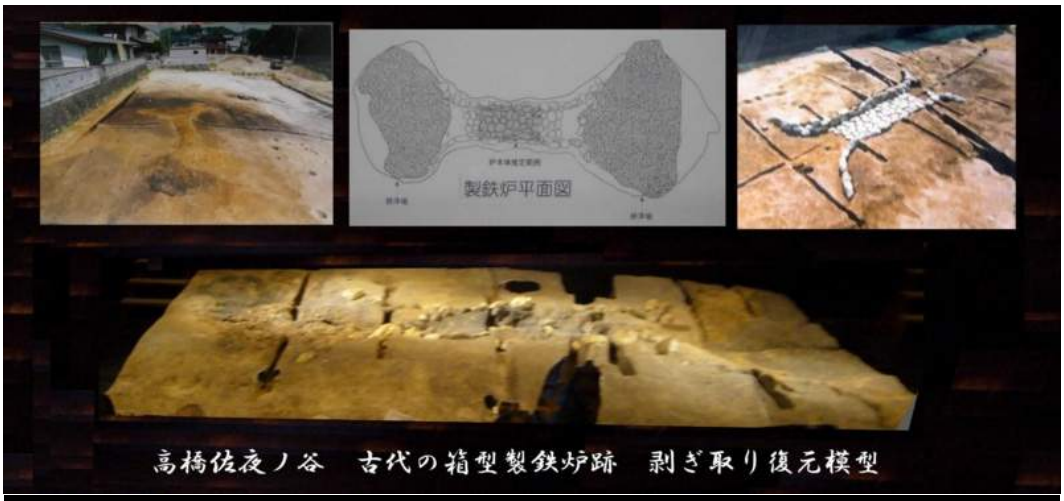
佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡から出土した遺物　須恵器破片と鉄滓

佐夜ノ谷　復元炉による古代復元操業実験場と復元された製鉄炉　ふいご連結部と排滓場

2　今治　佐夜ノ谷・製鉄遺跡シンポ「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」まとめ

シンポジュームの参加記録を内容に私の Country Walk の写真などを加えて
PDF 写真 file にまとめました
PDF 写真 file「高橋佐夜ノ谷・製鉄遺跡　発掘報告シンポジューム記録」
を１ページづつ写真化しました。

【1】今治佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡　発掘調査概要



■ いっしょに出土した炭の加速器年代測定法により　7 世紀後半から 8 世紀初めの製鉄炉
■ 炉の両側に排滓部があるアレイ型の大型の箱型炉
吉備等で始まった小型製鉄炉が畿内で大型に改良された規格タイプのアレイ型
■ 炉底部にびっしり石を敷き詰めた防湿構造
掘り込まれた溝の側に石組・底にはきっちりと川原石が敷き詰められ、その上に
びっしりと突き固められた炭。　その上に製鉄炉が築かれている
■ 簀巻状の鍛冶炉用羽口が出土
同じものが大和　川原寺鍛冶工房や法隆寺などで見つかり、大和との関係が見られる
また、直ぐ近傍の別名寺谷Ⅰ遺跡で時代は特定できないが古代の鍛冶工房と見られる
29 基の鍛冶炉が出土
■ 7 世紀後半から 8 世紀にかけて　大和は律令中央集権を確立し、東北の蝦夷　北九州
朝鮮半島への備えなど敵対する勢力に対抗　鉄の需要が高まる時代
畿内で培った鉄素材の増産・安定供給のため　重要拠点での製鉄コンビナートを支援
規格化されたアレイ型製鉄炉が整然と立ち並ぶ
● 畿内　近江　瀬田丘陵　野路小野山製鉄遺跡・木瓜原製鉄遺跡
● 東北　福島　金沢製鉄遺跡　武井製鉄遺跡
● 九州　福岡　元岡製鉄遺跡

今治市古代文化シンポ「鉄と国家」
愛媛大学　村上恭通氏　講演「日本古代の製鉄炉と国家政策」より

7 世紀末から 8 世紀初頭　　大和王権が畿内で改良した大型規格炉（アレイ型）をモデルに
鉄の大増産が必要な地域に大規模製鉄コンビナートを建設・
それらの製鉄炉に今治高橋佐夜ノ谷で見つかった製鉄炉の類型が見える

【2】佐夜ノ谷Ⅱ遺跡出土製鉄炉の構造とその復元

石を敷き詰めた炉床構造と左右に鉄滓排出場のあるアレイ型

【3】佐夜ノ谷製鉄炉の位置づけ　　地方の重要拠点に作られた大規模製鉄コンビナート

7 世紀末から 8 世紀初頭　　大和王権が畿内で改良した大型規格炉（アレイ型）をモデルに

鉄の大増産必要地で大規模製鉄コンビナートを建設・

それらに　今治　高橋佐夜ノ谷で見つかった製鉄炉の類型が見える

なお　シンポジューム資料としては

愛媛大学・今治市共同企画シンポジューム

「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」

という立派な素晴らしい報告書が出されていますので　正式にはそちらをもごらんください。

参　考　　きわめて大規模な製鉄遺跡で律令国家が大きく係わった製鉄工房

近江　瀬田丘陵の野路小野山製鉄遺跡

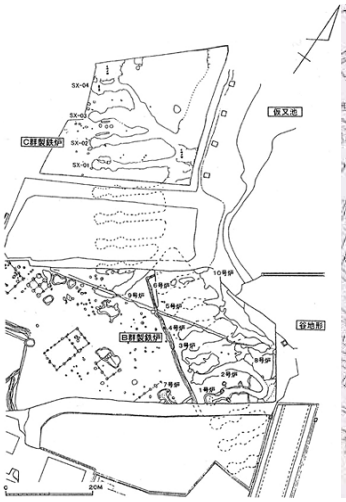
京滋バイパス　野路中央インターの橋脚の下にある野路小野山製鉄遺跡

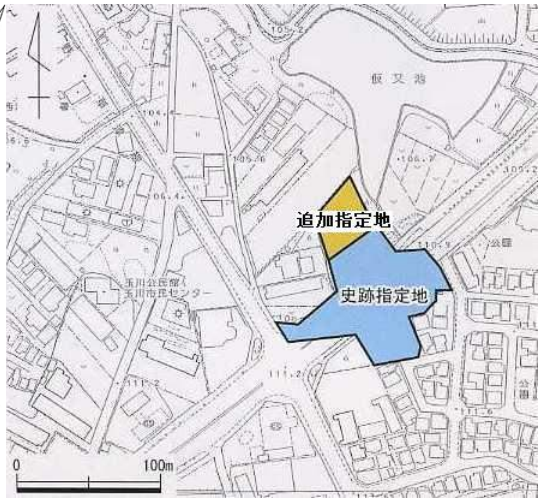
図4　野路小野山遺跡　炉の並びと単位の想定復元図

国内に例のないきわめて大規模な製鉄遺跡で律令国家が大きく係わった官営工房であったと推測

追加指定地　草津市野路町字小野山 2140 番 1　　指定地面積　1,042 平方メートル

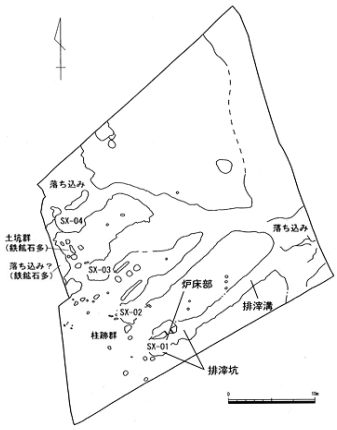
大津市から草津市の南に広がる瀬田丘陵は、近江国庁（大津市大江）に近いことから、土器を焼く窯や製鉄・銅の鋳造を行う生産遺跡が数多く営まれました。国道１号線京滋バイパス建設にともなう発掘調査で、製鉄炉 10 基、木炭窯６基、大鍛治跡１基、管理用建物１棟、工房跡 11 棟など、奈良時代の製鉄に関する遺構がすべてそろって発見されました。わが国における製鉄技術の発展と、古代国家における鉄生産の実態を明らかにする上で、きわめて重要な遺跡として、昭和 60 年に国史跡に指定された。





平成 17 年度の調査では、整然と並ぶ製鉄炉４基がさらに見つかり、未発見の製鉄炉が地下に多数眠っていることが明らかになりました。

大津市から草津市の南に広がる瀬田丘陵のこうした遺跡群を一体のものとして捉え、史跡野路小野山製鉄遺跡に大津市の山ノ神遺跡・源内峠遺跡を加え、あわせて「瀬田丘陵生産遺跡群」として史跡指定されている。（平成１７年度）。



新たに見つかった４基の製鉄炉遺構配置

調査で判明した野路小野山製鉄遺跡の特徴

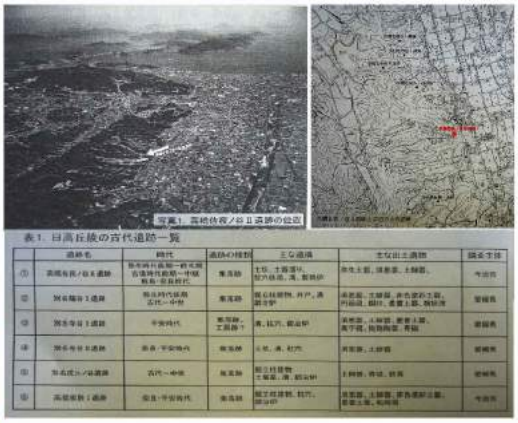
- 箱形製鉄炉が 15 基確認されており、うちＢ群 6 基、Ｃ群 4 基は整然と並び、Ｂ群には周囲を取り囲む溝が存在する。きわめて規格性が高く、組織的で量産化を目指した操業また、Ｃ群 4 基の製鉄炉の北側にもさらに分布していることが判明している。
- 散発的で小規模な操業であったＡ群から、製鉄炉が大幅に整備され、大量生産を確立させたＢ群・Ｃ群へと変遷した。
- 製鉄炉群の南西側に、木炭窯 6 基、鍛冶炉 1 基、工房跡、管理用建物など製鉄に関連する遺構がまとまって存在している。他の生産遺構が認められず、製鉄専業の遺跡である。
- これまでの調査成果や周辺地形からすると、京滋バイパスの南東側にも製鉄炉が連続して並ぶ可能性が高く、炉の総数は二十基を越えるものと予想される。
  また、製鉄炉群の南西側では柱穴や土坑などが多数検出されていることから、工房群などもさらに隣接地へ広がっていくものと考えられる。

以上のことから野路小野山製鉄遺跡は、国内に例のないきわめて大規模な製鉄遺跡であり、その規模からみても郡司などの地方有力者が経営するようなものではなく、律令国家が大きく係わった官営工房であったと推測されている。

PDF 写真 file「高橋佐夜ノ谷・ 製鉄遺跡　発掘報告シンポジューム記録」

愛媛大学・今治市共同企画シンポジューム「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」　2006. 9. 16.

四国で初の古代製鉄炉　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡　発掘報告会



■　高橋小夜ノ谷に復元された　高橋小夜ノ谷Ⅱ製鉄炉　　2006. 9. 16.

■　四国で初めて見つかった古代の製鉄遺跡　小夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡の位置付け

地方重要拠点で経営された大和律令国家の官営製鉄所のひとつでないか????

■　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡の位置づけ

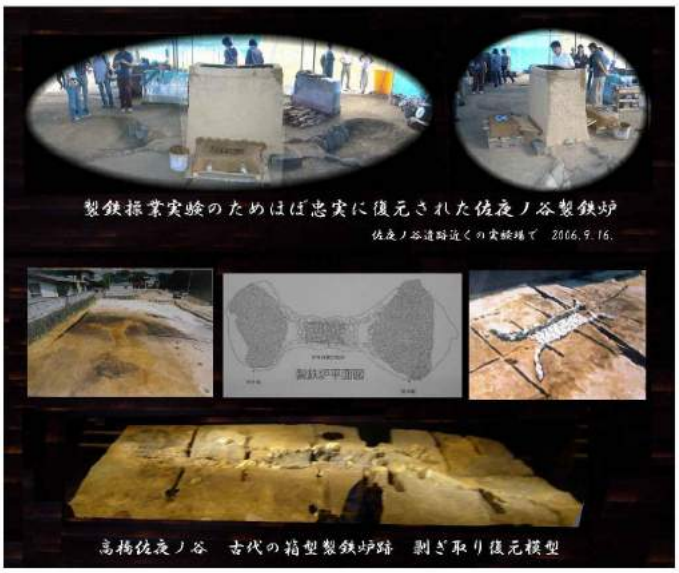
７世紀後半　中央集権を確立した大和王権は政権維持のため　朝鮮半島からの鉄素材を輸入しつつ　積極的な鉄製品の増産を進める。

６世紀に中国山地　特に吉備で始まった鉄生産の増産を進めるため、渡来の技術集団を取り込み、製鉄炉の改良大型化・規格化を進め、多数の製鉄炉を並べ　大増産するコンビナートを作り上げ、九州・東北など鉄を一番必要とする地方拠点にそれらの技術移転をすすめ、大製鉄コンビナートを作りあげた。

今回四国今治　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡で出土した製鉄炉も畿内で大型改良された規格型の両側に排滓場を持つアレイ型箱型炉で、底部には石をきっちりひきつめた防湿機構があるのも　東北のコンビナートで見られる類型である。

また、この佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡がある日高丘陵の佐夜の谷の直ぐ近傍別名寺谷からは時代的には少し下るようであるが、鍛冶炉が２９基も出土した古代の鍛冶工房跡がみつかるなど、ほかにも鍛冶遺跡が見つかっており、この丘陵地には古代の製鉄コンビナートがあったのではないかとのイメージが膨らんでゆく。

佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡で見つかった箕巻状鍛冶炉羽口も大和の川原寺鍛冶工房や法隆寺にその類型がみられ、この今治と中央との間に強い交流があったことがうかがわせ、一層　四国今治の地に７世紀後半　ないし８世紀初頭Ⅱ国家的規模の製鉄コンビナートが眠っているのではないかと夢が広がっている。

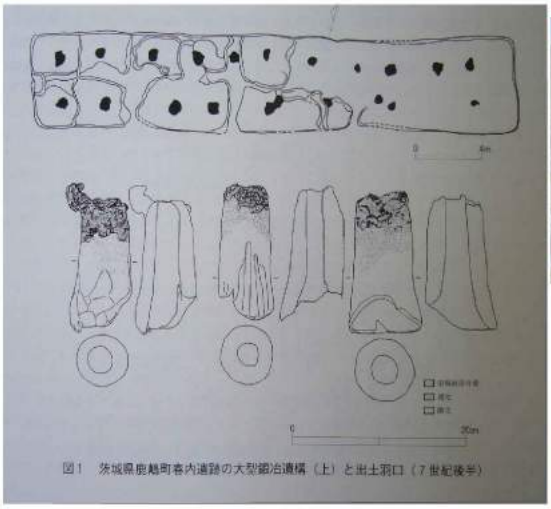


箕巻状羽口の出土とそのベースと見られる川原寺鍛冶工房の鍛冶炉羽口

多数の鍛冶炉が出土した隣接する別名谷

■　７世紀　大和の大規模鍛冶工房が鉄器増産を推し進めた

木製の鉄器モデルの製作とそれを型とした量産鉄鍛冶の推進と大型鍛冶工房の地方伝播



茨城県鹿嶋市春内遺跡　大型鍛冶遺構

明日香　明日香池
大型鍛冶工房遺跡

明日香　川原寺の鍛冶工房遺跡

1.　畿内　　近江　瀬田丘陵　野路小野山製鉄遺跡・木瓜原製鉄遺跡

1.1.　野路小野山製鉄遺跡

1.2.　木瓜原製鉄遺跡　　製鉄から鍛冶加工　梵鐘鋳造場を持つ大規模な製鉄コンビナート

木瓜原遺跡　発掘時の周辺丘陵地

立命館大学　くさつ　キャンパスの敷地内にあり、七世紀末から八世紀初めまで製鉄、製陶から梵鐘の鋳造まで　さながら古代のコンビナートというべき総合生産工房でした。

木瓜原製鉄遺跡が地下に保存された草津キャンパス　グラウンド
立命館大　草津市

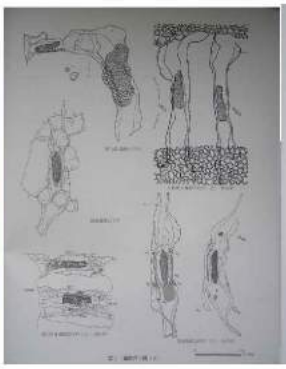
2. 東北　福島県　武井製鉄遺跡群　&　金沢製鉄遺跡群　　蝦夷に対する大和王権の兵器庫

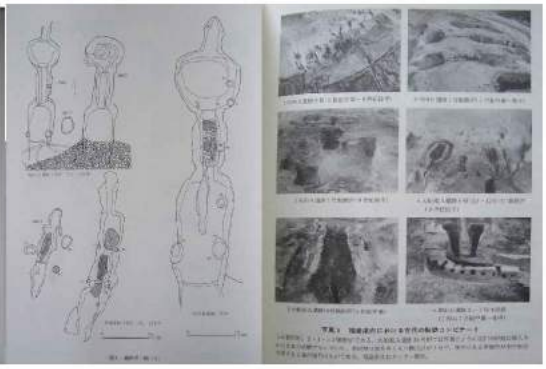
武井製鉄遺跡群

東北電力原町発電所内金沢遺跡

福島県浜通り地方北部の相馬地方には 200 を越える製鉄関連遺跡がある。特に武井地区の製鉄遺跡群　金沢製鉄遺跡群から 7 世紀後半から 10 世紀　大和王権の蝦夷への対応兵器庫の役割を担った大製鉄コンビナートがあった。
原町市と鹿島町に広がる金沢製鉄遺跡群は 7 世紀後半から 10 世紀初頭まで操業された約 225,000 ㎡の全国でも例のない大きな規模遺跡である。多数の製鉄炉、木炭窯、鍛冶炉、竪穴住居跡、掘立柱建物跡からなるコンビナートがこの地区に形成されており、律令時代の国営製鉄所と考えることができる。遺跡群内 123 基の炉のうち竪形炉は 10 基のみだった。

踏み鞴と箱型炉の復元　　出土した踏み鞴と箱型炉　8 世紀





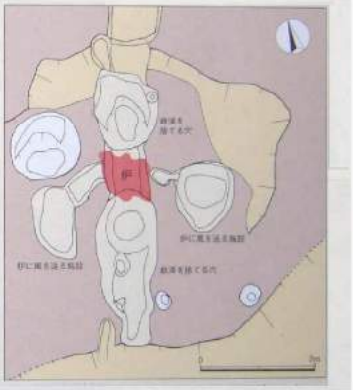
3.　北九州　福岡県　元岡遺跡　　朝鮮半島・大陸への備え

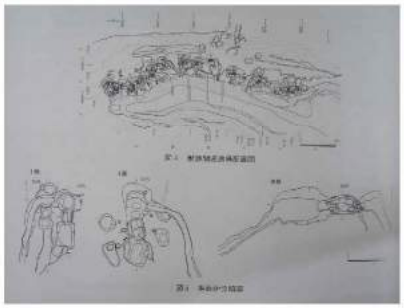
北九州福岡県玄界灘に突き出した糸島半島の付け根　九州大学新キャンパス建設地から縄文から江戸期まで　特に古墳時代・古代の遺跡が数々出土

第 12 次調査で 8 世紀半ばの製鉄炉が谷の斜面に２７基みつかり、この谷には鉄滓が埋め尽くされていた。西隣の志摩町でも八熊遺跡はじめ、多くの製鉄遺跡がみつかっており、糸島半島一体が古代の大製鉄コンビナートだった。整然と鉄アレイ型の多数の製鉄炉が並ぶことから　白村江の戦い(663)で唐・新羅連合軍に破れた大和が、大陸・朝鮮半島の防備に必要な武器調達のため、国家規模の大製鉄コンビナートを作ったと考えられる

▲いくつも並んだ製鉄炉　(12 次調査　下方が谷)

古墳時代以降朝鮮半島の影響を強く受けるようになり、特に白村江の戦い（663 年）で唐、新羅連合軍に敗れ、緊張が一気に高まります。大宰府に水城を築き、さらに要所に朝鮮式の山城や烽火、防人を配置します。中国や朝鮮半島に面したこの一帯では、絶えず軍備のため鉄製品が大量に必要だったのでしょう。



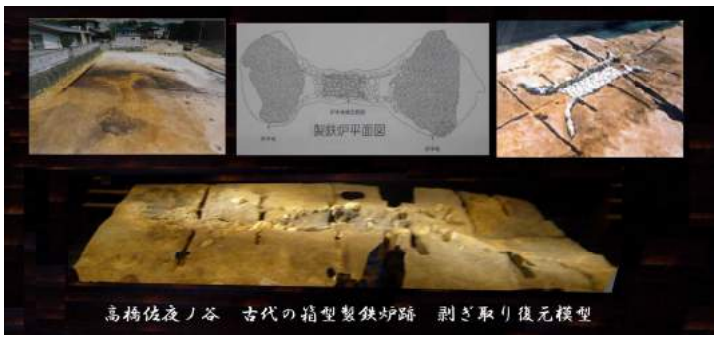


四国で初の古代製鉄炉　高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡発掘報告会

愛媛大学・今治市共同企画シンポジューム

「鉄と古代国家　今治に刻まれた鉄の歴史」

【完】



【参考資料】

1. 今治市古代文化シンポ「鉄と国家ー今治に刻まれた鉄の歴史-」
愛媛大学考古学研究室・今治市・今治市教育委員会
2. 和鉄の道Ⅵ　「今治市高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡を訪ねて」
3. 和鉄の道Ⅲ　「近江の国　瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群」
4. 和鉄の道Ⅰ　「蝦夷征伐の兵器庫　金沢製鉄遺跡」
5. 和鉄の道Ⅴ　「7 世紀古代飛鳥の大製鉄遺跡を訪ねて」

16、 甲斐・信州国境地帯　八ヶ岳山麓に縄文遺跡を訪ねて　2006.10.6.-10.

縄文人は山を見晴らす素晴らしい高原に住んでいた

北杜市周辺から見た山々　左: 南アルプス鳳凰三山・甲斐駒　中央:八ケ岳　右:茅が岳　2006.10.10.

1、 日本人の心の故郷といわれる縄文集落がそっくりそのまま見つかった
茅ケ岳山麓の北杜市梅ノ木縄文集落遺跡を訪ねる

2、 八ケ岳　清里　清泉寮に泊まって

3、 縄文の黒曜石原産地遺跡　長和市星屑峠に縄文の黒曜石鉱山を訪ねる
縄文石器材料「黒曜石」を日本各地に配っていた霧ケ峰・中山峠

左:梅の木縄文遺跡　　中央:八ケ岳清里 清泉寮周辺　　右:縄文の黒曜石鉱山星屑峠原産地遺跡

今年の初め、新聞に茅が岳山麓で祖先を祭る広場を取り囲んで住居が建ち並ぶ縄文の集落がそっくりそのまま出土したという。 弥生が戦さの時代といわれるのに対し、戦さのない素朴な日本人の心の故郷といわれる縄文の象徴である。常々一度しっかりそんな村を見たいと思っていた集落が今なら見られる。

しかも　出土したところが縄文のビーナスなどが出土した八ケ岳山麓に続く東隣の茅が岳山麓。この山の北側　霧ケ峰・中山峠には糸魚川の翡翠と共に日本各地にその痕跡が見られる黒曜石の原産地である。車がないと中々廻れぬところ。

　家内に清里に泊まってというと行くという。珍しく意見一致で甲府にいる知人や東京の娘一家を訪ねるスケジュールも入れて10 月 6 日の朝神戸を車で出発。あいにく雨であるが　名神・中央道経由で諏訪へ。伊那谷を抜けるあたりでは本降りでこの日は山の景色を楽しめなかったが、東京の帰り再度訪れた時は快晴。　素晴らしい山の景色を楽しめました。

縄文の現代集落がそっくりそのまま出土
山梨県 北杜市　梅之木縄文遺跡
縄文のモデル村 全面保存できる？
広場囲む集落 丸ごと出現
進む整備処分場計画
容量縮め、今秋着工へ

茅が岳をバックに東には富士山がぽっかり浮き、正面に広がる台地の眼下には西から甲府盆地に流れ込む釜無川沿いの狭い河川平野に韮崎・北杜の街並。そしてその向こうに南アルプスの荒々しい峰々が壁のように建ちはだかる。西に眼を転じると八ケ岳がどっしりと座っている。

縄文の集落がそっくりそのまま出土した梅ノ木縄文遺跡　八ケ岳・茅ケ岳山麓　山梨県北杜市

梅ノ木遺跡はそんな茅ケ岳の台地の上　リンゴ林やぶどう園にかこまれて　広場を中心に竪穴住居跡が建ち並んでいました。「縄文人はこんなすばらしい場所に住んでいたのだ」としばし、周りの景色に見とれていました。

また早朝の八ケ岳山麓清里はもう秋。　夜がしらみ始めた早朝　さくさくと落ち葉を踏みしめて歩く白樺の森に聖アンデレ教会の鐘の音が響いていました。

やっぱり　一泊して早朝歩く幸せ　素晴らしい散策でした。

初秋　八ケ岳山麓　清里の朝　　2006.10.6.

また、八ケ岳と霧ケ峰の間の白樺湖の横　信州峠を越えると数々の縄文人が黒曜石を求めて移り住んだ山に囲まれた長和町鷹山。　熊が出ると脅かされながら静かな林の中を登って星糞峠へ。峠の南の山の斜面には 100 を越える幾つもの縄文人が黒曜石を掘って出来た窪地が林の中に散らばり、其の一つ一つに野球ボールほどの番号標識が付けられて点在。ふと足元の土を凝視するとキラキラ漏れ来る日差しに光る黒曜石の屑。星糞峠の名前そのままに林の中に黒曜石が点在していました。

鈴を貸してくれた黒曜石ミュージアムの人達はなかなか帰ってこないので　随分心配してくれたようですが、林の向こうに見え隠れする霧ケ峰の山並みを眺めながら　縄文人が黒曜石原石を掘り出した鉱山跡に眼を凝らして地面を見ながら歩き回りました。

信州　鷹山星糞峠　縄文の黒曜石鉱山　星糞峠黒曜石原産地遺跡　2006. 10. 7.

この信州から日本海へ出たところの糸魚川は縄文の翡翠の原産地。この翡翠とこの地の黒曜石が対となって遠く三内丸山遺跡にまで運ばれている。誰もいない静かな山中　木々が点在する山の斜面の林の中に今もキラキラと黒曜石のクズが輝いていました。
車でないと本当に便利の悪い場所ですが、「星糞峠」の名前そのままに誰もいない神秘的な空間でした。

一度ゆっくり、信州の山を眺めながらのゆったりした旅をしたかったのですが、そんな満足を達成させてくれた甲斐・信濃国境　縄文を訪ねる旅　「甲斐　茅が岳山麓・八ケ岳清里・信濃霧ケ峰　星糞峠」の旅の写真をアルバムにまとめました。

　諏訪湖・諏訪大社もすぐ近くでしたが、今回はたずねることができませんでした。
この諏訪湖周辺は湿地の葦原に吸い寄せられた鉄が堆積して作られた褐鉄鉱・高師小僧が豊富にあり、これを原料として古代たたら製鉄の前に製鉄が行われた可能性が多くの伝承で伝えられ、諏訪大社も製鉄の民との関連が在るという人もいます。そして　ある本にはすでに諏訪・信濃では縄文時代には褐鉄鉱・高師小僧を利用した製鉄が行われ、その様相を縄文の火炎土器そして製鉄炉が円筒埴輪だとして研究をしている人もいます。
にわかには信じられませんが、これらの鉄素材がひょっとして１０００℃近傍で反応して溶けるなら、可能性があるかもしれない。そうすれば、日本各地に残る伝承の多さから日本の古代が変わってしまうと・・・・・
梅ノ木遺跡が出土した北杜市にも古墳時代の鉄製品の出土があるなど古代鉄の痕跡があると北杜市の埋蔵文化センタで聞きましたが、次回です。

1、日本人の心の故郷といわれる縄文集落がそっくりそのまま見つかった

茅ケ岳山麓の北杜市梅ノ木縄文集落遺跡を訪ねる

1.1、　土砂降りの雨の中　北杜市　梅ノ木縄文遺跡を訪ねる　　2006.10.6.

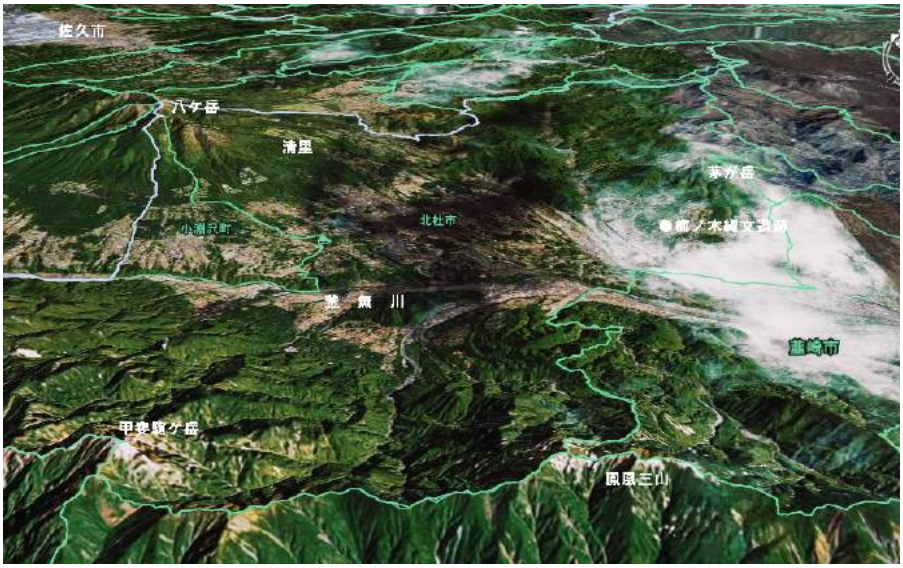
山麓に梅ノ木縄文遺跡を抱く茅が岳　　2006.10.6.

10.6.午後　土砂降りの雨　山口で一緒に仕事した仲間を北杜市の隣の南アルプス市に訪ねる。

甲府のぶどう・リンゴやももなど果樹園のど真ん中に住んでいて、本当にうらやましい。

「天気がいいとアルプスが素晴らしい。なんで　よりによって　雨の日に・・・」と。

周囲の山々や果樹園の話を本当にうらやましく聞いて、天気の良い日を選んで　東京からの帰りにもう一度来ようと・・・



縄文遺跡の宝庫　八ケ岳・茅が岳周辺図

「雨の中　人もいない高原　茅が岳広域農道の入り口が難しいし、遺跡の場所をよう見つけんやろから」と事前に見に行って　梅ノ木遺跡　近くまで車で先導して送ってくれた。

甲府の南側に隣接する南アルプス市から釜無川を渡って　うっすら雲の中に八ケ岳頂上部に雲がかかった茅が岳の南山麓の台地に付けられた茅が岳広域農道に入り、畑が広がる高原台地の上をつっ走しる。

地図には印を入れてきたが、目印になる山々が全く見えないが、３０分ほどで、山梨県フラワーセンタの前をすぎると田畑の中に左右にリンゴ園が点在する北杜市明野町の梅ノ木遺跡周辺につく。

明野の集落は台地の下で、リンゴ直売所が少し手前にあっただけで、周囲は広い畑が続き、畑の奥　茅が岳の山裾にわずかに人家が見える。

「晴れた日には山々がこう見えて・・・」と教えてくれるが、西の八ケ岳も南の南アルプス連峰も全く見えない。

雨の中　周囲が全くみえない茅が岳山麓の丘陵地　北杜市梅ノ木遺跡周辺　2006.10.6.

畑地の北側　茅が岳がみえるはずであるが、全く見えず

「この広域農道のそばの砂利道を山の方へ 500m ほど入ったあたり、向こうにプルドウザが見える辺が遺跡のはず」　こんな雨の中　物好きな・・・と友達は言葉にはださないが、笑いながら帰ってゆく。

茅ケ岳山麓　丘陵地　梅ノ木遺跡周辺　　2006.10.6.
写真奥　雲の中に八ケ岳の裾野がうっすら見える

とにかく　新聞や考古学速報新発見 2006 に載った航空写真のイメージを頭に田畑のあぜ道を入ってゆくが、ますます雨が強くなって確信が持てない。
結局、奥の茅が岳の山裾の家を訪ねて、おばさんの車に先導してもらって遺跡へ。

雨に煙る梅ノ木縄文集落遺跡　全景　北側より

先ほどブルドーザーのところからあぜ道を北に入ったのですが、その南側の草原が梅ノ木遺跡だという。

良く見ると　広い草原のところどころにブルーシートが被せてある場所があり、ぐるっとそのブルーシートをつなぐと真ん中が広場で、ブルーシートがかけられている場所は竪穴住居跡らしい。何とはなしに、広場を取り囲む縄文の集落跡であることが判る。

雨に煙る梅ノ木縄文集落遺跡　全景　南側より　　2006.10.6.

雨に煙る梅ノ木縄文集落遺跡　全景　北側より

この草原右手には茅が岳から草原に沿って　雑木林が見える。そこが谷になっていて、雑木林の中に入ると狭い谷の崖下に、ブルーシートがかけられ、ここが梅ノ木遺跡の水場・作業場の発掘現場と知れる。

　ひとっ子一人いない広場の真ん中に立つとグルリと周りが見渡せるが、土砂降りの雨でまったく　周りの状況がよくわからない。

「縄文の広場を中心に祖先と一緒に暮らした縄文の村」
赤坂憲雄さんの話に引き込まれて何度も聞いた縄文の集落半信半疑だったのですが、広場の中央に立って、本当だったんだとグルリと体を回して、ブルーシートを一周。

ブルーシートのかけられた遺跡の水場と作業場
集落跡のある台地西に隣接した谷間

晴れていれば　其の眼前には　茅が岳・南アルプス・八ケ岳の大パノラマ　昔は違っていたでしょうが、ぶどうが実り、リンゴが赤い実を付けている。晴れていれば、どんなに素晴らしい景色だったろうと・・・・。

梅ノ木縄文集落遺跡　全景　(10.10.晴れの日に撮影した遺跡)

　絶対にもう一回帰りに立ち寄ろう。　家内に言うと同意見。
それにしても　雨の中　友人も　訊ねたおばさんも　よう　連れてきてくれたわ・・・と感謝です。
　まだ　発掘が続いているので、この先どうなるかわからないが、そっくりそのまま残してほしい。

八ケ岳山麓側から茅が岳　　2006.10.7.

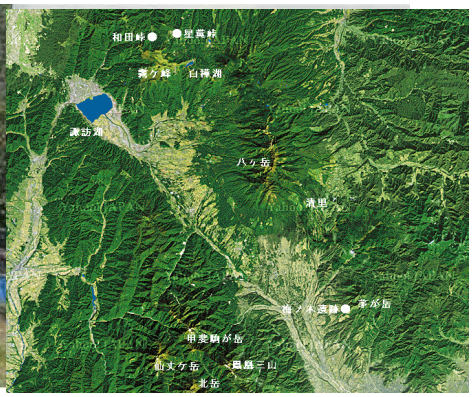
土砂降りの雨の中　３０分ほど　草原をあちこち歩きまわって、また　広域農道をさらに西へすぐ西側の八ケ岳山麓へトラバースして　夕方の清里へ。
八ケ岳の山麓側からは今まで、今雨の中見てきた梅ノ木遺跡を懐に抱く茅ケ岳全体が始めてその大きな山体を現す。大きい山である。
この茅ケ岳は「日本百名山」深田久弥が最後に登って、ここでなくなった山でもある。
東京からの帰りにもう一度きて　アルプスを梅ノ木遺跡から見よう。
そういいながら、約３０分ほどでもう暗くなりかけたポールラッシュの開いた清里へ
清里の聖アンデレ教会　昔銚子で世話になった武藤牧師を訪ねたあと、一度泊まりたかった　清泉寮に着いた時にはもう薄暗くなっていました。

平日なのでディナーは数組だけ　ゆったりとディナーを楽しめる。ワインを訊ねると「茅ケ岳」がお勧めという。　すっかり　うれしくなって
それで乾杯。山の静かな夜を楽しみました。

八ケ岳　清里　夜の清泉寮　「茅ケ岳」ワイン

1、2、　　縄文集落跡がそっくり出土した北杜市梅ノ木縄文集落跡遺跡　概　要

10.10.　北杜市明野町埋蔵文化財センターでいただいた資料・写真より



縄文集落跡がそっくり出土した北杜市梅ノ木縄文集落跡遺跡

素晴らしい晴天の 10.10.　　梅ノ木縄文遺跡を再度訪れ、予想通り、遺跡からは素晴らしい南アルプスや八ケ岳の大パノラマを見ることが出来ました。また、横の谷では地元の人達による台地の上から作業場・水場へ至る縄文の道の発掘調査が行われていました。

　ちょうど昼休みのおばさんたちに話しかけ、この台地の下にある北杜市埋蔵文化センターに行けば、空から見た写真やら資料があると聞いて訪れ、見せていただいた写真やいただいた資料で梅ノ木縄文遺跡の概要をまとめました。

梅ノ木遺跡は約 5000 年前縄文中期　約 500 年続いた集落跡遺跡で、丘陵地の台地に約 3ha のひろがりがある。180 軒以上の竪穴住居が広場を取り囲むように直径約 100 メートルの環を描いて建ち並ぶ環状集落がある。すぐ隣の川が流れる小さな谷には水辺の作業場があり、集落から、その水辺の谷への縄文の道が見つかっている。
集落全体・道・水辺の作業場がセットになった縄文の村全体像が見える貴重な遺跡である。

梅ノ木遺跡　全体の略図

この遺跡は八ケ岳連峰のすぐ南東側に位置する金が岳・茅が岳の西麓　標高 800 メートルの丘陵地の上に　　あり、広々とした原生林を切り開いて、たった 2 軒の住居がつくられ、この梅ノ木集落 500 年の歴史が始まったという。

眼前のなだらかな丘陵地の向こうには南アルプスが荒々しい峰々が連なり、其の手前　丘陵地の下　南アルプスとの間を北西諏訪湖側からから南東へ　八ケ岳・茅が岳の山裾を縫って　甲府盆地に流れ込む釜無川に沿って狭い河川平野が広がり、そこを西信州側の茅野市をこえて、甲斐側へ中央高速道路・中央線が走り、北杜市・韮崎市そして甲府市が並んでいる。

また　すぐ西には巨大な八ケ岳が雄大な裾野を広げ、東側　延々と続く丘陵地の向こう遠くには富士山がぽっかり浮かび、素晴らしいパノラマを繰り広げている。

集落の北西側の谷には金ケ岳から流れ出る小川「湯沢川」があり、現在は涸れ沢のようになっているが、当時は一年を通じて水が流れ、急斜面にはさまれてはいるが平地面もあり、絶好の水場になっていたと考えられる。集落から水場へ急斜面を降りてゆく縄文の道があった。

梅ノ木遺跡　水場の谷へと続く縄文の道

この梅ノ木遺跡は以前から縄文遺跡として知られ、周辺の畑地は江戸時代後期に開墾されたもので、畑地では土器や鏃が拾えたという。

2001 年度より、畑地帯総合整備事業のための事前発掘調査が行われ、2003 年 6 月に環状集落がほぼ完全な形で残っていることが判った。それで、遺跡が分布する約 2ha を 2003 年から 2007 年までの予定で確認発掘調査が今進行中である。

この過程でそっくりそのまま出現した集落は長径 40 メートル　短径 30 メートルほどの楕円形の広場を竪穴住居跡が取り囲み、500 年ほどの存続の間に建て替えが繰り返され、一時期に存在した戸数は数軒から 10 軒程度と考えられている。墓や貯蔵穴なども発見されている。

北側からの梅ノ木遺跡の全景　2006.10.10.

山梨考古 101 号「梅ノ木遺跡から見た縄文のムラ」より　2006.5.1.

梅ノ木遺跡では井戸尻 3 式・曽利Ⅰ～曽利Ⅴ間での 6 式の土器が出土しており、この土器から縄文中期約 500 年続いたムラの様子が浮かび上がってくる。この地方の土は酸性土で墓がとこにあったのかはよくわかりませんが、土坑の調査などから、竪穴住居の間にあったとみられ、死者とが生きている人たちの竪穴住居と一緒に広場を取り囲んでいたと考えられている。

また、18 号住居から出入り口に埋甕が 2 つ埋められ、其の横に平たいが立ち、さらに壁に 2 本の石柱が立てかけられている。　埋甕は幼くして死んだ子供の墓あるいはお産の後産を入れて子供の無病息災を祈ったものと考えられ、住居に持ち込まれた石柱も何か祈り・祭の道具だったのかもしれない。

死んだ祖先や子供たちと同じ空間の中で縄文人が暮らしていたことがよくわかる。

また　珍しい人面の吊り手土器や土偶も出土している。

集落の北西の沢にある水辺の作業場へ降りてゆく縄文の道が昨年秋確認され、現在も調査が続いている。

この沢への道は集落から水辺まで標高差 17～18m。急な斜面に「土木工事」で斜面を掘り下げ平らにした道が 70m にわたって続いている。水辺には平らな石が敷き詰められ、焼けた土も確認され、この作業場で動物の解体や土器などが焼かれたと考えられている。

集落から水辺の作業場へ続く縄文の道　　右上奥が作業場　2006.10.10.

山梨考古 101 号「梅ノ木遺跡から見た縄文のムラ」より【2】　2006.5.1.

山梨考古 101 号「梅ノ木遺跡から見た縄文のムラ」より【2】　2006.5.1.

「戦いと穢れを知らず　祖先と一緒に暮らす縄文のムラ」「日本人の心の故郷　縄文」
広場・墓場を中央にそれを取り囲むように住居が広がる。　・・・・・
一方　弥生の時代は「戦さの時代」集落は住居を取り囲む環濠でしっかり守られ、村の中には高い望楼が立っている。祖先の墓は環濠の外に遠ざけられている。
何度も赤坂憲雄氏の講演でいっぺんにフアンになり、何度となく聞いた縄文のムラの話であるが、そんなきれいな環状集落を是非一度は見たいと思ってきました。三内丸山には墓の道があり、墓の道を通って集落に入るが、集落が大きすぎて　広場を取り囲むといったイメージがなかなか持てなかったが、まさにしっかりと環状に広場を取り囲む竪穴住居群がありました。

ましてや　弥生の時代は「鉄」の時代。　鉄・鉄文化が戦さを生んだのか・・・つい最近　鉄が集積され、損傷人骨が多数出土した鳥取県の弥生時代後期の青谷上寺地遺跡には高い望楼があったと奉じられている。
日本人にはこの縄文・弥生の 2 つの気質を潜在的に常に持ち合わせている。願わくは　縄文の知恵の中で平和に暮らしたい」との気持ちがある。

縄文の集落と弥生の集落の比較

梅ノ木遺跡が出土した茅が岳山麓から八ケ岳山麓へと続く丘陵地は縄文遺跡の宝庫。
この梅ノ木遺跡のある北杜市にも数多くの縄文遺跡があり、　北西の八ケ岳山麓には縄文中期の代表的な遺跡　井戸尻縄文遺跡群　さらに北西の茅野市には縄文のビーナスが出土した棚畑遺跡や双環状の大集落である尖石縄文遺跡があり、また　八ケ岳を北に越えて裏側の霧ケ峰・鷹山星糞峠には日本各地に運ばれた黒曜石原産地遺跡がある。
これらの遺跡と梅ノ木遺跡との結びつきなどは現状まだよくわかっていないが、梅ノ木遺跡でも黒曜石が出土しているといわれ、今後これら周りの縄文遺跡との関連も検討されるだろう。
また、この梅ノ木遺跡のある浅尾地区では　遺跡を含む北側の谷間に廃棄物最終処分場建設の計画があり、賛否両論で揺れ動いていたが、この処分場を北側にずらし、規模を縮小して建設をスタート。
遺跡調査は 2007 年に完了し、その後　国の史跡指定を受けて歴史公園として整備されるスケジュールが進められていると聞きました。
　ぜひとも　いらわずに　今の景観がそのまま残されれば・・・・と願っている。

■　参考資料

北杜市教育委員会　平成 17 年 12 月 17 日　梅之木遺跡見学会　資料
山梨考古 101 号「梅ノ木遺跡から見た縄文のムラ」　2006. 5. 1.
空から見た梅ノ木遺跡写真は北杜市埋蔵文化財センタで接写させていただいた

1.3　再度　梅ノ木縄文集落跡遺跡を訪れて　梅ノ木縄文遺跡アルバム

茅ケ岳山麓を走る広域道より　茅が岳全景　北杜市　フラワーセンタ周辺　2006.10.10.

10 月 10 日　快晴　素晴らしい天気である。東京を朝早く出て　再度中央高速道を通って北杜市へ
前回　訪れた時には　全く周囲の状況が見えなかった梅ノ木遺跡周辺も素晴らしい景色が見られるだろうと期待が膨らむ。韮崎のインターチェンジで出て　6 日に仲間が教えてくれたとおりに茅ケ岳の広域農道に入り、茅が岳の山裾をまきながら、丘陵地を登ってゆく。
丘陵地の上は畑地とリンゴ林やぶどう園が点在し、その向こうに南アルプスが豪快な峰々を連ねている。
まずは車を止めて、この素晴らしい南アルプスのパノラマに見入る。

南アルプス　左　鳳凰三山　右　甲斐駒ケ岳　北杜市茅が岳山麓の丘陵地より　2006.10.10.

もう　その高さに圧倒されて　しばし見入っていました。かつては　あの上に立ったのですが、もう高くてよう登れない。先日　仲間が自慢していた素晴らしい山の景色　圧倒的な高さです。
　元の道に戻ってすぐ　赤い実をつけたリンゴが目につく。直売所に入って　リンゴを試食して　孫にリンゴを

送って。　真っ赤に実ったリンゴ林を見るのは久しぶり。
本当に気持ちがいい場所である。

リンゴ畑の後ろに茅ヶ岳が見える北杜市梅/木遺跡周辺　　2006.10.10.

リンゴ園の所からものの５分ほどで　梅/木縄文遺跡。
3 日前にきた時とは全く違った光景。茅が岳をバックに東には富士山がぽっかり浮き、正面に広がる台地の眼下には西から甲府盆地に流れ込む釜無川沿いの狭い河川平野に韮崎・北杜の街並。そしてその向こうに南アルプスの荒々しい峰々が壁のように建ちはだかる。西に眼を転じると八ケ岳がどっしりと座っている。
「縄文人はこんなすばらしい場所に住んでいたのだ」としばし、周りの景色に見とれていました。

南側から梅/木縄文遺跡　集落跡の向こうに聳える茅ヶ岳　2006.120.10.

梅/木縄文遺跡　集落跡　全景　北側より　　2006.120.10.

南西側

中央広場

南東側

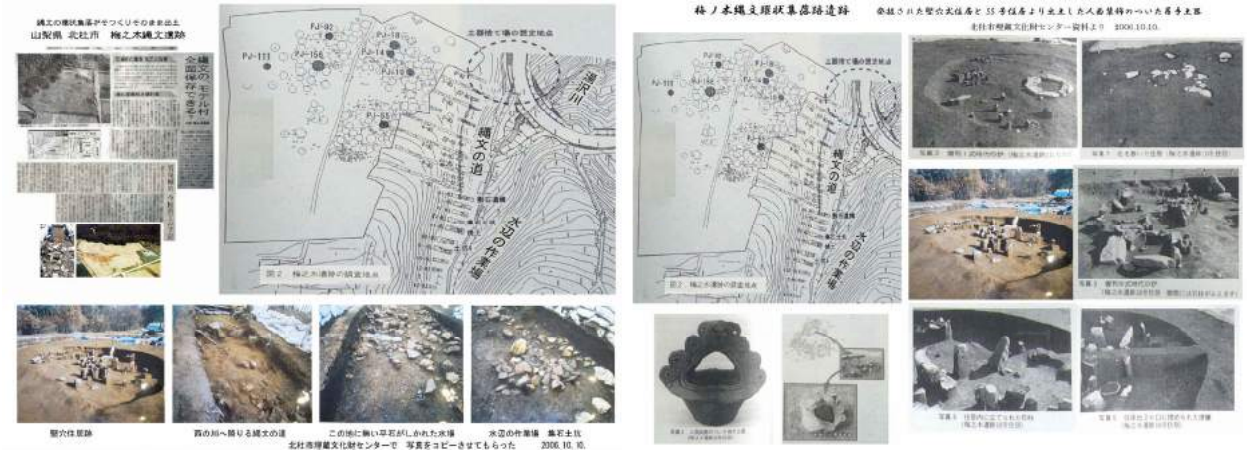
南側

西　八ケ岳

中央　南アルプス

東　富士山

梅ノ木縄文遺跡　集落跡　全景　　2006.120.10.



集落跡に隣接する林の中に入ると急な斜面の下で発掘作業が続けられていて、集落から水場に至る縄文の沢の道がかおを出していました。

集落から水庭・作業場に下る縄文の道　2006.10.10.

発掘当時の水場へ下る縄文の道　　北杜市埋蔵文化財センター資料より

やっぱり　再度立ち寄ってよかった。
大満足の梅/木縄文遺跡でした。
また、沢で発掘調査をつづけていたおばさんたちに会えたのもラッキー。　リンゴ園のところから下に降りていけばすぐに埋蔵文化財センター。　気楽に色々教えてもらえると。
　本当に遺跡の空からの写真や資料などをだしていただき、教えてもらえました。
　環状の縄文集落がそっくりそのまま見られるなんて、本当にそっくりそのまま残してもらいたい遺跡です。

「縄文の心を映す」といわれる円環・サークル
　秋田大湯や青森・小牧野遺跡など東北・北海道のストーンサークル　北陸のウッドサークル
　北海道キウスの周堤墓群　千葉の加曾利貝塚　そしてこの八ケ岳・茅ケ岳山麓梅/木遺跡の縄文の環状集落
縄文人たちの生活の証ではあるが、現代の眼でその「縄文の心」を探ってみたいものである。

　蛇足ながらリンゴ園の横道を茅が岳の方に入ったところにワイナリーがあり、食事が出来るのをみつけていましたので、そこで昼食しようと・・・。行ってびっくりしたのですが、　このワイナリーが清里で梅/木遺跡の話をしながら飲んだ「茅ケ岳」ワインのワイナリー。
三内丸山ではニワトコで酒を作っていたといいます。
この梅/木遺跡ではどうだったのでしょうか・・

006.11.18.　梅/木遺跡を訪ねたときのことを思い出しながら
2006.11.18.　Mutsu Nakanishi

注；この Country walk　和鉄の道　製鉄遺跡探訪とは少し離れていますが、三内丸山遺跡・ストーンサークルなどと同様鉄以前の縄文の流れを知る上で重要と思って、和鉄の道にも収録しました。

中央高速道より八ケ岳　富士見市付近

中央高速道　伊那周辺より　南アルプス連峰

2、 八ケ岳　清里　清泉寮に泊まって　　白樺が美しい秋の清里　アルバム

初秋　八ケ岳山麓　清里　　清泉寮にて　2006、10、7、朝

早朝の八ケ岳山麓清里はもう秋。　昨日の雨も上がって　青空が広がりだした 7 日　夜がしらみ始めた早朝　さくさくと落ち葉を踏みしめて歩く白樺の森に聖アンデレ教会の鐘の音が響いていました。
やっぱり　一泊して早朝歩く幸せ　素晴らしい散策。　其の時のアルバムです。

3、 縄文の黒曜石原産地遺跡　長和市星屑峠に縄文の黒曜石鉱山を訪ねる
縄文石器材料「黒曜石」を日本各地に配っていた霧ケ峰・中山峠

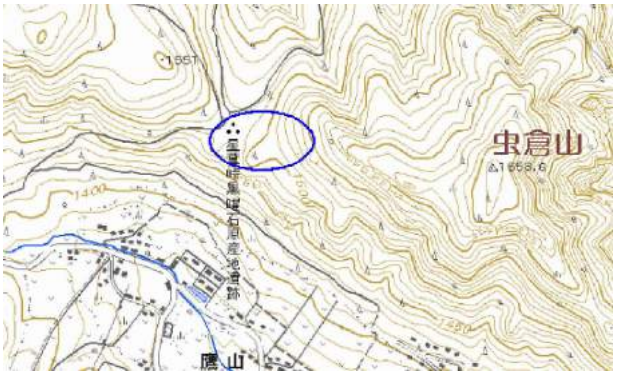
縄文の黒曜石鉱山　長和町鷹山　星糞峠黒曜石原産地遺跡　　2006. 10. 7.

10 月 7 日朝　心配した昨夜の雨もやみ、雲はあるものの日が差している。予報によれば山梨県側は晴れるが、信州側はまだ雨が残ると。

今日は日本各地に運ばれた信州・霧ケ峰の黒曜石の原産地　縄文の黒曜石を見に行く。

黒曜石は切れ味の鋭いナイフや鏃・槍先など縄文の主要道具の原石で、北海道上川「白滝」信州「霧ケ峰・中山峠」そして「隠岐」など限られた産地でしか出土せず、「糸魚川」の翡翠などと共に縄文時代の主要な交易品で、是非一度自然の中に在る原石をみたいと、北海道の上川にもトライしたのですが、雪で行けずで、それならば、信州で・・・と思っていた場所である。

中山峠は中山道の諏訪・甲州側から信州へ入る交通の要衝であり、茅野・諏訪から霧ケ峰・美ヶ原へと続くポピュラーなハイキングコースで、信州には何度も行きましたが、私は足を踏み入れたことがない場所でした。

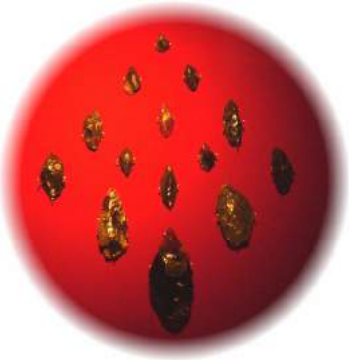


山のガイドブックにも「八ケ岳や霧ケ峰　山道を歩いているとところどころに今も黒曜石が落ちている」と書いてあるのを知って、信州へ行ったら今度は是非霧ケ峰へ足を伸ばそうと・・・・。

インターネットで調べるとその霧ケ峰周辺の長和町　鷹山の星糞峠はそんな縄文人が長年にわたり黒曜石を採取した

鉱山でその鉱山遺跡が「黒曜石原産地遺跡」として保存され、また、鷹山には「黒曜石ミュージアム」明治大学の黒曜石研究センタがあり、今も調査を続けていることが知れた。また、長和町のインターネット地図には点線の山道が星糞峠を通って山についているし、どうも星糞峠を越える林道がある。　ここを歩いた記事がないか???調べるのですが､｢黒曜石ミュージアム｣の記事意外に星糞峠を歩いた記事は1,2しかなく詳細がよくわからない。
「まあ　出かければ　黒曜石の露頭の位置も教えてもらえるだろう。
　地図で見れば　道がついていそうなので２時間もあれば、何とかなるだろう。地図だけしっかり持って　後は　ミュージアムで教えてもらって・・・」といつもの調子である。
現地に行ってわかったのですが、僕が描いていた「『黒曜石原石の露頭』」がみられる」というイメージとは随分違うことが　後で判りました。

黒　曜　石　：



火山岩の一種で化学組成では一般に無水珪酸に富んだ酸性岩で、流紋岩や石英安山岩とよく似ています。
火山活動により地上に噴出した流紋岩～安山岩質の粘性の高い
岩漿（マグマ）が、急冷により、晶出が妨げられてできた岩石で硬度は５度。比重は2､339～2､527。
これらは、ケイ長質岩に分類され、けい酸アルミニウムの他に酸化カリウム、酸化ナトリウムなどのアルカリ金属酸化物を８～１２％含み、比較的鉱物の融点が低いのが特徴。
どんなマグマでも黒曜石になるものではなく、流紋岩～石英安山岩質のマグマからできます。
また、割るとガラスのように鋭いエッジが出来ることから、石器の材料として使われてきました
今から約８０～１４０万年前の諏訪地方では八ヶ岳山系が活発に噴火し、地下からのマグマが地表に噴出し、壮大な噴火活動が繰り返され、その噴火活動が終息にいたる際に、粘度の高いマグマが急速に冷却し、黒曜石が生成されました。

　星糞峠のある長和町鷹山へは　清里からは　ちょうど八ケ岳を挟んで北西の山の裏側で、小海線の通っている八ケ岳の東側を越えるか　または八ケ岳の西側の茅野から蓼科山の横　白樺湖を越えるかして、甲州・諏訪側から信州側へ越えねばならない。土地勘のない関西からだと車でないと行きにくいところである。
　清里の朝と清泉寮の朝食をゆっくり楽しんでの出発で、朝が遅れたので、茅野から白樺湖の横を越えて、鷹山に入ることにする。其の後　星糞峠を歩いて、黒曜石見られなかったことを考えて、鷹山から中山峠・霧ケ峰へ行って東京へ向かうスケジュールをたてる。
清里から中央高速道路長坂 IC から諏訪南・茅野 IC を出て、北へ八ケ岳・蓼科山の西山麓を白樺湖へ。
八ケ岳には雲がかかっているが青空ものぞいて快適。八ケ岳の西麓の丘陵地国道 152 号線を北へ、尖石縄文遺跡のすぐ近くをどんどん登って、蓼科山の山中へ入ってゆく。　この辺りから青空は消え、霧雨交じり。

中国道から八ケ岳　長坂 IC

茅野から蓼科山の山中

諏訪・信濃の境　蓼科山山麓白樺湖

約１時間 30 分ほどで、白樺湖。やっぱり冷たい風で寒いが、湖面に霧が立ち込め、かえって美しい。
もう　ここから大門峠を越えればすぐ鷹山である。
霧雨の中　霧ケ峰・車山への分かれ道を通りすごし、あっけなく大門峠を越えて信州側へ。

大門峠を越えて　すぐ　鷹山スキー場・黒曜石ミュージアムの標識のある追分で左へ鷹山の集落に入る。山又山の真っ只中である。霧雨の中周りの状況がよくわからないまま黒曜石ミュージアムの前につく。

　南には大きな鷹山スキー場のゲレンデから霧ケ峰の山々が見え、反対側ミュージアムの横　草地の広場の向こうに星糞峠・虫倉山の尾根筋が見えている。

鷹山 1. スキー場入り口の標識で集落へ

鷹山 2. 黒曜石原産地遺跡のある虫倉山は雲の中

鷹山 3. 黒曜石ミュージアム　.

雨もあがり、星糞峠のある虫倉山が見えてくる　黒曜石ミュージアム前　2006. 10. 7.
広場中央奥の案内板のところから星糞峠への遊歩道がついている

まず、星糞峠の黒曜石・星糞峠への道への情報を聞きに黒曜石ミュージアムに行く。
ミュージアムにはかつて　縄文人が黒曜石を採取した黒曜石鉱山の解説や黒曜石採掘の様子と加工で作り出された石器や信州黒曜石の広がりなどがわかりやすく展示されている。

黒耀石体験ミュージアム　星糞峠黒曜石の展示　　2006. 10. 7.

このミュージアムや長和町では黒曜石の「曜」の字を「耀・カガヤキ」と書いて「黒耀石体験ミュージアム」と書く。人の手が加わって割れた黒曜石の破片は光を浴びてキラキラ輝く。この地に無数に散らばる半透明の意思がキラキラ輝くのをいつの頃からか「星糞」と呼び習わしてきたことから、「黒曜石」にも「黒耀石」と名づけたという。この地が国内有数の黒曜石原産地である証を主張しているのだろう。

「星糞峠に登って　黒曜石の露頭のところまで行きたいので　そこまでの道を教えてほしい」と言うとどうもおかしい。

「星糞峠まではこのミュージアムの裏から遊歩道がついて、その周りが星糞峠の黒曜石鉱山遺跡です。
星糞峠の黒曜石鉱山の周辺までなら　30 分ほどで行けるのですが、遺跡から上の方は急な山道になるので厳しいし、行かない方がいい。露頭と言っても　それは見つかっていない。それに　今　熊が周辺の山に出て　危ないので　星糞峠の方には行かない方がいい。」と学芸員の人も出てきて、どうも歯切れが悪い。

「ええ・・・熊　　こっちの尾根に出没しているのでなければ行けるでしょう。鈴でもあれば貸してほしい」と。

「まあね。　十分注意すれば・・・・」と OK してくれる。

ミュージアムで鈴を用意してもらっている間にミュージアムの展示を見ることにした。

「星糞峠の縄文黒曜石鉱山遺跡」や「黒曜石の露頭がみつからない」の言葉に引っかかっていましたが、展示を見て　判りました。

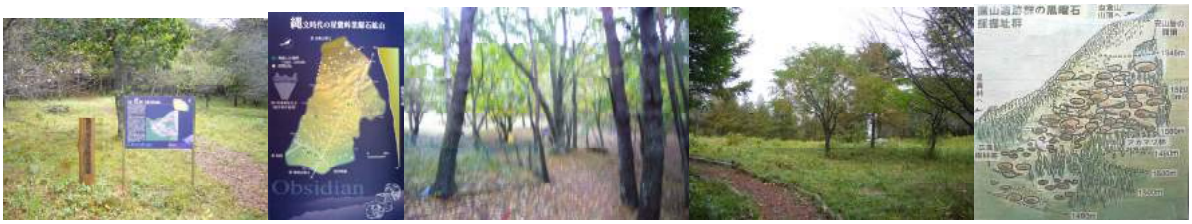
この地の黒曜石産出の経緯は次の通りだという。

昔虫倉山噴火で黒曜石が形成され、その火口近傍が地殻変動や気候不安定な時期とあいまって、土砂崩れで

崩壊し、大量の黒曜石が土砂と共に星糞峠から山麓の川にまで流れ落ちた。
旧石器人たちは川で土砂で洗われて露出した黒曜石の破片を発見し、それで道具を作り、この鷹山川筋に住み着き、狩などで生活をはじめた。多くの人達がこの川筋で生活を始めた。
そして　縄文の時代になると　もう川筋には黒曜石が取れなくなり、山に登って黒曜石を掘り出すようになり、小さく砕いた原石や道具に加工された黒曜石が各地に運ばれるようになった。
　それで、縄文人が山で黒曜石を掘り出した後の窪地が確認されただけで 150 以上星糞峠から上の虫倉山の斜面に点々と存在し、「星糞峠縄文の黒曜石鉱山遺跡・黒曜石原産地遺跡」として保存され、この黒曜石の破片が星糞峠近傍でキラキラひかり、「星糞」と呼ばれてきたという。
したがって、耳慣れない「黒曜石鉱山」の言葉や「黒曜石原石の露頭」が見つからぬ由縁である。

鈴を腰に「カラン　カラン」と音をさせながら、草地の奥の入り口から林の中に入ってゆく。
まあ　鈴を付けても最近の熊には鈴もお守り程度ですが、二人がガサガサ音をたてれば大丈夫でしょう。
「星糞峠縄文黒曜石鉱山へ」の案内板のところから木片が敷かれた遊歩道が林の中　尾根の上へと登ってゆく。
　敷き詰められた木片が絨毯のように心地よく、雨上がりの緑が美しい森の中の静かなハイキングです。
こんなに良く整備された道があるとは思いもよりませんでした。
「これ　黒曜石じゃない　さっきから　時折　キラキラ光っている石がある。」と家内が小さな黒い破片を指でつまんでいる。ガラス状半透明の黒い破片　こんなに簡単に黒曜石が見つかるなんて・・・・
　道端に眼を凝らしながら、尾根の上へ向かって 30 分。尾根の上に出たところが星糞峠だった。

星糞峠へと続く良く整備された遊歩道　2006. 11. 7.



国史跡星糞峠黒曜石原産地遺跡の案内板のある星糞峠

峠には左から右へ尾根を越えてゆく林道があるが、峠の左で扉か閉じられていて　林道からは峠へは行けない。
峠は右手の虫倉山と左の小さな山高松山の鞍部になっていて、右手の虫倉山への山の斜面が続く林の入り口に「星糞峠黒曜石原産地遺跡」の案内板があり、この林の奥急な山の斜面に広がる縄文人の黒曜石採取跡　黒曜石鉱山の分布図が点々と 150 を越える番号が付けられた印で示され、林道側の休憩所にはこの鉱山遺跡の模型が置かれていた。　峠が標高約 1400m でここから虫倉山の斜面 1540m 近くまで　広がっている。

峠の上にも 111 号・112 号採掘跡の標識を付けた窪地が青いシートで覆われ直ぐそばに見える。

この星糞峠の左手　西側の谷へ降りたところが女男倉川の黒曜石原産地そしてその向こう北から南へ続く尾根筋が和田峠・霧ケ峰の石曜石原産地がつづく。

「信州 霧ケ峰黒曜石原産地」「八ヶ岳山麓の黒曜石原産地」と呼ばれる信州の黒曜石原産地地帯と呼ばれる日本各地で使われた縄文の黒曜石石器の原石の供給場所である。特にこの星糞峠は　縄文人が長期にわたって、黒曜石を採掘した跡が窪地となって山の斜面に点々と続く縄文の黒曜石鉱山跡である。

星糞峠黒曜石原産地遺跡の標識のところから赤い矢印の順路標識にしたがって、鉱山遺跡の中に入る。

虫倉山の頂上へ向かう緩やかな斜面の静かな雑木林の中に、採掘跡を示す野球ボールほどの認識票がついた窪地が点々と続く。

程なく前方に金網に囲まれたブルーシートがかぶせられた窪地が案内板とともに見えてくる。

標高 1500m　鉱山遺跡の中ほどにある第一号掘削跡遺跡である。

虫倉山へのゆるい斜面上に広がる黒曜石鉱山遺跡　第一採掘跡周辺　　2006. 10. 7.

黒曜石鉱山遺跡　第一採掘跡と発掘状況を示す案内板　縄文後期 3500 年前

この案内板によると「この窪地の地下には、直径 3m　深さ 3m ほどの井戸状の穴が多数埋もれていている。
　この穴は竪坑と呼ばれ、黒曜石の塊を掘り出した穴で、黒曜石の塊がうずまっている白い粘土層に向かって掘られた穴である。　この竪坑から縄文後期 3500 年前の土器が出土している。」と記されていた。
この第一採掘跡の少し上のところから虫倉山の頂上へ向かって急斜面となっていて、ロープが張りめぐらして一般の見学路はここで横に巡るようになっていた。

さらに上に行くところにはロープを越えたところに「探求コース」の案内板があり、赤い矢印の踏み跡表示が急な斜面をジグザグに登る細い踏み跡があり、踏み跡沿いに採掘跡を示す窪地表示ボールが点々と続いている。

標高 1500m 付近　急斜面の斜面に採掘跡を示すボールと探索路を示す矢印が続く

「ここより上が厳しいので、上に行かずに降りてきたら・・・」とアドバイスをもらったところ。
　案内板には「星糞峠鉱山遺跡は標高 1487m の所にある星糞峠から虫倉山頂上部周辺 1546.8m の南北 220m 東西　300m に広がっている。
そして、第一号採掘跡のある標高 1500m のこのあたりが、遺跡のちょうど中間点。ここまでの緩やかな斜面がここから急斜面に変わる。この急斜面と頂上の間にまだ見つかっていない黒曜石形成にかかわった噴火口がある可能性が高い。」と書かれていた。
　また　ここに至る道々にも目を凝らすと小さな黒曜石の破片がボツボツと見つかった。

見学路で見つけた黒曜石

　熊が出る気配もないし、「やっぱり、視界の開ける頂上周辺　鉱山遺跡の最上部まで行きたい」と結局そのままさらに上へ登って　鉱山遺跡の最上部まで行きました。

鉱山遺跡の最上部　　2006.10.7.

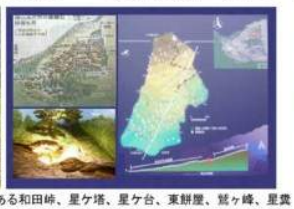
探求コースの案内板から、さほど掛からずに鉱山遺跡の最上部になり、木々のないオープンな草地になり、そこからは西側に広がる霧ケ峰の山々　そして真下に鷹山の集落が見えました。

1.　鷹山集落越しに見える霧ケ峰の山々　　2.　鷹山の集落

星糞峠鉱山遺跡　最上部からの眺望　2006.10.7.

糸魚川の翡翠と対になって、三内丸山遺跡までも運ばれた信州の黒曜石。
是非そんな信州の黒曜石原産地で自然の黒曜石を確かめたかった希望がかないました。
ミュージアムの人達は降りてくるのが遅いので心配したと聞きましたが・・・・結局ゆっくりと星糞峠鉱山遺跡の林の中を 2 時間弱歩いて、黒曜石ミュージアムまで降りてきました。
情報が少ししかなく、どうなるかと心配して出かけたのですが、誰もいない静かな山中　木々が点在する山の斜面の林の中に今もキラキラと黒曜石のクズが輝いていました。
車でないと便利の悪い場所ですが、「星糞峠」の名前そのままに誰もいない神秘的な空間。
ゆっくりと縄文と対話できる空間でした。
　この後　霧ケ峰・中山峠の黒曜石を続けて訪ねる計画でしたが、もう　満足感いっぱいで　結局車で中山峠・霧ケ峰を車で走りぬけて、諏訪まで出てきました。
ご機嫌の鷹山　星糞峠の黒曜石探訪でした。
もっと　便利がよければ　本当にお勧めなんですが・・・・

星糞峠　黒曜石原産地遺跡　　長野県長和町鷹山　2006.10.7.



黒曜石は、諏訪湖の北方にそびえる霧ケ峰にある和田峠、星ケ塔、星ケ台、東餅屋、鷲ヶ峰、星糞峠、男女倉などで産する。
いずれも標高 1,500 メートル前後で高位にあり、　総じて　和田峠産黒曜石と呼ばれ、その代表的な原産地遺跡が霧が峰に隣り合う長野県長和町鷹山の鷹山遺跡群の星糞峠黒曜石原産地遺跡である。
このいわゆる和田峠産の黒曜石は、松本～大町を経て姫川水系を流下して糸魚川に至る地理学のフォッサ・マグナと重なる文化伝播経路を経て、日本海に面する糸魚川に出る。　そして、姫川で産するヒスイとセットとなって、西は富山県や石川県、福井県へ、そして東は新潟県から青森県へと運ばれていった。
鷹山黒耀石原産地遺跡群は大規模な 11 の遺跡と小規模な 5 つの地点遺跡から構成され、星糞峠には縄文時代の黒耀石鉱山と呼ばれる大規模な発掘跡がある。
旧石器時代の遺跡群は 1950 年代に地元の児玉司農武氏によって発見され、その後、小規模な発掘が行われてきたが、1984 年のたかやまスキー場建設に伴う発掘調査が契機となって、黒曜石原産地遺跡として本格的な調査が行われるようになった。
そして、遺跡群の一部からは刃器や槍先尖頭器の製作に関わる遺物が大量に出土するなどこれらの遺跡が原産地という特性を背景として黒曜石の採集から、目的する石器の量産・搬出を行っていた遺跡である事も確認されました。また、前人未到の森林部全体を対象として、鷹山遺跡群の詳細な分布調査が行われ、星屑峠を中心とした数多くの黒曜石採掘跡である 180 を超える凹型くぼ地の存在が確認された。
現在　縄文の黒曜石鉱山と呼ばれる星糞峠の遺跡では　峠から虫倉山の急な斜面の林の中にあるこれら黒曜石の採掘跡の凹型窪地の一つ一つに番号札がつけられ、国史跡「黒曜石原産地遺跡」として保存されている。
この星糞峠黒曜石原産地遺跡の成り立ちについては次のように考えられている。
今から数十万年前　鷹山の星糞峠近くには大きな火山の噴火口があり、火道の周囲はマグマが急激に冷やされてできたガラス状の火山岩「黒曜石」の壁が出来ていた。そして、火道の上部が崩れ、大量の土砂とともに黒曜石が鷹山川に堆積。埋もれた川の一部は湿地化する。約 2 万年前の旧石器時代に人々がこの湿地の周辺に住み、狩をすると共に　この鷹山川で土砂が流き露出した黒曜石をみつけ、石器に加工しはじめる。また　この地の黒曜石が周辺にも伝わり、この黒曜石を取りにくる人達も現れる。　約 1 万年ほどまえの縄文時代　気候は暖かくなり、周囲に森が発達すると共に気候が穏やかになると山崩れも少なくなり、川に崩れ落ちる黒曜石も少なくなり、縄文の人達は山に登りつつ、黒曜石を掘り始め、それが 3500 年前頃縄文の終わりまで続く。
この黒曜石は上記のような過程でうまれることから、その原産地は限られ、あたかもこの地が縄文の黒曜石鉱山として、山の斜面のあちこちで大量の黒曜石が掘り出され、その原石や鋭利なナイフ状石器や石鏃　槍先尖頭器などの石器に加工され、糸魚川周辺のヒスイとついになって遠く青森三内丸山遺跡など全国に広がっていった。

中山道　和田峠周辺　　峠に和田峠遺跡群の標識が立っていた　2006.10.7.

すっかり　秋の装い　紅葉が始まった霧ケ峰　　2006.10.7.

ここにも縄文人の足跡　黒曜石の原産地がある

一度ゆっくり、信州の山を眺めながらのゆったりした旅をしたかったのですが、そんな満足を達成させてくれた甲州・信濃国境の縄文遺跡を訪ねる旅。
「甲州　茅が岳山麓・八ケ岳清里から信濃霧ケ峰　星糞峠へ」の旅の写真をアルバムにまとめました。
諏訪湖・諏訪大社もすぐ近くで　製鉄遺跡探訪・和鉄の道としても　面白いところですが、今回はたずねることができませんでした。
この諏訪湖周辺は湿地の葦原に吸い寄せられた鉄が堆積して作られた褐鉄鉱・高師小僧が豊富にあり、これを原料として古代たたら製鉄の前に製鉄が行われた可能性が多くの伝承で伝えられ、諏訪大社も製鉄の民との関連性を考える人もいます。また、ある本では　すでに諏訪・信濃では縄文時代には褐鉄鉱・高師小僧を利用した製鉄が行われ、その様相を縄文の火炎土器そして製鉄炉が円筒埴輪だとして研究をしている人もいます。
にわかには信じられませんが、これらの鉄素材がひょっとして１０００℃近傍で反応して溶けるなら、可能性があるかもしれないときになっています。
そうすれば、日本各地に残る伝承の多さから日本の古代が変わってしまうと・・・・・
梅ノ木遺跡が出土した北杜市にも古墳時代の鉄製品の出土があるなど古代鉄の痕跡があると北杜市の埋蔵文化センタで聞きましたが、次回です。

甲州・信州国境　八ケ岳山麓に縄文遺跡を訪ねて

1. 茅ケ岳山麓の北杜市梅ノ木縄文集落遺跡を訪ねる
   日本人の心の故郷　　Pdf File 縄文の集落がそっくりそのまま見つかった
2. 初秋　白樺が美しい　紅葉し始めた清里の朝
   　　八ケ岳　清里　清泉寮に泊まって
3. 長和市星屑峠に縄文の黒曜石鉱山を訪ねる
   縄文の黒曜石原産地遺跡　　黒曜石」を日本各地に配っていた霧ケ峰・中山峠

【完】